THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第三十三年第二號　第三百五十三號

島村博士證明
腦の病
健腦丸
良藥
KENNOGWAN

歐洲大戰は
腦力の戰爭
協商軍と同盟軍の智惠競べ

◇五年に涉る大戰亂は何時迄續くであらうか、頭到米國も聯合軍に參加した。幾百億の軍費、幾萬臺の飛行機。怖ろしい大仕掛の援兵に對抗して同盟軍は如何なる策略を籌らすであらうか。

◇要するに今回の大戰は敵と味方の智惠競である、頭と頭の戰である。敵が毒瓦斯を發明すれば味方は巨大な裝甲自動車を創造する。敵が隼の如な飛行機を製作すれば、味方は大鷲の樣な戰鬪飛行機で驅逐する。敵が潜航艇で暴れ廻れば味方は海峽一面の捕獲網を張る。科學と科學の術競べ腦力と腦力の大戰爭である。

◇國と國との戰ひも頭腦の戰であれば人と人、社會の生存競爭も矢張頭腦の戰である。頭の善いものが立身し、頭の惡い者が失敗する。

◇今度の戰爭で我邦は幾多の成金が出來たのも要するに先見の明があつたからで、頭腦がよいから先見の明が得られるのである。

◇平素から腦の健な人は判斷力も記憶力も持久力も

◇絶えず頭痛がする。眩暈耳鳴がする。夜眠られぬ。便秘逆上に惱ませられる。眩暈耳鳴がする。記憶力が減退する。精力が衰へる。食慾不振、悲觀憂鬱に陷り途には自暴自棄劣敗者の群に墮る。

◇之を救ふの捷徑は『島村博士有效證明の腦病特効藥』健腦丸の服用である。健腦丸の偉大なる効果は如上の徵候を快治し、怖る可き腦充血を醫し、中風卒中を未發に防ぎ、頭腦を明快にする作用がある。乞ふ世上腦神經病に苦む人、先づ一週分を試みよ。必ず効驗著るべし。

健腦丸主效

■腦充血 ■頭痛
■腦膜炎 ■耳鳴
■逆上症 ■中風
■神經痛 ■眩暈
■腦貧血 ■健忘
■鬱憂 ■便祕
■卒中 ■癲癇

特長

健腦丸を常に少量宛持藥とせば逆上を引下げ便通を快し恐る可き腦充血を快治し中風卒中を未發に防ぎ記憶力を增進する特効ありまづ一週分を試みよ!!

◀價▶

半週分四十錢、一週分七十錢
二週分一圓參拾錢、三週分一圓八十錢、五週分二圓八十錢
十週分五圓



吉井勇氏新著　竹久夢二氏装畫極美本

源氏物語情話

初版即日賣切
再版出來せり

定價金九拾錢
郵送料金八錢

「源氏物語」は、戀愛文學として、實に古今絶無の雄篇傑作也而も、耳遠き古語のたやすく解し難く、大冊浩瀚、購讀共に便ならざるを思ひ、吉井氏の才筆を煩はして、これを四百枚の現代的文章に書き改め、全作中最も感興豐かなる部分を悉くして、此の一卷を得たり。王朝のドン・ファン光る源氏が一生の情史を、現代華冑の伊達男なる吉井氏が書ける此の書の、いかに興趣深き讀物なるかは、こゝに云ふ迄もなかるべし。作と人と相待ち相得て、源氏物語以後、更に一の源氏物語あるのおもひある可く、原作を讀まざるも此の一書を以てよく、此の大作の全豹を窺ふに難からざる可き也。

長田幹彦氏著

縮刷 祇園夜話

竹久夢二氏裝▼定價六拾錢
濃艶極美本▼郵送料六錢

是れ幹彦氏が出世作にして、又其代表作と稱せらるゝもの。此書出でて謂ゆる西京文學作者の名と共に大に世に謳はるゝに至れり。今回小社に於て讀者の便を計り、至廉の縮刷本を發行す。可憐なる小形の美冊子、艶麗なる夢二氏の装畫に彩られて情趣滴るゝの思ひあらん。

岡本綺堂氏著

■近松情話（第七版）

夢二氏裝畫
定價九拾錢
郵送料八錢

長田幹彦氏著

■西鶴情話（第四版）

夢二氏裝畫
定價九拾錢
郵送料八錢

長田幹彦氏著

■鴨川情話（第十版）

夢二氏裝畫
價八拾五錢
郵送料八錢

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

熱語成句六萬集大成的世界無比

A NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF IDIOMS AND PHRASES

四六判堅牢美本千三百二十餘頁

◎六萬の熟語成句を集大成せる辭典は我國に於てのみならず、世界的に破天荒である。◎譯語及行文は平易明快な現代口語を以てしてあるから、何人にも難解の憂はない。◎解釋は丁寧詳密表面より裏面より又側面より分り易いやう、意味を取違へないやう、隈から隈まで注意*してある。◎排列法は斬新な考案を凝した一定のシステムによつてあるから檢出に甚だ便利である。◎廢語俗語俚言方言等は一々明示した上英米乃至蘇蘭愛蘭*濠洲等に行はるゝ特殊の言語意味も悉く列擧注意してある。◎活字は本書の爲特に新タイプを鑄造し印刷は小氣味よい迄鮮明で製本は堅牢優美を極めてゐる。◎要するに本書は熟語辭典として内外大小の名辭書を室内に積載したと同じ價値を有し我英語學者の寸時も缺く可らざる最要辭典である。

英和熟語大辭林

第四高等學校教授 文學士 篠原一慶先生
同上 岡本清逸先生 共編

東京神田 冨山房發行

内容見本進呈 往復葉書申込

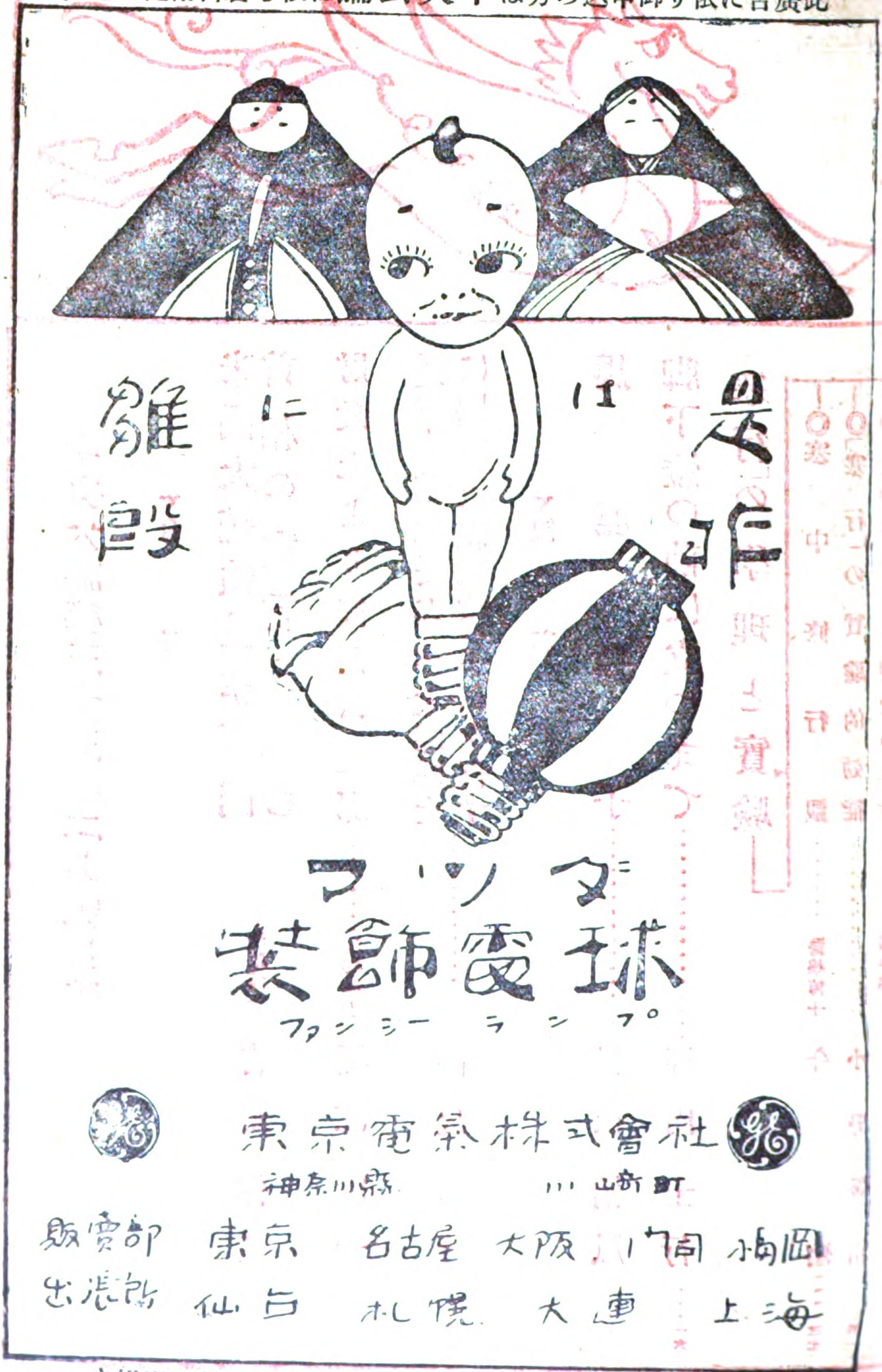
壹萬部限リ特價

貳圓五拾錢

郵税内地十二錢臺樺二十錢鮮支三十錢

冨山房 振替五〇一

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

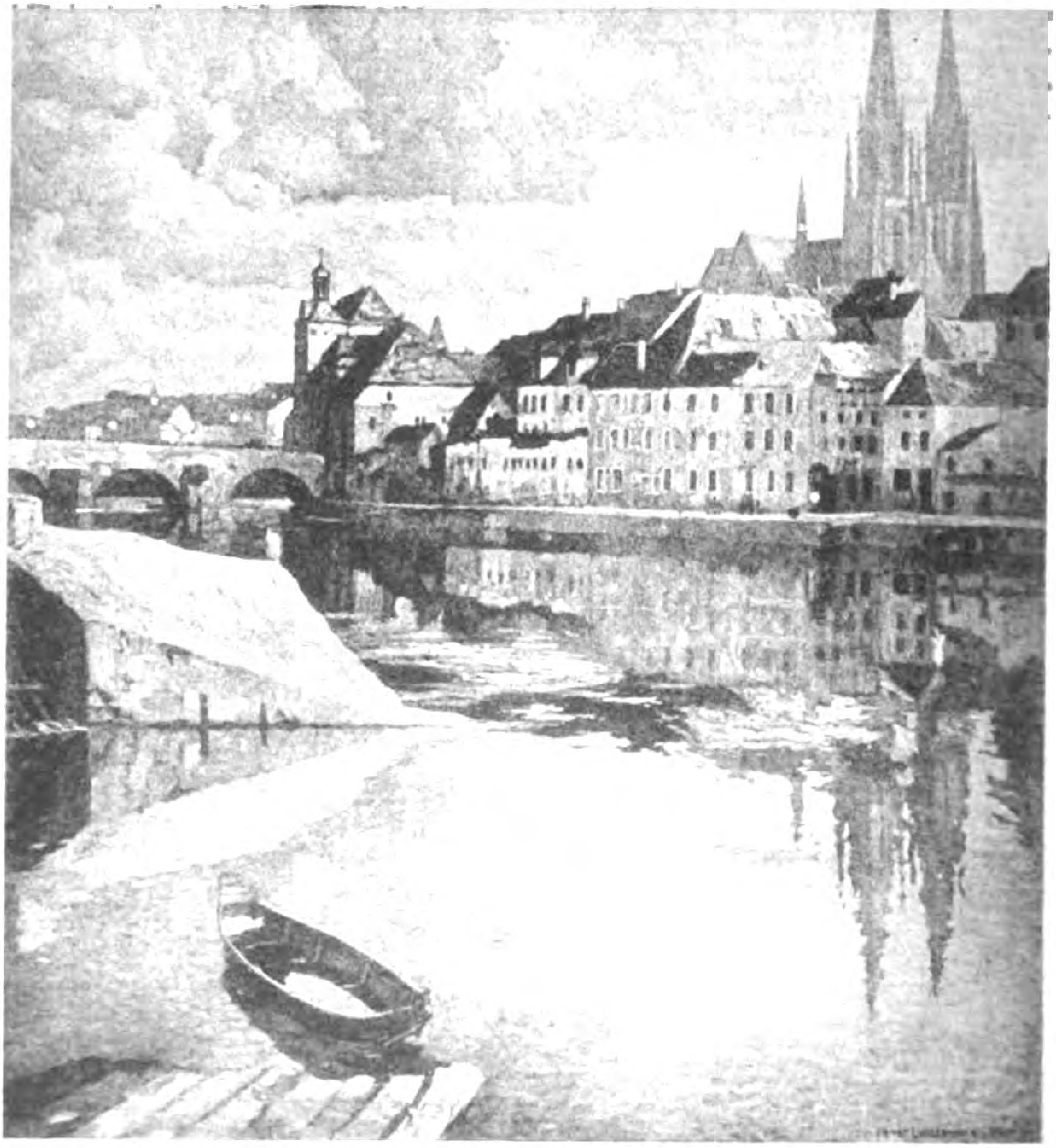


信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第三十三年二月號目次





"LANDSHUT"
ERNST LIEBERMANN

中央公論



第卅三年第二號
二月號
第三百五十三號

米國大統領及び英國首相の宣言を讀む

法學博士 吉野作造

(一)

英國首相ロイド・ヂョーヂの一月六日勞働組合大會に於て爲せる宣言は、我國に於て九日の新聞に、又之と相前後して米國大統領ウィルソンの議會に送れる教書の大綱は、十一日の新聞に發表された。共に戰爭の目的並びに連合國側の講和條件を明示したもので、政治上極めて重要なる意義を有するものである。而して是等の宣言の發表が露・獨單獨和議交渉に促されたものなることは固より言ふを俟たない。本號時論欄にも述べたる如く、露西亞は去年の暮獨・墺側に對し、和議交渉の原案として、一般平和の條件

たるべき基礎的原則を公表した。獨・墺側も之に對する答辯の形に於て其の講和條件の大略を示した。於是英・米側も亦同じく其の講和條件を天下に公示して、間接に露・獨の挑みに應ずるの必要を認めたのであらう。兎に角之等の事實に由つて、我々は今や、獨・墺側と連合國側との講和條件の如何なるものなりや、又兩者の中間に立つて鋭意一般平和の恢復に焦慮しつゝある露國の講和條件は、前二者のそれと比して如何なる差異ありやを知るの機會を得た。一部の輕薄なる論者の中には、口でこそ大言壯語すれ、いざと云へば如何樣にも主張が變るなどゝいふて、是等責任ある當局者の宣言に大なる重味を置かざらんとする者もあるが、我々は英・米乃至獨逸はもとより、今日紛亂を極めつゝある露西亞と雖も、共に皆極めて眞面目なる動機に動いて居るものと認むるが故に、彼等の宣明に依つて明かになつた思想を比較研究することは、やがて戰爭並びに講和の問題を判斷するに、有力なる材料たるべきことを信じて疑はない。連合國側に在つて宣言を公表したものは、英・米兩國のみである。佛蘭西は特別の發表をして居ないけれども、一月十一日同國下院に於て、外相ピションは露京に於ける主權簒奪者を通じて講和の交渉を開くは佛國政府の屑とせざる所、獨・墺側が直接吾人に講和の提議を爲すまでは、何等回答を與ふるの必要を認めないとて、英・米と同一の行動に出でざるを辯護して後、「佛蘭西は講和條件に關して完全に・英米兩國とその見る所を同うす」と述べて居るから、詰り英・米の宣言は佛蘭西の意見をも代表するものと觀てよい。伊太利其他に於ても、夫れ〳〵政府當局者は、英・米兩國の宣言に裏書する旨を述べて居る。故に、英・米の宣言は畢竟連合國全體の意見と觀て差支ないと思ふ。又假令反對の考の者があつても、英・米・佛が已に一致した以上之を如何ともすることは出來まい。

(二)

英・米兩國の宣言は、もと露・獨單獨和議の開始に促されたものであるだけ、自ら之に對する兩國の態度の宣明を以て初められて居る。而して兩者共に和議交渉の舞臺に於ける獨・墺側の態度を非難して居ることは同一であるが、露西亞の態度については、ウィルソンは惟り大に之を賞揚して居るに拘はらず、ロイド・ヂョーヂは餘り好感を有つて居ないやうである。ウィルソンは曰く「露西亞代表者は、その採つて以て一般講和締結の基礎たらしめんと欲する諸原則をば完全適確に提示せるのみならず、以上諸原則の具體的適用の案件をも、亦齊しく明確に列擧したり。之れに反して、中央諸國代表者の提示せる解決案は頗る明確を缺き、彼等が更に特定の實際的案件を示すに非ざる以上、如何樣にも解釋せられ得べき曖昧なるものなり……彼等の提議の眞意を一言にして盡さん乎、彼等は畢竟其軍隊を以て占領せる土地をば、その如何なる部分をも、永久に自國領土の一部として保有せんと欲するものに外ならず」と述べて居る。獨・墺側が少數の軍國主義者、帝國主義者に左右され、多數國民の輿論が殆んど顧みられざる以上は、斯くなるも亦已むを得まいと云つて、民本主義の爲めに大に氣焔を吐いて居る。然るにロイド・ヂョーヂの方は、露西亞の提案せる原則そのものには餘り深く觸れずして、唯其のこゝに到れるまでの態度を責めて居る。その言ふ所の大要を摘まめば次の如くである。曰く露西亞の將來がどう治まるかは、今日の所分らない。然し差當り獨逸の毒手の深く喰ひ込んで居ることだけは、疑が無い。而して獨逸が露國に對して侵略的野心を包藏して居ることは、今や一點の疑がない。露國の軍隊は全く戰鬪力を缺くが爲め、獨逸の威嚇に抗することを得ず、ために露國は將に獨逸の奴隸とならんとしつゝある。

々は固より他の國々と同じく露西亞の新民本主義と提携するを喜ぶものであるけれども、現在の爲政者が單獨行動に出で、自ら國を誤まるの措置を採るのは、我々に於て如何とも致し方が無い。彼は、彼自身の人民によつての外、今や全く救はるゝの道が無いと。斯くて彼は暗に露國の內政に干渉するの意思は無いけれども、反動革命が起つてもつと穩健な且つ確實な政府の現出せんことを庶幾して居るやうな口吻を洩して居る。昨今英國が今の過激派政府を承認せんとしつゝありとの風說が傳はつて居るが、ロイド・ヂョーヂの此宣言と右の風說とは鳥渡兩立し難く見える。併し乍ら轉じてウィルソンの立場を採れば、過激派政府の承認位は何の譯も無い。何となれば彼は單獨不講和條約に背いたといふ方面から露西亞を責むることはせず、專ら彼等の發案せる平和條件の頗る公明正大なるの點よりして、頻りに賞讃の聲を放つて居るからである。ウィルソン曰く「露西亞は今や獨逸の暴力の前に絕望的窮地に陷り、其力全く潰滅に歸せるものゝ如くに見ゆるも、而かも彼等の精神に至つては毫も之に屈するものに非ず。彼等は今後に於ても主義並びに實行の兩面に於て恐らく斷じて讓歩する所なからん。彼等が正義の何たるか仁慈名譽の何たるかにつきて、卒直に簡明に且つ誠實に聲明せるの一事に至つては、苟も人道の友を以て任ずる者の等しく嘆賞して措かざる所ならん……露國現在の諸領袖が如何に之を迎ふるに論なく、露國民の窮極願望たる自由と秩序ある平和との獲得の爲め彼等を幇助し得るの何等かの道の吾人の前に開かれんことは、實に吾人衷心の願なり」と。

　以上英國と米國との露西亞に對する態度の相違が我々に取つて鳥渡面白い。たゞ併し乍ら、英國は露國の行動の形式を法理的に責め、道德的に警戒するものであり、米國は露國民の主義精神の實質を裏書

し且つ後援するものと觀れば、兩國の對露國態度は、必ずしも根本的に異なるものと斷言することも出來ない。

兩國當局者の宣言は遂に進んで戰爭目的の聲明に移つて居る。何の爲めに戰爭するかを明かにして講和條件叙列の前提として居るのである。此點に關してウィルソンは曰く「吾人參戰の目的は、屢々繰返へされたる正義の蹂躙を糺し、此種の犯行を再びせしめざるやう、確實なる保障を世界に與へんとするにあり。……從つて此戰爭によつて吾人の要求する所のものは、何等吾人に特別なる種類のものに非ず、唯此世界をして安全にして居心地好き生活の場所たらしむるにあるのみ。殊に吾人の如き、苟も平和を愛好する人民——平穩に自由に生活し、且つ暴力と利己的侵略とによりて煩はさるゝこと無く、他國民より正義公平を以て遇せらるゝを欲する人民——の爲めに世界を安全ならしめんとするにあるのみ。此點について世界の人民は凡て共同の利害を感ずるや言を俟たず。故に世界の平和の爲めの條件は即ち吾人の要求する條件たらずんばあらず」と。ロイド・ヂョーヂの方は戰爭の目的を唯簡單に「正當にして繼續する平和の爲め」といふ一句に約言するに止めて居る。尤も他の場所に於て「吾々は獨逸國民を敵として戰ふのが本意では無い。一つには自衞の爲め、又一つには公法と國際的正義との擁護の爲めに、已むを得ずして戰ふものである。此の目的さへ達すれば何時でも戰爭は止める」といふやうなことを述べて居るから、畢竟は米國と同じやうなことを云つて居るのである。

然し是等の宣明は餘りに抽象的にして、ウィルソンが獨逸の態度を批評したると同じく、所謂「特定の實際的條件を示すに非ざる以上、如何樣にも解釋せられ得べき」程甚だ空漠たるものである。あれ

位のことは實は獨・墺側でも云ひ得るし又現に云つても居る。もう少し具體的の細目に入らねば、彼等の戰爭によつて達せんと欲する現實の目的は明かにならない。幸にして兩國の當局者は、細目の講和條件を列擧するに先立つて、先づ根本條件なるもの數條を掲げて居る。之れは恰度昨年の春露西亞が單獨講和會議に於て獨逸に提示せる六箇條の根本原則と相對照するものにして、此と彼とを比較研究すれば略ぼ是等諸國の所謂戰爭目的なるものは相當に明白になると思ふのである。

先づウィルソンの提案から述べる。彼の根本要件とするものは四箇條ある。第一、講和談判は絶對に公開せらるべく、且つ何等個別的秘密協定の存在を許さゞる事。第二、平時戰時を問はず、領海以外の海洋に於ては、絶對に航行の自由を認むる事（但し國際協約の實行の爲め、國際間の行爲により、一部若くは全部を閉鎖せるものは此限りにあらず）。第三、締約國間には出來るだけ經濟的障壁を撤廢して平等なる通商關係を確立する事。第四、國內安寧の維持に支障無き點まで軍備の縮少を圖る事。次ぎにロイド・ヂョーヂは「平和の來るに先立ち次の三要件を充さゞるべからず」として、第一、條約を神聖犯すべからざるものとするの原則を確立する事、第二、領土問題は住民自決主義と被治者同意主義とに基いて解決する事、第三、特別なる國際組織の創定により軍備の負擔を減じ、戰爭の機會を少からしむる事、を掲げて居るが、其外別の個處に「不法行爲並びに國際法の侵害によつて加へられたる損害の賠償」といふ一項もある。此損害の賠償といふ事については、ウィルソンの方は全然言及して居ない。從つて彼が果して露西亞の提案の如く絶對的無賠償主義を取るものなりや否やは明かでない。兎に角此一點についてだけは英・米當局者の意見は全然合致するものではないと見なければならぬ。他の點については言ひ

方が違つても大體に於て同樣であらう。ウイルソンの第一條件はロイド・ヂョーヂのには之れ無く、ロイド・ヂョーヂの第一條件はまたウイルソンのに之れ無しと雖も、此點は兩者に於て何等の異議あるべくも思はれない。ロイド・ヂョーヂの第二條件は、ウイルソンは植民地問題の解決について他の所に之を認めて居る。軍備縮少の事も大體兩方同意であるから、若し雙方の間に多少意思の合致せざる點ありとすれば、そは英が米の擧げたる第二・第三の原則によつて、從來占め得たる海上優越權並びに經濟的優越地位に、何等拘束を受くるを欲せざらんとする所にあらう。然し是等の點については、從來英國は幾分我儘であつたと認められて居るから、恐らく米國の公明正大なる提説に對しては、深く異議を唱ふることも出來まい。

以上を以て英・米兩國の一般平和恢復の基礎的條件の何たるかは明かであらう。而して之を同じ問題に關しブレストリトヴスクの會議に於て言明せられたる露・獨兩國の見解と比較するは、頗る興味ある研究である。此會議に於ける最初の發案者は露西亞であるが、彼は第一に現占領地の返還及び即時撤兵を要求した。此點は明白には云つて居ないけれども、英・米側の固より異議なき所であらう。而して獨逸側は、一方に於ては强請併合の意思無きことを言明して居れど、撤兵の時期は講和條約に於て定むるを原則とし、講和條約に先立つて撤兵を必要とするものは特別の協定に由るべき旨を主張して、手强く露の主張を斥けて居る。第二に露西亞は、戰爭に由つて獨立を失つた國の完全なる恢復を要求して居る。此點について英・米兩國は、抽象的原則の形に於ては述べてないが、白耳義、セルビア、モンテネグロの獨立恢復といふ個々別々の項目として、同じことを主張して居る。而して獨・墺側も此の點に於て

は全然無條件に贊成の意を示して居るから、獨・墺は最早白耳義は勿論、セルビア、モンテネグロの併合をも斷念したものと云はなければならない。第三に露西亞は、從來他國の支配の下に屈服して居つた民族に、一般投票によつて其政治上の運命を自ら決するの權利を與ふべき事を主張した。此宣言と共に露西亞は自ら自國内のフインランド民族やウクライナ民族に此の自決權を與へたのであるが、此點に關する英・米並びに獨逸の態度は全然露西亞と同一なるを得ない。英・米側は主として敵國の領内に於ける民族については此原則を適用せんことを主張して居る。彼等は露西亞の提案の如く、之を一般原則の形に於いて表はさず、アルサス・ローレンをどうするとか、ポーランドをどうするとかいふ個々別々の問題として掲げて居る。從つて自國内の異民族はどう處分するの考なりやは明でない。只植民地の處分に關しては一般的原則の形に於て同じ主張をなして居るけれども、然し講和問題に上るべき植民地と云へば獨逸の植民地だけである。故に或意味から云へば、此點についての英・米側の主張は偏頗であり狡猾であると觀られ得る。されば現に露西亞は去年十二月の末つ方英・佛側に向つて講和會議參加を迫るの檄文に於て、彼等が印度や埃及や又は印度支那等を如何に處分する積りなるかを詰つて居る。英・佛側が此點に關して露西亞の要求に從はざる以上、惟り獨逸をして之を承認せしむるには、もつと打擊を與へて、彼を全然戰敗者の地位に墮した後でなければならない。而して獨墺側自身は此點については、之れもと國家内部の問題にして、國際協約を以て强請せらるべき事柄に非ずと爲して斷然反對の態度を取つて居る。故に此點については英・佛側と獨逸との間に尙ほ大なる距離がある。近き將來に於て露西亞は果して兩者を讓步せしむるに成功するや否や。第四に露は多數民族併住の地方に於ては各民族に自治權を與ふべ

しといふ主張を爲して居る。此原則の適用を受くるものは、實際上墺洪國のみであるが、英・米兩國は、其形を異にしては居れ、全然その觀る所を露西亞と同じうして居る。惟り獨・墺は之れ亦國內法上の問題であつて、事實上は成るたけ自治を許すべきも、之を他から强要せらるゝことを欲しないといふ態度を執つて居る。故に此點についても雙方の主張相反するを見る。然し之れは獨・墺側に於て承認したからと云つて、遣り方によつては、格別實質上の損害を來さずして解決が附くから、前の第三の問題ほど困難なものではない。尤も遣り方次第では、二三民族の獨立となり、事實上墺洪國の領域縮少を見るに至るべき事の惧あることは勿論である。第五に露西亞は、何れの交戰國も賠償を支拂はざること、既に支拂ひたる賠償は之を返還すべきことを揭げて居る。此點についてウイルソンは何等特別の言明を爲して居ないが、多分露西亞と同意見なのであらう。然し無警告潛航艇襲擊によつて米國人の生命財產に加へられたる不法の損害（此不法を糺すといふのが米國參戰の目的である）に對し、彼は果して何等の賠償をも要求せないのであらうか。ロイド・チョーヂは現に不法行爲並びに國際法の侵害により加へられたる損害の賠償を一般的に要求して居るのみならず、白耳義やセルビヤ、モンテネグロに關する個々の場合についても一々賠償の要求を揭げて居る。而して彼は是等の賠償は所謂不法に加へられたる損害の賠償であつて、普通懲罰の意味を含む所謂戰時賠償の意味ではない。從つて是等賠償の要求は露西亞の所謂無賠償主義に必ずしも抵觸するものではないと云つて居る。然し露西亞の提案は、係かる意味の賠償をも一切皆否認せんとするものである。併し露は戰爭によつて蒙れる個人の損害を一切放任して顧みざらんとするものではない。是等の爲めには交戰各國をして一定の比例に基く出資に依りて、特別の基

金を設定せしめ、之れから各々賠償を得しめやうと主張してゐる。賠償ではない。各國が銘々進んで金を出し合ふといふのである。併し之も所謂「一定の比例」の定め方如何によつては、その特に重き比例を課せられたるものに取つては、事實賠償の賦課と同一の結果にならぬとも限らないから、獨逸は此點を顧慮したものと見へ、他の交戰各國が皆遠からず講和談判に參加した上にあらざれば之れを議し難しと逃げて居る。又一般無賠償主義の提案に對する獨逸の態度を觀るに、元來無賠償主義によつて最も利するものは獨・墺側なるが故に、彼等は無論無條件に露西亞の提案に同意して居る。然るに彼等は更に慾張つて、俘虜費用及び一國領域内に於て敵國の平和人民に加へたる不法損害の賠償だけは拂ふことにしようといふて居る。俘虜として外國に囚へられたものゝ數は、獨・墺側よりも連合國側に多い。又敵國内に於いて損害を受けて居る平和人民といへば、之れも獨・墺人の方が多い。敵國に在つて獨逸人の蒙つて居る損害の賠償を云々して、(尤も協商國側の人民にして獨逸に在つて損害を蒙つたものも、同樣に賠償を受け得るが、併し此方は遙かに人數が少い)獨逸が敵國の占領地に於て敵國の平和人民に加へたる損害に言及しないのは、餘りに蟲の好い言ひ分と云はなければならない。第六に露西亞は植民地問題並びに弱國保護の問題を掲げて居る。植民地については第一項乃至第四項の條件によつて之を解決せよとあるから、先づ卽時撤兵して之を原所有者に還すのが第一の手續きであつて、然る上に各民族に其政治的所屬を自ら決定するの權利を與へよといふのである。此點に關して英・米の態度は、大體に於て露西亞と同樣である。但、撤兵の時期については或は露西亞の要求するが如く卽時たることを直に承認しないかも知れない。併し之は獨逸が其占領地より卽時撤兵することと交換條件として成立せしめ得ないこともなから

う。然るに獨逸は現に植民地にして講和會議の問題として上るものは、專ら自國の植民地のみなるの事實に鑑み、撤兵並びに還附には全然贊同して居るけれども、植民地住民の自決權行使については全然反對して居る。尤も獨逸は所謂民族自決主義を主義として排斥するの形は採らない。獨逸は、其植民地住民が今度の戰爭に於て本國獨逸の爲めに竭くした忠實の事實は、彼等が如何なる場合に於ても獨逸の所領たることを希望するの最も有力なる證左として、彼等の如何なる意思表示にも優さるものであるといふ理窟から、更めて自決權を行使せしむるの必要が無いと主張して居る。然し事實は必ずしも獨逸の云ふが如くではないから、獨逸が植民地を失はざらんとする限り、極力凡ゆる口實を以て英・米の要求に反抗すべきや疑ない。露西亞は、獨逸が如何なる苦痛を嘗めやうが、又英・佛が如何なる影響を受けやうが、そんなことには更に頓着なく、唯植民地の運命は住民の意思に依つて定まるといふ主義が確立しさへすればよい。なほ此民族自決主義は、植民地の場合のみに限らず、凡ての場合に適用せらるべき原則として討論せらるべき問題であるから、兩交戰國間に意見の一致を見るはなか〳〵困難であらう。來るべき講和會議に於ても、最も激しく爭はるゝ問題の一は、恐らく此點であらうと思ふ。次ぎに弱國の保護に關する問題としては露國委員は、强國が將來經濟上より弱國を苦しむる方法を取つては不可いといふやうなことを述べて居る。此點についてはウイルソンも「經濟的障壁を撤廢して平等なる通商關係を確立」すべしと云ふて居るから、先づ露西亞と全然同意見と見てよい。ロイド・ヂョーヂは此點については何等明白なる宣言はして居ない。之れ恐らくは主義としては必ずしも反對ではないが、かの所謂連合國經濟會議の決議と關聯して、戰後場合によつては、今日の敵國を經濟的に引續き苦しむるの必要ある

べきを想うて、他日自繩自縛の窮境に陷らざらんが爲めに、故らに言明を避けたのではあるまいか。獨逸は現に此壓迫を今より非常に恐れて居るから、最も熱心なる言葉を以て露西亞の提案に賛成して居る。故に此點に於ては大體露西亞の提案が結局多數の賛同する所となるだらう。

以上述ぶる所によつて英・米の要件と獨逸の要件との間に、今日尙ほ大なる溝渠あることを知ることが出來る。露西亞と英・米との間には、主義に於て大體一致するも、尙ほ細目の點について多少の疎隔あるを免かれない。而して此兩者の差は取りも直さず露國の冥想的空想と、英・米の實際的見地との相違である。此相違は今日の露國と英・米との凡てに亘る相違にして、惟り講和條件に限つたことではない。而して今後の講和條件の變遷を覽るには、先づ第一に英・米と露國とが今後事局の實際的推移に連れてどれだけ接近するかを着眼せねばならぬ。之に次ぎて又英・米の近き將來に於ける努力奮勵が、どれだけ其意思を獨・墺に驅行し得るに至るやをも細心の注意を以て觀察せねばならぬ。

（三）

予は更に進んで英・米兩國當局者の宣言に表はれたる細目の講和條件について觀察を下さう。

先づ第一に英・米兩國は佛蘭西伊太利及び羅馬尼の占領地より獨墺軍の直ちに撤兵すべきことを要求して居る。其内英は損害の賠償をも主張して居るが、米が此點に言及して居ないことは前にも述べた通りである。占領地卽時撤兵の問題について、特に一つ注意すべきは露西亞の問題である。米國は露西亞についても固より撤兵を要求して居る。のみならず更に「露國に關する一切の問題は、露國が自己の政治的方針を獨立決定するの自由なる機會を得んとするに際し、他國民の最良にして自由なる協力を容易

ならしむるやう、斯くして彼等が自由國民の團體中に眞摯に歡迎せられ、且つ其實に必要とする凡ゆる援助が自在に與へらるゝやうに解決せらる」るを要すると云ひ、暗に撤兵ばかりではない、獨逸の勢力をして獨り露國内部に横行せしめざらんとするの意圖をも洩して居る。然るに英國は、前にも述べた如く、露西亞の現狀を悲觀し、現政府の態度を悦ばず、露國人民自ら起つて自ら救ふの途を講ぜざる以上は我々に於て何等手を下すべき途が無いといふに止めて、撤兵のことには一言も觸れて居ない。撤兵の必要を觀ないといふ譯でもあるまいから、今の政府の下に於ては撤兵を說いても駄目だと見たのか、或は露國民の反省を促す爲めに特に撤兵を問題としなかつたのか、何れ特別の理由があることであらう。根本の考に於て決して米と異るものではあるまい。

第二に白耳義及びセルビア、モンテネグロの獨立恢復についても双方の要求は全く一致して居る。英は更に之に損害の賠償を附け加へて居ることは言ふを俟たない。而して米は特にセルビアには「自由安全なる港口を得しむること」と「白耳義の獨立恢復を圖るは、以て世界各國民に國際法規に對する各自信頼の念を恢復せしむる所以」なること等を附言して居る。セルビアは歐羅巴に於て、瑞西を外にしては、港口を有せざる唯一の獨立國である。海と接觸を保たんことは彼の多年の希望にして、之れが墺洪國との衝突の原因であり、又延いて今度の戰爭の遠因でもあつた。獨・墺側に在つても、苟も同國の恢復を認むる以上は、之れに港口を與ふるは亦避け難いことであらう。

第三に獨立を有せざる民族に自決權を與ふること、並びに諸民族雜居の土地に於て自治主義を認むることについても、大體兩者の意見が合致して居る。多數民族雜居の場所と云へば專ら墺洪國が問題にな

るのであるが、米は「墺洪國諸民族には何よりも先きに自治的發展の機會を與ふべし」と云ひ、英は「眞の民主的自治を許すこと」は絕對の急要なりと云つて居る。從來墺洪國の國勢の振はざる一つの主因は、多數民族の乖離反目であつた。故に各民族に自治を與ふるは、一面に於て內紛を除去することになる。けれども又他の一面に於ては、ボヘミアや南スラヴの中央と相離るゝによつて國力の削減を來すことも認めなければならない。蓋し所謂自治を許すといふことは、處に依つては單純な自治に了らざるものあるべきを覺悟せねばならぬからである。去ればロイド・ヂョーヂは特に「吾人は墺洪國の潰裂を冀ふものにあらざれども、之れ亦歐洲平和の必須條件として已むを得ず」と附言して居る。次に所謂「獨立を有せざる民族」については、英・米兩國は、主義として其民族の本來の希望を無視するものではない、從つて所謂民族自決主義に依る解決方法を採用して居る。斯くて此原則の適用として明白一點の疑を容れない處置であるといふ譯で(一)アルサス・ローレンは當然佛國に割かるべきこと(但し此點は千八百七十一年普魯西より佛蘭西に加へられたる不法行爲の原狀恢復といふ文字で表はされて居る)、(二)波蘭土民族はその住居する凡ての地域を包括して獨立の一國を建設すべきこと(米は特に之に安全自由なる港口を附與し、其獨立と領土とは國際條約を以て保障するといふとを附言して居る)、(三)土耳古の支配の下にある諸民族の獨立を承認すること(米は何の民族といふ個別的列擧の方法に出でないけれども、英は特に亞剌比亞、アルメニア、メソポタミヤの三つを擧げて居る。而して英は別個の國民としての地位を承認することと云つて居るに對し、米は生命の安全と自治的發展の機會を與へて絕對に之を犯さざることゝ云つて居る。何れにして獨立の承認に外ならない)、(四)墺洪國に對する伊太利民族地方は、當然伊太利に合併

せらるべきことを掲げて居る。此外米國は何等言及して居ないけれども、英國は、墺洪國内の伊民族を伊太利に合併すると同一の原則をトランシルヴァニアに適用して羅馬尼の膨脹を圖ること、並びに歐洲以外に於ても一般に此原則の適用せらるべきことを掲げて居る。之れ皆恁かる場合に於て、併合せらるべき民族は皆進んで併合を希望して居るものといふ前提に基くものたるは論を俟たない。從て言及は缺いて居つても、米國も亦必ずしも此等の要求に反對なのではなからう。

第四に巴爾幹半島の問題が來る。半島は由來歐洲紛亂の源である。歐洲の平和を永久に維持せんが爲めには、土耳古を適當に處分しなければならない。此點についても英・米兩國の考は、土耳古民族が其住域の全體を包括し、コンスタンチノプールを首府として、其帝國的主權を維持することを認むるに一致して居る。又之れに關聯してダーダネル海峽の問題については、國際的管理の下に永久中立の自由航路とするといふことに一致して居る。元來戰爭の初め英・佛諸國は、密約を以てコンスタンチノプール及びダーダネルの露國領有を認めたのであつたが、露西亞自身が今日既に併合を否認し、且つ又連合諸國が民族的權利自由を尊重するの主義を主張するに至れる以上、ダーダネルの自由航通を條件として土耳古の半島の一角に於ける存續を許すのは當然の順序であらう。

第五に獨逸植民地の處分に關する問題であるが、之れについて米國は「關係政府の主張と同等の程度に、在住民族の希望をも尊重する」の原則によつて自由公明に且つ絶對に淡泊なる精神を以て其主權問題を解決すべしといふて居る。英は現に其占領せる獨逸の植民地を其儘領有して仕舞はうとはしない、が、又直に之を獨逸に還附もしない。最後の處分は講和會議の協定に一任しやう、但此場合に於ては、

第一に土着人民の希望と利益とを尊重すべく、而して民族自決主義の原則が採用せられなければならないと主張して居る。

以上を以て英・米兩國の細目の條件は竭きた。が、最後にもう一つ、講和條件と觀るよりも寧ろ講和會議に於て討議せられ而して結局其成立を見んことを欲する希望條件とも云ふべきものがある。それは戰後に於ける國際間の特別組織の創設である。ウィルソンは曰ふ、「國の大小如何に拘はらず、其獨立と領土とを相互的に保障するの目的を以て、特別の條約により、各國民の一般的聯合を形成すること」と。ロイド・ヂョーヂは曰ふ、「今次戰爭の解決は將來に禍根を貽さざる底のものならざるべからず。併し如何に巧妙に國境其他の問題を處理しても、國際紛爭の種子を絶滅するは事實不可能なり……故に吾人は國際爭議解決の根本の手段として、「戰爭」に代はるべき何等かの國際聯合組織を設定するの大企圖なかるべからずと信ずる。畢竟戰爭は野蠻の遺物なり。國際紛爭の解決に於ても、個人間の場合と同じく、法と正義とをして暴力に代らしむることは絶對的に必要なり」と。之れ皆倶に戰後に於ける國際聯合組織の計畫を暗示するものにして、講和會議が直ちに此種の希望に何等具體的の成型を與ふるや否やを知らずと雖も、法と正義とを基礎とし、各國聯合の力によつて、永久に平和を保障せんとするの思想が、少くとも講和會議に於ける指導的精神の一たるべきは、今より之を銘記するを要する。

（四）

最後に英・米兩國の當局者が、戰爭及び講和に關する彼等の最後の決心を表明せる大文章も亦吾人の特別なる注目に値する。英國は簡單に、「吾々は以上の條件を遂する爲めには、從來よりも一層大なる犧牲

を拂ふを辭せず」と云つて居る。言簡なれども言外に現はるゝ決意は頗る堅い。且つ彼が演説の冒頭に於て、「過去數日間予は各方面の代表者の意見を求むるに骨折つた。その結果戰爭の目的と平和條件とについては國民的一致あることを發見した。故に吾輩の云ふ所は啻に政府の意見にあらず、實に國民全體の意見である」と云ふを觀ても、英國の決心の程は覗はれる。若し夫れウィルソンに至つては、詳細に其決心を語り、烈しく獨逸を責めて、その戰爭に關する決心の牢として拔くべからざるものあるを示して居る。彼曰く、「恁かる條件の獲得の爲めには吾人は敢て戰鬪を辭せず。之れ唯吾人は正義の行はれ、前記諸條件の遵奉に依つてのみ保障せられ得る正當確實なる平和の實現せんことを冀ふの意に出づるものにして、敢て獨逸の强大を嫉視するが故にあらず……若し獨逸にして正義と法と公正との約束に於て、吾人並びに他の凡ての平和を好愛する國民と提携するを厭はざらん乎、吾人は何を以て干戈の間に彼と見ゆるを敢てせんや……予の提案せる諸條件を通じて流るゝ明白なる一原則は、畢竟凡ての國民と民族とに正義を保障することに在り。換言すれば、その强弱如何に拘はらず、凡ての民族に自由並びに安全の對等條件の下に生存するの權利を承認するに外ならず……此原則の爲めには、吾人は生命と名譽と其他一切の所有を捧ぐるを辭するものにあらず」と。以て彼等が、以上述ぶる所の諸條件を最小限度の要求として、最後まで其獲得の爲めに奮鬪せんとするの大決心を知る事が出來る。

予は終りに英・米兩國當局者の宣言を讀んで得たる三つの要點を揭げて、此小論文を結ばうと思ふ。

第一は、英・米兩國の各種の主張の根抵となつて居る原則は、畢竟もつと明白に露國が主張して居る所のものと本體を一にして居ることである。從つて戰爭の目的並びに講和條件に關する思想としては、

露西亞の思想が最も卓越して居ると謂はねばならぬ。といふたからとて必ずしも此種の思想の發祥地が露西亞であるといふのではない。唯最も醇正なる形に於て這の思想を卒直に聲明したのが露西亞である。それだけ又露國の思想は獨り揭焉として他國を支配せんとする概を示して居る。英・佛側も固より戰爭の初め以來同じやうな原則を抽象的に主張しないではなかつた。けれども彼等は時として獨逸に對する自家の利害問題を、利害を離れた抽象的原則の貌の下に主張するの嫌ひ無きを得なかつた。例へば民族自決主義といふ原則の下にアルサス・ローレンを佛蘭西に奪はんとしながら、同じ原則を愛蘭や埃及にも適用すべきや否やは、故らに言明を避けて居つた。從つて彼等の主張は聊か醇正を缺く所がある。それだけ露西亞の公正なる且つ卒直なる主張の前には聊かたじろかざるを得ない氣味がある。之れ露西亞の思想の何と云つても今日最も優勢を示して居る所以である。尤も露西亞の主張の重きを爲すのは、露西亞の主張の實際的適用が、大體に於て獨逸に不利なるも、英・米・佛に取つては太だ有利なる所あるの事情にも幾分依る所はあらう。

第二に、露西亞の主張するが如き原則は、英・米の之を賛するによつて、今日殆んど多數國家共同の要求となつて居ることである。只此原則の適用は殆んど悉く獨・墺側の不利とする所であるから、事實上完全なる承認を彼等より得ることは頗る困難である。元來獨逸は今度の戰爭に於て正義公平の立場から云へば受け身の地位に在るのだから、戰に勝つても多少の讓歩は到底免かれない。が、何處まで讓歩さした所が、今日彼等の私かに胸中に藏する所の講和條件は、固より英・佛の主張とは餘程距離の遠いものたるに相違ない。從つて今日は言ふまでも無く、近き將來に於ても、英・米側と獨逸側との講和條件は容易

に一致を見るものでない。而して正義を後援として最後の捷利を確信して疑はざる英・米の決心前記の如く牢として抜くべからずとせば、講和機運の熟成を見るまでには、今後更に永い時日を待たなければならない。如何に勇猛でも、獨逸が更に大に猛進して其意思を敵國に强請するといふが如きは、今日の所もはや其見込は無い。然らば平和の到來は之を獨逸側の事實上の屈服の時に俟たなければならないが、斯くの如き屈服は果して何れの日に來るであらうか。米國は密かに獨逸民衆の起つて政府の軍國主義を紛碎せんことを豫期して居るやうに見える。露西亞は現に進んで無線電信或は檄文の撒布によつて頻りに獨逸民衆の平和思想を煽動することに骨折つて居る。英・米兩國の當局者が更に戰備を修めて、獨逸に事實上の打擊を與ふる前に、思想上獨逸が國內平和主義者の壓服する所となるを期し得るだらうか。獨逸が昨今故らに露西亞との單獨講和の顚末を國民に正しく報道せざるの事實に觀るに、獨逸內部民心の動搖は單獨講和開始以來とんと其勢力を增して居るとも想はれる。要するに双方の講和條件の間には、未だ大なる距離がある。從つて近く平和の克復すべき見込みは無い。けれども亦いつ何時平和の氣運を急激に持ち運んで來るか分らないといふのが今日の實況であらうと思ふ。

第三に、平和の克復が何時如何なる時期に到來するにしろ、講和會議に於いて所謂「萬國聯合組織」は確に一個の重要なる問題となるに相違ないことである。斯くの如き思想は古來屢々閑人の空論に止つた。而かも現實の國際關係は古往今來常に陰雲の見舞ふ所となつて居る。從つて過去の歷史に囚へらるる者は、一言の下に斯の如き思想を痴人の甘夢と罵倒し去る。無論國民と國家との關係が從來の如く單純なる信義と公正とを以て支配し得ざりし時代に在つては、一躍に安全確實なる世界的聯合の成立を見

は不可能である。併し之が出來ぬ間は世界の平和の永久に保たれないのも亦、過去の歴史の教ふる所である。そこで從來の經驗に失望して迚も駄目だと諦めるものもあるが、併し又一方には苦い失敗を重ねた度毎にこれだから國際聯合が益々必要だと考へるものもある。現に今日世界の有力なる政治家が眞面目に此問題を攻究して居るといふ事實は、之を輕々に看過してはいけない。表面はどんな公明正大なことを云つても、腹では何を考へて居るか分らないなどといふのは、餘りに公人の心事を疑ふものである。口先で何を云はうが實力の前には何になると云ふのは、餘りに思想の力を無視するの議論である。眞面目なる人の眞面目なる思想は、或る場合に於ては武力よりも強い。吾人は戰後直ちに國際聯合組織の創設あるべしとは輕信しない。又創設されても固より初めから完全なものとも思はない。併し乍ら戰後に於ては、國際協同の力によつて法と正義とを擁護し、又此協同の力を以て武力を恃む或る一國の跋扈を抑へようとするの主義、從つて又凡ての善き事に於て世界の凡ての國が誠意を以つて協力するといふ主義が、國際間の通義となり、又各國銘々の根本方針となるだらう、此の爲めに或る種の國際組織が實現するだらうとは、予輩の深く信じて疑はざる所である。

財政上より觀たる支那

法學博士　堀江歸一

一

余は昨年十月中華民國財政總長梁啓超氏の聘に應じて、北京に赴き、財政部の官吏、中國交通兩銀行員を會員とする財政金融學會に於て、通貨銀行金融の諸問題に關して二十餘回の講演を試み、聊か支那人の知見開發に資すると共に、財政當局者の諮問に基き、二三の問題に對して、卑見を開陳し、支那の經濟制度を改善するに多少の力を致したり。此間多數の支那人と交遊し、又在留邦人の所見を叩き、支那の現狀に就て、得たるもの尠しとせず。今所感の一端を披瀝して、讀者の叱正を請はんとす。

支那に於て余が第一に接觸したる問題は中國銀行條例改正の一事なり。支那に於ける紙幣發行の制度は完備したりと稱する能はず、地方に於て諸銀行が紙幣と約束手形とを同一視して、其濫發を試み、爲めに生ずる弊害の大なるは既に顯著の事實なるが、北京に於ても中國交通の兩銀行あり、中國銀行は財政部に、交通銀行は交通部に屬し、共に紙幣發行權を有して、營業しつゝあり。同一政府の行政部門に屬する二個の發行銀行ありて、一の都會に於て互に業務を競爭しつゝあるが如き奇怪至極の沙汰なるに、（其後發行權を有する滙業銀行なるもの新に設立せられて、益々此不合理を甚だしからしめたり）兩銀行の營業方針亦宜しきを得ず、相次いで紙幣を増發して、兌換停止の已むを得ざるに至り、余の北京に赴きたる當時、紙幣の流通價格は六十内外に居り、政府は之を引上ぐる目的を以て、或は額面價格を以て、兩銀行紙幣を官吏の俸給支拂に用ひ、又鐵道賃金の納付に充つるが如き方法を取れ

と雖も、流通價格の維持に大なる効果を及ぼすを得ざりき。玆に於てか、中國銀行當局者は銀行紙幣整理の根本方針として、政府と銀行との關係を明にし、後者をして前者に對して獨立の地位に居らしむるの急務なるを認め、同銀行則例の改正に就て、卑見を徴したり。

而して中國銀行則例なるものを見るに、一二の點を除き、悉く日本銀行條例を直譯したるに外ならざるは、余の一驚を喫せざるを得ざる所なりき。今其全體に渉り、如何なる點に如何なる改正を施せば、支那の國情に適合する銀行條例たるを得るや、正確なる判斷を下するに苦しめりと雖も、兎に角支那當局者の求むる所は中國銀行をして政府より獨立せしむるに在るを以て、之に應じて制度を改正するの必要ありとしたり。然らば從來の條例に於ては、何故に中國銀行は政府に對して獨立する能はざりしやと云へば、則例第十七條に於て、總裁副總裁を政府に於て、任命するが爲めに外ならず。是れ日本銀行條例に於て、日本銀行正副總裁の政府任命に係る規定を模倣したるものなる可しと雖も、實際の結果に於ては、中國銀行を擧げて、政府に隷屬するに至らしむるものなるを以て、中國銀行の獨立を期する以上は、先づ此規定を改正するの至當なるを考へ、余は正副總裁の株主總會の選擧に依る可きの改正を立案したり。

以上の改正は其後國務院の決議を經て、大總統令を以て公布せられ、本年二月を以て、實施せらるゝの豫定なり。唯今日中國銀行株式の過半は政府の所有に係るを以て、株主總會に於て正副總裁を選擧するも、大株主たる政府が選擧を左右するに至るの道理にして、隨て政府に對して中國銀行が名實共に獨立するには、民間の財力大に發達し、政府の所有する中國銀行株式の民間に賣却せられたる後を待たざる可からずと雖も、以上の改正が聊か中國銀行獨立の素地を開きたるは疑を容れず。唯昨年十一月段内閣瓦解し、現時の王内閣組織せらるゝや、中國銀行總裁王克敏氏總裁在職の儘、財政總長に就任し、監督者と被監督者との職を一身に兼ねたるは、中國銀行獨立の要求あり、又現に

之を實行すべき條例の制定せられたる今日に於ては、目するに一個の奇觀を以てせざるを得ざるなり。

二

尙ほ一の奇觀を以て目す可きは、中國銀行の外に、交通銀行なるものあり、交通部に屬し、交通總長たる曹汝霖氏其總裁を兼任し、財政部に屬する中國銀行と相對して、紙幣を發行しつゝあり。支那の如き領土廣く、加ふるに交通機關の不備なる國に於ては、二個以上の發行銀行の全國に涉つて存在するも亦已むを得ざるの數なるが如しと雖も、二個の發行銀行が共に其本據を北京に置き、互に行政上の所屬を異にし、一は交通系に他は進步系に屬して、兩者の政治上に於ける系統に異なるが如く、兩銀行亦相對立し、共に營業上の方針を誤りて、不換紙幣を濫發し、紙幣の流通價格著しく低落して、何時兌換の復興を期するを得るや知る可からざるが如き、滑稽の沙汰と云はざる可からず。昨年十月、我國の興業、朝鮮、臺灣諸銀行と交通銀行との間に交通借款なるもの成立し、交通銀行は整理資金の融通を受けたれども、銀行其ものゝ經營に大なる缺陷ありて、之を補正するの道備はらざる以上は、借款に依て、整理の實を收めんとするが如き、望む可からざる所なりとす。余は支那人に會する每に、此事の背理を以てし、何故に中國交通兩銀行を合併するか、又は交通銀行の紙幣發行權を廢止するの擧に出でざるやを難詰したれども、支那人は何れも事情の已むを得ざるを楯として、辯解するの外に道あるを知らざりき。

余は中國銀行條例を改正するに當り、偶然支那に於て改革事業を爲すことの甚だ困難にして、漸進主義を以てせざる可からざる所以を理解するを得たり。蓋し中國銀行は紙幣發行權を有し、財政部に對して特殊の關係を持し、其地位たる他國の中央銀行と異ならず。然も中國銀行は營業報告を世間に公表するの義務を負はざるなり。斯の如きは發行銀行として許す可からざる所なるを以て、條例改正の機會に乘じ、余は條例の一條に、中國銀行は每日營業上の現計を財政部に報告し、且つ每週の平均高を官報に公告す可き旨の規定

掲げ、以て條例の完備を期したり。然るに大總統令を以て、發布せられたる中國條例則例を見るに、余が改革の眼目としたる營業報告公示の一條は空しく削除せられて、其跡を留めず。茲に於てか當局者に向つて、其理由を糺したるに、當局者は中國銀行の現狀を以てして營業報告の發表に困難なる事情を訴へ、强ひて之を發表せんか、却て銀行の信用に不良の影響を及ぼすの恐あることを憂ひ、他日を期するに至れる所以を說きたるを以て、余亦遂に之を如何ともする能はず、重役任選の方法に關して加へられたる改正を以て、最も重要なるものとし、他は姑く不問に付することゝしたり。此事たる、支那に於ける改革の容易ならざることを示すの一端たる可きなり。

三

幣制改革は支那の財政問題として、年來の懸案なり。民國三年二月公布の國幣條例は卽ち支那現行の貨幣法にして、庫平純銀六錢四分八釐卽ち二十三グラム九七七五〇四八を以て價格の單位とし、之を圓と稱するの規定なるが故に、此法律にして厲行せられんか、支那は銀單本位制の國たるを得べし。支那は國幣條例の下に、各種の貨幣を鑄造發行しつゝあり。而して同條例に據る各種の銀貨は同價流通の狀態を維持しつゝあるが故に、從來の貨幣流通狀態に比較して、一步を進めたるの跡ありと雖も、政府は新銀價を發行しながら一方に舊銀貨に對して、何等の處分を施さず、國幣條例施行細則第三項「市面通用之舊銀角、舊銅元、舊制錢、政府以國幣收回改鑄之但於一定期限內仍准各照市價、行用前項舊幣用以完納公款時每月內各地方公署懸示市價收受之其市價以前一月該地方平均中價爲標準」の如き遂に厲行せられず、種々の貨幣の流通すること雜多にして、其間に何等統制の見る可きものなく、加ふるに外國貨幣併に銀行紙幣の流通を以てし、國幣條例第一條「國幣之鑄發權專屬於政府」と云へる規定の如き、意義の見る可きものなきに至れり。又假に政府が國幣條例を厲行したりとするも、銀貨本位の下に、支那の流通貨幣を統一するが如き、幣制改革の目的に

適合したりと稱する能はず。蓋し幣制改革の期圖する所は一二に止まらずと雖も、就中其重要なるは諸外國と、貨幣の基礎を同一にして、對外取引を確實にし、以て資金の融通、貿易の伸暢を求むるの諸點に存し、銀貨本位に依て、内國の貨幣を統一するは、是等の要求に反するものあればなり。

昨年八月段内閣の組織と共に、梁啓超氏の擧げられて、任を財政總長に受くるや、曩に幣制局總裁たり、又在野の時代に幣制改革論を公にしたる關係上、自己の在職中に此問題を解決せんとし、余に囑するに改革の立案を以てしたり。余は財政部泉幣司何福麟、同部員余名詮の兩氏に就て、支那の實情を聽取する一方に、從來改革案として公にせられたる諸案に就て、其長短を研究し、結局(一)支那に於ける貨幣取引の基礎を金貨に據らしむること、(二)支那現行の貨幣流通狀態に大なる變革を急劇に來さしめず、殊に民國三年國幣條例の認めたる諸規定は成る可く之を存續すること(三)外國借款に依る所を最も少なからしめ、隨て徐々に改革を進むること(四)國際貸借の狀況を支那に有利ならしむることの諸點を骨子として、私案を編成し、說明書と共に、之を梁氏に交付したり。然も其後二日にして段内閣動搖し、梁氏は進步系閣員と共に辭職し、段内閣亦瓦解の已むを得ざるに至れるを以て、梁氏の手に依て、幣制改革の行はる可き希望遂に空しきを告げたり。斯る事情より云ふときは、現下支那に於て幣制改革の計畫を遂行する爲めに、事業を政治上の關係より分離し、新に幣制改革督辦の官制を設け、督辦に一切の權限を付與するを必要とする意見の行はるゝも亦偶然に非ざるなり。

然れども余は北京に滯在して、多數の支那人と會談し、又北京に於ける商業取引の實狀を目撃して、支那幣制改革の根本問題に就て、一個の疑惑の生ずるを禁ずる能はざりき。即ち支那人は幣制改革を必要としつゝありや否やの點是れなり。支那に於て各種貨幣の間に同價流通認められず、流通の狀態混亂せるが爲めに、最も不便を感じ、困難を訴ふるは外國人殊に新來の外國

人なり。現に余の如き北京に到着後數日ならずして、銅錢に缺乏し當時宿泊せる北京ホテルの帳場に就て、一圓銀貨を銅錢に兩替することを求めたるに、番頭は余に交付するに百枚の銅貨を以てしたり。各種貨幣の間に同價流通の行はるゝ國ならんか、斯る兩替は固より當然にして、何等論ず可きものなしと雖も、支那は貨幣の不同價流通を本體とする國なり。隨て銀貨と銅貨との交換率は市場の狀況に依て定まり、日に變動するを免かれず、當時に於ては銀貨一圓に對し銅錢は百二十五枚を以て、市場の兩替相場としたるが故に、ホテルが銅錢百枚を以て、銀貨一圓と引換ふるが如き、即ち外來の旅客に對して、其無智に乘ずるの奸手段とせざるを得ず。一圓銀貨と小額面銀貨との交換率亦然り。前者は大洋と稱し、後者は小洋と稱せられ、兩者の間に同價流通行はれず、一圓銀貨は例へば二十錢銀貨の六枚に相當々が故に、二十錢の貨物を買入る場合に、一圓銀貨を支拂に充てんか商人は釣錢として五枚の二十錢銀貨を得意先に交付するを當然とす。然も奸商にして得意先きを新來の外國人と見るや、兩種銀貨の同價流通を裝ひ、自家の嚢裡を肥さんとす。此外銀行の發行する兌換券にして、北京通用銀貨に兌換せらる可きものと天津通用銀貨に兌換せらる可きものとあり。北京に於て後者を流通せんとする場合には、前者に比較して、二三錢の割引を覺悟せざる可からず。加ふるに銀貨を主として流通し、又兩銀を以て、爲替相場を定むる支那に於ては金貨國に對する經濟上の關係に安定を缺き、金貨國との貿易の投機に流るゝは勿論金貨國の資金亦支那の希望する程度に於て支那に流入せず、其來る場合にも、條件の支那に不利なるを免かれず。

上述諸種の事情は支那をして幣制を改革し、內國に於ける貨幣流通狀態を整理し、其基礎を金貨に置かんとする意見の主持せらるゝ所以なるが、支那人は如何なる程度まで此必要を認めつゝありや。支那人は如何に內國の貨幣が今日の如き亂雜なる狀態の下に流通すると雖も、之に對して各自の利益を保護するの道を知り、又斯く貨幣の混亂せる爲めに、兩替商其他種々の

職業に就く者あり、兩替爲替其他の方法に依り、奇利を博すること亦少なからず、唯支那人中外國貿易に從事し、又金貨國より資金の融通を仰がんとする者は貨幣制度の不備殊に本位制度の多數文明國と異なる現狀に滿足せざる可しと雖も、是等は國民中の少數者に過ぎざるを以て、如何に熱心に幣制改革を希望するも、未だ國民的要求と認むる能はざるなり。而して從來支那に於て屢々幣制改革の計畫せらるゝは、要するに外國に熱烈の希望あり、支那にして此希望に應ずるときは、幣制改革を名義として、外國に借欵を起すを得べきが故に外ならず。支那人の側より云ふときは、外國が支那に向つて幣制改革を要望し、然も支那の爲めに之を實行す可しと勸告するが如き、寧ろ滑稽の沙汰にして、支那人は諸外國の支那に幣制改革を勸むるを以て、支那の爲めにするに非ず、自國民の爲めにするものなりと理解しつゝあり。是れ支那人が幣制借欵を起して、有利なる條件の下に改革に要する資金の調達を仰がんとする所以なり。然も諸外國は支那の幣制改革を以て、支那の爲めにするものなりとし、援助を與ふるに就て、自ら條件の嚴正を欲し已まず。兩者の間に此誤解あり、幣制改革の前途容易なりとする能はざるなり。

四

予が北京に到着したるは昨年十月十日にして、北京を去れるは十二月二十四日なり。即ち滯留の期間は七十五日にして、此間財政部の官吏、中國交通兩銀行員等を會員とする財政金融學會に於て、前後二十二回の講演を試み、實際の方面に於ては中國銀行條例の改正に參與すると共に、貨幣制度の改革を立案したり。前者は或る程度まで卑見に基きて、新條例の制定を見るを得たりと雖も、後者に至つては、梁啓超氏の退職と共に、何等の效果を實際に示す能はざりしを遺憾とするものなり。余が僅々七十五日間の滯在に於て、右に揭ぐる職務を果したるは、要するに支那當局者の方に余の意見を用ゆるの誠意あり、余の方に於て支那の爲めに多少なりとも貢獻するの熱心ありたるの結果に

ならざるなり。

今日北京には專門の學科に就て、日本人敎習の駐在するものなしと雖も總統府以下行政各部に雇聘せられつゝある邦人顧問は四五の人を數ふを得べし。然も是等の顧問あることに依て、支那は幾何の利益を收め、又日本は如何なる利益を博しつゝあるやと云へば、共に大なる疑問とせざるを得ず。支那政府の顧問を遇するや、多く之を一個の看板とし、顧問を派遣する國の歡心を繫ぐの具とするに止まり、大に顧問をして指導の任を致さしむるの誠意を有せず、顧問亦就任の當初に於ては、政府の爲めに献策を試みることある可しと雖も、其支那人目前の利益に一致するものに非ざる限り、支那政府の採擇する所と爲らざる爲め、自ら支那に對して冷淡を極め、無爲無能の間に任期を終了するの傾あり。憐れむ可し顧問の多くは飼殺しの豢公人と異ならざるを。元來我國が支那に顧問を派遣するや、多く官吏の古手を以てし、官界に置くも老朽して任に堪へず、然も退職を命ずるには多年の勤勞上同情す可きが如き者を救濟する爲めに、支那政府の顧問とするの趣なきに非ず。又時に本國に於ては品性人格に關して、一般の指彈を蒙れる者が一時の避難所を求むる爲めに、支那に顧問たることあり。斯る輩を擧げて、支那の顧問たらしむるも、支那人の尊敬を買ふ能はず、何等支那の爲めに爲す所なきに終るは、幾多事例の證明するに足るものあり。斯の如くして、支那に權勢を收めんとするが如き、企て及ぶ所に非ざるなり。從來の如き顧問ならんか、其增減の如き、毫も意に介するに足らず、支那政府たるもの、顧問制度に依て、利益を收めんとする以上は、顧問を迎ふるに誠意を以てすると共に、顧問の人選に注意し、一方に顧問たるもの、支那に對して眞面目ならざる可からざるなり。

要するに顧問制度に依て、支那が政治上經濟上の改革を期せんとするが如きは一時の變態にして、支那自ら支那人に適當の敎育を授け、支那人をして外國に獨立して、自國を治むるに至らしめざる可からず。而して支那が敎育ある支那人を得るには、現下の狀態に

於て、外國教育機關の援助を受くるの必要あるや論を俟たず。余の今回北京に遊歷して見聞したる所を云へば、支那人教育に就て、近時最も活躍しつゝあるものは北米合衆國にして、北京の郊外に豫備校を設立し、支那の青年に英語英文を始め專門學を修得するに必要なる知識を授け、其業の成れる者は之を本國の大學に送りて、專門の學科を修めしめ、而して此間に要する費用は先年團匪事件の際に合衆國の領收せる賠償金を支那に還付し、爲めに生じたる財源を以て支辨することゝしたり。今や此方法の下に、合衆國の教育を受けたる青年は行政各部に於て、漸次樞要の地位を占めんとしつゝあり。又支那の青年にして日本に遊學する者の數も亦少なしとせず、青年官吏にして、日本何大學何學校の出身なりと稱する者、到る所の行政各部に之を見ると雖も、余が支那滯在中、實見したる所に據れば、我國に於て最も教課の嚴重なる學校に入學し、何等の情實も、斟酌もなく、日本の學生と同一程度の試驗を經て修學したる者は、支那人たるの故を以て、容易に卒業證書を授與するが如き學校の卒業生に比較して、遙に本國に於て官吏として優秀の成績を擧げつゝあることを爭う可からず。故に我國が支那人を教育するに當つては、營利的に經營せらるゝ學校が成る可く多數の支那人を收容するの目的を以て、容易に卒業證書を授與するが如き方法を愼しみ、眞面目に教育に當る可く、支那政府たるもの亦日本に於て如何なる學校が最も嚴正に支那人に教育を授くるやを考へて、同じく日本の學校の卒業生と稱する輩の間に於て、相當の區別的取扱を爲さゞる可からず。支那人教育の見地より云はんか、彼の營利的根性を以て、支那人を收容する學校の如き、支那人教育の本旨に反するの甚だしきものなり。

新任博物館總長森林太郎博士に與へて博物館の革新を促す

高島米峯

一、如何の理想がある

大日本帝國に於ける唯一の博物館、しかも、帝室の名を冠せる堂々たる博物館にして、若し、その形式整はず、内容充實せず、觀覽者をして滿足せしむること能はず、研究者をして失望せしむるが如きものならむか、啻に、大日本の名に愧づべきのみならず、實に帝室の尊嚴に累することなきを保すべからずと思惟す。而して、その責や何人かこれを負ふべき、曰はく、言ふまでもなく、館長その人たらざるべからざるなり。これを以て、僕曾て、博物館の改善に關し、一二の意見を公表したることありしが、前館長、能くこれを容るゝの雅量なく、改むべくして改められざるもの、依然として今尙昨の如し。今にして、前館長を追窮するは、恰も、死屍に鞭つの憾なき能はず、如かず、新館長に向つて、改めて言を進めむには。

僕今、一度、官海を勇退したる森博士、……學會そ

の他、各種團體の會員たることまでをも辭したりと傳へらるゝ森博士が、何故に、突如として、博物館の館長となるに至りしかについて、徒に邪推を逞しうせざるべし。されど、僕は、森博士が、官海を退くと同時に、各種團體との關係をも絶ちたりと聞きたる時、博士は、必ず、專ら、文藝のために、半生を獻げむと決意したるものならむと想像し、早稻田の坪內博士が、老來却つて意氣旺盛、飜譯に創作に、文藝界に貢獻することの多大なると對比し來つて、曾て、明治の文壇に、轡を並べて馳騁したりしこの兩雄が、大正の文藝界に、再び筆陣を張つて相見ゆるの壯觀を、心窃に、期待するところ無からざるを得ざりしなり。然るに底事ぞ、爾來、未だ朞年ならざるに、早くも既に、再び官海に泳ぎ出でたるさへあるに、官吏中、最も拘束多くして自由を缺ける位置を選び、新聞に連載せる「伊澤蘭軒」さへ、その脫稿の年月日までを明記して、任官以後の作にあらざることを、辯明せざるべからざる程の窮窟をも、これを堪へ忍ぶの境遇に甘んずるに至らむとは。

されど、これは、僕の期待の誤りにして、森博士に於て、もとより風馬牛たらむ。若し果して然りとせば、野に居りて自由に專心に、文藝のために盡すところあらむともせず、一旦念を斷ちたる官海に再度の航行、殊に、特に選びて博物館に長たるに至りし以上、博物館に對する理想とこれが實現の手段とに於て、必ずや自ら深く信ずるところあるものと、解せざるべからず。少くとも、現任學習院長北條氏が、まづ一二の改革案を提出して、その容れらるべしといふ保障を得たる後、始めて任に就きたりといふが如き底のもの、なからざるべからざるなり。否、賢明にして思慮深き森博士、もとより多大の抱負これあらむ。されど、その就任の挨拶に於て、新舊館長送迎會席上に於て、博士はたゞ、前館長の方針を繼承し、若し改むべきものあらば、徐々にこれを改めむと欲する旨を語りたるに過ぎずと聞く。僕は、是を以て、漫然、謙讓の人、その言ふところ、もとより此くの如くならざるべからずと稱して、已むこと能はざるなり。冀くば、一言せしめよ。

二、大陳列館の增築

僕未だ海外を知らず、これを以て、歐米先進國の博物館と、我が帝室博物館とを比較して、その長短得失を論ずるの資格なしと雖も、しかも、僕は、我が帝室博物館に對し、たゞ我が帝室博物館として、幾多の不滿なきを得ざるなり。況や、海外に旅行して歸り來れる者の觀察に從ふも、又、來朝せる外人の語るところを聽くも、我が帝室博物館は、失望と嘲笑との標的たるに於てをや。

博物館中、最も新しき建造物たる表慶館さへ、兎角の批難を免るゝこと能はず。殊に、新築以來、幾年を經たるかを知らざるも、その本館と稱するもの以下、各種倉庫に至るまで、頗る舊式なるが上に老朽に近く、たゞ打ち見たるだけにても、我が國唯一の帝室博物館として、甚だ貧弱を感ぜずむばあらざるなり。もとより、形式の整備よりも、内容の充實を貴しとすと言ふものあらば、それにも一應の道理はこれあり。されど、今の我が帝室博物館を觀覽せるもの、誰か、その内容の充實を嘆美するものありや。謂はゆる内容の充實とは、藏品の夥しきをのみ言ふにあらず、珍品重寶の多きをのみ言ふにあらず、寧ろ、館務に從事する館員の頭腦の明晰と、知識の豐富と、手腕の卓越とを加算することを忘るべかざるなり。然るに我が帝室博物館、果して藏品夥しきか、果して珍品重寶多きか、館員諸君の頭腦と手腕、果して今日の文化に順應せる、博物館經營に堪へ得るものあるか。

内容の充實、もとより焦眉の急務たり。されど、今の帝室博物館に在りては、最も進歩せる建築術と、最も清新なる博物館經營法とに基ける、大陳列館の增築を、更に、より焦眉の急務となさゞるべからず。歷史部にせよ、美術部にせよ、工藝部にせよ、考古部にせよ、人種部にせよ、博物部にせよ、材料如何に多くとも、これを陳列する場所を有せずむば、蓋し、寶の持腐れなり、又これが陳列の方法、非科學的ならむか、博物館に依りて請益せむとする研究家は、何等得るところなかるべく、一般觀覽者は、これによりて啓發せ

らる丶こと尠かるべし。これを以て、新館長森博士、若し聊かにても、今の帝室博物館をして、博物館らしからしめむの意あらば、まずこの問題の解決より着手せざるべからず。

或は曰はく、新館増設、事頗る可なりと雖も、建築費を得むこと、甚だ難事たりと。或は然らむ、されど、必ずしもこれを國庫に仰ぐを要せず、宮内省に求むるを要せず、もとよりこれがために、帝室を煩はし奉るを要せざるなり。今や、成金輩中、漸く酒色に飽き、別莊に飽き、書畫骨董に飽きて、公共の事業に財を散ぜむとするものを出すに至れるの時、彼等を善導するに、その道を誤ること無くむば、百萬二百萬の金を、帝室に献納せしむるが如き、決して不可能にあらざるべければなり。

三、觀覽者のため研究者のため

博物館の目的、もとより單一ならず。その中には、一般人の知識の啓發といふことも含まるべく、専門家の研究に便益を與ふることも含まるべく、從て、これ等の目的に沿ふべき、各種の材料の蒐集と保存といふことも含まるべし。この見地よりして、我が帝室博物館を觀る、果して能く、一般人の知識を啓發し指導するに足るべき、設備整へりや否や。試みに、一定の觀覽料を納付して、博物館に入れ。まづ、一枚の觀覽手引さへ與へ、若しくば賣らざるがために、何處に何物が陳列しあるかを知るに苦しむのみならず、自己の研究材料を索めむがためには、兎も角も、一應、博物館全體を廻覽せざるべからず。而して、漸くにして、目的の材料の陳列室に入ることを得たりとするも、目錄の備へこれ無きがために、博物館には、現に陳列せられたる材料以外に、果して幾何の材料の蓄へあるかを知るに苦しまざるべからず。加之、何等かの方法を以て出陳以外、別に數多の珍品重寶を藏することを知るを得たりとするも、それを觀むこと、決して容易ならず。若し人あり、出陳以外の物品を、特に觀むことを欲するも、某々官署の照會を經るにあらざれば、恐らくは許容するところとならざるべし。

且つ、その陳列の方法、餘りに混雜を極め、その說明又甚だ不親切にして、博物館によりて、知見を擴めむと欲する處の一般人に於ては、何等の啓發、何等の開導をも得る能はざるのみならず、專門的研究に從事する人のためにも、便益を與ふること決して多からず。苟も、博物館に就いて、何事かを研究せむと欲するもの、多くはこれ篤學の士、縱令、その研究が、己の爲めにするにもせよ、人の爲めにするにもせよ、これが研究を助けて、その目的を達せしむること、博物館に死藏せる寶物を、世間に活躍せしむる所以の事業ならずや。何等か特殊の方法を設けて、研究者をして簡便に、博物館の恩惠に浴せしむるの途に出でざるべからず。

是を以て、僕は、博物館當面の事業として、凡そ、左の數項を擧げむと欲す。第一、各部の目錄を大成して、これを發賣すること、恰も帝國圖書館の執り來れるところの如くなるべし。第二、簡便なる觀覽案内を印刷して、觀覽者一同に與ふること、恰も某々博覽會の爲せるが如くなるべし。第三、藏品中の珍品重寶は大略の說明を加へて、これを繪はがきに製し、一般觀覽者及び研究者をして、自由に選擇購買せしむること、恰も文部省美術展覽會の如くなるべし。第四、陳列は、出來得る限り組織的にして、研究者を便し、說明は、成るべく啓蒙的にして、一般觀覽者の知識の開導に資すべし。此くの如きは、賢明にして思慮深き森博士の胸中旣に成案あるところならむ。若し、僕のこの言、喧嘩過ぎての棒ちぎれとなることもあらば、啻に、僕一人の幸慶たるのみにあらざるなり。

四、繁文縟禮の打破

官僚的繁文縟禮は、各官署の通弊にして、獨り、博物館の專賣にあらざれども、取りわけて博物館の繁文縟禮には、大抵の商人、悉く恐れをなす所なりと風聞す。その風聞に曰はく、三十錢か五十錢の品物一つ購入するにも、電話にて呼びつけ、ヤレ見積書を送れ、ヤレ何日までに納入せよ、ソレ請求書を差出せ、ソレ領收書を携へて何日何時までに出頭せよと、イヤハヤ以

て大變なことなりと。或る皮肉なる商人は、その七面倒臭さ手續きに憤激して、「そんなに小六ヶしいことを仰つしやるならば、代金なんぞ貰ひに出ませぬから、どうとも、博物館の方で勝手に處分して下さい」と答へたる時、電話口に出でたる博物館員は、「帝室の御用に對して、そんな無禮なことを申しては濟むまい」と威嚇したる由。繁文縟禮を以て、帝室の御威光と心得たる程の沒分曉漢が、帝室博物館中にあるは、却つてこれ、帝室の尊嚴を冒瀆するの恐れなきにはあらざるなきか。

前にも言へるが如く、特殊の研究者が、出陳以外の物品を借覽せむとする場合、一私人としては、如何なる手續きを履むも、斷じて許さるゝの途なく、他日出陳せらるゝ機會を待つの已むを得ざるなり。何々學會といふが如き、團體を代表してこれを出願するも、願書が違式なりとか、宛名に官名が記して無いとか、種々の面倒を重ねたるとゝのつまりは、幾月も、そのまゝに握り潰さるゝこと、敢て珍らしからずとも傳へらる。これを以て、如何にかして、己の希望するところのものを觀むと欲せば、他の官署の紹介を得て出願するを、最も便利となす由。これも市井の風聞なれど、出願者が、如何なる人物なるかの不明なる場合こそ、さる小六ヶしき手續きも必要ならむが、出願者の履歷地位の明かなるものに對しては、杓子定木を振舞はさゞる限り、何等か簡便の方法を執ること、決して不可能にあらざるべし。

博物館員中、非常識なるものこれありといふについては、更に一つの風聞あり。そは、新館長森博士任命のこと、新聞に豫報せられたるを見たる某博物館員は、「一體、この森林太郎といふ人は、今まで何をして居た人だらう。エッ、小說家？、軍醫總監？、へエー、そんな人が、博物館へ來たつて仕方があるまい」と、驚異の眼を輝かしつゝ、冷笑し去りたりといふ。如何に、「高等物置」の番人なればとて、かくまで非常識にして、かくまで沒分曉の徒あらむとは、吾輩の信ずること能はざるところ。されど、博物館が、十年一日の

如く、何等の進歩をも示さず、何等の發展をも爲さず、到底、時勢の推移と歩調を共にすること能はざるものあるを見るは、或は、かゝる駄人足の、二三にしてとゞまらざるなきやを、疑はざる能はざるなり。

如上の記載は、全くこれ市井の風聞にして、想ふに何等の醉興漢か、道聽途說したるものならむ。不敏、僕の如きと雖も、敢てこれを信ぜむとは欲せざるなり。されど、火無くして烟上らずといふを動かすべからずとせば、此くの如きの風聞、たまたま以て、新館長森博士をして、博物館に對して、情弊廓清の大斧鉞を下さしむる、好參考たらずとせず。

五、舊人新人

官廳の情弊打破は、舊人に代ふるに新人を以てするに始まる。博物館、豈獨り、御多分に洩るゝの理あらむや。然り、新館長森博士は、文壇及び官海に於て、新人を以て目すべき人にはあらざれども、これを前館長に比し來る時、幾何か新人らしき感なきにあらず。既に、幾何かにても、新人たらば、舊人たりし前館長の下に働きつゝありし舊人を陶汰して、これを補ふに、幾何かにても新しき人物を採用せざるべからず。されど、博物館の如く、美術品、工藝品、その他の物品に對して、鑑識上の權威を以て期待せらるゝところに職を奉ずる人々は、皆斯道の大家老巧者たるところを要す。從って、新人といふを、年少の青年と解すべからざること勿論なり。

歷史部には歷史專門學者無かるべからず、美術部には美術の專門家無かるべからず、宗教部……帝室博物館には、未だ宗教部の開設を見ずと雖も、こは、早晚必ず開設せられざるべからざるところのものたり……には宗教の專門家無かるべからず、その他各部、悉くその道の專門家無かるべからざるなり。然るに、今の博物館、果して此の種の專門家を網羅せるや否や。僕の知れる某々兩三氏の如き、實にその任を辱しめざる斯道の大家はこれありと雖も、尙、其の數の甚だ乏しきを感せざる能はず。されど、未だ、書畫骨董商と結託して、不正に己の懷を肥さむとするが如き、奴輩を

出さざることゝ、書畫骨董の賣買を内職とするが如き、劣等の館員を有せざることゝは、實に帝室博物館の誇りなりとす。

縦令、今現に、専門の學者あり、専門の鑑識家ありて、聊かも事缺かずとせむも、人間誰か百年の壽を保つべき、老巧の人相ついで易簀せば、これに代るの人俄に求め難かるべし。平常に於て、特に人物の養成に留意するところ無くば、事に臨みて噬臍の悔あらむ。殊に、博物館は、たゞ専門の學者あり、専門の鑑識家あるを以て、發展すべきものにあらず。若し、經營そのよろしきを得ざれば、恰も磨かざる璞の如く、遂に光を放つことなくして已まむ。この故に、これが經營の方面にも、特殊の人物を養成すべき要ある事も萬々。而して、この種人物の養成は、歐米先進國の博物館を、見學せしむることを以て、主眼とせざるべからず。

それ此くの如く、専門の學者あり、専門の鑑識家あり、而して専門の經營者あり、此等の人々互に相提携して、博物館の向上發展に力を致さむか、帝室博物館をして、名實相應せる、日本唯一の博物館たらしむること、決して遠き將來にあらざるべきなり。新館長森博士、若し、形式的方面にのみ眼を注ぎて、此の人物養成を忘るゝが如きことあらむか、十の改革百の廓清も、畢竟これ徒事に了らむのみ。先賢曰はく、一年の計は穀を植うるに在り、十年の計は樹を栽うるに在り、百年の計は人を養ふに在りと。至當と謂ひつべし。

六、特別展覽會の情弊

博物館の事業中、最も世人を益するものゝ一は、特別展覽會なり。特別展覽會を開かむがためには、博物館員諸君の、努力の尋常ならざるを看取して、常に感謝の意を表することを忘れざるなり。されど、帝室博物館主催の特別展覽會に、いつも眞贋の疑はしきものを出陳せらるゝは、果して何の理由に基くものなりや。僕、斯道に於て何等知るところこれなきものなれども、多少これを知れるものゝ、批難せるを耳にせる

こと一再ならず。若し眞に、眞贋の別を辨じ得ずして、否、贋物を眞物と確信して、これを公衆に示したるものならば、博物館の鑑識上の權威、果して何處にありや。若し、又、贋物と知りつゝ、これを眞物として、故意に出陳したるものなりとせば、公衆を欺くの罪、甚だ大ならずや。或人曰はく、「なンぼ博物館だからとて、この位の眞贋の區別がつかないといふことはないのだが、所藏者へ、無理に賴ンで出品して貰つた義理として、まさか、贋物だから出陳しないとも言へず、贋物といふ札をつけて出陳する譯にもゆかず、苦しまぎれの非常手段で、酌量すべき情狀はあるのサ」と。それ或はさる事情もこれあらむ。されど、此くの如き場合、敢然として眞贋の判決を與へ、縱令、博物館より懇願して出陳の承諾を得たるものなりといふとも、斷然排斥して、こゝに始めて博物館の權威も明に、且つ、世人を誤るの罪をも重ねざるべきなり。此の如き手段に出でゝ、若し將來、再び家寶を博物館に借さずといふが如き小量の徒あらば、斷じて借るを要せず。かくして博物館の鑑識上の權威、いよ〱高まり來り、この特別展覽會に出陳せらるゝは、同時に眞物たるの折紙を附與せらるゝと等しく、一擧にして二つの榮譽を荷ふものなることを理會せらるゝに至らば、自ら進んで出陳を求むるもの、次第に多きを加ふべきなり。若し、博物館にして、眞贋未了のものあらば、明にその然る所以を記して、これを一般觀覽者の批判に訴へ、相共に研究を重ぬること、また斯道に忠なる所以ならずや。然るを、聊かの情實に拘泥して、自ら僞り人を欺くが如きは、博物館の權威を危くする惡魔の所業と稱せざるべからず。

　特別展覽會は、然ずしも、出陳點數の多きを誇るを要せず。三點四點にても、鑑賞家を喜ばしめ、研究家を益せしめば、以て足れるにあらずや。玉石同列して鑑賞家を迷はしめ、研究家を侮辱するが如き、雜駁なる展覽會は、兩國の美術俱樂部に於て、殆ど每日これあり、敢て、帝室博物館を煩はすを須るざるなり。新館長森博士、またこの點にも留意し、部下を督勵して

時々、眞實にして而して有益なる特別展覽會を開催せしめられむこと、眞に切望に堪へざるなり。

七、動物愛護か虐待か

動物園も亦、博物館の事業の一なり。上野の動物園、その規模の小なる、その動物の自然を拘束する、その動物を殺すことの多き、その珍しき動物の皆無なる、世界の動物園中、最も貧弱なるものゝ一なる由は、常に、海外旅行者より傳へ聞くところなり。豹も死し、虎も死し、河馬も死し、狒々も死す。曰はく何、曰はく何。凡そ、兒童の觀むことを欲するが如き動物は、大抵、半歳を出でずして斃れざるなし。これを以て、氣候の變化は、彼等動物をして、長命せしめざる所以なりと辯ずるものあれども、然らば、何故に、淺草の花屋敷の動物は、比較的長命なるかを反問せざる能はず。啻に然るのみならず、花屋敷の如き、一小團體の經營にして、不完全なる興業的動物園に於てさへ、尚且つ、帝室博物館附屬の動物園よりも、奇獸珍禽の兒童に歡ばるるもの多きは、甚だ深刻なる皮肉ならずや。

動物園の目的の一は、各種動物の自然の生活狀態を人間に觀せしむるにあり。歐米の動物園に於ては、獅子の如きさへ、日々時間を定め、これを檻外に出して自由に遊ばしめ、象の如きは、兒童の最も親しき友として、解放するものさへこれありといふにあらずや。然るに、上野の動物園に於ては、犬一匹と雖も、自然のまゝにして、自由に行動せしめたるものこれなく、鐵檻裡に追ひ込められざれば、鐵鎖足を縛して、寸步も動く能はざらしむ。獰猛人を害するが如きものは、巳むを得ずとするも、然らざるものは、成るべく柔順に飼育して、兒童の友たらしめ、動物をして人を恐れしめず、兒童をして動物を愛するの情濃かならしめば、單に、知育上の効果著しきのみならず、德育上の效果も亦多大なるべし。

或る美術家嘆じて曰はく、「上野動物園の動物は、極めて不自然に生活せしめられて居るために、その形狀までが不自然になつて居て、折角、彼等を寫生するつ

もりで出かけて往つても、却つて失望して歸ることがある」と。『兒童教育の目的を達することも十分ならず、美術家のモデルとしても用をなさず、たゞ、斃後の剝製を目的としてのみの動物園ならば、上野の動物園は、規模餘りに大なるに過ぐ。これ無くば則ち已む、苟もこれ有る以上、有るが如くにして有らしめざるべからず。新館長森博士は、時々、動物園を訪ひ、彼等無告の動物に對して、如何にこれを遇すべきかを考究せよ。庶幾くは、その德禽獸にも及ぶの機會あるべし。

八、高等物置の番人

新館長森博士、就任以來、軍服を着し軍刀を帶し、早出後退、萬事軍隊式を發揮することをこれ怠らず、兎角、遲刻早退に馴れたる館員をして、大に覺醒せしむるところありたりと聞く。紀律を正すも亦是れ有用の事、決して輕視すべきにあらずと雖も、此くの如きは、必ずしも、新舊館長交迭の意義にあらざるべし。若し、新館長森博士にして、上來論述し來れる問題について、何等解決を與ふることなく。帝室博物館をして、依然一種の『高等物置』たるに止まらしめ、自ら物置番人たるに甘んぜむか、僕は、博物館長の交迭に、何等の意義あるかを知るに苦しむのみならず、特に、一度、官海を退きたる森博士が、再度の出馬についてその心事の諒とすべきものあるを、見出すこと能はざるなり。

知らずして行はざるは、その愚憐むべしと雖も、以て敎ふべし。知つて行はざるは、如何ともすること能はざるべきか。新館長森博士、冀くは、館長早出して自らストーブを焚きつけ、以て給仕の來るを待つといふが如きは、一種の挿話として價あるべきも、帝室博物館革新の大業には、甚だ多くの效果を持ち來さざるものなることを思へ。(大正七年一月十八日)



馬鹿囃子

村松梢風

一

書院番の士達が一度にどか〱と這入つて來て、辨當を喰べながら、暫時は花見の噂などで騷々しかつたが、軈て一人起ち二人起ち、廣い休息部屋は大風の吹き去つた跡のやうに靜かになつた。

左右は障子で、次の間との境には絲目の杉戸が立てゝある。廊下近くは薄暗いが、外へ對つた方は一面に春の陽ざしに燃えて、室內でも陽炎が舞ひさうに明るい。茶の世話をする坊主の姿も、もう其處らには見えなかつた。

そんな時分に、唯た一人で辨當を喰べに來た士があつた。梅鉢の紋の付いた袴を着た、三十前後の、何處か貧相な顏をした男である。

士は食事をしながら、時々何か考へるやうな眼つきをしたり、ぶつ〱口の中で呟いたりしてゐたが、何と思つたかいきなり辨當箱の蓋を、箸でポコポコ叩き始めた。

「ポン〱ポコ〱、ポン〱ポコ〱」

士は稍々暫らくの間叩いてゐたが、軈て滿足らしい微笑が口許に浮んで來た。と、細い口笛の音が、彼れ

の唇を破つて漏れて出た。
「ポコ〱」といふ單調な音に、巧に口笛が絡んでゆくと、微妙な、浮かれるやうな調子を持つて聞えて來た。
「これ！何を致して居るかッ」
突然廊下の障子を明けて、鋭い聲でかう云つた。幕府で「赤鬼」といふ綽號で通つてゐる大目付土岐丹波守が、何時の間にか其處へ來て突つ立つてゐた。
士は飛び上らんばかりに駭いたが、いきなり箸を放り出すと、「はッ」と云つて平目のやうに突つ伏して終つた。
丹波守はつかつかと部屋の中へ這入つて來た。
「只今のは、あれは何ぢや」
「はッ、ば……馬鹿囃子の眞似事で――」
「なに馬鹿囃子……？全體此處を何處と心得居る、慮外者！」
「恐れ入つて御座る。平に、平にお許るし」
「默らつしやい。其所許の姓名は何と申す？」
「な……内藤安藝守組下、椿井金之助――」
丹波守は眉間に太い太い皺を寄せて士を睨みつけてゐたが、其のまゝ長袴の裾を曳き摺つて出て行つた。
士は眞蒼い顏をして、ガタガタ慄へながら座つてゐた。

本丸書院番士椿井金之助が、殿中に於て馬鹿囃子をした條で、お役御免の上差控えを仰せ付けられたといふ事件は、幕府建ち始まつて以來の妙な出來ごととして、人々の笑ひ咄の種になつた。椿井は番町に住む五百石の旗本である。彼れは次男で、而も性來魯鈍な人物だが、兄が早世したゝめに、家督を繼いで幕府へも出仕することになつた。彼れが今度の禍をなした馬鹿囃子に凝り始めたのは、何んな動機からであつたか分らないが、左に右く何一つ滿足に出來ない此の男が、不思議にも馬鹿囃子だけは上達して、當時此の社會で名人と云はれる砂村の三吉でさへ「椿井さんの笛にやあ敵はない」と云つて舌を卷いたといふほど、優

れた伎倆を持つてゐた。で、彼れは其の日も新手を編み出すことに熱中してゐた餘り、到頭場所柄をも忘れて終つたやうな譯であつた。

此の話を、雲州松江の大守松平出羽守齊貴が聞いたのは、道悅といふお城坊主の口からで、事件があつてからまだ間もないことである。道悅は、椿井が大目付に見咎められてひどく狼狽したといふことなどを、自身が見てでもゐたやうに、手眞似身振りで話した末に

「藝に事を缺いて馬鹿囃子などに凝りますとは、馬鹿は馬鹿だけ、いやはや爭はれぬもので御座りますて」

と、仔細らしい顏をして云つた。

齊貴は異樣な感に打たれた。天下の旗本が馬鹿囃子に凝つて身を誤つたといふ出來事よりも、愚鈍な男が其の伎にだけ驚くべき上達を示したといふ話が、彼れの胸に強く響いた。

「餘程馬鹿囃子の才を持つて生れて來たものに相違ない」と、齊貴は椿井といふ人物の容貌などを心に描きながら思つた。殿中に居ることも忘れて、辨當箱を叩いたり口笛を吹いたりした椿井の心持が矢張り自分の胸にも流れてゐるやうな氣がした。

齊貴の祖父の治郷は、隱居してから不昧と號した。大名とは云へ諸藝に秀で、別けて茶道では雲州流の一派を開いて、風流な生涯を送つた人だけに、樣々の逸聞が當時も世上に傳はつてゐた。然し夫れも、曾祖父宗衍の奇行には及ばない。宗衍については次のやうな話がある。

或る時、宗衍が殿中で宿老田沼意次に會ふと

「田沼公に伺ひますが、大名が吉原へ參つてはならぬといふは全體如何なる掟で御座る？」と、眞面目な顏をして訊いた。

宗衍は平常を知つてゐる上に、何につけ如才のない意次は

「左樣な掟は御座らぬ。然し、雲州公若しお越しになるならば、予は出羽守ぢやと名乘つてお越しなされ」

と、笑ひながら答へた。

其の翌日、宗衍は登城の時と同樣に美々しく行列を

整へて、吉原をさして出掛けるのであつた。

宗衍は隱居して後も、相變らず不羈磊落の行ひが止まなかつた。常に黑小袖の紋付に黑縮緬の羽織といふいで立ち、其の頃流行のばつちを着け、尻をからげて、二三人の近侍を隨れて芝居や角力場へ入り込んだ。そして力士では釋迦ヶ嶽、俳優では瀨川路考などを取卷にして、處嫌はず遊び歩いた。

かうした血を享けて生れた齊貴は、十三歲の時に世繼となつた。爾來彼れは引續いてお城へ出てゐるので、柳營の事は一々實際を目擊して、それをお納戶や小姓に口授筆記させて置いた記錄だけでも長持に幾棹も溜つた。だから近頃は老中でも、五節句の儀式などは「雲州公に訊いて見ずばなるまい」と云つて、態々お城坊主を差し向けるといふ風である。かうして柳營の儀式古實に關する智識では、當時齊貴の右に出る者は無いが、尙それ以上に、彼れがあらゆる遊藝の達人であることも、世上に隱れない評判であつた。

齊貴は、祖父の流を繼いで茶道の稽古をしたり、或は能狂言を習つたりしたのを手初めに、四十餘歲の今日迄には、ありとあらゆる藝事を學んで終つた。藝事にかけては、彼れは眞に天稟の才を備へてゐた。他人(ひと)が一年かゝる處を、彼れは一と月か二た月で覺えて終ふ。こんな風であるから、今では何一つ新規に習はふといふものも無くなつて終つた。

齊貴は今道悅の話を聞いて、椿井といふ人物に興味を感じると同時に、馬鹿囃子といふものは何んなものであらうかと、俄に好奇心をそゝられた。「いやもう名の通り至つて馬鹿々々しい、愚にもつかぬもので御座ります」と、道悅は一概に貶(けな)して終ふのであるが、彼れには何となく面白いものでありさうに思はれた。

二

闌(たけなは)な春の陽が、青々した芝生の上、鱗のやうな小波を浮かべてゐる池の汀、圓い築山の蔭に半分見える四阿(あづまや)の屋根、あたり一面に燃ゆるやうな光を見せてゐる。

極彩色の浮世繪を描いた金屏風、象眼を鏤めた黑檀

の書棚、唐木細工の机、さうした調度で飾られた居間で、支度の整ふ間を待つてゐる齊貴の心は、初めて見ようとする馬鹿囃子に對する興味で一杯になつてゐた。

番町の椿井金之助の許へ、松平出羽守から使者が立つて「是非其所許の馬鹿囃子を拜聽致し度いから、近日今井谷の下屋敷の方へお越しを願ひ度い」と鄭重に申し込まれた時には流石に金之助も駭いて終つた。如何な玄人でも舌を卷く程、藝道の達人と云はれる出羽様の前で、まして馬鹿囃子などがやれる譯のものではない、と愚か者と云はれる金の助でも考へた。

「到底お耳を汚す程の藝では無之、且は差控え中の身でも御坐れば、此の儀は御用捨に預り度い」と辭退したが、其の後再三の使で「公儀の事などは當方で必ず引き受けるから」と迄云はれて見ると、根が好きな道だけに到頭承諾して終つたのであつた。然しかうなつて見ると、一人では出來ない藝であるから、彼れは當時此の社會で名人上手と云はれてゐる者ばかりを選つて、此の晴れがましい場所へ連れて行くことにした。先づ笛の吹手には、自身のほかに小松川の反歯の傳次郎、締太鼓では砂村の三吉と、本所の御家人囃子の頭目と云はれる岩附左門次、其の他大太鼓やチャンギリの打手。近年馬鹿踊りに新工夫を加へて評判を取つた藏前の新吉、小村井の初太郎、といふ顔振れであつた。

「お支度が宜しう御座ります」

一人の腰元が來て、廊下へ手を突いてから云ふと、齊貴は直ぐに脇息を離れて起つた。彼れの後から、紫縮緬の衣服に紅梅色の肩衣を着けた小姓だの、友禪模様の振袖に帶を矢の字に結んだ腰元などがぞろぞろと續いた。

正面は能舞臺である。其の大廣間の眞中に齊貴の席が設けられた。續いて大勢のお部屋方が、裲襠の裾を捌きながら、各々の腰元を隨へて這入つて來た。若し慣れぬ者が此の中へ挾まつたなら、眩暈を起すだらうと思はれるやうな、耀かしい色彩と、濃厚な脂粉の香

が室内を占領して終つた。

軈て肩衣を着けた囃子方や後見がゾロ〳〵と舞臺へ上つた。そして道具を前に座が極まると、一同大守の方に對つて恭々しく一禮した。と、其の時あちらこちらから、女達の忍び笑ひをする聲が起つた。

端たない腰元などが、笑ひ出したのも無理はない。藝人と云へば、美男子ではない迄も、大抵垢拔けのした男と相場が極つてゐるのに、是れはまた揃ひも揃つて妙な男ばかり並んでゐた。瘦せこけた眞黑い顏に、猿のやうな齒を見せてゐる反齒の傳次郎、藥罐頭で、有るか無いか分らないやうな眼と鼻の持主である砂村の三吉、菊石面の岩附左門次、其の他何れも近在の百姓だけに、かうして見ると何處となく樣子が可笑しい。齊貴も危く吹き出しさうになつたのをやうやう我慢したが、何だか馬鹿々々しいやうな氣がした。

然しそんな心持は、囃子が始まると同時に消えて終つた。それは急調な屋臺囃子から始まつた。

「テ、テ、チン〳〵〳〵」

と眞先に打ち出した締太鼓の音が、先づ齊貴を驚かせた。長唄の下方で充分覺えてある齊貴は、小撥の音が一里先迄聞えると云はれる三吉の撥音を聞き遁さなかつた。續いて傳次郎が吹き出した笛の音色に、彼れは又もや魂を奪はれて終つた。

陽氣な屋臺囃子が暫らく續いてから、一轉して閑雅な「昇殿」の手に移つて行つた。思ひ切つて調子を落した笛の音が、宛ら地を這ふ煙のやうに、太鼓の撥に纒はり絡んで流れるのが、何とも云ひやうのない面白味を見せて來る。と、最後に最も華やかな「四丁目」の囃子には入つて行く。

「面白い――」

齊貴は囃子が了ると、思はず讃嘆するやうな聲を出した。是れ程の藝を、今迄知らずに過ごしたといふのは、何たる迂闊なことであつたらうと思はれた。

間もなく舞臺では新吉の「素戔烏尊」が始まつた。囃子道具が改まつて、能管を椿井金之助、大拍子は矢張り三吉が打つた。

それは如何にも不思議な舞踊である。勿論在來の神樂とも違ふ。莊重な能から解脱して、其處に一種の滑稽味を加へたやうな、飄逸とも、洒落とも、形容し難い趣がある。

左に右く、謡ひといふものゝない、囃子ばかりを相手の此の舞踊は、間の拔けたやうな困難極まるものであらうと思はれるのに、それを巧に踊りこなしてゆく新吉の藝の冴えに、齋貴は驚異の眼を瞬らないでは居られなかつた。

三

今井谷の出羽樣の屋敷外を通る人は、明けても暮れても御殿の奥から漏れて來る馬鹿囃子の音を聞かない日はなかつた。

當分のうち椿井金之助や砂村の三吉は、殆んどお屋敷に詰め切りの姿であつた。藏前の新吉がやつて來て、齋貴の手を執つて馬鹿踊りを指南してゐることもあつた。――素朴で、單調で、そして間の拔けたような馬鹿囃子ほど、あらゆる遊戯に飽いて終つた自身の心持を、適切に語つて呉れるものはないと齋貴は思つた。

大勢のお部屋方から腰元まで、一同競つて馬鹿囃子を習ひ始めた。明るい酒宴の席などで、振袖を着た女達が、緋縮緬の襷を掛けて、太鼓を打つたり笛を吹いたりした。

おさんの方といふお部屋は、表向は側用人杉山某の娘といふことになつてゐるが、其の實芝の火消の家に生れた。十五の春には花柳の名を取り、愛宕樣の祭禮に屋臺の上で踊つた時、見物人の中に怪我人が出來たといふ噺が、彼女の若盛りの美しさを語る種であつた。

或る夜齋貴がおさんの方の部屋へ行くと、いつもは高島田に結ふと極つてゐる腰元達が、どうした譯か其の夜に限つて潰し島田に結つてゐる。酒宴半ばに、齋貴が氣がついて不審顔をすると、

「今宵は芝の囃子を御覽に入れようと存じまして――」

と、おさんの方は險のある眼元に媚を見せながら云つて、直ぐに腰元達に眼配せした。

軈て間の襖が拂はれると、ずらりと竝んだ女達の扮裝に、思はず齊貴は眼を欹立てた。――各々片肌脱いで、華やかな鹿の子絞りの襦袢の袖を見せ、襟に豆絞りの手拭を掛けた、太鼓を打つ手、笛を吹く手、雪を欺く幾つもの腕に、刺靑の龍が燭臺の灯に躍つた。

當分のうちおさんの方は、毎夜のやうに大守を迎へることが出來た。然し此の秘密が、さう何時迄も他のお部屋達の間に知れずにはゐなかつた。出羽樣の奥女中は、軈て一人殘らず腕に刺靑を畫いて終つた。

四

或る日老中阿部伊勢守から出羽守の重役に宛てゝ、申渡す旨あれば當役宅迄出頭相成る可しといふ書面であつた。其處で松平家から家老の柳田四郎兵衛が出向いて行つた。柳田は三千五百石の代々家老であるが、殊に不昧公の信任を受けて、逝去の砌にも「齊貴の事は萬事其方後見致すよう」とのお言葉があつたといふことを、今以て何よりの誇としてゐる老人である。

用向といふのはかうである。松平出羽守は、去る五月をもつて在府の期限を超え居る故、爾來數回督促に及ぶも今以て歸國致さぬは何故であるか。縱令將軍家の近親なりと雖も、私の事情をもつて武家の大法を紊すに於ては、其の儘には捨て置き難いことになるから、早々參勤交代を致すやう。――かう云ひ渡したあとで、伊勢守は稍々打ち解けた樣子で四郎兵衛に對つて「是は役儀の上ではなく、予が一存で注意致すまでぢやが」と前置きをして、近頃出羽守殿が馬鹿囃子に耽つてゐるといふ評判が餘り世上に喧しいので、自然この事が幕府へも聞えずには居らない。で、有司の間には種々やかましい議論もあるが、左に右く、大名の身として斯かる下賤の伎に耽るといふは世の聞えも面白からぬことで、延いては武家一統の威信にも關する事であるから、向後左樣なことは愼まれるやう、其方達より諫止致すが宜しからう、と云ふのであつた。

「重々恐れ入りまして御坐ります。參勤交代の儀、主

君折り節不例の爲既々延引致し、每々御手數を煩はして申譯は御坐りませぬ。就ては幸ひ病氣も全快致しましたれば、早速歸國のことに取り運びまする。次に馬鹿囃子の儀は、是も病氣欝散の爲と捨て置きまして御坐りましたが、只今の御忠告一々御尤の次第、今後は乾度愼みますよう主君に申聞けるで御坐りませう」

四郎兵衞は冷汗を流しながらから云つて伊勢守の前を退つたが、其のまゝ駕籠を飛ばして下屋敷へ驅け着けた。

出羽守が參勤交代を怠り始めたのは可なり前からの事で、其都度幕府でも持て餘してゐた。怠ると云つても、出府の際には早々に出掛けて來るが、さて今度歸國の段になると、何の彼のと故障を云ひ立てゝ一日でも永く江戸に留まつてゐようとするのであつた。

「予は田舍は嫌ひぢや」

と、齊貴は心底江戸を離れるのが辛いらしく云ひ云ひした。で、此の事に就いては、家中の者も一と方ならず憂慮したが、これと云ふのも、主君が餘りに遊藝などに凝り過ぎる結果だといふことに、誰の意見も一致してゐた。殊に今度の馬鹿囃子に至つては、伊勢守から注意される迄もなく、一同最初から眉を顰めて、四郎兵衞をはじめ散々諫言をした上のことである。

其の日も齊貴はおさんの方の部屋で、女達に囃子を打たせ、自身は道化の面をかぶつて馬鹿踊りをやつてゐる最中であつた。

「柳田殿がお見えになりまして御座りまする」

と、一名の腰元が慌たゞしく這入つて來て、それへ手を突いて云ふと、齊貴は踊りを止めて

「おゝ左樣か、苦しうない是へと申せ」と、突つ立つたまゝ云つた。

四郎兵衞はづか／＼と這入つて來たが、ヒヨツトコの面をつけて立つてゐる齊貴の姿を見ると、忽ち苦り切つた顏をして

「御前、其のお姿は何事で御座る」と、吾を忘れて叱り付けるやうに云つた。

「あはゝゝゝ。是は粗相ぢや、許せ／＼」

齊貴は笑ひながら面を外して、褥の上に座つた。

「して四郎兵衛、何ぞ火急の用事でも起つてか」

「されば、お家の一大事を申上げに參つて御座ります」

「なに一大事？とは如何な事ぢや」

「ほかでも御座りませぬ。御前、今日限り其の馬鹿囃子をお廢め下さりませ」

「はゝゝ。又しても異見か。然し四郎兵衛、何時も申す通り、予は馬鹿囃子が何より好きなのぢや、まあ〱勘辨せい」

「否、成りませぬ。今日は今迄とは譯が違ひます」

かう云つて四郎兵衛は、稍々落ち着いて來た樣子で、今日阿部伊勢守から呼ばれて行つた顛末を逐一話した。

「で、此の上まだ御歸國遊ばされぬ時は、公儀より如何樣のお咎めがあらうも計られませぬ。又お慰み事も度を過ごして、萬一御家名を瑕つけるやうな事に成りましては一大事に御座ります故、此處は何卒御賢慮の程願はしう存じまする」と、四郎兵衛は此處ぞ一生懸命に、白髮頭を疊に摺りつけて嘆願した。

齊貴は苦笑ひをして默つて終つた。勿論參勤交代をしないでは居られないことは、云はれる迄もない話だが、あの荒い北海の風物、陰鬱な城下町、其處に一年を暮さなければならないと思ふと、江戶を離れるのが耐へ難く厭になる。又馬鹿囃子の事では、誰が何と云はうが、藝に對する理解を持たぬ者の言葉を容れて、此の無上の樂みを捨てゝ了ふといふことは到底出來ないことである。さういふ人達に對つて、決して馬鹿囃子がつまらぬ藝ではないといふことを納得させようと思つて見たこともあるが、何れ程彼れが口を酸くして説明して見たところで、それは畢竟馬の耳に念佛に過ぎなかつた。

「殿樣の物好きにも困つたものだ」

かういふ陰口が耳へ這入る度びに、彼れは不愉快でもあれば、何となく寂しいやうな氣もするのであつた。

「御前、今日こそ確たるお言葉を承はり度う存じます

る」

四郎兵衛は凝と齊貴の顏を見上げて云つた。其の視線がおさんの方に向けられると、彼女は眩しさうな美しい眼を伏せた。

「四郎兵衛、參勤交代は近々に致すが、然し、馬鹿囃子は廢めんぞ」と、齊貴は重くるしい氣分を感じながら云つた。

「それでは手前安心が出來ませぬ。御前が國表をお嫌ひ遊ばすのも、詰りは江戸で左樣な事ばかり遊ばして居るからで御座ります。先づ馬鹿囃子からお廢めなさらねば駄目で御座ります」

「では、予には樂みは不要ぢやと申すのぢやな」

「滅相な。お道樂も結構で御座ります故、もそつと高尙なお慰みをなさりませ。お祖父樣がお茶の名譽は申す迄もないこと、曾祖父樣は、是は又大層お能がお上手だつたげに御座ります——」

「予は茶も稽古した。能も習うた。其の他何でも致して見たが、馬鹿囃子が一番面白いのぢや」

「それは畢竟お物好きと申すもの。左樣な事は世間の人が承知致しませぬ。ちと其の邊のこともお考へ遊ばしませ」

「世間は世間、予は予ぢや。何とでも云ひ度いやうに云はして置け」

「では何うあつても」と四郎兵衛は稍々氣色ばむで「公邊の首尾を害ねまする迄も、馬鹿囃子は廢められぬと仰せられるので御座りますな」

「莫迦を申せ、大名が馬鹿囃子を致しては成らぬといふ掟が何處にある？また伊勢守が馬鹿囃子を下賤の伎と申したとのことぢやが、今度左や右う申したなら、何故に馬鹿囃子は下賤の伎で御坐る、と其の理由を聞いて參れ」

「左樣な事は伊勢守殿に伺ふ迄も御座りませぬ。抑々馬鹿囃子など申すものは賤しい農民共の慰み事で、決して高貴の方の遊ばすべきものでは御坐りません」

「はて其方のやうにもない、國家の基たる農民を賤しい者とは心得ぬ。又假りに、農民の慰み事故賤しと云

ふならば、大名が致せば自然馬鹿囃子も尊い伎にならうといふものぢや。な、人に尊卑はあつても藝に貴賤はない。四郎兵衛、何とさうではあるまいか」

から云つて齊貴は穏やかな笑を浮べた。四郎兵衛は默つて考へてゐたが、

「一應お道理のやうにも存じますが、矢張り私には腑に落ちませぬ。それに世間といふものは」と云ひ掛けて四郎兵衛は氣がついたやうに「では、只今とは申しませぬ程に、今一應お考へ直しを」

「考へ直す迄もない、馬鹿囃子は予が命ぢや」

「お情ないことを――」

四郎兵衛は涙を含んだ眼で齊貴を見た。聽て萎れ切つた樣子で出て行つた此の年老いた家來の姿が、何時迄も齊貴の眼に殘つてゐた。

五

柳田四郎兵衛が切腹して死んだのはそれから十日ばかり經つてからのことである。

彼れは、其の後も主君に對つて諫言したが、齊貴は依然として馬鹿囃子を廢めねばかりか、參勤交代の方も、何の彼のと云つて愚圖々々してゐるいであつた。

四郎兵衛が切腹したといふ報知と同時に、齊貴に宛てた一封の遺書が御殿へ屆けられた時、彼れは、終日の遊樂の倦怠した軀を緣先に出て、女達に團扇で煽がせながら、泉水に鯉に麩など遣つてゐるところであつた。

遺書には、四郎兵衛の口から何遍も云はれた言葉が、矢張り其の儘繰り返されてゐた。

「……飽迄尊慮に逆ひ奉る罪、御宥免可被下、一重に奉願上候。等枯草餘命を縮し、最後の御奉公仕候事、本望不過之候、今端にのぞみ他念無之、たゞ御幼少自りの御面影など彷彿致し、乍恐御懷く存上候。申上度事限無く有之樣被存候へ共、思ひ筆に不委候。先は草葉の陰より、君御家御繁昌、御安泰の程奉念上候。……」

齊貴は凝と引入れられたやうに、遺書の面を見詰めてゐた。四郎兵衛の最後の有樣が想像された。死といふ盲目的な力を藉りて、四郎兵衛の一念がひしひし

と胸に迫つて來るやうに感じた。

其の翌日、彼れは江戸を發つた。焦けるやうな熱い日であつた。乘物の中から、簾越しに見る都の大路小路を、紅繪の日傘を翳した女などが歩いてゐた。

翌年の五月迄、齊貴は國表で暮した。

同じ道中でも、歸國の時と出府とは、彼れにとつては格段の相違である。――一夜一夜と、旅寢の夢を重ねる毎に、都の姿が濃くなつてゆく。眼に慣れた沿道の景色さへ、次第に江戸へ近づくと思へば、彼れには興あるものに眺められた。

江戸へ出て來た當座を、譯もない歡喜に包まれて過ごしてゐた齊貴は、間もなく自身の生活に何か物足りなさを感じて來た。女達を相手に遊樂に耽つてゐる時も、靜かに一人で座つてゐる時も、彼れの心には絕えず空虛が付き纏つてゐた。

「馬鹿囃子をやり度い――」

本能的に、彼れはさう思つた。直ぐに四郎兵衞の死といふことが、彼れの頭に浮んで來る。然し、あの時自分を動かしたものは何であつたらう……？單に死といふ事實以外に、其處には何物も無いではないか。四郎兵衞の諫めに依つて、自分は馬鹿囃子の非を悟つたのではない。理不盡な死の力に壓し付けられて、謂はれなく馬鹿囃子を廢めたのだ。――

華やかなやうな、はかないやうな馬鹿囃子が、惡魔の奏でる樂のやうに齊貴を誘惑した。締太鼓を打ち込む手先の快さ、玉を轉がすやうに吹き出す笛の面白さ――。

出羽樣のお屋敷から、再び馬鹿囃子の音が聞え始めた。

家中の士達が、一番最初に思ひ起すのは柳田四郎兵衞の事であつた。四郎兵衞の踏んだ忠義の道を、一も二もなく眞理に殉じたものとして終ふことに就いて、彼等は勿論何の疑問も起さない。

間もなく、四郎兵衞と同じ行爲に出た士があつた。

それは千石の家老で、鹽見小平といふ者であつた。

然し小平の執つた手段は、前のやうな善い結果は齎らさずに終つた。それは齊貴自身が馬鹿囃子を廢めるとか廢めないとか云ふ前に、遊藝の爲めに二人まで家老を殺した彼れの大きな落度を、幕府で捨てゝ置かなかつたのである。

齊貴は國表へ蟄居を命ぜられた。彼れには子がなかつたから、普通なれば家斷絶になるべきところを、特別の計らひで、松平定安(十一代將軍家齊の孫)を急養子に迎へて家督を立てた。

六

齊貴が、様々に運動をした結果、馬鹿囃子を嚴禁するといふ條件の下に、辛うじて江戸の土地を踏むことが出來たのは、國表の閑山御殿で十年の月日を暮した後のことであつた。

彼れの頭には滅切り白髪が目立つて來た。そして陰鬱らしい皺が、深く深く顔に刻み込まれてゐた。永い間の自由を奪はれた寂しかつた生活は、彼れの性情の上にも同じやうな陰影を射し懸けないでは居らなかつた。

近頃の彼れは、遊藝ばかりではなく、何事にも昔日のやうな強い執着は持つてゐなかつた。華やかであつた壯年時代の生活、新しい藝事と云へば何でも貪ぼり習つた心持、熱情的な自身の姿。――過去の波瀾の一つ一つが、古い繪卷のやうに、折り〱は胸に思ひ返されつゝも次第に薄れてゆくのであつたが、たゞ一つ馬鹿囃子に對する執着だけは、いまだに蛇のやうに彼れの心に喰ひ入つてゐた。四郎兵衞や小平の事、其の頃彼れを取り圍んでゐた女達の事、それらはともすれば忘れ勝ちであるのに、あの馬鹿囃子の音色だけは、一日でも耳元から消え去るといふことはない。

椿井金之助が馬鹿囃子に一流を編み出し、椿井流と云つて、近年專ら流行り出したといふ話なども、自然齊貴の耳へは這入らずに居らなかつた。十年の歳月は、其の中に様々の大きな事件を生み出して、幕府にも江戸の町にも駭くやうな變遷が現はれてゐたが、さうし

た出來事よりも、こんな話の方が彼れの胸には大きく響いて來るのであつた。

其の日は山王の祭であつた。

齊貴は赤坂見附上の上屋敷の方へ出掛けて行つた。其處には當主の定安や、齊貴の夫人(鍋島閑叟の妹)などが居た。夫人は以前から此處に住まつてゐたが、彼れは若い時分から上屋敷を嫌つて、大抵今井谷の方でばかり暮して來た。嚴格で、多少女丈夫的の傾向を持つてゐる夫人とは、彼れは何うしても反りが合はないといふやうな點もあつた。

一門の人達や、重立つた家臣までが連なつて、二階の大廣間で酒宴が開かれた。人で埋められた往來、綠青色の水を湛へてゐる外濠、木立に包まれた山王の境內、町々の屋根を越えて遙かな山脈の起伏まで、其處からは一と目に見渡せる。

八ツ近くなると、吹上の上覧を了へて來た花車が溜池の方から揃つて練り込み始めた。賑やかな囃子の音が、町を傳はり、木立に響き、手に取るやうに聞えて來る。

十年振りで齊貴の耳を訪づれた囃子の音が、どんなに彼れの胸をそゝり立てたことだらう?今日彼れが上屋敷へ來たのは、祭禮見物とは云ふものゝ、馬鹿囃子を聞くのが唯一の目的であることは云ふ迄もない。――松江に居た頃、もう二度と江戸の土は踏めないだらうと思つたりしたことを考へると、彼れは夢のやうな氣がした。

出羽様の御隱居が上屋敷で祭りを御覽になるといふことが、誰云うとなく知れ渡つた。

何十本といふ花車が、殘らず松平家の方へ向けて据ゑられた。それは將軍家の御上覧よりも一生懸命に囃子方の連中は交る〱、有らん限りの腕を振るつて囃し始めた。

七

「三吉が居る――」

何處の町のか、龍神を飾つた花車で囃子を始めた時、それ迄恍惚と引き入れられてゐた齊貴は、思はず

眼を耀かしてから云つた。それは締太鼓の打ち方で直ぐに知れた。強く強く打ち込んで輕く響かせ、そつと轉がして打つ撥音の鮮かさ。――まん圓い顔、禿げた頭、糸のやうな眼。――太鼓を打つてゐる三吉の顔が、齊貴は眼に見えるやうな氣がした。

三條小鍛冶の花車から吹き出した傳次郎の笛の音が、又もや齊貴を夢の世界へ引き入れた。

「これ、今笛を吹いて居るのは、よく屋敷へ參つた傳次郎であるぞ」

と、齊貴はしまひには懐しさに堪へられぬやうな眼付をして云つた。あたりの者は、仕方なしに感心したやうな顔をして、ほんの義理一遍に囃子へ耳を傾けたが、直ぐに各々勝手な談話を始めたり盃の獻酬に氣を奪られたりしてゐるのであつた。

齊貴は興醒めのした顔つきで、陽氣な酒宴の席を眺めた。

下屋敷へ歸つて、獨り靜かに居間へ座つてからも、馬鹿囃子の音が齊貴の耳に附いてゐて離れなかつた。

「自分はもう馬鹿囃子はやれないのだ――」

さう思ふと彼れは心に喰ひ入るやうな淋しさを感じた。

華やかであつた祭りの光景を胸に繰り返しながら、うつとりと座つてゐた齊貴は、軈て高蒔繪の手文庫をポコ／＼と指で叩いて、識らず／＼口笛を吹き出した。（完）

脚下燈の前に立つまで

坪内士行

日本風に云へば人世は五十年であるが、西洋式に見れば卅五才が人生の半ばである。將來に目を向けて希望發展の行手を見張る者にとつては、すべて大きく、廣く、深い方こそ望ましいから、僕も七十年を一生とする方に手を上げる。その標準から見れば、僕はまだ人生定義の半ばに到るまでにも此處數年の餘裕はあり、墓所までは前途頗る遠い。半途にも達せずに自叙傳めいた物を草するのは烏許がましい次第で、識者の眉を顰めさせることに相違ないが、僕は今二月下旬を期して俳優になる。昔の所謂河原乞食になるのである。此の僕の新事業を、或人は無謀と危み、或人は借金で困つてゐるからだらうと云ひ、又或人は面白半分の道樂さと嘲へ葉卷の煙を輪に吹かれる種々の取沙汰もあり、何が故に安全な敎職を棄て、俗人の敬意を買ひうる大學講師たるの名を安うして俳優となるか、僕の出發がどれ程劇の爲めに日本藝術の爲めに貢獻しうると思ふか、などゝ案じ問はれる方々も少くない故に、僕從來の藝の方面に於ける準備と經驗と迷ひと決心と希望とをそれ〴〵項を分つて告白的に綴り、もつて第一には家父年來の愛育に多少報いる所ありたく、次には、同情し後援せられる先輩、同僚、公衆に對する僕の感謝の意を表し、又、萬一にも不幸にして僕失敗の曉に及んでも、なほ何が故にかく準備し、かく思ひ定め、かく望んで新劇の爲めに立つた僕が失敗したか、墮落したか、方向を轉じねばならなかつたか、に對する世人の解剖批判の材料たると共に、やがて續から俳優志願者の他山の石となり、又は覆轍を踏ましめぬ最後の願ひまでも添えて、忙中萬年筆を走らせやうとするのである。

準備

一二年ではあるが敎壇に立つた今にして、始めて敎育の難いことを多少悟つた。凡そ敎育には放任的の敎育と、干涉主義の敎育とがある。これは何の敎育にも適用される二方法であるが、日本近代の俳優敎育についても、九代目團十郎と、五代目菊五郎との場合の如

きは最も著しく相對立して示されてゐた。それは世人熟知の事であるから、今更ら繰返す必要もないが、九代目團十郎は何事にも放任主義を取り、五代目菊五郎は飽くまでも自己の標準、自己の型に他を鑄込まねば止まぬ態の俳優長であつたと聞く。能の方で見れば寶生九郎翁の如きが嚴格主義、干渉主義で、その稽古の劇しさ故に（他の理由もあらうが）あたら有望な一少年を死に到らしめて、九郎翁自身涙を流して惜んだ事があるとか云はれる。

　箇人の智識が進み、世を擧げて箇人主義になり、又自意識が發達して來る時に當つては、青年である程動ひ所謂生意氣になる、智が勝過ぎる。反抗的、偶像破壞的になり易い。昔はたゞ何がなしに尊いと見なされ來り、何がなしに從はねばならぬ物と思はれ來つた物に對しても、世が進むに從つて、何が故に尊いのか、何が故に從はねばならぬか、の疑問が生じ、時には楯の一面のみ——それも勿論自分に都合のよい一面のみ——を見て、先づ第一に、尊からず、從ふ要なしと觀察を下して意氣揚然たる者が多い。その時に當つて、放任主義の教育がよいか、干渉主義の教育が歡迎されるかと云へば、云ふまでもなく青年の間には放任主義こそ望ましいものであるに相違ない。被教育者の箇性を重んじ、その向ふがまゝ、又その天分のまゝに發達させる。それは當然しかあるべき事、望ましい事である。然しながら、僕は此の放任主義の教育法、ある意味での天才教育は決して絕對に理想的なものでない事をつく〴〵と悟つた。あながち此處に教育論をしようと云ふのではないが、人間が生れ落ちた時、赤子の時、少年、青年の時、あらゆる時を通じて天使の如く純、天女の如く潔であるものならばいざ知らず、怠惰や迷ひや劣情が蜘蛛手八文字にからみかゝる凡俗人の生活にあつては、少くとも幼時の教育は總明な干渉主義でなければならぬ。（總明でなければどんな主義を取らうと駄目である）

　少くとも幼時の時の教育は干渉主義でなければならぬ。それから十六七乃至一人前となる前後から段々と

放任主義にして、後には全責任を絶對に當人自身に持たせるがよい。

僕が柄にもない教育論をするのは、つまり、いかに僕が幼時の練習や學校通ひを厭がり、辛がり、親を恨んだかを云ひ、その自分の心得の間違ひと、昨今になつてから感ずる親の鞭撻の難有味を書かう爲めの序開きである。放任主義と干渉主義。その何れにもせよ教育者が無智又は無法である程恐ろしい結果を來らすが、とりわけ無法な無差別な干渉主義ほど被教育者に取つて恐ろしく感ぜられ、辛く感ぜられるものはない。それは壓制であり、暴力であり、破滅である。然しながら、不幸にして被教育者に取つては往々總明な干渉主義と、無法な壓制との區別のつかぬ事がある。いや、多分はみんな同じに感ぜられる。僕の場合も其の一例。

まことに、「思へばこそ鞭うつ」難有味は程經ねば分らぬ。僕の虚弱な身體の爲め——二度までも大病の爲めに生死の間にさ迷ひ、十二三以上には生存しえられまいと醫者から宣言された僕の爲めに——最初に先づ運動の爲めとあつて劍舞を練習し始めたのが六七才頃でもあつたらうか。記憶は朦朧としてゐるが、その師匠番は故土肥春曙であつた筈である。それから痩馬の喘ぎは始まる。

その頃の東京專門學校は事毎に學生が素人芝居を催したので、櫻花咲く向島の廣場に運動會の開かれる折などには、怪しげな名優が怪しげな舞臺にドタバタと座を立てゝ、醉心持の見物の目を眩せるのは學校行事の一つ。今も僕には、あの頃向島堤を酒樽かつぐ學生らしからぬ學生——の濶歩した姿が目に浮ぶ。僕其の怪しげな舞臺に太刀を横たへて餘興の劍舞を演じた事を覺えてゐる。多分これが公衆の前へ出た初舞臺であらう。御褒美として學校から頂戴した寫眞挾みの本は、今も何處かに存在してゐる筈である。

その怪しい舞臺に現れた名優連に對しての振附師があつた。これは鬚の生えた、又は禿頭の男子ではなくて、昔の所謂御狂言師であつた西川仲次と云ふ女の舞踊手である。これが當時東京專門學校俳優劇の謂はゞ

舞臺監督である。その頃何才位であつたか、花恥しい妙齢の美人であつたか、どうかは僕は覺えてゐない。僕の記憶中にある仲次師匠は、とある夏の夕べ、小石川のさる裏町の長屋の二階で蚊燻し兼帶の線香を立てた四疊半に、ポキ／＼と音を立てゝ骨を折つて棺の中に入れられた往生に至る少し前、小さい、痩せた、稽古しながらも居眠りをして、「瀧夜叉」の地も「忠信」の地も混線させてしまふ憐れな、敗殘者としての老婆である。

僕はその頃此の師匠をどれ程嫌つたらう、憎んだらう！　何故と云ふに、劍舞を餘興に演じた前後から、此の女師匠は僕の踊りの手ほどきに來る事になつたからである。そしてそれから後、僕は必らず毎晩一時間乃至二時間づつは踊りのおさらひをしなければならなくなつたに加えて、そのおさらえの爲めに幾度となく女々しい泣顏をしなければならなくなつたからである。「此の師匠さへ來なければ、かうまで叱られはしまい。かうまで泣かされはしまい。何故此の女は家へ來るのだらう！。」が、これが僕の當時の正直な本音である。師匠その人は嚴格な女ではなかつた。理想の高い舞踊手でもなかつた。だが其の女師匠を蓄音器代り活動寫眞機代りに傍へ置いて、其れを通じて舞踊を研究し、理想化して行かうと云ふ家父の透視的の眼光が、世界の何物よりも僕には恐ろしかつた。腹部に二つまで腫物が出來ながら、「なまけ者！。」と叱られるのがこわさに踊りつゞけ、とう／＼踊り終へずに舞臺に平太張つて泣いた事もある。足の廣げ方が惡いと云つて、師匠よりも勿論家父の方が先に舞臺に飛上つて來て直す時には、膝節を叩き折られるかと縮み上つたこともある。それもこれも、あゝ、思へば二タ昔以上も前の事となつた。

之等の練習は、勿論維新前の武藝、遊藝の練習に比べては寛大至極なものであるに相違ないが、しかも一時評判であつた文藝協會の稽古や、ローシー氏の指導振り其他に比べては、微倍會釋のない嚴重なもので、今になつてこそ其の煉火を潜つて來た事を誇りたいや

うなよろかしい氣も生ずれ、當時の子供、腹でこそ「クソ、いまく\しい!」と齒ぎしりはしてゐても、表面意氣地のない泣顏をさせられるのがどれ程辛かつたらう!

その間に、牛込の元の淸風亭の何かの會の折に、「桐一葉」長良堤の場の木村重成に扮して、素人仕立の馬に乘つて驅出す拍子に、馬がとうく\便所の中へ後じさりして、重成、大いにベソをかゝざるをえなかつた事もあれば、故土肥春曙、水口微陽氏其他に助けられて、「二葉楠」の正行を練習し、實地に涙を何度となく流させられた事もあつた。

踊りと芝居と學校と三味線と唄と、これだけが小學校時代から中學へ入る前後へかけての重要な僕の日課であつた。級中で身長も年齡も一番劣つてゐた僕にとつては、學校でいゝ成績をとると云ふ事だけでも困難であつたが、その方に特別の野心がなかつた僕は、小學校でも、殊に中學では中位より下らぬ程度で滿足して、口先ばかり達者に他人の惡口を云ひ散らしてゐた。それは兎に角として、父が舞踊劇を論じ、日本の舞踊の將來を考へ始めたのは、一面僕の習ふのを見て一層舞踊に興味を感じたからの事で、やがては一家を擧げて其の方面に新開拓をしようと志すに至つたのであるから、學校よりも芝居よりも三味線よりも、何よりも、先づ舞踊の練習に身を入れさせたのは當然の事である。然し、子供の僕に當然だか不當然だか分らう筈はない。小學校の歸るさに、いたづら子供共が道を扼して、「踊りなんか習つてやがる奴は通さない」と押寄せかゝつたり、親友の家の者が、僕が踊りを習つてゐるからと云ふ理由の下に、親友を僕の家へは遊ばせに來させなかつたりする山の手の孤獨な夕刻毎に「何故僕は踊りを習はなければならないのだらう?」と云ふ疑問は絕えず念頭に浮んだ。他の子供が知らぬ事を習つてゐると云ふ事に對しての自慢の心も確かにあつた。然し、そんな僅かな慰めは「厭だ!厭だ!」と云ふ感じの前には殆んど何等の力も無かつた。

毎土曜日の午後から日曜の晝頃迄へかけて、仲次師

匠が泊りがけで敎えに來る。一年二年經つ中には、當人は厭々でも、踊りの數だけは上る。やがては仲次師匠の手にある物は殆ど盡きる程にもなつたのであつたが、僕が此の老師匠を嫌ふ心も段々と募つて行つた。敗殘の藝人であつた彼女にとつては、僕の家は第一の御贔負であり、僕は第一の高弟なのであつたから、彼女は僕を所謂掌中の珠の如くに吹聽もし、取扱つても居たらしい。それは今思ひ廻らして始めて見當のつく事である。「何故坊ちやんは私になついて下さらないんでせう？」と悲しさうに囁いたのを微に覺えてゐる。間口二間とない舞臺を持つた彼女の家へ、用を云ひつかつて行つた時に、さながら天使が降臨したかのやうに喜びと敬ひと得意とをもつて僕を迎へ、わざ〳〵向三軒兩隣のお神さんや鼻垂れ娘を呼集めて、「是非私の坊ちやんの踊りを御覧」と、無理矢理に「三つ面」を踊らせられた事も覺えてゐる。得意な筈の「三つ面」を其の時に限つて始めから終まで滅茶苦茶に間違へ通した事も覺えてゐる。紫陽花の花は虫退けになるとかで、僕の家の庭に紫陽花が咲くとは所望するのが毎夏の例であつたが、それを僕が彼女の家まで持つて行くと、その時病氣で寢てゐた師匠は、痩せた手で僕の手を取つて、涙を流した夕もあつた。然し、その時も僕は其の痩せた手が氣味が惡くてならなかつたのだ。

僕は決してあの師匠を嫌ふべき理由も、憎むべき理由は尙更らないのである。要するに坊主が憎けりやの喩の通り、稽古が厭なのが第一に舞踊に對する反感となり、その餘澤で師匠迄も呪つたのである。あれ程厭がりながらよくやつて來たと思ふと同時に、あの仲次師匠に對する自分の不人情な振舞を回顧して、まことに濟まない事をしたと深く耻ぢる。

此の師匠が細い骨を折られて棺の中に入れられるまでの一生は勿論の事、それと僕との連絡した範圍の幼物語を書けば現今流行の親類縁者丸出しの小説より優れた抒情的な物も出來るのであるが、此處には割愛して話を續けよう。

此の師匠が老耄して、居眠りばかり始めるやうにな

つた時に、始めて僕は濱町の大師匠、卽ち今の藤間勘翁氏の門に入つたのであつた。それは十七であつたか十八であつたかの頃と思ふ。それからは僕は多少踊りを嫌ふ熱度は低くなつた。それは、第一には電車のなかつた當時であるから、牛込から濱町まで人力車で通ふ、それが嬉しかつた。第二にはこちらから出かけるのであるだけに、稽古の時父の目が光つてゐない。從て歸宅してさらふ時にも比較研究的の訂正やら改修を命ぜられる度合が幾分ゆるい。それに勘翁師の教導も懇切を極めたものであつた。もつとも週日には僕は學校へ行かねばならず、師匠の方も藝人を始め多くの弟子が來るので、わざと師匠には迷惑でも、日曜の人の來ぬ折を限つて稽古をして貰つたのであるから、全く二人きりの對稽古であつたせいもあらう、例の童顏に笑みを漂へて、優しく、然しながら型をくづさずに教えられた事は、今は樂しい思ひ出の一つである。

その方は多少樂しみが增したと思ふ間もなく、今度は稽古する物の數がふえた。狂言を故高島彌五郎に、義太夫を故生駒太夫に、その他築地のサンマースへ英語の稽古、とんぼ返りの練習だ、諸の皮切りだと、應接に暇もない。中學を出ると一年間學校を休み、早稻田大學の豫科を終へると又一年休んで、藝事の方を勵ませられた。「吾々が藝事を研究するのは慰みではない、眞劍の仕事である。武士が劍道を修するのと同じである。死に身でやるのだから其の爲めに舞臺の上に倒れてもいゝ筈だ。」今も此の意見に相違ないが、その頃の父の稽古熱は正に其の頂點にあつた。

惡い事には、いや、怪しからん事には、その頃がまた僕の生意氣になる年頃であつた。二年間學校を休んだので、早稻田の本科で文學を修める頃には、もう同級生と年齡もさう相違してはゐず、學科をさほど苦しいとも思はなくなつただけに、一層踊りの稽古がどれ程の價値があるものだらうか、などゝ疑ひ始め出したのである。

年には年の特長があり、時代には時代の思潮がある。藤村操の話は今ではもう單なる一つ話として殘るばか

りであるけれど彼、と前後して、彼と同じ、又は似た考へなり、思想を持つてゐた青年が其の當時どれ程多かつたらう。天才は周圍なくしては現れないと云ふが、或一人の者の行動が多くの人を動かした如くに見える場合には、その實かへつて摸倣したと思はれる多くの人がある時なればこそ、その中から特殊の行動をとる者が現れるのである。まことにあの頃の思想界は――今より悪いとは云ひかねるが――渾沌たるものであつた。凡俗の僕として其の流れに抵抗しえた筈はない。「生とは何ぞ？」これは學校の試驗よりも踊りの稽古よりも重大な問題になつて來た。ハムレットは死んでの先の世が明かでないから「生きてゐようか、ゐまいか？」と叫んだ。僕には先の世の事が分らぬのは勿論であるが、此の世の事が分らなかつた。人間が生れて來てゐるのは事實である。けれどもその生れて來た事實を繼續させ、努力して行く目的は何なのだらう？ 人生の高上と云ふ。人生が高上されたらどうなるのだらう？ 理想の實現と云ふ。理想が實現されたらどうなるのだらう？ 何だ面白くもない。まだ他に何か人が生れ、存在して行く價値のあるものが此の世の中にあるのぢやあるまいか？ それが判然しない限りは、その終局の終局が分らぬ限りは、末の世がどんな夢を見る所であらうと、それをあながち恐れるには及ばないのぢやあるまいか？ どうせ吾々は末を知らぬ浮世に生きてゐるのだもの。

こんな取止めのない事ばかり考へてゐたのでもないが、兎に角何かしきりに獨りよがりの煩悶通を氣取つてゐた。つまらない世の中だと云ふ說の眞先の對照物は踊りの稽古である。踊りが何だ、舞踊の價値如何、之を研究する事の實感。我儘と勝手と生意氣の限りを盡して怠惰癖を出し、卒業間際の三年になつては、他の科の生徒までも聞きに來ると云ふ評判の父の沙翁の講義にさへ缺席して、戸山の原に寢轉んでは春霞を吸ひ乍ら考へてゐた。

その中に卒業期は近くなる。卒業の時には論文を出さねばならぬ。その論題は父に選んで貰つて「日本舞

踊の可能性」と定めた。折も折、題も題である。結果のよからう筈はない。可能性を論ずるのか不可能性を論ずるのか分らなくなつた。結論を變へようと三晩程は曉の近づくのを知らずに筆を持ち續けた。然し到底立派な首尾一貫した物の出來上らう事こそ不可能で、とう〳〵論文の點は非常に惡かつた。檢閲者の一人であつた島村瀧太郎先生の好意と同情ある辯護もあつたが、兎に角僕自身頗る不出來な論文であつた事を悟つてゐる。

それでも當時は中々自分が惡いとは思はない。「舞踊なんかで大したものが出來るもんか」と八つ當りに當り散らしてゐた。丁度僕が卒業すると同時に成立した文藝協會研究所の稽古始めと共に、僕も其の舞踊の理論方面を引受けて研究し、講述する筈であつたが、他に一層直接な理由もあり、かた〳〵僕は米國へ行く事になつて、此處に僕自身の所謂放浪生活は始るのである。その暇乞に行つた時だつたかに、高田早苗先生が「踊りが嫌ひだと云ふが、本當に嫌ひなら今迄辛抱して稽古を續けて來る筈はない。稽古が嚴しいから厭なんだらう。なまけ者だな」と云ふ意味の事を云はれたのを覺えてゐる。

經驗

米國へ行つた當時は、出立の時の事情が事情なので、別に何と定つた研究目的もなかつた。父は僕に絶對の自由を許したのである。急に名實共に放たれて、ボストン市の夕闇に月を仰いで呆然と行李に腰を下ろした時には、いつそ氣が清々した。清々はしたが、嬉しくはなかつた。歸朝したら大學の講師にでもなれるやう、それにはマスターの肩書でも取つて來るやうにとの高田先生始め先輩の意見に從つて、米國第一の大學ハーヷードに籍を置く事にはなつたのであるが、どうして僕の英語で間に合はうぞ。學生時代には洋行と云ふ事を少しもしたいとも思はなかつたし、語學も決して好きではなかつたから、よしんば築地のサンマースへ半年や一年行つた事はあらうとも、日常の挨拶は兎

に角渡米早々大學の講義の分らう筈はない。それにマスターの肩書も一向欲しくなかつた、頗る無慾な(？)青年であつたのである。珍粉漢粉の講義を聞くことと半年ばかりで、學校は止めた。

習慣性で、芝居見物だけは渡米早々に始めた。これは同じく珍粉漢粉でも、目で見れば分る事であり、同伴者に折々説明して貰へる便宜もあり、日本で聞いた程づば抜けて西洋人の方が上手でもなささうなので、大いに皮肉を日本へ書送る樂しみもあつたのである。然し、ある人に紹介狀を貰つて、ボストン市一流の新進俳優兼興行師の元へ、舞臺裏拜見を申込んだら、「何が此の素チヤブめ！」と云ふ顔つきで、「舞臺を研究するのは客席から見るのが最も適當であり、正當な方法だ、」とぬしかたので、それ以來米國では樂屋口からの訪問は何處でもしない事にきめた。その頃のヤンキーは生意氣な奴が多かつたらしい。

學校中止の後は、主として芝居見物をして歩いたが、事情あつてロッスと云ふ日本贔負の畫家の所へ皿洗ひに入つたのを手始めに——と云ふとどうやら盗んで歩いたやうに聞えるが——ヒギンソン大佐と云ふ文士兼軍人の家や、富豪の夏季遊船の臺所や、アメリカン・ハウスと云ふホテルの昇降器係りのボーイなどに住込んで歩いて、やがては玉轉がし屋の店番までも三月ほど勤めた。流石に玉轉がしの番人になつてゐる姿を見た或人は「坪内もあれでは未が……」と案じられたさうな。つまり道樂の餘り金に窮して零落したか、又はあゝ云ふ仲間に入つてはもう墮落する一方とでも思はれたのであらう。實際危い時であつたに相違ない。僕が之等の仕事を芝居の一部として見、シエークスピヤの所謂「人生演劇」の一局面として見る態度に出でず、又、此處には書く必要もない僕一箇の心中に嚴として存在してゐた或る信念がなかつたならば、多分僕はあれなりで墮落したかも知れない。考へ方次第ではぞつとする境界へまで入り込んだのである。

之等の仕事、例へばホテルの天井裏に黒ん坊や伊太利あたりからの出稼女と壁を接して寢たり、玉轉屋の

裏の物置きで、瓦を集めた七輪で半煮えの豚の肉を食ひながら、襟から雨垂れを脊筋へ通はせたりした事は、實際僕はその時も今も一種餘裕のある心で眺めてゐる。「芝居を實地でやつてるだけの事さ。」これが僕の考へであつた。「苦しいには相違ない。人から輕蔑されるにも相違ない。然し、これは日本では得られない經驗であり、獨逸、英國でもえられまい。他日何か役に立てらるゝかも知れない。」かう云ふ心もあつた。今もつて其等の經驗を役に立てらる機會もなく、傑作も書きえないが、多少心を練る役には立つてゐる。少くとも自身では、家庭に於ては思ひ切り嚴しい練習を受け、米國へ渡つては思ひ切りあらゆる方面の人の間に揉まれた事を誇りともし、嬉しく面白く感じてゐる。

さう云ふ實地演劇の傍ら、多少眞の藝術と直接打ちつかる折はあつた。日本でもよく早稲田大學關係の會などを催す時があると、それが僕の家で開かれる場合には大概僕は踊らせられた。「山姥」を踊つて貞如女史に叱られたのは父の方から招いた會合であつたが、何かの夏の會に「蜘蛛の拍子舞」か「瀧夜叉」か可成りな女形を踊つて閉口した事などもあつたが、米國でもはからず踊りを踊つた。それはまだ故岡倉覺三がボストンの美術館にゐた頃であつたが、舞踊愛好の人々の目に止まつて、小宴會の席上や、舞踊學校などでうろ覺えの手振りを見せた。それが段々と評判になつたので、愛好者の一貴婦人が奔走して、ボストンの小劇場へ出勤しろと云ふ事にまでなつた。小劇場では難有くないが、多少の報酬をあてに出勤を諾して、まづ其の試演をぶつつけに公衆の前で演ずる事になつた。帯や道具は手細工である。その時の試演に成功してゐたならば、僕も環女史、又はもう一つ上のニジンスキー位の大評判をえたのであつたかどうか怪しいが、その心配までもなく、まんまと失敗した。あまり聲の來ようが遲かつた爲め、顔のつくりが間に合はず、「手習子」の振袖姿の舞踊手は、日に燒けた黑人面で出なければならなかつたからである。

米國最後の經驗は紐育の俳優學校入學失敗の件であ

る。勞働で蓄へた金も多少は出來る、一つ何か纏まつたものを、との考へから、これも紹介狀を貰つて行つたのであつたが、會見のそも〲から正科への入學は拒絶された。つまり他の生徒と同等に教えて行くには語學が不足だと云ふのである。これは何時も僕に反對なり辯護なりする勇氣を失はせる挨拶で、僕は日本の大學卒業生としては相當に出來るつもりですと云ふ程鐵面皮になりえない。なりえた所が、出來ない英語は出來ないに相違ない。到底米國に生れ、米國に育つた者と同じに出來よう筈はない。普通の講義を聞くのでさへもさうであるのに、まして言葉を第一に吟味する俳優學校で入學を斷られるのは蓋し當然な事である。さうあきらめて、一と月程箇人教授を受けた後、英國へ渡つた。

　英國へ渡つての事は折々の雜誌に載せもし、僕の「西洋芝居土産」中の附錄にもやゝ委しく書いてをいた事故、改めて云ふ事もないが、英國での振出しも俳優學校入學失敗に始る。これはもつとも何の紹介もなしに、全く普通の入學志願者として行つたからでもあるが、試驗を受けてまんまと二度の失敗。發音が丸でいけないと云ふ挨拶である。僕がかう繰返して失敗談を書くのは、人を欺き誤らん事を恐れるからである。日本人で西洋の何の研究所、彼の俳優學校へ入學し、又卒業したと云はれる人も大分ある。さう云ふ人は、然し、特別の天才であるので、平凡な者では中々及びもつかない。せい〲箇人教授を受けるか、好意を持つて內部の樣子を見せて吳れる位が關の山。一寸英語が出來る位の事で向うの俳優學校の正科が踏めると思つたら間違ひである。それから今一つ念の爲めに云へば、總じて今でも西洋と云へば何となく難有く響き易いが、少くとも僕の覗いて見た範圍で云へば、紐育のも倫敦のも、之等の俳優學校はもとの文藝協會演劇研究所より優れたものとは斷言しえない事である。モスコウの演劇學校は全然知らない。然し、概して洋行中見聞したものは餘程こちらが腹帶を締めてかゝつても、つひ買冠つたり、或は歸朝してからおまけをつけて見た

くなるものである。これは決して僕が入學失敗の敗け惜しみで云ふのではない。

入學仕損じてブラ〳〵してゐる中に、クレーグと先づ面會し、次にベンソンに會ひ、やがて故アーギングに會した。世界一の背景畫家たるクレーグは當時伊太利フロレンスの山紫水明の都に劇術學校建設の考案中で、僕にも日本舞踊の一端を練習に來いとの招きがあつた。ベンソンは英國俳優中で最も沙翁通な、そして又最も後進養成に巧みな俳優である。その人からは自分の一座に加はつて練習して行けとの手紙があつた。然し、僕は最後に故アーギングの一座に赴いた。それはクレーグの話は、例の空想家的のあての無い事であり、ベンソンへは一門弟として月謝を拂つて行かねばならぬ。其等に比べるとアーギングの話は、僕を顧問役として招くのである。しかも給料を先方から呉れるのである。行かざるべからずである。そして其の一座に入つてから、例の「タイフーン」を演出したり、「ハムレツト」の仕出しにも出た。

之等が僕の海外での最後の活動ではない。アーギングの注文により、父の指導によつて、日本人を主人公とした脚本を書きかけてゐた分は、肝心のアーギングの不慮の死によつて中止したが、その後僕は、當時では英國第一の美人――と云ふよりは繪葉書の美人――と評判されたクーパーと云ふ女優の出るイーヂー一座に加はつて支那人を演じたのである。イーデーは、英國近代劇運動の急先鋒の一たるコート座の二首領バーカーとヴェドレーンが、後にバーカー獨立して、ヴェドレーンのみ殘つた時から其の相棒になつた壯者である。支那人に扮したので餘り自慢もしないが、その興行中今度の大戰は勃發して、一般演藝界の不振となり、僕も止むをえず歸朝した。

迷ひ

左様、僕は止むをえず歸朝した。止むをえずと云ふのは、活動する場面の無いのに歸らなねばならなかつたからである。

或人は「新劇を倒した者は新劇運動者それ自身である。」と云ひ、又或人は、「新劇を損じたものは事情に通ぜぬ贔負連の引倒しによつてゞある」と云ふ。僕は幸か不幸か、自由劇場の演出した物も、文藝協會の仕事も、一つも見る機會がなかつた。之等は殆ど僕が外國に放浪してゐる間に起り、放浪してゐる間に倒れたのである。（自由劇場を倒れたと云ふのは語弊があるが、少くとも長い間休息してゐる）。從つて或意味では僕は日本の新劇運動に少しも關係しなかつた者である事を喜ぶ。諸先輩の心中を察し、その書かれた物を讀むと、之等の事業に失敗し、乃至挫折した當事者になつての殘念さが思はれて、思はず涙が出る程であるから、その一人にならなかつたのを喜ぶ時もある。然しながら再び考へると頗る淋しい感に襲はれざるをえない。誰を賴み、誰を力に將來へ進んで行けるのか？　昔から云ひ古された事ではあるが、芝居は一人では出來ない。

その淋しい思ひを船に載せて歸る途々、又しても昔に似た迷ひ、煩悶は生じたのである。流石に今更ら世界を測り、神意の底を割らうとするやうな身の程知らずの思案にはふけらぬが、全體おれは何をするのだらう、どうして生きて行くつもりだらう、何うして舞踊とか俳優とかゞ生甲斐ある生活の様式と考へられるだらう？　かう思ひ返し、思ひ廻らす。

戻る巣のないやうな心で歸朝して見ると、昔に増す溫情の親族、知己の間には早くも種々の膳立てが据ゑられて、第一には思ひ設けぬ早稻田大學講師の地位をえた。僕は望みもせずに洋行し、豫期もせずに大學講師となつたのである。幸福兒たるに相違ない。

その他にも（あまり金になる話ではなかつたが）種々の事業は僕を待つてゐた。そして其の多くは勿論演劇方面へ關係した事であつた。その中の一を選んで、僕は無名會囑託と云ふ事になつたのである。

かう定つてから今年でもう三年。その間には勿論種々の非難もあり、辯駁したい評などもあつた。例へば本誌上に始めて發表した作に對して「函の中に收めておけ」と評された時の如き、又、新歸朝の某氏の新歸

朝眼識で「到底仕出し位の役をしたり、舞臺をおもちやにする事しか出來ぬ奴」と云ふ意味の穩かならん、しかも見當違ひの評をされた時の如きは、流石に僕も昔の皮肉な筆が取りたくて腕がムラ〳〵した。又、名倉君の如く、友人として「學校敎師と舞臺の實地との二股武士は止めたらよからう」との親切な忠告に對しても挨拶が書きたかつたのである。それもこれも止めた。一つには今に知つてくれられる時があるだらうからと云ふ考へと、今一つには、何時自分は舞臺の人になるかも知れない。「何事ぞ、花見る人の長刀」、用心々々、と思つたからであつた。

一方には敎職、一方には舞臺、双方を兼ねた僕は得意でなければならないのでもあつたらうが、その實常に不安でならなかつた。それはあながち二股兼ねてゐる爲めの不安ではない。ある意味に於ては多くの人が二股も三股もかねてゐるし、又、適任でさへあれば十股も廿股かけても差支えはないが、僕の不安と云ふのは純然たる敎師たりえられさうにない自分の傾向に對する不安と、無名會の事業の將來に對する不安とである。

第一に、僕は所謂敎師になれ切れさうにない。自分の不完全な點、不滿足な點が見え過ぎて、研究的な仕事ならば格別、ことさら自分の短所を取りつくろつて威嚴を保つ體の敎師になれさうにない。それに僕は至つてのなまけ者である。その癖小心者である。時に一句の間違ひでも胡麻化す事が出來ない。間違へると氣になつてならぬ。間違へまいとすると人一倍の氣苦勞である。之等は至極通俗的な云ひ方ではあるが、この調子では何時になつても科長を望み、學長を望む心さへ起りさうにない。

その際に起つたのは例の早稻田騷動である。古疵を改めて見るでもないが、あの騷ぎによつて、僕の恩師高田先生と、父逍遙と、共に學校との關係を絕つた。さらぬだに不安を感じてゐる僕の心が動搖せずにゐやう筈はない。

然し、一方の無名會の樣子も決して景氣はよくは無

い。これは僕は立入つた事情を知る者ではなく、たゞ其の時々の脚本を供し、舞臺の指圖をする程度の關係で、僕の知る以上にいろ／＼複雜な組織になつてゐるのであらうが、兎に角僕が外部から微力を盡してゐるだけでは振興しさうにないのである。思ふに、もう世人の物珍らしさ故の歡迎の無くなつた今後にあつては、新劇の復興はたゞ二つ道がある。一つは舊文藝協會其他の組織にならつた團隊を作り、それを全く藝術を藝術として愛する百萬長者が、寄捨のつもりで維持費を出す。これは理想的な事である。然し、從來の新劇團失敗の跡を見ても、亦現に富豪連を見渡しても、まだ寄捨のつもりで新劇團の爲めに月々千の萬のと云ふ金を出す人は無ささうである。それが無い以上は此の理想案は全然着手しない方がいゝ。第二は、これも困難な事ではあるが、吾々自身があらゆる一座へ割込んで行つて、その中に同志を見出し、その中に氣脈を通じ、技藝も錬つて、十分世の信用を博するまで辛抱して、おもむろに内部から振興させる案である。これの最も困難なのは最初の志と意氣とを持續して行くと云ふ點であるが、若し志ある者共が、よし一時は四方に散在してゐようとも、他日を期して呼應し合ふならば、百年河清を待つに似た富豪の出現を期してゐるよりも、實果の上がりうる見込はあると思ふ。まして所謂歌舞伎派、所謂新派の中にも、藝も志も高い者は少なからずある昨今であつて見れば、思ふ程困難ではあるまい。

それなら俳優になるか？　そこに至つて永らく迷つた。

俳優とは何ぞやの定義を下すまでもないが、脚本中の人物に扮して、その人物の性格を活き現はす者であるだけに、よく俳優は人形であると云はれる。人形でなければならぬ、とまで云はれる事もある。萬一俳優は作者の人形であり、指揮役の人形であるならば、これほどつまらぬ者はない。全然人格の無い動物にならなければならない。僕はこんな者になるのは厭だ。

俳優は娼妓と同じ者だと云ふ説もあるよ、島村民藏君から聞かされた。なるほど客の前へ出て肉體や表情、

その一擧手一投足の運動によつて歡心を買はんとする點からだけ見ても兩者に似た點がある。肉體から人を動かさうと云ふのである。俳優がたゞ單にそれだけの者ならば、僕は眞平御免である。

俳優は一時的の藝術家である。かのヒルンも「藝術の起源」の中に「舞踊や演技の効果は、創出されると同時に破壞される」と云ひ、その他俳優の藝術的の生命の短い事を嘆じた句は隨所に見出される。戲曲や小說や、詩歌、いや、彫刻、繪畫、建築さへも數千年の後まで傳へられる物であるに拘らず、同じく藝術家でも俳優の創出する藝術は、眞の意味ではその一瞬每に消え去るものである。「波打際に書く文字」よりも實はもつと早く消えるものである。

いやしくも野心あり、後代數千年に亘つて名を殘すと共に己の創り出した藝術を多くの人に味はせよう志ある者が、陽炎にも似た俳優にならうと思ふ筈があらうか？

劇界內部の事情や弊風は實に厄介なものださうである。他の藝術界にあつても弊のない所はなからうが、とりわけ之は多數を相手に、多數常に一處に集つて、商人に統括されて行かねばならぬ藝術界である。さらぬだに藝術家は多感多情の者が多いのに、競爭や、嫉妬や、嘘、謀略の頻りに行はれる處へ、突然單騎飛込んで、第一心の平和がえられるだらうか？

敎師は不適任だ、俳優もどうも、などゝ迷ひ出すとそれこそ山籠りが一番よくなる。

決心

人は他人の後に倣ひ、他人の轍を踏んで安全ばかり計つてゐては、第一變化もなく、進歩もなく、興もない。冒險ではあらうとも、自分の他に異つた特長が多少なりともあるならば、それを持つて別天地を幾分づつなりとも切開いて行くに越した事はない。

僕は改めて此處に幼少の頃の父の薫陶に對して感謝したい。同時に恨み明かした仲次師匠に滿腔の謝意を表したい。僕がいぢめられながらも他の子供等に對し

て一種の誇りを感じてゐた事は、今も誇りとして殘らねばならぬ。平々凡々たるべき僕が、今回これも思ひ計らねばかり短い間に、先輩、友人諸氏の後援によつて兎に角舞臺の人となる運びに至つたも、昔の練習を記憶されゝばこそと思ふ。そこに何等かの特色があるだらうと思はれゝばこそ推選もされるのであると思へば、いよ〳〵昔泣き恨んだ自分がおぞましい。

俳優論に就いては僕別に説があるが、迷ひ明かしたた種々の疑問や周圍の事情に就いて、一時的かは知らぬが、相應の解釋もついた。此上はまつしぐらに、倒れるまで舞臺の上で奮闘する。時期尚早しの説もあつたが、いかに何でも人生の半ばまで待つて初舞臺をするでもあるまい。僕はむしろ今は最も時はいゝと信ずる。

それでいよ〳〵今二月下旬に帝國劇場で「ハムレット」を演ずる。二番目物は宗十郎中心の面白い物の筈である。「ハムレット」を如何にして、どう云ふ場割で演ずるかに就いては、今月の「早稻田文學」を參照されたいが、殆ど改作と見られるばかりに書直したもので、少くとも從來お馴染の物とは變つてゐるつもりである。此の「ハムレット」を出すについては、今更らもうハムレットでもなからう、とか云ふ批評や、其他種々の注意もあつたが、これ限りで、あとはノホヽンと引下らうと云ふ道樂分子は僕の肌には合はない。若しさうだらうと思ふなら思ふ人が道樂文士なのだ。續けて上演するとなれば追々の脚本も用意がなければならぬので、さてこそ所謂安全第一を期したつもりである。

希望

おれにも芝居が出來ると云ふ意味で出かけるのでない事は、以上の各項を讀まれた方には分明だと思ふが、僕にとつては、實際前にも記した通り、此の際は内部へ入つて、微力を盡して劇の高上を計りたいと思つてかゝる眞劍の仕事なのであるから、從つて勿論希望も澤山ある。然し、その希望は（或は一部から臆病だとの非難は受けるかも知れぬが）かのスターとなり

リーディングマンとなつて八代目團十郎や歌右衛門昔時の人氣男になりすまさうと云ふのが主ではない。ツリーやアーギングの例に倣つて、素張らしい道具や背景を使つて大いに金を儲けやうと云ふのでもない。之を英吉利の近代劇界で見るならば、バンクロフトのした仕事がしたい。バーカーの仕た事業の後を追ひたい。バンクロフトとバーカーも元は一俳優たるに過ぎなかつた。然し非常な聰明な頭を持ち、技倆も秀でゝゐた處から、段々と世間の評もよく、興行師への我儘もきくやうになつた處から、バレクロフトは獨立で、バーカーは他人と聯合して、興行をする事となり、その一座には無名の、然し將來望み多い靑年を集めて新らしい物を上演するに力めた。時には自分が主人公を演ずるのは無論であるが、それは其の作の主人公が自分でなければ適しない場合に限られて、作次第ではどんな新參の者にでも大役をつけて訓練する。此の二點を僕は嬉しく感ずるのである。新らしい自國作家の推進と、俳優の指導養成。

もとより之はツリーやアー[illegible]にしみであり、自分を賣る上に於ては損である。然しながら眞に其の國の劇に益する點から云へば其の差は比較にならぬ。バンクロフトの名の如きは專門家にでなければ知られぬのであるが、その賢妻ウイルトンと共に活躍した何年かの興行は英國識者の揃つて感謝し賞讃する所で、此の一座あればこそ英國近代劇の父と云はれるロバートソンの如き名脚本家も腕を延したのである。バーカーの名は比較的多く知られて居ようが、此の人のコート座に於ける興行が、バーナード・ショウをして名を賣出させる序開きになつたのは有名な事實である。バンクロフトも部下の統一、訓練に巧みであつたが、バーカーも敢て之に劣らぬ好指導者で、嘗て其の部下であつたエーンレーの如きは、僕の考へでは若手中第一の名優であり、それに次ぐクオーターメンの如きも故アーギングと「タイフーン」を演じて、時に其の主人公を壓する呼返を受けた上手である。
バンクロフトとバーカーに限らず、多くの俳優兼興

行師は、大概まづ俳優であつて、次に出世して興行師なり指揮役になるのが普通である。ラインハルトにしても、クレーグしてもさうである。僕は曲りなりにも亦、短年月の間にもせよ無名會の指揮役をした。その意味から云へば俳優になるのは逆である。その點でレコードを破ると同樣に、成績の點からも西洋のレコードを破りたい。今すぐに僕がバーカーたりバンクロフトたらんとするのではない。それが前にも内部からおもむろにと云つた所以である。そして辛抱してゐる間には大家や、新作家の新作を或時には自身に、或時には同志の人々によつて、演じて行ける時が來ようと思ふ。それが今の僕の希望である。

僕の初舞臺に際しては、何等の宣言もなく、何等の大抱負も掲げない。たゞ僕の過去には感謝すべき訓練があり、僕の將來には廣く公衆と共に實現しうる希望がある事のみを特に記す。日本劇界の戰國時代は去つた。急ぐべからず。再び車を坂下へ落さぬ用心をして漸進したい。

なほ僕の舞踊に關する希望、及び他年望んでゐる勘彌、宗之助、猿之助一團舞踊劇海外遠征の件などもあるが、流石に近頃忙しいので疲れた。今擱筆するのも朝の五時である。これから寢る。「どんな夢を見るだらう？」

（正月十七日）

「寒行」の學理と實驗

△寒中修行觀

醫學博士　今　裕

寒中修行の問題については、醫學上の見地から別に恁うと云ふ調査はして居らぬが、劍術の寒稽古は例年自らやつて居るし、夫れに唯一回ではあるが、寒中禊行なるものに參加した經驗もあるから、此等の實驗から得たる自分の考へをお話して見よう。

世人の多くは、寒中修行を所謂「くすり」であると心得、之れさへ行ずれば健康者は益々健康を保ち、病者は病を治し得るが如く考へて居る樣であるが、之れは大なる誤であると自分は考へる。抑も昔の難行苦行なるものの多くは、祈願の意味であつて、體を苦しめ身を犠牲として大願成就を祈るのである、從て因習の久しき、自然、寒暑の修行が何等か神秘的意義あるものゝ如く解さるゝに至りしは固より無理からぬことである。斯の如く、假令寒行なるものの眞目的は寧ろ精神的方面にあつたにせよ、一面之れを身體的方面より觀察して重大なる意義あるものなる事は爭ふ可からざる事實である。併しながら、身體的鍛錬に致せ、精神的修養に致せ、又は學術の研究に致せ、何事に拘らず、不斷の撓まざる修行によりて初めて其眞諦を得るに至るものであつて、微々たる一時の難行に依つて、永遠の健康と幸福とを期待するが如きは、所謂「苦しい時の神頼み」『死に際の念佛』と一般、誠に虫の好過ぎる事であつて、實に非望も亦甚だしきものと謂はねばならぬ。

御承知の如く佛教などに於ても、常時の修行と、別時の修行とあるので、常住坐臥の修行は之れを常時の修行と云ひ、臘八の接心とか、三伏の接心とか云ふの

は所謂別時の修行であつて、嚴寒酷暑の候を期して、常よりは一層烈しい修行を積むのである。劍道や柔術の寒稽古も申さば矢張り此別時の修行に外ならぬのである。自分は此別時の修行には二通りの意義がある樣に思ふ。第一には、常時の修行によつて吾々は、如何の程度までの進境に到達せるかを自家心身に試問するの意味で、之れに依つて耐苦耐難に對する確信を得るにあるので。第二には更に烈しき寒暑に抗して、一層猛烈なる修行を積み、尙一段の進境に達し、大いに勇往邁進の氣を養はんことを期するの意味である。斯樣な次第であるから、常時の修行あつて、初めて別時の修行が、其意義をなすものであつて、不斷の修行なきところには別時の修行は何等の意義を有せざるものである。難行の最も利益ありとするところは實に上述の如く困苦に堪へたる經驗より得たる、自家心身に對する確信を得ることである。獨り寒暑の問題に止まらず、凡百世路の艱難に當て、容易に之を突破し得るの氣性を養ふに於て大いに力あることは爭ふ可からざる事實である。諺に曰へる、「困難汝を玉にす」「可愛い子には旅をさせよ」など、何れも皆消極的に又積極的に親しく世路の艱苦を嘗めて、自ら勇邁の氣を養ひ又之れを養はしめ、强固の信念を得せしめんとするにある事は多言を要せざる次第である。身體的にも常時の修養を積める人に寒暑に於ける別時の修行の甚だしき効果あることは是亦爭ふ可からざる事實である。劍道の寒稽古の如き、實際寒中の稽古の間には直ちに効能も見えないが、春陽三四月の頃になつて初めて、呼吸も長く續き、體も樂に動く樣になることに氣が付くに至ることは經驗家の何れも皆認むるところである。暑中稽古も同樣、稽古時期の終りに至つては、寧ろ疲勞衰弱を覺ゆるに至るものであるが、九月十月秋冷の候に至つて同樣効果が現はれるに至るものである。人の身體は之れを猛鳥野獸の類に比ぶれば固より甚だかよわきものの樣ではあるが、鍊磨と慣習とに依て、意外の機能も營み得る樣になり、又絕大の抵抗力を得るに至るものである。寒中の潜海、水泳と云ふが如き、聞くさ

へ身の毛もよだつ様ではあるが、鍛錬者自身にあつては左程の事ではない。先年自分が參加せし片瀬の寒中禊の際の如き、海水温度は攝氏十二三度より四五度の間で、之れを華氏に直せば五十度以上にあるので、氣温よりは餘程高かつたのであるから、決して堪へ得られぬ程のものではなかつたのである。歐米の雪國に於ても近年雪中の裸體外氣浴が大分各地で流行し來り。所によりては、多數の會員を得する倶樂部なども出來、着々好成績を擧げて居る所もある様である。それで、自分は血氣强壯の青年諸君に向つて、體力の堪へ得る程度に於て何等か寒中修行を行ずる事は決して無用の行にあらず、必ずや得る所あるべきを斷言するものである。

以上は固より健康者に就ての場合であつて、虚弱者若しくは病人にあつては、固より同一に律することが出來ないのである。世人の多くは病人養生と健康養生とを混同して、健康者にして随分病人の眞似をする人少なからざると同時に、他方に於て病人が又健康者の列に伍して随分無謀の擧を敢てし、不測の危害を招くものが少なからざる様であるが、之等は共に大に愼まざる可からざることである。虚弱者病人と雖往々寒中行事に參加し、何等の危害を招かず、却て之によつて自家心身に對する確信を得、健康を恢復するの動機となることも固より之れ有る事と思ふ。世の寒行を指導する所謂修道者流の中には、一々之れ等の實例に指を屈して、斯様な場合もあり、斯様な實例もありとて、何よりの證據として之を主張の種となし、之れに參加せる經驗者も亦單なる自家一身又は極めて少數の實驗を以てして、一以て萬事を推し、其効驗を吹聽すると云ふ様な譯で、意外の誤解を惹き起すこととなるのである。斯の如きは、獨り寒行の如きに止まず、近時盛んに流行する種々雑多なる萬病に効ありとして、世俗の間に信者を有する民間療法に於ても、亦全く同様であつて、誠に寒心に堪へざる次第である。抑も經驗なるものは、正確なる知識の判斷の基礎の上に立て、始めて意義あるものであつて、知識の根據無き經驗の判

斷は、何等の價値を有せざるものである。治病の場合に就て謂へば、其病の本態如何、官能的なりや、器質的なりや、其治せりと云ふ事も、單に自覺的なりや、根本的なりや、永久的なりや、一時なりや等巨細の點に亘りて學術的基礎の上に觀察し、之を判斷す可きである。而して判定の結果確實に治癒せりとしても、一以て萬事を推す事が出來るものではない。世人多くは奇矯の事に信仰を向くるの傾向あるもので、腎臟炎に過量の蛋白の有害なることを知り、糖尿病に糖分の制限を要するを知れる人々さへ、自家の體質を辨へず、年齡も顧慮せず、病症も知らずして、菜食好しと云へば菜食に至り、肉食良しと聽ては又爭ふて之に赴き、何々療法効ありと聞きては一も二も無く其門に集まるが如き、何れも生を愛し、病を惡むの衷情に出づるものであつて、固より無理からぬことであるが、誠に寒心の至りである。寒行の場合も亦同樣に、種々の要約を顧慮するの必要がある。されば無暗に寒行の危險を鼓吹して、血氣横溢の青年をして漫りに臆病神の奴隷たらしむることは固より宜しからざる處であると同時に、寒行指導者が徒らに過大に其効驗を吹聽して、病者をまでも見す〳〵危害に陷るゝが如きは之れ亦大に愼むべきである。要は唯其體力を計り、修行の經歷を酌量して、以て之と適するを度とす可く、甚だしく過剩に亘るを避く可きである。

以上は寒行乃至荒行に對する自分の意見の骨旨であるが、序ながら、武道修行に關する私見をお話して見よう。劍道にしろ、柔道にしろ、之を學ぶに當ては、専門家としての研究と、素人としての修行との間には自ら程度的の差別ある事は固よりなれど、其眞目的は、單に體力の養生のみにあらず、又技術の末に走りて勝負を爭ふのみにもあらず、兼ねて、堅忍不拔の精神と所謂禮に初まり禮に終ると云ふが如く、高尚なる品性を養ふにあるのである。劍道家の階段は、單に技術の熟未熟のみを標準とするものでは無く、耐久力の强弱、氣分卽ち精神修養の程度、品格の高下等を考量して之を定むるものであつて、單に全身筋肉機能の圓滿なる

發達を期する所の體操術とは全然其出發點を異にし、終極の目的を異にして居るのであるから、體操と武道と何れが優るやは、已に問題となる可きものでないのである。全身筋肉機臓の圓滿なる發達を計らむが爲めには、固より生理學的解剖學的基礎の上に樹てられたる體操を以て理想的とす可く、兩々相待つて始めて心身の完全なる發達を就けしむ可きである。自ら劍道を修むるも、常に及ばざるを師として之に及ばんことを期し、若やげる血液を常に體中に濫らしめ、自が天職の撓まざる遂行に資せんとするに外ならぬのである。

△「寒行」の實驗的効能

小野鍾山

▽寒行は難事に非ず

所謂寒行なるものは、總ての藝道の鍛錬に最も重要なるものである。就中日本古來の武術たる劍道柔道等に於ては、寒稽古と稱して此最寒中の三十日をば、一年を通じて最も大切な時期として、盛に錬磨しつゝあるのは皆人の知るところである。又音聲を主とし音量を要する淨瑠璃、謠曲、常盤津、清元等の藝事に於ても、此最寒を修養の好時期として居る。此時期は第一に氣温低下して空氣が比較的濃厚になつて居るから、音聲を發するに其反響(こだま)が大なる事と、第二に寒時は暖時よりも肉體の緊張力が强いから從つてより以上の訓練が出來る事と共に、斯る場合に苦心して修業を重ぬる忍耐力や克己心の奮起が、自ら偉大なる精神修養の力となつて體現せらるゝからである。劍道柔道の如き、寒風凛烈たる中を曉の霜を踏んで道場に通ひ、稽古着一枚に身を固めて、流汗瀧の如くなるまで錬磨するのであるから、自ら其働き方が温暖の時よりも優れて居る譯である。されば從來の實驗によれば、此僅か三十日間の寒稽古は、他の氣候に於ける六ヶ月位に値ひして居るのである。音聲を用ゆる藝人の如きも、少くとも眞個の音量を保ち眞實なる音聲を得んとするには、三冬位咽喉を破らねばならぬといふ事である。僅か十數

許りの少女を仕込むのにも、朝早く物干台に登らせて、聲のあらんかぎりを出させて唱はせるさうである。末技に於ける一少女の訓錬にすら、猶斯くの如き狀態であるから、所謂冷水摩擦や寒垢離を取るといふが如きは、決して珍らしい至難な事ではない。故に普通人に於ても、其如何なる種類に拘らず、一種の年中行事として必ず實行されん事を希望する。

▽寒行の精神的及び肉體的功果

何事に關しても、第一に精神が決定して居らねば、實行を完成することの出來ないのは云ふまでもないが、特に此實行に於ては、先づ其精神が確固不拔にして一點怯怖の念なく斷々乎として敢行するといふ決心夫自身が、最大肝要事である。彼の成田の不動或は水天宮等に於て、心願を以て寒垢離をなしつゝある信者等について觀るに、其心願の善惡適否は別問題として、彼等の誓願したる丈けの寒行を修了し得れば、其心に必ず御利益あるものと堅く信じ、之を前提として行つて居るのであつて、其人の肉體が苦行に堪へ得る丈けの力を有つて居る場合に於ては、其荒行が何等の障害を與へぬのみならず、非常に大なる利益を成就し得るものである。卽ち其精神上に於ては、大いに自己の信仰を强くし、從つて全心を緊張せしめ、其結果肉體に於て大なる抵抗力を增進し、從來虛弱なりし身體も俄かに健康になるといふ事になるのである。されば、平日都會生活に於ける商店等の比較的身體の運動の不足せる人々が、始ど半裸體といふてもよい位の薄衣で冷水沿をなし、寒風凛烈たる街上を疾驅し廻るといふ事は、其精神上に於ける訓錬は申すまでもなく、肉體の運動としても實に緊張し充實せる方法として大いに奬勵すべきである。從來の慣例によれば、之は朝早くか夜分といふ事になつて居るが、日中に於て行へば一種の日光浴になるのであるから其功能は一層多大であらうと思ふ。

▽荒行僧に對する希望

僧侶或は行者の間には「荒行」と稱して、最も嚴格なる佛道修行の法がある。今日も之を修める者がないで

もないが、昔程嚴密に行ふ者が少くなかつたのは慨はしい次第である。所謂難行苦行を以て神佛の道を體得し、衆生を敎化するは彼等の務であるのに、其之を怠るといふ事は、彼等の行力の足らないのに依るが、蓋し宗敎其物の權威を少くするものであらうと思ふ。勿論學問上の修行に努める事の必要なるは勿論であるが、此荒行によつて精神と肉體の充實緊張を計り、所謂靈肉一致の境界を現出する事は、宗敎家の第一義ではないか。されば、眞實信仰に生きんとする人々は、須らく此點に於て大いに反省して貰ひたい。釋尊の如き大智大能すら、八千八度も生れ變り死に變りしたといふ難行苦行を積まれたのでないか。況してや末世の凡俗に於ては、八千八度の十數倍數十倍の努力を有つて、あらゆる困苦缺乏に打勝つだけの力を養成するのが當然の事ではあるまいか。荒行は堅忍不拔、精進勇邁、唯一念に實行すると云ふのが當面の目的であるから、其行力は卽ち實行である。實行が凡百の道の究竟の目的であつて、萬能餘りあつて一心足らざる、實行の缺けたる人々が、果して何をか成し得べき。須く大に反省して、困苦缺乏に耐ふるの素地を養成して、眞個大丈夫兒の本懷を體得して貰ひたいものである。

▽平山先生の寒行

今から八十年許り前に平山子龍といふ名高き先生があつた。先生は儒道の達人であると同時に、禮樂刑政より農桑水利の事に至るまで悉く講究せざるなく、特に露國を征するの義を唱道して、北海道の開拓に經綸を傾けられ、傍ら邊海の防禦に先鞭をつけられた人である。又時の昌平黌の儒官柴野栗山先生等と親しくして居つたのであるが、多くの儒者も常に先生の鋭き論鋒に當る事が出來ず、又劍術、槍術、拳法、兵學等の蘊奥を極め、一人として先生の向ふに立つ人はなかつた位の偉い人である。而して先生は常に嚴寒猶重ね着をなさざるのみならず、風呂桶に冷水を貯へて早朝其中に端坐して讀書三昧に耽りつゝ、其冬期を送るのが例であつた。又それのみならず嚴冬白雪紛々たる日には、素肌に鎧を着し而して長刀を携へ四谷から牛込邊を疾驅して、其心膽を鍛錬して居られた。先生は常に『近頃の武士が悉く泰平の安に慣れて、只身心の安逸をのみ願ふて居るのは、實に淺猿人であつて、一旦大事なる場合如斯の泉何事をか爲し得ん。予は平日と雖も常に大事に際會せるものとして如斯く修行するのである。豈敢て他あらんや。』と、多くの生徒を敎獎されて居つた。而かも此方法は老に至るも猶且つ改めず、七十に及んでも尙其

戰氣堅鎌として風神毫も衰へざるものがあつた。如斯き例は從來澤山あるが、今日ゝ總ての人も餘りに安きに慣れて、甘華美贅弱の風習に流れつゝあるのは、これ全く由々しき問題である。然しながら、我陸海軍に於て平常の訓練を此邊に用ゐて居る點も少なからんのであるから、聊か其意を强うするに足る。されど、彼等にして一度軍隊の門を出づるや、元の默阿彌になつて、折角二年間乃至數年間教養し來れる軍人精神の本義を忘れて了ふといふやうな實例が多くあるのは、甚だ惜はしい次第である。

▽北海道に於ける荒行道士

固より總ての寒行を行るに方つて、其體力及び場所の如きは十分に研究するの必要があるけれども、肉體を曝露するも猝忽ちに凍傷を起さない位の温度の處に於ては、容易に實行する事が出來るのであるが、非常なる寒氣に觸ち肉體に凍傷を起すが如き土地に於ては、凍傷を起さない丈けの準備をして實行する事にせねばならぬ。北海道札幌に田中穆山なる一道士がある。齡已に六十を超えて居るが、常に單衣一枚を以て三冬の嚴寒をも難なく經過して居る。之れを直に常人に奬勵する譯には行かないけれども、一度精神の確立さへ出來れば、生死をも脱する事が出來るのであるから、斯かる行も決して至難な事ではない。決心と鍛錬の如何によつて出來る事柄である。

▽慣れる事の必要

予の平常の主張から云へば、吾人の肉體の皮膚の如きは、少くとも顔面、手掌及び足の皮膚の如くなる事が大切である。其母體を離れたる時には、別に異つたものではないのであるが、段々と試錬を重ねると、從つて踵は踵の皮膚となり、常に暴露せる顔面の如きは、身體中の最も强固なる皮膚となる。之は何故かと云へば、要するに「慣れた」といふ結果に外ならぬ。故に其實行の如きも只一冬のみを以て滿足する事なく、病的の理由なき限り、其年齡を問はず、緩急を計りて不斷に行ふべきである。よく『慣れる』やうに心掛けるのは、抵抗力增進の一方法である。但し、吾人の體溫は吾人の生命を持續する上に於て最も大切なものであるから、時間といふ事も大いに考へねばならぬ。例へば、ガタガタと胴慄ひをするやうでは、寧ろ害あつて益なき事である。如斯は未だ自己の精神氣魄が身體に充實せざるが故に、外部に對する抵抗力弱きに源因するものである。眞實氣力が肉體全部に充實すれば、假令肉體は

糜爛し盡すとも、齒の根も動かぬやうな胴慄ひは起らぬものである。

全國師團管下中で、寒暑ともに嚴しいのは旭川であるが、旭川師團の士卒の耐寒力は、實に優秀なものであつて、既に日露の戰役に於て、識者の容認するところとなつて居る。是實に平生の訓練より來る結果であつて、暑さに耐へ得るの力は、寒さに耐へ得るの力であつて、耐寒力は即ち又耐暑力であることも明かである。而もその訓練たるや、畢竟慣れると云ふことに歸着するものである。近來氷滑りが段々盛になつて來たのは、甚だ喜ばしき事である。

▽寒行の準備行爲

寒行の準備行爲としては、先づ當初に呼吸の調子を取り、氣力を全身に充たし、而して後全く部分的の肉體を忘却し盡くして、平然として敢行するといふ事が一番大切な事である。即ち寒中游泳の如き、又は薄着のまゝ徒歩するが如き、總て皆此精神を以てする事が必要である。換言すれば、精神を潜めて體内より外界の寒氣に對抗する氣持が一番大切であつて、外界の寒氣から壓倒せられるやうでは到底之を敢行し得る事は出來ない。のみならず、往々にして病的傷害を誘致するの源因になる。要するに、此寒行といふ事は、精神上より見ても肉體上より見ても、少壯老が悉く敢行して非常に重大なる功果のある事と思ふ。依而左に予の實見し來れる方法によりて、一々に渡つて更らに少しく述べて見ようと思ふ。

▽寒中水泳

寒中水泳は少壯者が實行して其身心を鍛錬するに最も適して居る方法である。太平洋沿岸の海水は概して陸上の氣溫よりも暖き場合が多いから、之に入るのは左程苦しい事ではない。近時河面氏が宗教的の立場から禊會（みそぎくわい）なるものを組織して、國府津又は小田原沿岸邊りに於て實行をせられて居るが、之も一つのよき企であると思ふ。予の經驗するところによれば、海水の溫度によつて時間の程度を限定し又其體力の如何によつて限定せねばならぬが、普通の健康體なれば、十分間乃至三十分間を以て適度とする。其準備としては先づ一片乃至二片の餅を食する。又は粥を茶碗一パイ位に食し、而して海岸に至らば、先づ調息を十分にし、手足の運動を試み、身體全部を潤らし、而して後靜かに水に入りて

游泳を初める。寒中水泳は最も靜かなる事を要する。決して焦燥的にならないやうに工夫せねばならぬ。而して游泳終らば、直ちに湯衣なり單衣等を着して家に歸り、なるべく空氣の流通せざる場所に於て適宜の運動を試み、又は溫浴するとかして其濕氣を立派に拭ひ去る事が肝要である。而して寒中水泳は、晴天の日中が最も適當である。

▽冷水浴

冷水浴は最も手數を要せざる方法で、何人にもお勸めしたいのである。東京市に於けるが如き水道を使用せる冷水浴は、隨分冷たいのであるが、慣るればなんでもない。彼の井戸水の如きは、非常に暖かであつて、冷水浴には極めて容易なものである。扨て之を行るには、先づ充分身體の運動をなすなど、前述の水泳に於けるが如き準備を必要とする。寢室を出でゝ直ちに浴するが如きは、甚だ不合理の事である。予は常に如何なる事に對しても、其事に應じたる準備乃至用意の必要なる事を主張して居るが、其用意とは、要するに精神の充實である。肉體に氣力を充滿せしめて、其緊張せる精神並びに肉體の力を以て外敵に對するといふ方法をいふのである。故に外敵から制せられるといふ狀態を最も忌むのである。即ち如何なる場合に於ても、充實せる肉體と精神を以て外部に對抗する。即ち外部を制するといふ前提の上に立つ事が一番大切である。此事は『制するか制せられるか』『支配するか支配せられるか』といふ問題に歸着するものであつて、如何なる場合に於ても、身自ら支配するところの見地に立つ事を前提とする。而して普通人に於ては、水道の水なりせば、一升桝を持つて三十バイ位が最も適度である。一つ二つ三つと徐ろにかぶるのである。先づ第一に兩膝にかけ、第二に左右兩肩に交々かけるがよろしい。冷水浴に於ては皮膚の抵抗力を增進する事は勿論であるが、猶それ以外の功力は細胞組織の全體を振盪させるといふ事が一番生理的によいのである。強ち澤山の水を使ふを要しない。只普通人が之を行ふ場合に注意せねばならぬ事は、空氣の流通激しき所を避け、胃腸に故障のある際は之を止めるといふ事である。而して水浴終らば、十分乾燥せるタオル數本を用ひて全身を

よく拂拭し、毫も濕氣のないやうにする事が大切である。又若し冷水浴を行ふた後、體溫を回復する事が六ケしき場合に於ては、適宜に體操を十分行つて其溫度を回復するがよろしい。世間には往々にして此冷水浴の爲めに傷害を惹起した實例があるが、それは多くの場合に於て準備並びに終了後の手段を過つて居るのに歸因して居る。決して冷水浴夫自身の罪ではない。近來冷水浴は隨分行はれて居るが、貴族院議員古賀博士の如きは、毎朝水道の口から、浴しつゝ實行されて居る。

▽冷　水　摩　擦

冷水摩擦は、其溫湯たると冷水なると又乾燥せるタオルを以てするとを論んぜず、最も合理的な運動方法である。卽ち先づ皮膚の抵抗力を進め、血液の循環を正調ならしめ、從つて風邪などの病氣に犯される事は斷じてなくなる。又皹凍傷等を防ぐ。此方法は極く行ひ易き平凡なものであるから、都會生活をして居る紳士淑女は、せめて此冷水摩擦位の方法は講じて貰ひたいものである。

此の冷水浴や冷水摩擦の効能あることは、既に遠山醫學博士が詳細に說述されたるところであつて、卽ち冷水浴を慣行すれば、皮膚の抵抗力を強くし、寒暖の急變に逢ひ、雨に濡れ寒風に吹かれ、不時の出來事の爲めに深夜に起き出で、又は徹夜して働くやうなことがあつても、決して感冒に犯さるゝことがないのである。特に必要なるは、常に讀書する學生、坐業の人、に身體虛弱なる人、感冒に罹り易い癖のある人、神經衰弱者、安眠の出來ざる人、病後恢復期に入りて衰弱の未だ去らざる人、胃腸の慢性疾患、無熱なる肋膜炎の慢性病、盜汗の人等に對しては最上の治療法である。

又之を永續して實行した人の經驗に徵すれば、冷水浴は朝寢の癖を打破し、怠惰の方面より勤勉力行に入らしめ、且つ忍耐の氣象を養成せしむるのである。故に唯身體の健康を增進せしむるばかりでなく、精神上の効果は尙更に大なるものである。

之實に專門の醫學者が、此の如く顯著に認むるとこ

ろなるに徹しても、其効果の著しきものなるを知ることが出來るではないか。

▽寒参り

寒参りは一面宗教信仰上の問題である。人間といふものは、何か一つの信念がないといふと、兎角實行をにぶるものであるが、此寒参りの如きは此意味に於て、最もおもしろいものである。無智なる熊公八公等をしても、十分之を成し遂げしめる。又此寒参りは、以上の他の方法に比して、驅走をするといふ事に於て、特別の意味がある。此驅走ついては、本誌十二月號で論じて置いたから、それについて見るがよろしい。

▽寒中登山

寒中登山や雪中旅行なども又極めて面白い。白雪皚々たる中を突破するといふ事は、其精神及肉體の鋭氣を養ふ事非常に大である。出來得る限り、事情の許す限り、大いに行るがよろしい。

▽厚着をすな

古へより飽食暖衣は最も悪事の如く論んぜられて居るが、眞に深き道理のある事である。先づ其弊害としては、天賦の皮膚を弱くし、延いては精神力を脆弱ならしめ、其結果僅かな事でも直ぐに病氣をするといふ事になる。吾人の皮膚は其抵抗力が非常に強いものであるが、之を使用し訓練せぬ時は次第に其力を失ふて了ふのである。世人は皮膚を以て單に細胞を包む袋位にしか思ふて居らぬやうであるが、決して左様ではない。只單に中の物を包んで居るといふのみでなく、外部に對する防衛の機關である事を知らねばならぬ。

前にも述べたるが如く、耐寒の力は、耐暑の力で、畢竟、精神力の強いといふことゝ、肉體の強いといふことゝ一致する結果に他ならぬものであるが、當面の問題としては、皮膚を强壯ならしむるといふことは、肉體を强壯にする基本であるといふことも出來るものであるから、如何なる方法にても、常に皮膚の抵抗力を、より以上に强大ならしむることに注意せなくてはならぬ。是れ固より春夏秋冬、四六時中を通じての問題であるけれども、之が訓練に最も適切なる時期は、此嚴寒の時である。卽ち最寒の時に、容易に耐へ得るやうに慣らして置けば、他の時期は、殆んど介意するに足らぬ位のものである。

然るに文明社會の現代に於ては、殆んど足らぬ物な

き、否寧ろ餘りに設備が出來過ぎたる程、物質方面が發達して來たために、自ら人は安きに慣れて、不覺不識の間に、天賦の肉體を弱めつゝあるの傾向がある。就中都會生活の人士に此弊は甚しいのであつて、而も上流の人士間には尚更に軟弱安逸の風習に浸染して居る。其結果としては、此等人士の家庭に於ては、殆んど醫師の藥と首引の狀態であるのは、餘りに考へざるも甚しいものではあるまいか。

概觀するに、足らぬ勝ちの勞働階級には、健康者多く、足りて飽くことを知らざる上流階級には、殆んど不健康者のみであると云ふ有樣であるのは、大に反省を要すべきことであると思ふ。卽ち之等は一に天賦に反きたる安逸華奢の生活、換言すれば軟弱なる生活が將來する必然の結果であつて、實に痛しきことではあるまいか。

古から「子供は風の子」なりと云はれて居るが、大に味のある言葉であつて、世の多くの人々は、其子女を教養するにも、この「子供は風の子」なりとの大慈悲心に立ち歸り、子供の天賦を害せぬやうに、軟弱手段たる眼前的の小愛のために、天晴れ强壯者となり得べき資質の子供を、可惜虛弱なる不健康者とならしめぬやうに覺醒して貰ひたいものである。

慣れの力ほど恐ろしきものはなく、困苦缺乏の間に、簡易なる養育を受けて、成長したるものは、精神及肉體共に、健全なるものであつて、如斯にして成人せる者は、其生命の基礎が最も强固に定められたるものであるから、從つて如斯基礎の上に、始めて長き生命と幸福とは建設さるゝものである。之に反して何一つの不足を知らず、安逸放縱に慣れたる者は、忍耐、努力と云ふやうやうなことは夢にも知らず、之が爲めに精神肉體共に軟弱怯懦、僅かばかりの障害にも忽ち斃れる。恰も溫室咲きの花のやうな有樣になつて了うのである。故に何等の試練なくしては、精神上にも肉體上にも、强大なる力と云ふものは生ずることなきを知らねばならぬ。

古人が「困難汝を玉にす」と云はれたのは、實に至言

であつて、吾人が精神及肉體を訓練するには、周圍に敵が存在するからである。況して眞實の健康體を養成するには、此極寒時は、其試錬を重ぬる屈竟の時節である。

▽萬止むを得ずんば

人各千樣萬態の體質や習慣を有するものであるから、以上述べたる方法を敢行し難き事情の人も多々あるであらう。されば予は更に老婆言を呈して、萬止むを得ずんば此の方法だけでも行つて貰ひたい。

(一)　洗面は必ず冷水を使用すること

水が直ちに凍る地方は格別として、氣溫が零度乃至五六度位の場所に於ては、冷水の洗面は何の苦もないことである。今年東京に於ける寒氣は實に稀なるものであつたが、水道の水が直ちに凍るやうのことはなかつたのである。而して冷水にて洗面するの利益は、顏面の手の皮膚をして、耐寒に慣れしむる上に於て多大の効果のあるのであつて、彼の顏面に皺の生ずるを氣に病む人々が、盛んに溫湯を用ゐて居るのは、實に矛盾したることである。常に冷水を用ゆれば皮膚の光澤を増し、天性の美を増し、皺を生ずることは少いのである。之實に皮膚を緻密ならしむるからであつて、湯の場合には、皮膚は自ら弛緩して、更に收縮することになるから、段々と生肌(きめ)が粗になり、全く天性を害するの結果になるものであるのみならず、洗面後の感じは、湯を用ゐたる時は、忽ちに寒冷なる空氣に觸れて不快を感ずるが、冷水を用ふる時は、後に漸次に溫暖を覺えて愉快極りないものである。殊に一日中最も貴重なる早朝の精神爽快は、一日中の活動に對して、大なる力を有するものであるのみならず、必ずや一日一回乃至數回の洗面を冷水を以て慣行することは、最も容易のことであつて、而も其効果の大なるものたるを知らねばならぬ。又洗面のみならず、冷水を用ゐて咳嗽(うがい)をすることは、溫湯のそれよりも、餘程効果があるのである。世人往々にして餘り冷き水にて咳嗽をするのは歯の爲めに適せぬやうに思へる人もあるけれども、慣るれば決して有害のものでない。要するに之等のこ

とも、畢竟習慣によつて自ら分れるのであるから、平素可成消極的の手段を避けて、積極的に外部を支配する強き抵抗力を増進することに注意せねばならぬ。

(二) 寢衣を着代うるに温むる如き慣習を全然廢すること

之は寒時に於ける行事中最も大切なることである。寢衣を着代うるは普通朝夕二回、何人と雖もなすことであるが、其時温めたる衣服を着るが如きは、餘りに軟弱過ぎることであつて、皮膚に對して不親切なことである。卽ち吾人の皮膚は外氣に能く接觸すればする程、抵抗力を增進する素質を有して居るのであるから、何等特種の試練を行はぬ人々に在つては、せめて寢衣を着代ふる時のみにても、皮膚に寒暑の變化を感受せしめて、其抵抗力を保存せしむることに注意せねばならぬ。故に、この目的を完全に達せんとするには、起床の後洗面を終るまで位は、可成單衣一枚にて辨すが最も適當なる方法であると思ふ。之を慣行して、寒中に於て二十分時三十分時、乃至一時間と云ふやうに、段々長き時間を平氣に薄衣にて居らるゝやうになれば、實に仕合せなことであつて、自然皮膚の抵抗力が增進し從つて健康になることが出來るのは、冷水浴や冷水摩擦と同樣の效果である。

慣行は實に偉大な力を有するものであるは、既に各自が認識せらるゝところであらうが、尾籠の話ではあるが、この嚴寒時に於ても、大小二便を達するに、之が爲めに感冒に罹つたと云ふ人は、ツイ聞かぬところではないか。是實に慣習の力であつて、此事に關しては、人は自ら、何等の不安なく、何等の危惧なく實行するから、終に何等の障害なく、又何の苦もなく行ひつゝあるのに視るも、本來寒いとか暑いとか云ふことに對する感覺は、或程度までは全く、心の持ち方、氣の持ち如何に關するものたることが明かではあるまいか。

(三) 儀禮に關する以外には、可成身に纏ふものを簡短にするやう

に注意せねばならぬ。卽ち襟卷とか手袋とか足袋とか

云ふやうなものを、出來る限り避くるやうにすることは、自己の肉體を强壯にする一方法たることを忘れてはならぬ。虛榮(みえ)のために要もなきことに、肉體の抵抗力を減少せしむるが如きは、實に可惜(あたら)々々のことゝ云はねばならぬ。之等も畢竟慣行によつて如何樣ともなるものであるから、深く注意すべきことである。

現に松室法相の如きは、夙に健康に餘程注意せられて居るのである。現今に於ても尙且つ、十五分間乃至三十分間位は、毎朝殆んど全身を大氣中に曝露して、其試練を積まれつゝあり。又女子高等師範の細田敎授の如きも、毎朝一時間宛の試練をされて居り、共に老齡の人々であるけれども、寒冒一つ引かぬと話され居られるのに視ても、僅に一日十五分間や一時間の實行にても、大なる効果のあることが明かである。

生理學上より觀たる禊行

醫學博士　生沼曹六

人類の便利幸福を增進せしむるを目的とする文明の餘弊として、往々便利が過ぎて努力を缺き、幸福が過ぎて贅澤に陷るは勢の免れ難い所で、今の青年學生殊に都會の學生を昔の學生、田舍の學生と比ぶれば柔弱で安逸に流れてゐる風がある。之れに對抗する爲めに近頃所謂硬敎育なるものが頻りに唱へらるゝのは、文明の弊を救ふ點に於て誠に結構な事である。近來所々で、從來多少宗敎上の關係を以て行れた荒行の一部か、或る人士の間に行はれるのも此趨勢の一端と見る事が出來よう。荒行も時には宜しからうけれども、全く衛生の點を顧慮せずに唯從來の形式にのみ從て行ふ事は最も注意せねばならぬ所と思ふ。

私は古典攻究會が行ふた、禊行に參加した多數の人に就て、前後四回生理學上の檢査を遂げ、今年の一月には自ら其列に加はつて體驗して見た。故に私は此禊行に就て其の肉體に及す影響を客觀的に觀察したる所を述べ樣と思ふ。

先づ禊とは何んな事をするのかと云ふ事を一言せね

ばならぬ。古典攷究會で行ふた禊は夏季と冬季との二期に一週間行ふのであるが、夏は八月山中にて行ひ、冬は一月海岸にて行ふを例とする。一週間とは云ふものゝ初日と最終の日とは食事が平常と同じであるから、最も異つた生活狀態にあるのは、中間の五日間である。行事の大要は冬の禊では、朝七時頃に三分から五分位の間海岸の波打つ所に浴し、其間は兩手に力を入れて之れを振りつゝ大祓戸大神と云ふ語を繰り返し高唱するのである。浴後は平常冬季用の衣服に更めて神前に集まり、聲高に經典を朗讀し、十分位にて終る。一節毎に、三十分間位腕を振りて祖神の名を高唱する。此の如くすること三回凡そ一時間半にて一回の拜神を終る。其後で大きな丼に一杯の白粥を梅干の菜にて喫する。之れを朝食と中食との兼用にする。又一回拜神があつて、午後一時頃朝と同じ様に海浴を取る。又拜神があつて六時頃に丼一杯の白粥の夕食を喫する。次に講演があつて九時頃に寢に就く。之れが日々の行事である。夏の禊では海浴の代りに瀧壺に浴したり、川に浴したりする丈けの相違で他は大同小異であること んな有様であるから、荒行と云ふ程ではなかろうが半飢餓の狀態で、可なりの勢力(エナルギー)を失ふ行である。殊に冬季の禊に於て然りとする。

更に私の觀察を述べる前に注意したい事がある。それは是迄の禊に於て參加者の感想談を度々聽いた事がある。固より感想であるから主觀的の方面ばかりであるが、何れも氣分がよいとか、頭が輕く感ぜられるから身體の健康上にも有利なるに相違ないと云ふ結論で、小兒にでも虛弱なものに迄でも斷然實行せしめんとする意氣込である。然し主觀丈けでは決して事物の眞象を得てゐるものではない事は、客觀の觀察丈けが眞象を得ないのと同樣である。丁度此關係は壺の內に入て見れば周りは凹面であるけれども、外から壺の胴を見れば凸面をなしてゐる樣なもので、內觀と外觀併せて始めて全きを得るのである。手近の例で云へば、酒を飮んだ時のほろ醉機嫌は誠に心持のよいもので此時の主觀のみから判斷せば、ほろ醉程度の飮酒は身

有利であるとも云はれる。現に此の樣に信じてゐる人も澤山ある樣であるが、客觀的觀察の結果は全く反對で、酒は此心持のよい、ほろ醉程度の量で既に恐るべき害毒を身心に與へてゐる事が明かなのである。故に禊其他此種のあらゆる荒行に於ても單に主觀的方面のみを以て速斷せず、充分に愼重なる客觀と相待つて正當なる判斷を下す事に勉めねばならぬ。

第一、體重に及す影響は大體減少するのであるが、中には增加するものもないではない。之れを夏期御嶽山に於ける十二名に就ての試驗の成績に見るに、禊最終日の體重を、禊第一日の體重に比して、增加するもの六名減少せるもの五名、增加なきもの一名で、體重の增加率は四分が一番多い率で、體重減少率は三分が一番數多い率であつた。又冬期片瀨での禊にて三十三名の人に就て調べた結果は、增したものが六名、其內一番大なる增加率は二分であつた。體重の減つたものは二十七名、其內一番多かつた增加率は二分から三分の減少で、一番大なる減少率は五分から六分のものであつた。又夏期戸隱山に於ける檢査では三十四名中增加せるもの四名、然も一分以下の增加が一番多く、最高增加率とても二分乃至三分の間のものであり、減少の方でも一分以下の減少が最も多く、最高率は五六分の間にあるものであつた。又第四回冬期興津での實驗にては增加せるもの一名もなく、增減なきもの一名、他は皆減少であつたが、二分から三分迄の減少率のものが一番多く、最高率は八分から九分の間のものであつた。元來禊の時の樣な著しく減食したる狀態にて、日々可なりの筋肉働作（神前に於ける經典の音讀及振魂乃至坂道の駈歩の如し）を行ふ外に水浴によつて多量の體溫を失ふ場合には、是非とも身體の物質が分解して體重が減少せねばならぬ。然るに少數ながら却て體重の增加する者がある理由は、排泄物の蓄積によらねばならぬ。私は主に水分の體內蓄積が其原因であると信ずる。實際禊の經過中に下肢に浮腫を起して來たものを多數に認めた。

第二に脈搏は禊の日を經るに從ひ漸次に減少して來

るのが常である。其減少率は御嶽山の禊の場合には第六日の平均脈數は第一日の平均脈數より十五・五少く、片瀨の禊にては平均十一を減じ、戸隱山の禊にては平均六・三を減じ、興津の禊にては平均六を減じた。此脈數減少は一般飢餓の經過中に起るものと同樣である。呼吸數も少しく減少する傾向である。御嶽山の場合には平均四・五を減じ、片瀨の禊にては四・三を減じ、戸隱山の禊にては一・一を減じ、興津の禊にては平均僅に〇・六の減少であつた。

　體溫は今迄測定した數が餘り多くはないが、平日と變りがない。內には毎日規則正しく〇・一度宛を減じた人もあつたが、平均數の上では禊第二日と第五日との間に認むべき差異がなかつた。是れも一般飢餓の場合に見る現象に一致するのである。健康なる大人が普通の仕事をしてゐる場合に廿四時間中に失ふ全「エネルギー」は、之れを溫量で表すと略二千四百「カロリー」であるが、此量の略八割は身體の表面から溫熱として失ふ量である。身體の表面から失ふ溫熱の量は身體の皮膚の溫度と皮膚に觸るゝ物の溫度との差に正比例するものであるから、今禊の間に體溫が平日と變りがない事は、身體の失ふ溫熱の量が平日と變りがない事を察するに足るのである。況んや冬期の禊に於ける樣に一日二回も海水に浴する事は非常なる體溫の消耗を來すのであるから、此場合には却て平日よりも溫熱即ち「エネルギー」を失ふ事が增加してゐるのである。然るに猶平日に異ならざる體溫を維持してゐるのであるから、體內では平日以上に燃料に相當する體內の有機成分を酸化即ち燃燒（焔は發しないが）しなければならぬ。其結果上揭の體重の減少となり、（體重の增したものは酸化の際に出來た水分が充分に排泄されずに體內に殘てゐる爲である）又後に述ぶる樣に體內の蛋白質分解が割合に多い事實となつて現はれてゐる。

　又身體內に於ける新陳代謝に及す影響は、身體より排泄さるゝ物を、分析して見るに由て推察する事が出來る。吾々の實驗にては冬期片瀨と興津とに於ける二回の禊にて稍精確に尿中の種々なる成分を分析して見

た。其詳細は寧ろ專門の事項に屬するから是れを省略し、其內最も重要視すべき體內の蛋白質の分解の有樣だけを述べよう。

蛋白質は身體の生活物質を造てゐる主要成分であつて、日々必ず一定量の分解があり、從て日々一定量の蛋白を食せなければ遂には體內の蛋白質が無くなる譯である。そこで體內の蛋白質が減らない樣にするには、少くとも一日中に身體內で分解する丈けの蛋白質を一日中に食はねばならぬ次第である。扨て體內で分解する蛋白質の量は一日の尿中に排泄される窒素の量を測り、之に六・二五を乘けると其日體內で分解した蛋白質の量を知る事が出來る。故に尿中の窒素の量は體內で分解した蛋白質の量を知る標準になる。

扨て大人が食事をしてゐる場合には、食中の蛋白質が多ければ體內に於ける蛋白質の分解も多くなつて平衡の狀を保ち、食中の蛋白質の量が少ければ體內の分解も少くなつて平衡を保つに至るものであるが、食中の蛋白質の量が餘り少くなると遂に平均を保つ事が出來ないで、食するよりも體內で分解する量が多くなる。此蛋白質の出入の平衡を保ち得る最小限の蛋白量は、體重一瓩に就き一日〇・七五瓦、之れを窒素の量で測ると〇・一二瓦となる。日本人の平均體重を五二瓩とすれば、一日四九瓦の蛋白質を含んだ食物を（外に澱粉と脂肪とは充分な分量に含んで居らねばならぬ）食すれば、身體の蛋白質平衡の狀を作る事が出來る。

元に歸て祕の場合に體內で分解する蛋白質の量は如何程であるかと云ふに、食事をしてゐる場合に蛋白質の平衡を保ち得る最小量よりも遙に多いのである。例へば與津に於ける某氏の一例を取て日々體內より排泄した窒素の體重一瓩に當る量を擧げると、祕第一日〇・一六第三日〇・二一第四日〇・三九第五日〇・一九第六日〇・一五と云ふ數で、第二日と第六日の量は稍蛋白需要の最小量に近いが、其餘の日にては著しく其量よりも多い。言葉を換へて云へば、割合に多量の蛋白質が日々體內で分解した事を示すのである。又體內の活動の標準となると稱せらるる「クレアチニン」係數（尿

中に排泄される「クレアチニン」內の窒素の瓩量を體重の瓩量で除つた數を云ふ)は、禊の間には一般に減少してシャッフェル氏の所謂正規の量と見做すべき範圍の下に降る日が少くない。然し實際の筋力を多くの人に就て腕力計にて測つて見た成績では、筋力には變化のない場合と、却て增した場合とあつた。兎に角禊中最も顯著なる事實は體內の蛋白質が割合に多量に分解する事である。

以上の樣な影響を肉體に及す禊が、健康上に如何なる利害があるかは、輕々に決する事は出來ないが、健康なるものでは禊の行位は、格別身體に危害がないのみならず、一時的の飢餓は却て身體の組織細胞の補充機能を高めて、飢餓の後には飢餓前以上の身體を造り上げると云ふ事も考へられる。唯發育能力の旺盛である少年には、一時たりとも之れを飢餓に陷るゝ事は無理である外に、之れを下級の動物に就ての例で見ると、生殖機能發達以前のものを飢へしめると、生殖機能の發達を促す。若し同じ事が人間にもあるとすれば、餘り面白い影響とは云へぬ。唯年齡が四十歲を越へて漸く身體の機能が衰へ始めてる人には、斯る一時的の飢餓によつて、再生機能を挑發せしめるのはよいと思ふ。最も懸念に堪へぬは一時的なりとも榮養の衰へたるに乘じて、潛在病根の頓に勢力を得て來る事がありはせぬかと云ふ事である。故に斯る行をせんと欲する人は、豫め嚴密なる身體檢査を受けた後に於てするのが最も安全な方法と思ふ。

飽迄も注意すべき事は、單に主觀的の材料のみを以て判斷し、身體の體質、年齡等の異つてゐる他人の事を推測するは誠に危險なことである。況んや二三日の經驗を以て平常の生活法に迄推し及ばさんとするが如きは、無法の甚だしいものと云はねばならぬ。

知名の兄弟を産んだ父母の研究(二) 其遺傳的方面と教育的方面

(一)有島兄弟

文學者有島武郎
畫家有島生馬
文學者里見弴

▽私の父と母

有島武郎

私の家は代々薩摩の國に住んで居たので、父は他の血を混じへない純粹の薩摩人と云つて可い。私の眼から見ると、父の性格は非常に眞正直な、又細心な或る意味の執拗な性質を有つて居た。そして外面的には隨分冷淡に見える場合が無いではなかつたが、内部には恐ろしい熱情を有つた男であつた。此の點は純粹の九州人に獨特な處である。一時に或る事に自分の注意を集中した場合に、殆んど寢食を忘れて終ふ。國事にでも或は自分の仕事にでも、熱中すると、人と話をしてゐながら相手の言ふ事が聞き取れない程他を顧みないので、狂人のやうな狀態に陷つた事は、私の知つて居るだけでも、少くとも三度はあつた。

父の教育から云へば、父の若い時代としては新らしい教育を受けた方だが、其の根柢をなしてゐるものは、矢張り朱子學派の儒學であつて、其の影響からは終生脫する事が出來なかつた。然し何所か獨自な所が有つて、平生の話の中にも、其の着想の獨創的なのに、我々は手を拍つて驚く事がよくあつた。晩年にはよく父は『自分が哲學を、自分の進むべき路として撰んで居つたなら、屹度纏つた仕事をしてゐたらう』と言つてゐた。健康は少い時分には大變弱い子で、これで育つだらうかと心配されたさうだが、私の知つてからは强壯で、身體こそ小さかつたが、精力の强い、仕事の能く續けて出來る體格であつた。仕事に表はす精力は、我々子供達を驚かす事が屢々あつた位である。藝術に對しては特に沒頭したものが無かつたので、鑑識力も發達してはゐなかつたが、見當違ひの批評などをする時でも、父其人でなければ言はれないやうな表現や言葉使ひをした。父は私達が藝術に携はる事は極端に嫌つて、殊に輕文學は極端に排斥した。私達は父の目を掠めてそれを味はなければならなかつたのを記憶する。

父の生ひ立ちは非常に不幸であつた。父の父、即ち私達の祖父に當る人は、薩摩の中の小藩の士で、島津家から見れば陪臣であつたが、其の小藩に起つたお家騷動に捲き込まれて、琉球の或る所へ遠島された。そ

れが父の七歳の時位で、それから十五か十六位までは祖父の撫育に人となつた。從て少い時から孤獨で（父は其上一人子であつた。）獨りで立つて行かなければならなかつたのと、父其人が餘り正直である爲め、屢々人の欺くところとなつた苦い經驗があるのとで、人に欺かれない爲めに、人に對して寛容でない、偏狹な所があつた。之れは境遇と性質とから來て居るので、晩年には追々練れて廣い襟懷を示すようになつた。殊に面白がつたり喜んだりする時には、私達が「父の笑」と云つてゐる、非常に無邪氣な善良な笑ひ方をした。性質の純な處が、外面的の修養などが剝れて現はれたものである。

母の父は南部即ち盛岡藩の江戸留守居役で、母は九州の血を持つた人であつた。其間に生まれた母であるから、國籍は北にあつても、南方の血が多かつた。維新の際南部藩が朝敵に廻つた爲め、母は十二三から流離の苦を嘗めて、結婚前には東京でお針の賃仕事をしてゐたと云ふ事である。かうして若い時から世の辛酸を嘗め竭くした爲めか、母の氣性には濶達な方面と共に、人を呑んでかゝるような鋭い所がある。人の妻となつてからは、當時の女庭訓的な思想の爲めに、在來の家庭的な、所謂ハウスワイフと云ふやうな型に入らうと努め、又入りおほせた。然し性質の根柢に有る烈しいものが、間々現はれた。若い時には極度に苦んだり悲しんだりすると、往々卒倒して感覺を失ふことがあつた。其の發作は劇しいもので、男が二三人も懸らなければ取扱はれない程であつた。私達はよく母が此儘死んでしまふのではないかと思つたものである。然し生來の烈しい氣性の爲めか、此の發作がヒステリーに變つて、泣き崩れて理性を失ふといふやうな處は無かつた。父が自分の仕事や家の事などで心配したり當惑したりするやうな場合に、母がそれを勵まし助けた事が屢々あつた。後に母の母が同棲するやうに成つてからは、其の感化に依つて淨土眞宗に入つて信仰が定まると、外觀が一變して我意の無い思切りのいゝ、平靜な生活を始めるやうになつた。そして癲癇のやうな烈しい發作は現はれなくなつた。若し母が昔の女の道德に囚はれないで、眞の性質のまゝで進んで行つたならば、必ず特異な性格となつて世の中に著はれたらうと思ふ。

母の藝術上の趣味は、自分でも短歌を作る位の事はする程で、可成豐かに有つて居る。今でも時々やつて居るが、若い時には殊に好んで腰折れを詠んで自ら娯んでゐた。讀書も好きであるが、之れはハウスワイフと云ふ事に制せられて、思ふ儘にやらなかつたやうであるが、然し暇があれば喜んで書物を手にする。私共兄弟が揃つてかういふ方面に向つた事を考へると、母が文藝に一つの好愛心を有つてゐた事が影響してゐるだらうと思ふ。

母に就ても一つ云ふべきは、想像力とも思はれるものが非常に豐かで、奇體に無い事を有るやうに考へる癖がある。例へば人の噂などをする場合にも、實際は無い事を、自分では全く有るとの確信を以て、見るが如く精細に話して、時々は驚くやうな嘘を吐く事が母によくある。尤も母自身は嘘を吐いてゐるとは思はず、慥かに見たり聞いたりしたと確信し

てゐるのである。

要するに、根底に於て父は感情的であり、母は理性的であるように想ふ私達の性格は兩親から承け繼いだ冷靜な北方の血と、ワリに濃い南方の血とが混り合つて出來てゐる。其の混り具合に依つて、兄弟の性格が各自異つてゐるのだと思ふ。私自身の性格から云へば、固より南方の血を認めない譯には行かないが、ワリに北方の血を濃く承けてゐると思ふ。何方かと云へば内氣な、鈍重な、感情を表面に表はす事を餘りしない、思想の上でも飛躍的な思想を表はさない性質で、色彩にすれば暗い色彩であると考へて居る。從て境遇に反應して咄嗟に動く事が出來ない。時々私は思ひもよないような事をするが、それは咄嗟の出來事ではない。私なりに永く考へた後にする事だ。唯それを奬め相談しないだけの事だ。かういふ性質を有つて、私の家のやうな家に長男に生れた私だから、自分の志す道にも飛躍的に入れず、から遲れたのであらうと思ふ。

父は長男たる私に對しては、殊に峻酷な敎育をした。少い時から父の前で膝を崩す事は許されなかつた。朝は冬でも日の明け〳〵に起されて、庭に出て立木打ちをやらされたり、馬に乘せられたりした。母からは學校から歸ると論語とか孝經とかを讀ませられたのである。一向意味も判らず、素讀するのであるが、よく母から鋭く叱られてメソ〳〵泣いた事を記憶して居る。父は然しこれからの人間は外國人を相手にするのであるから外國語の必要が有ると云ふので、私は六つ七つの時から外國人と一所に居て、學校も外國人の學校に入つた。それが爲めに小學校に入つた時には、日本の方が遲れてゐるので、速成の學校に通つた。

少い時には芝居その外の諸興行物に出入する事は殆んど無かつたと云つて可い位で、今の普通の家庭では想像も出來ない程頑固であつた。男が妄りに笑つたり、口を利くものではないと云ふ事が、父の敎へた處世道德の一つだつた。尤も父は私の弟以下には餘り烈しい、スパルタ風の敎育はしなかつた。

父も若い時はその社交界の習慣に從つて隨分大酒家であつた。然し何時頃からか禁酒同樣になつて、僅かに藥代りの晩酌をする位に止まつた。酒に醉つた時の父は非常に面白く、無邪氣になつて、まるで年寄つ子供のやうであつた。其の無邪氣さ可減には誰でも吹き出さずには居られなかつた。

父の道樂と云へば謠位であつた。謠は隨分長い間やつてゐたが、そのワリに一向進歩しないやうであつた。一體私の家は音樂に對する趣味は貧弱で、私なども聽く事は好きであるが、それに十分の理解を持ち得ないのは、一生の大損失だと思つてゐる。

▽兩親に對する感想

有馬生馬

一昨年の十一月亡くなつた私の父は正直で頑固で負ず嫌ひで、寧ろ狹量

で技術上の下で働いた人だつたと思ひます。父の同僚にそれぞれ伯爵とか子爵とかになつてゐる人々ですが、父はその晩年を會社の一重役位で別に不平も漏さず暮してゐました。然し壯年時代は俗吏でありながら一種の氣骨と見識とを失はないで、自分の職責以外にも様々な憂國的な理想を懷いてゐたやうです。從つてその成就した仕事にもどこか非凡でない處がありました。一例を擧げれば明治二十年頃既に、二十世紀は鐵の世界であるといふ持論から、盛んに製鐵事業の必要を説き、「鐵論」などいふ小冊子を印刷して配布したり、諸有力者を説き廻つたりしても一向耳を傾ける人がゐなかつたのみならず、知人間に「鐵狂」といふ有難い字名などを頂いてゐた相です。然しその熱心が遂に故後藤伯を動かし、やつと今日の枝光製鐵場の基礎が置かれる事になつたので、敷地なども專門の技術家と父とが一緒に行つてみて選定したものだ相です。今日になつて見ると其見識は時流を拔いてゐたものと思はれます。當時父は大藏省の一俗吏でありながら、農商務省所屬のこの事業を斷行した所などを見れば、變つてゐたに違ひないのです。「俺はこの事業をし遂げて政府からたつた五十圓の手當を貰つた丈けであるが、國家がそれに由つて利益した所はどの位か分らない。」酒の上などでこんな怪氣焰を聞いた事がありました。

實業界に身を投じてからも死ぬ日まで時代遲れな憂國といふ古武士のやうな氣風を革めませんでした。當然骨董いぢりなどはまるでしませんでした。「玩物喪志」といふのがその主義で、殺風景で、極めて儉約家でした。然し字は見るのも書くのも好きなやうでした。

そんな風に頑固でしたから私共[illegible]したこの[illegible]した事も屢々あります。酷い時は互に一月も口を利かずにゐた事がありました。此時代には色々な事情で二人の間に誤解もあり、中に這入つて中傷する者などもあつたのです。私には始終よく其間の消息が解つてゐましたが、苟も父たるものが、第三者の中傷に乘るなんといふ事は馬鹿々々しいと思つてゐたので、裏表の事をひつくるめて其儘正面から父と衝突してゐました。然しその頃はもう七十近くなつてゐたのでいつも父の方から折れて出ました。此三四年は時に理解し合つて、二人の間は全く平和でした。父は私が「父であるからといふ理由」では決して盲從しない人間である事を認め初めました。私は多くの點で父が寧ろ好きでした。殊に少しもセンティメンタルでない事と僞善的でない事と、それで心の奧に涙のある人だつた事が好きでした。父の死は密かに豫想してゐたよりも幾倍も私を悲しませ、寂しく感じさせてゐます。あれほど正直な人間は亦とありませんから。女に對しては特別な誘惑を感ずる弱い人のやうでした。然し幸ひそれがため家庭を破壞して終ふほどの禍は一度も起りませんでした。之は多少母の因襲的道德觀のお蔭もあつたらうと思ひます。自信は極めて強い方でしたが、思想は寧ろ懷疑的でした。一生を支配した經典は論語でしたが、本質は大乘佛教的な色彩を帶びてゐました。道德的といふより良心的、倫理的といふより本能的でした。

兩親はよく他に向つて「私共は子供に對して放任主義である」といふやうな事を話してゐましたが、それを聞く度私に少し片腹痛く感じさ

た。兩親の放任主義は、主義があつての主義とは見えなかつたからで、寧ろ止むを得ない自然の結果に過ぎないやうに思つたからです。實際父は私共の子供時代には外の事に多忙で内の事などは全く念頭に置かなかつたといふのが眞實の所と思ひます。少し餘裕が出來て内を顧みやうとする頃には私共は兩親から束縛的に教育して貰ふやうな氣はしませんでした。全く私共兄弟はこの放任主義を極度に善惡兩方面に利用したといふ事が言へると思ひます。

從つて私が父を德としてゐる事は、曾つて一度でも、自分達の生涯の目的や、事業に容喙しなかつた一事です。世間にはよく自己の名譽心や、利己的な打算から子供達の榮達富貴を無闇と希ふ兩親の淺間しい教訓や鞭打を見かけますが、父は決してそれをしませんでした。「人といふものは誰れでも天命以上を望む事は出來ないものである。」といふのが其安心立命でした。各人皆その天命と責任を負つてゐる、親と雖もそれに就いては何んにも云ふべき權利はない。さうこそ口に出しては言ひませんでしたが、その行つた所を今になつて考へてみると、さう云ふ結果になつてゐます。

もし父に子孫のために謀る執念がもつと深かつたらきつと私共をして無理にも官吏か實業家にしやうとしたでせう。さうすればその一生の仕事の餘澤を私共が被る事は必ずしもむづかしい事ではなかつたのです。然るに父は一度でもそんな卑劣な考を夢みませんでした。之等も父の貴い性格の一つでした。

然らば父は吾々の仕事をどう見てゐたかと云ふと、一寸返答に窮します。要するに何んにも言ひませんでした。嬉しくも、悲しくもないやうでした。自分丈けの事には非常に執着心が强い人でありながら、子供自身に就いては立入つて考へるやうな事もせず、案外淡如としてゐたやうです。

母は目の前に生きてゐますから何んにも言ひたくありません。唯吾々の仕事には何んの理解も同情もない事は確かです。吾々が世間の交際も碌にせず、青くなつて徹夜なんかするのを見るのが大分厭なやうです。之は母として、女として尤も千萬です。客が見えたりすると、きつといつもその話をして「私はもう厭で厭で」なんかと云つてゐるのを聞きます。私もなまじつか同情してくれたり、理解してくれたり、干渉したり、提灯持したりする母親より、その方がましだ位に思つてゐます。人工的粗製亂造の良妻賢母は眞平御免です。

▽父と母から私の享けた性情

里　見　弴

創作のなかで兩親をモデルとして或る人格を描くことはあるだらうが、いま玆では然し、そのことをしやうとは思はない。父、或は父系から享けたと思つてゐる自分の素質的な性情と、母、或は母系からのそれと

を次に列擧して見る。斷るまでもないが、父の方で擧げるものを母が全然有たないのでもなく、母の方に擧げてあるものにも(父の性質を云ふ場合には)父の特質の一つとして數へなければならないものもあるわけだ。唯これは、私と云ふ四男坊のなかにある種々の性分を、自分勝手な考へ方で、父と母とに分けて源づけたに過ぎない。こゝに擧げてないもので父母の有つてゐるものも勿論ある。尙また次に列擧された性情だけが、私の全體ではない。そこに惡いものが擧げてないのは、强ち私の虛榮心のみがさせた業ではない。要するに、茲では總べて私の裡に現はれた父母を云ひ現はすので、直接父母を云ひ現す場合には、自らまた違つて來るだらう。

父或は父系より、——直情。謹厚。廉潔。意力を尊ぶの念(意力そのものと云ふよりも)。愛憐。偏一。懷疑。獨創。細心。執强。粘着。彈力。精神性。現實性。平民性。田舍性。、

母或は母系より、——怜悧。自尊。意力(常に「一念」と云ふ言を云つた祖母に殊に負ふ所が多い)。忍辱。複雜。獨善。攝取。放膽。器用。洗練。洒脫。技巧性。空想性。貴族性。都會性。

——然し總ての言葉が陰陽(かげひなた)を有つ。(對語を有つと云ふ意味ではない。)かう書いて來ると私と云ふものが大變立派なものになつて了ふが、以上の性情を裏がへして、總て陰(かげ)の意味で採られても、私一個としては少しも差支ない。唯その筆法を以て、直ちに兩親の性情にまでも測られては私として少々困る。

以下談話を筆記して貰ふことにする。

父は生涯隨分忙しい人であつたのと、一つには自由な考を持つて居たから、極端と云つても可い程無干涉主義であつた。母は子供の敎育に就てはなか〳〵意見もあり、又興味を有つてゐる方であつたが、矢張り忙がしかつた爲め、私の育つ時分にはさう一々矢釜しく云ふ方でもなかつた。志望なども此方で定めたものに對して、一應は意見を述べても、斷然いかんと云ふやうなことを云はれることはなかつた。父には『自分の事は自分でする』と云ふ考が强かつた。極端な、少し滑稽な例を云ふと、自分の心懸けを良くしさへすれば決して病氣などをするものではないと云つてゐた。だから病氣をすると機嫌がよくなかつた。其の當時には、どうも病氣をして怒られるのは甚だ譯が分らない、かう云ふ時には慰めたりして貰ひ度いものだと大分不平だつたが、今から考へて見ると、さう云ふ事も大變面白い。それ程意力と云ふものを信じて居て、子供達にもそれを各自の中に確立させやうとしてゐた心持が分るやうな氣がする。『病氣をすれば醫者の食ひ物、喧嘩をすれば辯護士の食ひ物、死ねば坊主の食ひ物』とよく云つてゐたが、それは唯其の爲めに失はれる金錢のことのみを云つたのではなく、金錢以外に失はれて行くものの意味が、私にも少し分つて來たやうに思はれる。

父はわりにいろ〳〵な事をやつた人であつた。若い時分には馬に乘るとか、大弓を引くとか、或は鼓もやつたやうである。年を取つてからは

玉突と謠、能樂を觀る位であつたが、決して道樂の無かつた人ではない。けれどもいつでもそれに溺するのを見た事はない。負け嫌ひであつた所爲か、碁、將棊、加留多などは絕對にやらなかつた。若い時分に十市王洋と云ふ南畫家に就いて畫を少し許り稽古した事もある。併しさう云ふ藝術的な方面は得手の方ではなかつた。それでも晩年に、生馬兄からいろ〳〵話を聞いた爲めに、西洋風の美術も少しは解るやうになつて來た。すると自分流儀で、かうといふ意見を直ぐ立てゝゐた。ロダンの彫刻を『白樺』に送つて寄した時などは、觀て非常に感心して居た。文學の方面は誰も傍で話す人も無かつた爲めか、とうたう能く解らなかつたやうだ。病氣の時などに、夏目さんの『猫』を讀んで聽かせても、それ程面白がらなかつた。やつぱり伊藤痴遊の『西郷隆盛』だとか、講談本の『柔の平内』などを讀むと、その方を面白がつて居た。母の方は餘程藝術がかつた方面に嗜好を有つて居る。自分でも忙がしい中で歌をよく詠んだり、少し閑暇でもあれば、例へば父が病後轉地をするやうな場合には旅日記のやうなものを綴つて見たりした事もある。子供達の教育の爲めを思つたりするので餘り娛樂の場所へは行かなかつたが、芝居や淨瑠璃なども嫌ひではないらしい。感じる方だから『芝居は泣かされるので閉口だ』と云つて居るが、能には父と一緒によく出かけた。一切批評はしないけれども、(或はさせないけれども)私達の書いたものでも、本にでもなると晩殆んど寐ない位の勢で熱心に讀んでゐるやうだ。

私達兄弟は仲が良いと云ふので評判のやうだ。それに間違ひはない。が然し、何事か有るやうな場合には、協力同心して事に當るけれども、平生を云ふとかなり個人主義的にやつて居るのだ。四男である私の立場から云つても、「兄貴は兄貴、俺は俺」と云ふ樣な心持でゐる。兄達も其の心持をよく容れてくれて、チョク〳〵世の中で見るやうに「兄貴」を振廻すやうな事は決してない、だから見方によつては水臭いやうな風にも見える場合も無いではなからうと思ふ。けれども私の考では、其の爲めに宅の兄弟は能く御互に解り合つて、心持の好い關係に結ばれて居るのだと思ふ。それに長兄は、私から云ふのは可笑しいが、大變立派な人なので、兄弟達の關係が其處で扇の要のやうにキッチリ締つて居るやうな心强さを感じる。

(二) 長與兄弟

醫學博士 長與又郎
文學者 長與善郎

▽私の父と母

醫學博士 長與又郎

長與家は元來武家であつたが、今から六七代前から醫者となつた。それは何ういふ動機であつたか知らないが、兎に角それから兄稱吉に至るまで醫者を業として來たのである。

我々の多少知つて居るのは、俊民といふ人の代からである。それから

俊達、仲庵、東齋といふやうになつて居る。初めは漢法醫であつたが、俊達の時から『醫學は洋法でなければならぬ』といふ事に氣がついて、はじめて九州肥前の大村藩で洋法の醫學(蘭法醫)を攻究し始めたのであつた。洋法の種痘法なども此人が初めて大村藩で用ゐたものである。

私共の祖父に當る仲庵といふ人は、俊達の養子であつて非常に學才があつた。故に、息子ではあるけれども、俊達は之を一學友として共々研究したのであつた。此當時の事であるから『洋學は怪しい邪法だ』といふので、周圍から隨分と迫害を受けた。然し父子二人は少しも退かず、窮すれば窮する程固い決心を以て力を協せて勉勵した。家の諸道具などは悉く賣り飛ばして、所謂門前常に雀羅を張るといふ有様であつた。羽織など一枚しかなかつたので、外出の時は父子代りがはり着て行つたといふ事である。斯樣に一時は非常な苦痛であつたけれども、或時藩主が狩に行つて負傷をされ、それが化膿して大熱を起された場合、漢法では何うしても治らなかつたのを洋法で治療して以來、洋法の功能を認められ、其以後は順境に復した。

祖父仲庵は父東齋が三歳の時死んだので、東齋は俊達と其娘即ち仲庵の妻とで教育したのであつた。曾祖父の俊達といふ人は、非常に氣の勝つた勤勉努力の人であつた。

父東齋は十六歳の時大阪に遊學して、蘭學の大家緒方洪庵の門に入つた。福澤諭吉、大鳥圭介、本野盛亨など同門であつた。茲に學ぶ事四五年にして大村に歸り、一時長崎へも行つて居つた。後東京に出て來て公務に關はり、岩倉大使の行に加つてはじめて洋行した。此行で父の得たところは『歐米の醫學は個人々々の病を治療する他に、國家的に大きな組織があつて、國民全體に亙る疾病の豫防、健康の増進を主宰する行政上の制度がある。自分は普通の醫者になるよりも此國民的醫學を我國に興さう』といふ事であつた。歸朝後官に就いて此目的を貫徹せんが爲に終始したのである。

父は曾祖父俊達の嚴格な父同時に、祖母の寛嚴宜しきを得た教育を受け、曾祖父と祖父の思想の感化として『歐米の學問は偉い』といふ事を子供の時から頭の中に確かりと入れられて居つた。父が我々子供達を育てるに當つては嚴格であつた。子供に惡い事か過ちがあると、隨分酷く呵責したものである。然し嚴格と言つても其反面に於ては寛大なところと優しい所とがあつた。父の若い元氣のよかつた時程嚴しかつたが、歳を取るに從つて優しい方に傾き、家庭内の團欒を以て子供を教育するといふ風であつた。世間で何の方面の事でもよい、何か變つた事かエライ事でもあると、子供を一室に集めて其有様を詳しく說き聞かし、又之に對する父の批評觀察などを加へて話した事もある。晩年には兎角身體が弱くなつたので、子供の教育は母に一任して居つたやうである。夫でも我々には時により折にふれて、主義の下に行動する事と意志を強固に持つて眞面目に奮發する事の要を說いて居た。

母は本年七十歳になる。大村藩の武家の出で、寧ろ父以上の努力家で

ある。強い氣象と熱い情義とを兼ね持つて居る。父は前いふ通り晩年になつて子供の教育を母に一任したから、上の方の子供と下の方の子供とは其教育法が違つて居る事になる。然し父の教育の主義は『子供を教育する前に其母親を教育する』といふのであつたから教育の主義としては一貫して居つた。

▽僕の父母

長與善郎

僕の家は代々學者で、母の方は武家であつた。父親(專齋)は矢張り蘭法醫として立つたが、後には內務省などへ務めて居つた。政治的の方面については相當の興味を有つて居つたやうであるが、晩年には自分で活動するといふやうな事はなく、始終家の中で何かして居るといふ風であつた。身體が虛弱だつたので、家の中で靜かに本を讀んだり、詩を作つたりして居つた。

僕は八人兄弟であつたが、其の中二人死んだ。兄弟それ〴〵方面が違つて居る。法科を出て鐵道院へ出て居るのもあれば、實業に從事して居るのもある。家業に最も近い病理學を遣つて居るのもあれば、一番末つ子の僕のやうに文學を遣つて居るのもある。

親父は何方かと言へば、寂寞家だ。恬淡と云つたやうな、人から君子と云はれる人間であつたが、性格は中々狷介で、恐ろしく我儘で、氣位の高い氣六ケしやであつた。交際とか、世間的な俗事には冷淡な質だつた。母は父と違つて萬事エネルギツシユで、執拗な熱情を持つてゐる。兩方共人の下に立つ事の出來ない專制的な性格を持つてゐる處が共通してゐる。我々は兩親から此の入り混つた性質を受繼いで居る譯だ。

僕の家は詰り元來は醫者であるから、僕なんかも醫學を遣る事を勸められたが、然し文學を遣る事になつた。兄弟の中にも似た者もあるが、全然違つた性質を有つて居る者もある。しかし吾々の家族から一人位文學を遣る者の出た事も別に不思議な現象ではない。

兄弟皆其の方面は違ふが、夫々相當に發展して居る。我々兄弟は親に似てみんな敗けん氣が強い。

子供の教育には十分注意されたものだ。僕達が生れた時は、親父が恰度西洋から歸つた時で、餘程西洋文明に感服して居た時なので、一切西洋風であつた。洋館に住ひ、洋服を着て、ベツドに寢るといふ風であつた。其の時分は家の經濟の都合もわりによかつたのか、廣い邸に住んで居つた。兄弟が多いから、子供の娛樂は一切外よりも家の中で求めるといふ風に育てられた。子供の居間には、周圍の壁に色々の動物や植物の繪などが掲げてあつた。外で色々の面白い物を求めると、それからそれと次第に誘惑が生じて、惡い影響があるが、家庭の中に兩親兄弟姉妹の間の平和で自然な樂しみを求めるといふことであれば、さういふ恐れはないと云ふのだ。此の我々の教育法は確かに失敗はしなかつた。少なく

も自分と云ふ人間の從全作は此幼少時代の幸福な家庭の中に育てられたものである。

親父は寛大といふよりも嚴しい方であつた。僕の兩親には此の「寛容」といふ性質は欠けてゐた。從つて自由主義は僕の家には見出せなかつたが、僕丈けは末つ子で、小さい時は身體が非常に虚弱だつたから、上の兄弟達程には嚴格な躾を受けず、特別にあやまかされて我儘者に育てられた。

僕が文學者になるといふ事は、親父はよくも知らずに死んだ。親父は芝居が非常に好きであつた。團十郎なぞがよく批評を乞ひに來て居つたやうだ。

それでも僕の家も決して無事息災に平和にばかり來たのではない。僕が少し大きくなるに從つて姉が海で死んだ事から始まつていろ〳〵な不幸や面倒な事も相當にあつたのだ。

よく子供を連れて、田舍の遠い地方へ旅行したものだ。我々は子供の時分から、所謂自然の風物に接する機會が多く與へられた。此事が子供の教育に大なる關係を有つた。

親父は頭のいゝ、見識の高い人間として一般から認められ、尊敬されてゐた。隨分世間での勢力家も親父には一目を置いてゐたらしい。行政的な仕事など、周圍の者の相談に乘つて遣つて、指圖をするといふ風であつたが、事業を完成する名譽は皆人に讓つて何んとも思はなかつた。晩年になつてから「松香私志」といふ本を書いた。自敍傳のやうな物である。之れには自分のした仕事や、洋學が日本へ入つて來た時の狀態などが詳しく書いてある。漢文もなか〳〵造詣が深かつた。

親父は仲庵といふて居つたが、あんまり無理に勉強した爲めに腦を傷つて三十三歳で若死をした。學問は馬鹿によく出來たらしい。祖母は男性的の質で、非常に上手に親父を教育した。

母はもう七十になるが、弱いくせにねばり強い。母はよく永い艱難に堪えた。金に困つた時も其の間に立つて一人苦勞を背負つた者は母であつた。多勢の子供が兎も角皆よく育つたのは母の丹念に依ると云つてもいゝ。卅になる僕が一番末つ子で上が七人ゐたのだから孫まで寄せると大變な人數である。我々はよく母の處で落ち合ふ。母が死んだら淋しくなる事と思ふ。

(二) 長田兄弟

文學者 長田秀雄
文學者 長田幹彦

▽祖父の血が蘇生つたのだ

長田秀雄

古い事はよく分らないが、私の家の系圖を開いてみると、私の祖先は征西將軍懷良親王に從つて、その時分鎭西の地にあつて、南朝のために氣を吐いてゐた菊池の一族を頼んで京都から西に降つた南朝の遺臣で

つたらしい。舊記によれば、長田式部少輔基秀と云ふ人が菊池重朝公嘉吉年中の侍附にある。この人は連歌をよくしたさうである。

それからづつと降つて、長田三太夫と云ふ人が、阿蘇大宮司の家臣になつてゐたが、どう云ふ譯か、私どもの故郷たる熊本縣菊池郡に來て土着してしまつた。その四代目の子孫が吹擧されて佐々成政に仕へ、後に加藤有馬作に仕へて廣瀬と云ふ所の地頭職になつたさうである。

その子孫が代々菊池郡の今村と云ふ所の庄屋を勤めて祖父の代にいたつた。祖父は長田穂積直行と稱し、通稱を長左衞門と呼んだ。國學和歌を好んで、中島廣定翁の弟子であつた。隈府町庄屋を勤め、後に菊池神社の祠官に補せられた。その七子が私の父である。

父が生れたときは、もう私の家は降坂になつてゐた。丁度安政の末である。全國には攘夷倒幕の議論が喧しくて、王政維新の大業がまさに起らんとしてゐる内外ともに多事な秋であつた。國學を修め和歌を好んだ私の祖父は無論勤王黨であつた。私の父が幼心に記えてゐる處によれば、平野國臣が、時々私かに祖父を訪ねて來て、夜遲くまで、社殿で秘密會議を開いた事があつたさうである。父は赤貧の内に人となつた。早く醫學を志して、熊本市に出て、醫家に寄食してゐた。明治十年の役の時は、私の父は十九歳であつた。その頃寺を病院にしてあつたところに寄生をしてゐた父は、ある夕方食事中に、賊の一隊に襲はれて、故もなく縛られてしまつた。兵古帶をしめ、頭髪を分けて居た者は、頑固な舊士族や、薩摩の兵士たちには、皆官軍に使はれてゐる人間と見えたのである。その寺にも官軍の負傷者を隱してゐるだらうと云ふ嫌疑がかゝたのであつた。

賊營に曳かれて路傍に一日つながれてゐた父は、確に官軍・關係のない者であると云ふ保證人さへあれば許されると云ふ事になつた。夕方になりて、幸にも、そこを通りかゝつた一人の知人があつた。その人の證言によつて、父は危うき命を全うしたのであつた。

祖父が死んだ。父は祖母一人を殘して東京に遊學した。もとより金のあらう筈のない父は、親戚や同郷の人々の補助によつて、大學の別科を卒業する事が出來た。母は父の從妹であつた。

私が生れたのは神田神保町ださうである。明治十八年五月十三日である。私は父母の最初の子であつた。私は神田を通るたびに何の邊で生れたかを知りたいと思ふが、もうあのあたりはすつかり變つてしまつて、私の出生當時の家はどうしても見付らない。次に幹彥が生れた。私が幼時の事を記憶してゐるのは、憲法發布時代からの事である。何でも窓のやうな處から、憲法發布の御祭騷ぎを見たかすかな記憶が殘つてゐる、そのとき大きな家の造り物が、人に曳かれて前の道路をゆるゆると通つて行つた……

私と弟とはよく喧嘩をした。

幼稚園から富士見小學校の尋常科の四年まで行つて、私は當時一つ橋にあつた高等師範の附屬小學校に轉校した。

私は大へん臆病な子であつたやうに思ふ。それから獨逸協會中學校へ

入學した。父母は私を醫者にして、自分の跡をつがせやうとした。私は醫者は嫌だつた。どうしてもなるのが厭だつた。

卒業すると、高等學校の三部の試驗を三度受けさせられた。私は勉强も何もしなかつた。もうその頃は新詩社に行つてゐたので、詩ばかり作つてゐた。

高等學校の試驗を受ける意志がないのを見て、父は私を大阪の醫學校に入れるために、大阪に送つた。これも不成功だつた。私はたゞ大阪でなす事もなく一年を送つただけだつた。父はとうとう諦めて、私に文學を志す事を許した。弟は次男であるから、何でも自分の希望する物を學べと云ふので早稻田の英文科に入つた。

この頃の私の生活は極めて亂暴な物であつた。家庭には毎日のやうに親子の爭ひが演ぜられた。一人男の子が亡くなつたので、その頃は私の兄弟は六人であつた。男が二人女が四人——そして、一番上の妹はもう嫁づいてゐた。

私は木下杢太郎君や、北原白秋君と屋上庭園と云ふ文學雜誌を起した。極めて唯美的な傾向を帶びたものであつた。二號で發賣禁止を受けると共にその雜誌はつぶれてしまつた。

私は兵役に就かねばならなくなつた。そこで私は一年志願兵として、麻布の步兵第一聯隊に入營した。一年間の兵營生活は、私に人生を敎えてくれた。私の戲曲「歡樂の鬼」が自由劇場で始めて演ぜられたとき、私は上等兵の階級であつた。まだ夜間の外出を許されてゐないので、特に許可を得て、有樂座に行き、その當時流行してゐた個人[illegible]や吉井勇、木下杢太郎、北原白秋の諸氏と席を並べて、自作の上演を見てゐたときの心持は、未だに忘れかねる。半年振に煌かしい電燈の下に立つたのである。しかもその時同じく觀覽してゐた私の父母は、始めて私の小成功に對して喜んだ顏を見せてくれたのである——私は淚が出て仕樣がなかつた。

私の父は極めて溫厚な紳士であつた。母はそれに反して蹂躙な性質である。私が未だに不審なのは、あの溫厚な、物事のきちようめんな父から、どうして私のやうな疎懶な性質の子が出來たかと云ふ事である。酒は父も靑年期から壯年期にかけて、可なり飮んだらしい。母方にもその遺傳がある。私も弟も酒を飮むのは、不思議ではないやうだ。私たちのやうに醫師の家に生れて、兄弟とも文筆を以つて立つたのはよく人から怪しまれる點であるが、私は和歌にふけつた祖父の血が蘇生へたのだと信じる。それに私の兩親は、私たちの幼時、賤しい町の子と遊ぶのを嫌つて尋常科の三四年の頃から、膝ざらしや軍記の類を、私たちにあてがつた。私はその頃馬琴が非常に好きて、八犬傳を、何でも十一位の年、徹夜して一週間で讀みおはつたのを記えてゐる。

小學校では數學と畫學が一番きらひだつた。たゞ、數學の内では、幾何だけが不思議と好きだつた。三角や代數はいつも落第點に近いのに、幾何だけは良い點を取つたことを私は記憶えてゐる。

わが父

長田幹彦

私達は比較的豐かな東京の山の手の町の醫師の子として、少年時代は兎も角も幸福に育てられたのである。

私は少年の時代から非常に文學を熱愛したけれども、それを以つて身を立てようなどとは夢にも思はなかつた。私は中學を出るとすぐさま札幌の農學校を志望した。その時分は自然を憧憬するあまりに、土を耕すことが人間生活の理想であると考へてゐたからである。併し私は稍體質が虛弱であつたので、細心な父は遂に私の札幌行きを許し得なかつた。それ故私は積年の希望を一擲して早稻田の文科へ入つたのである。それも父は「文學者」たることを豫想して帝國大學に學べといつたのであるが、私はもうその時分には心窃かに作家たることを望んでゐたので强ひて早稻田へ走つたのである。

私達の父母は兄弟二人が文筆を以つて世に立たうとする傾向のあるのを知ると、ひどく悲しみ恐れた。今から考へてみると實に無理のないことだと思ふ。相當な頭腦と能力とを持つて生れて來た二人の息子が邪道に――父母の眼には少くともさう映つたに相違ない――陷つて衣食の途から離れていかうとするのを坐視するに忍びないと同時に、醫師としての後繼者を得ることが出來ないとすれば、父母としては此れほど殘念なことはなかつたであらう。殊に父は貧困の間から刻苦して自己の位置を築きあげて來た人なので、後繼者のないといふことは彼にとつては畢生の恨事であつたに相違ない。それ故に父母は有らゆる機會に、あらゆる手段を盡して私達の意志を飜させようとあせつた。殊にその迫害は長男たる兄のうへに一層激しく殺到して來た。併し少くとも私一人はもうその時分には到底文學を擲つことが出來なくなつてゐた。最初には作家にならうなどゝは少しも思はなかつたものが、在來の希望を擲つと同時に全く文學の魅力に縛められ、飽くまでそれを終始し、一生の精力をそれに向つて傾倒しようと堅く決心してゐたのであつた。

私達は泣きながら父母に反抗した。父母も亦涙を以つて私達を迫害した。その間に幾年かの暗い歲月が經過していつたのである。

その次に來たのが最も恐るべき放蕩時代であつた。精神の不斷の動搖は私に誘惑に打克つだけの强い心を與へなかつた。父母は遂に私達を敵視し、且つ憎惡した。鄕黨や知己の誰彼は私達を「碌でなし」と目した。その間に立つて溫厚篤實な父が世間に對する羞恥と、私達に達する憤怒と絕望とを以つてどれほど苦しめれたであらうか。その病苦は實に忍ぶべからざる底のものであつたに相違ない。

併し父はやがてその苦惱に打克つて、多少なりとも私達の眞の心を了解するやうになつて來た。父は總てを斷念しようとした。そして家庭を廓清し、私達の獨立を强要するために體のいゝ勘當を食はせたりした。父は煩悶のあまり少くとも自己の生活だけでも煩はされまいとしたのであ

る。私はその時分の家庭の暗さを今でもよく思ひ出す。父は私達を呪つてゐながら、それでも今に何かするであらうといふ希望に依つて僅かに慰められてゐたのである。それが却つて悲慘であつた。

私は飽くことを知らぬ放恣な青春の欲望と良心の苛責との間に轉々しながら極めて亂離な生活を送つてゐた。父にとつては幾度思ひ返しても、どうしても諦められぬ苦悶の日がつゞいた。私が旅へ出るやうになつたのもその時分のことで、私は到頭北海道の果までも流れていつた。そしてその「碌でなし」の間に、私は專念に人生を觀、藝術の眞諦に到達する道を搜り始めたのである。

今でも忘れない。私が旅役者の生活を描いて一躍文壇の最高權威たる中央公論誌上に掲載の榮を得るやうになつた時、私は初めて今迄に攫つたこともない莫大な稿料を懷にすると、直ぐさま父の許へ走つていつた。私はその頃本鄕の根津の貧しい下宿屋の一室に浪々してゐたので、私は久振りにそこから父の家へ歸つていつたのである。丁度黃昏時であつた。私は自分の功を誇らんとするよりも、事實父の歡の顏が見度かつたのである。十年に餘る長い歲月の間、碌でなしの子を持つたゝめにひどく肩身の狹かつた父に、自分の光榮のすべてを頒ち與へたかつたのである。父はその時默々(もく〳〵)として私の顏を見詰めた。その眼にはうすく涙が浮んでゐた。そして彼は唯莞爾として笑つた。私はその時の彼の顏を今だに忘れることが出來ないのである。

爾來父は彼の理想とする家庭生活と、私達の亂雜な生活とは到底一致

しないにも拘はらず、自ら屈して私達の味方になつて呉れた。一作が世に出づる每に孫を得たよりも喜んで呉れるのは父であつた。新聞に惡評が出てゐたといつては氣にし、多作をするといつては諫告してくれたのも皆父であつた。そして一昨年の二月、私が長篇「埋木」の稿を了らない前に彼は忽如として世を去つてしまつたのである。私達を生み、私達の藝術を育んで呉れた父は遂に歸らぬ旅に出てしまつたのである。

晚年に及んでは寧ろ安易な心持ちで私達を見てゐて呉れたし、私達も亦彼の死後に憂ひを殘すやうな不孝も働かなかつたのがせめてもであるが、併し過去十數年の勞苦に充ちた暗い生涯と、その間に處した父の胸中を思ふと、私は此の稱を認めながらも熱涙滂沱として頰に流れるのを禁ずることが出來ないのである。今更孝養の至らなかつたのを悲しむと同時に、他日私が畢世の努力を傾けた大作を完成するの日、互に笑つて往時を談ずる最大の恩人のないことを痛切に悲しまない譯にはいかないのである。

（四）箕作兄弟

理學博士 箕作佳吉（故人）
理學博士 菊池大麓（故人）
文學博士 箕作元八

▽私の父の性行と其教育法

文學博士 箕作元八

私共の父は秋坪といひ、菊池家から箕作家へ養子に來たものである。

菊池家は初め田原氏と稱し、後藤太の後裔より出たとしてある。代々教育に關係ある家で、先祖を菊池亮和といひ、學問に通じた人で、殊に書數經書にくはしく、算術其他の技藝を善くした。其子の愼も醫者を餘業とし、資性篤實で、矢張り學問を好んだ。其子を文理といひ、私共の祖父に當る人である。此人は江戸に行き古賀洞庵の門に學び、後藩府に屬する備中督部の郷校の長となつて教育に從事した。今でも菊池家の玄關に『典學』の二字を彫附けた大きな額の懸つて居るのは其時分の遺物である。文理の夫人は、和歌などが巧みで、賢夫人の聞へが高かつた。

箕作の家筋は近江源氏で、信長に亡ぼされた佐々木承禎の孫佐々木右兵衛督泰秀は、大阪冬陣の時秀頼に從ひ、戰ひに敗れて讃岐の小豆島へ隱れたが、後其男子二人が美作國に移つて農を業とした。其孫の丈庵といふのが始めて醫者になつてから、代々丈庵と稱して醫者を業とした。三代目の丈庵が秀れて居つて、津山侯に召出されて侍醫となつた。其子が即ち私共の祖父阮甫である。

祖父の阮甫は幼少の時から學問を好んで居つたが、年長けてから京都へ出て漢法を習ひ、津山で矢張り侍醫を務めた。後江戸に出て蘭學を學び、遂に其大家となつた。幕府に仕へて、今日の帝國大學の前身である蕃書取調所(後開成所と改む)に務め、又外交の事に從ひ、嘉永六年及び安政二年露西亞使節の來た時之に關係した。性質温厚篤實で、始終貧乏であつたけれども、學に刻苦勉勵する事『學問に淫する』と言はれた程である。其妻大村氏即ち我々の祖母は極く活潑な精力家で、私共子供時分には其躾が嚴しいので、ピリ〳〵して居つたものであつた。

父の秋坪は早くから兩親を失ひ、江戸に遊んで祖父箕作阮甫の門に入つて勉強し、阮甫が其奇才を認めて、遂に女を娶して養子として大坂に遣り、緒方洪庵の塾に入れて蘭學を學ばしめた。後幕府に召出されて外國語飜譯方となり、後向井隼人正の日本の最初の使節として歐洲に派遣された時、隨員として一行に加り西洋に赴いた。明治維新後は三叉塾を開いて大いに子弟を教育した。東郷平八郎大將、大槻文彦博士兄弟、阪谷芳郎男、平沼淑郎氏等は其門下から出たのである。後東京師範學校が創立された時、父は元來官途につく事を好まなかつたけれども、時の文部少輔(當時の次官)の田中不二麿氏が切に乞ふて起たしめ、同校の攝理とした。之に於いて父は建白して中學師範科を設置した。之が即ち今日の高等師範學校である。其他教育博物館長や帝國圖書館長になり、又福澤諭吉、加藤弘之等の諸氏と共に文明普及を目的として明六社といふを組織し、衆に推されて其社長となり、明六雜誌といふ最初の學術雜誌を發行した。又學士會院の創立せられた時には其一員に命ぜられた。

父は號を宜信齋といふて居つた。之は『信用すべき人に對しては誠心を傾けて友情を竭すべし』といふ彼の主張に相當するのである。佐藤齋先生の齋で額になつて居る物から取つたのである。性質は極めて眞面目で質素で温厚篤實、頗る名利に淡泊の方であつた。故に日につく處へ表立つて名を出す事が大きらひであつた。從つて官途につく事を好まな

かつた。奇拔な事、大膽な事は、不得手であつた。自分が苦學したので、常に『順境で許り育つた者は兎角役に立たぬ』と罵倒し、從つて貧書生などには大に同情し學資を與へて成業せしめた者も少くない。我々が死後初めて知つた樣な陰德に隨分澤山行つた。然し徒らに溫厚ではなく、若し門下生などで過つた行をした場合は隨分嚴しく面責した。無論諸子に對しても頗る嚴肅であつた。

父は子供の教育に全力を傾注した。舊來の教育法を破つて樣々新らしい方法を用ひた。殊に興味を與へつゝ勉強さすといふ方法を取り、漢學を教へても四書を終れば、直に國史略を教へ、夫も最終の卷より初め、順次に前の卷に移した。之は近世史の方が子供に興味を起すからであつた。又復習の時は一枚を讀む毎に、木札にある穴の中へ木片をさゝしめたり、袋の中へ紙縒(こより)を一本づゝ入れたりなど爲さしめ、さして退屈せぬ樣に注意した。英語は子供の時から教へた。繪や實物によつて其名を覺えさす爲めに、斯の如き教育法は今では普通な事だが、例へば猫の繪を見せてCatといふが如き方法を用ひた。

平生質素を旨として私共に着物とか下駄とかいふやうなものについては、少しも口を出すことを許さず、成るたけ左樣な事には無頓着にする樣にした。父隨分節儉をして居たが、子供の教育に關しては全力を盡くした。私共の洋行費は大部分父の私費であつた。翻譯などをして金が入つたけれども少しも贅澤な事をせず、悉く子供の教育につぎ込んだ。故に書物だけは要求すると直に承諾して少しも惜まなかつた。常に私共を戒めて『儉約といふものは、錢で濟む事を金にせぬ事で、錢でなければならぬ處を泥で濟す事ではない』とよく言ふて聞かせられた。又『余は汝等には財産は少しも殘して遣らぬが、其代り教育は父の義務として十分さしてやる。世間には金でも名譽でも權勢でも澤山ころがつて居るから、欲しければ自分の力で勝手に取るがよい』と言ふて居つた。

友人との交際については『一寸面白しろくて交際(つきあひ)よい人にはよく注意し亂りに信用すべからず、默つて居つても、正直で眞面目な人と見たら、此方から進んで何處までも永く親友とするがよい』と言つて居つた。又借金については『借金といふ事はどんな場合でも決してしてはならぬ。借金をする程なら、其代りに自分で一生懸命に苦しむで見るがよい。』『人の苦しみを助ける爲めにでも、連借などをするな、助け度くば自ら苦めて自分の力で救助せよ』と言ふて居つた。着物などを少しも構はなかつた代りに、食物は滋養物滋養物と喧しかつた。芝居は元來好きではあつたが、家族の爲めに良くないと思つて自ら制して行かなかつた。書畫骨董などの趣味はない譯ではなかつたが、斯んな事に從つて居ると奢侈の氣が起り勉學がおろそかになる處と、贅澤ぎらひなところから大に之を戒め我々にはわざと一つも床の間を作らなかつた。

父の身體は隨分と大きく、脊も高く二十二三貫の頗る堂々たる體格であつた。父は斯く健康であつたが、私は弱い方であつたから、私が洋行する時でも『お前は洋行してから十分勉強する事は信じて疑はないが、然し身體丈けは十分大切にしてゆつくり勉強するがよろしい。お前が歸つて來るまで、俺(わし)の方が強くなつて居るか、お前が強くなつて來るか競爭しようではないか』と言ふて笑つて居たが、明治十九年恰度私の洋行後間もなく腸チブスで六十一歳を一期として逝去した。

私の母は私の二つの時死んだのであるから、私は乳母に育てられたのであつた。故に私は母の事は少しも記憶して居らぬが、平常身體は強くなかつたやうである。

人物評論（九十）

勝田藏相論



▽屬僚的大藏大臣

鵜崎鷺城

勝田主計君が大藏大臣として議會に臨むのは、是れで三度目である。昨年の通常議會は豫算問題に移る前に、內閣不信任案で解散になつたし、次の臨時議會は期間が短い上に、財政上さまで面倒い大問題もなかつたが、今度の第四十議會は增税計畫や廢減税問題を初め、豫算に關して大分込入つた議論があるから

之れが說明應酬の任に當る勝田藏相も議會で實際の大臣振りを試驗される譯である。

勝田は世間から小僧大臣、青二才大臣と言はれ、大藏大臣として輕く見られてゐるが、それでも本年取つて五十であるから、一概に青二才でも無い。英國のロイド、ジョーヂは四十何歳かでパンナマン內閣の大立者となり、今でも五十を過ぐること餘り多くない。其の他軍需大臣のチャーチルにせよ、海軍大臣のゲデスにせよ、前印度事務大臣の小チャンバレーンにせよ、今日漸く四十代である。米國には國務卿ランシングといひ、陸軍卿ベーカーといひ、食料監督官フーバーといひ、何れも若手のチヤキ〳〵で、四十代の政治家はザラにある。革命後の露國は前首相のケレンスキーを別として、三十代や四十代の人間が其處にも此處にも活動してゐる。由來日本は時代の附いた人間を有難がる癖があるから、少し年の若いものが上の位置に立つと頭から見縊つて了ふ。若槻が第三桂內閣の藏相になつた時も、內田康哉が第二西園寺內閣の外相になつた時も、世間はナンダ鼻ッ垂しがと一概に安く買倒した。新時代眼からいへば古物鑑賞は餘り感服した風習でない。併し勝田は現內閣唯一人の明治生れで、年齡率を比較すれば確に若造である。何う贔負目に見ても一省の大臣らしくなく、隨分押しの利かぬ安つぽい大臣である。臨時外交調査會の如きも、本來を言へば內閣側より大藏大臣が一枚加はらねばならぬ筋であるが、勝田ではそれ丈けの威望と貫目に乏しい嫌ひがあるので其の代りに後藤內相を入れたものらしい。さすれば內閣の方でも勝田を安物大臣に扱つてゐるのである。

勝田は初めから大藏の畠に育つた男で、兒門からトコロテン押しに今の位置に進んだのであるから、外間から養子に飛込んで來たものに比べると、自然勝手も分り居心地も好い譯である。彼が二十年餘り大藏省にコビリ附いてゐる間には人事の變遷が多く、彼と同時代に屬僚の中堅を形造つたものは、今日殆んど大藏省を出拂つた。若槻と濱口は憲政會總務になつて柄にもない政黨生活に沒頭し、荒井賢太郎は朝鮮に釘附同樣になり、水町袈裟六は日本銀行副總裁で納り、橋本圭二郎は越後の石油會社に算盤を彈き、櫻井鐵太郎は臺灣銀行の頭取となり、山崎四男六は不靜な宮中生活を送り菅原通敬は貴族院に隱居し、塚田達三郎は浪々の間に死んで了つた。其の中で勝田獨りが今猶は大藏省に緣を繋ぎ、而も若槻に次いで內閣員――若し大臣になるのが榮達とすれば――に進んだのだから、一般の俗情から見て時代の寵兒と言はれるのも無理はない。啻に舊同僚中の出世男たるのみならず、同時代の大學出身中でも出世の筆頭である。二十八年の同級は都合好行つて次官、局長、公使になつたものもあるが、未だに草深い田舍に知事で埋もれてゐるのも少くない。勝田は濱口、菅原、塚田と略同時に大藏省に引取られ、初め屬官で阪谷や添田に逐ひ使はれてゐたが、明治三十年稅關檢査官を高等官の振出しに函館稅關長、大藏書記官、臨時國債整理局長、理財局長を經て次官に進んだ。函館から本省に轉じ、書記官を以て理財局國庫課長をしてゐたのは、故松尾臣善の理財局長時代で、それから水町が局長に進み、更に當

一西園寺内閣の次官になつて、勝田が局長になつたのである。彼が漸くオホクラマンとして認められるやうになつたのは此の時からで、理財局長としては無能呼はりするものがあつたけれども、先づ普通に仕事をやつて退けたと言つて好く、別に見劣りのする程でもなかつた。次官は前後三回に及び、初め第三桂内閣の藏相若槻の下に於てし、次に山本内閣の藏相高橋是清の下に於てし、三度目が寺内内閣の初期に於てし、三度とも期間が短かつたが、一人で三度も次官を勤めたのは此の男だけである。山本内閣の推薦で勅選議員に任ぜられ、内閣瓦解後暫く遊んでゐたが、大正四年の冬朝鮮銀行總裁に擧げられて朝鮮へ行つた。此の時は相前の抱負を以て行つたやうであるが、其の中寺内内閣が出來たので、當腕前を見せる暇もなく、元の大藏省に歸らねばならぬことになつた。

初め大藏大臣は寺内首相が兼ね、勝田は次官として入つたのである。寺内の腹には目星を附けた候補者があつたけれども、それが此方の豫想通り行かなかつたので、終に勝田を專任藏相にする腹を定めたのである。併し寺内も勝田の大臣は威望と貫目が充分でないとを知つてゐたから、世間の非難を掛念してイキナリ大臣にするを避け、當分首相兼攝でお茶を濁しつゝ世間の容子を探る中に、議會も召集され、最早專任に直しても差支ないとの見込が附いたので、漸く昇格を發表したのである。初めから寺内の考へが其處にあるらしく見えたので、世間には專ら勝田說が傳り、いよ〳〵それが實現されたときは、既定の事實として受取られたが、一般の頭は此の重大なる時局の財政當事者として物足らず感じた。

勝田次官若くは勝田局長と呼び慣れたものには、彼に勝田大臣と呼ぶのが相應しからぬやうに思はれた。一般はさうした頭で見たけれども、郷里の愛媛縣では開縣以來初めて大臣を出したといふので、恰も猫の額から虎が飛出した如く囃立て、同縣人は彼を招いて盛んな祝賀會を開いた。

勝田は大學でコツ〳〵勉强をして、試驗の點數を多く取るに一生懸命であつたが、其の割に學問の成績は好くない。役人生活をしてから多少書物を讀んだかも知れぬが、學者肌の男でない。唯だ書生時代から役人になつて出世するといふのが一心の志願で、總て此の榮達本位で官場に處して來た。それ故に官吏學はなか〳〵研究を積んでゐる。生來彼は極めて如才のない、常識の發達した男で、大學時代から對人呼吸を解し、如何なる場合にも人と喧嘩口論せず、教授及び學生間の氣に入られるやうに務め、役人になつてからも、先輩に對する工夫を怠らなかつた。國庫課長時代には局長の松尾に愛せられた。松尾が去つて水町が理財局長になつてからも、兩人の間は惡くなかつた。それ故に順序より言へば他に人もあり、適任と認むべきものがあつたに拘らず、特に水町は勝田を自分の後に推薦したのである。一時若槻と反目し、松尾の女婿で當時銀行課長であつた二宮基成と同盟して對抗したかに傳へられたが、實際は若槻との折合ひも好く、何人とも衝突するやうなことは無かつた。或は內心面白く思はないものがあつたにせよ、少くも彼に喰つてさる氣配を噯にも出さない。元と大藏省の高等官は田尻や阪谷が系統よりも人材本位を登庸の方針としたから、大藏省には他の官省と違つて政黨的系統が

なかつた。然るに近年大藏省の官僚にも黨派の色別けが附くやうになつて先づ若槻、濱口、長島等は桂系として憲政會の前身たる舊同志會に入り菅原も武富の女房役を勤めたのと、前内閣の推薦で勅選になつた關係から、憲政會の系統に近づき、橋本は西園寺系として政友會に入黨した。勝田も海坊主の次官であつたのと、山本内閣のとき貴族院に入つた關係から、政友系の如く見られ、又一時入黨を勧められたこともあるが、實は正眞正銘の官僚系である。唯だ現内閣の大藏大臣としては、憲政會よりも政友會に近いが、それは政府と政友會の關係から見たことで、勝田としては政友會其の物に縁もユカリもない。彼が黨派の色彩に染まずして昔ながらの官僚で通したのは、畢竟身を處するに便なるの用意よりし、總てが俐巧なる行方である。彼が寺内内閣の大臣にせり上ることが出來たのも、官僚系の忠實なる門徒であるからだ。

彼は無味乾燥なる數字的頭に不似合な俳趣味があつて、號を明庵といひ、子規派の俳句も造れば、文章も一通り書き、兎に角才物であるが、人間の器は極めて小さい。年が若い丈けに何かをかして見やうとの氣分はあつても、或る範圍内に定まり、間違つても腕一杯遣り拔くといふ機略も度胸もなく、只だ別條のない丈けの用意をして行くべき道を進む方である。局長時代から世間の毀譽褒貶を氣にする方で、嘗つて或る新聞が彼の鄙吝を素ッ葉抜くと、彼はさも一大事の如く神經に病み、年末賞與の幾分を下僚に分つたさうであるが、小者だけに人間は正直である。正直であるから豫算に對しても、若槻の如く無いものを有るやうに見せたり、有るものを無いやうに見せたりしない。唯だ胡魔化さぬといふ丈けで、財政家らしい財政家ではない。尤も兒飼からノシ上つて來た丈けに、大藏省の事情に通じ、一通り財政經濟の寸法を心得、又た若干外國の財政狀態を囓つてゐるだらうが、世界の大勢を達觀し、帝國の位置に顧慮して、國家といふ大きな見地から現在將來を頭に置いて財務を取扱ふが如き政治的手腕は此の男に期待されない。出來大藏省に育つたものは財政を扱ふに財政らしい手段と用意と識見と經綸を缺き、ヤツトこさと其の年度々々の歳計收入面に於ける算盤の辻褄を合はして、豫算をゴチヤマかせば好いとしてゐる。勝田も多年さうした因習と鑄型に養成されて來たから、大藏省といふ狹い天地で、目先き限りの工夫をするのを財政と心得てゐる。現に今度の豫算案を見ても計畫よりは數字の辻褄が先になつてゐるから、國家的財政にあらずして大藏省的豫算である。若し勝田に政治家の頭と藏相たる氣分とがあれば、思ひ切つた豫算を作つてサア是れで行かなければ今日の時局に處することが出來ぬと大きく切出す處だが、小心翼々の正直者と來てゐるから、オツカナビツクリで腦味噌を搾つた末が姑息な計畫になつたのである。

現内閣の大臣は松室法相と本野外相と後藤内相を除けば、仲小路農相といひ、田遞相といひ、岡田文相といひ、大島、加藤兩相といひ、いづれも次官から成上つたもので、獨り勝田藏相のみではない。六人も次官上りの出來星大臣がゐるのだから、曾ては無力の内閣として不信任案を叩き付けられ、或は外交調査會などといふ最高内閣が出來て力を添へて

貰らやうな始末になつたのである。其の中でも勝田は成上りのホヤ〲で、謂はゞ政治的成金である。然し彼も寺内の下には一廉の財政家の如く映じ、多少貫目の不足はあつても、全國の財務を託するに足るとしてゐる。蓋し寺内には財政の頭が微塵もないから、大藏大臣の鑑定眼も自然好い加減なのは無理もない。特に寺内の人物を見る標準は庭木に對すると同じく、別段特色が無くても小ヂンマリして缺點さへなければ好いとしてゐる。勝田の官僚式從順、官僚式勤勉、官僚式鑄型が寺内の氣に入つたのではあるまいか。

勝田が朝鮮銀行總裁に擧げられたのは前内閣時代であるが、元々時の朝鮮總督寺内の所望に出たもので、鮮銀總裁をしてゐる間にます〲寺内の信用を得て關係が密接となり、内閣組織と共に朝鮮から呼寄せたのである。寺内の藏相銓擇中は勝田が次官を以つて大藏省の一切を切廻し、初めから事實上の大臣であつた。嘗て若槻が財政上の懷刀として桂公に用ゐられた如く、勝田は今も猶ほ寺内に信任され、其　信用程度から言へば或は閣僚中第一に居るかも知れぬ。蓋し彼は寺内に取つては手頃な大臣で、本野は外樣大名だから、其の間に多少隔たりがあるし、後藤、仲小路、田等は何日何時どう脫線するかも知れぬといふ懸念があるが、少くも勝田には其の心配がない。隨て勝田も寺内の知遇に感激し、專心忠實に勤めてゐる。廣い意味に於て官僚系でも、狹い意味に於て何人の系統に屬するか明かでなかつた勝田も、今ではドツチから見ても純然たる寺内系である。

屬僚が大臣に孵化しても、オイソレと屬僚的氣分が拔けて國務大臣の頭に早變りするもので無い。勝田は屬僚の氣と態度とを以て大臣の事を行ひ、議會に臨んでも前二回のときと同じく屬僚臭味を脫しないだらう。これまで次官局長として何度も議會に出て應酬のコツを心得てゐるから答辯だけは普通にやつて退け、大臣自ら次官局長の說明までも引受けるだらうが、隨分貧弱な大臣である。藏相としても將た人物の點も演口の方が勝つてゐると言ふものが多い。我輩は一槪に形貌を以て人の實質を評價するもので無いが、彼の若々しい生白い顏、チックで捻り上げた豐富ならぬ口髯、其の紛々たる吏臭、何處から見ても學閥的威嚴に乏しい。蓋し斷定的に評すれば、彼は政治家にあらずして小手の利く事務官である。精一杯に買つて次官以上の材でない。頭腦が好いといふのも、若手の中で物が分つてゐるといふのも、畢竟刀筆の能吏としてである。唯だ彼を國務大臣として見るから兎角の雜辯を附けたくなるが、次官若くは局長として用ゆれば、一廉調法な人物である。

▽學生時代の勝田主計氏

内藤鳴雪

今の大藏大臣の勝田主計氏に就いて私の批評が聽きたいとのことであるが、私はお聞き及びの通り、同氏とは同鄕である上に、從來親しくし

て居る。左樣な私からする批評は、好く云へは味方贔負に陷る嫌がある。といつて惡く云へば不人情に渉る謗がある。兎角私の立場としては、批許がましい事を云ふことは好まない。よつては私と同氏との從來の關係や、私の知つて居る同氏の行爲に付いて少々お話をして見やう。尤も同氏の全體の事は知らない。唯私の知るところの範圍に止まるのである。

乃で勝田氏は私と同じ松山藩の士族である。其の親人は廉藏と云つて郡衙の務をして、即ち農政の方に關係して居たので、廢藩後もやはり大區小區と分れた其の大區の役員であつたやうに思ふ。乃で私は其頃學務の務めをして居たから、よく小學校設置の事に就いて廉藏氏と應接した事もある。今の主計氏は左程酒を飲まないやうだが、此の廉藏氏は隨分酒好きで、毎時も應接の際に酒を匂はして居た。が、性根はなか／＼確かで、少し間違ふと私が揚げ足を取られたこともあつたやうに記憶する。其の後私は東京へ出て官吏となつたので、廉藏氏の消息を知らぬと共に、其の子息に如何なる人があるか知らなかつたのである。然るに明治二十年前後に、舊藩主の久松伯爵家が、舊藩地の俊秀の子弟に學資を給與せらるゝ事になつて、私も其の世話係を囑托せられたが、其の給費生の内に勝田主計と云ふがあつて、即ち廉藏氏の子息であると云ふことを知つた。此の給費生の内には其の後俳句で名を揚げた正岡子規も居たのである。其の後久松家は給費生其他の同郷の書生を收容する爲め、常盤會寄宿舍と云ふを設けられた。これは今も本郷の眞砂町に存在して居る。そして私は二十一年に其の寄宿舍の監督となつたので、乃ち勝田氏とは朝夕出會つて親しくなつたのである。尤も此寄宿舍に居ても少し繋縛りのある下宿といふ位のもので、學校は各自の望むところによつて通學して居たものである。勝田氏は其の頃の第一高等中學へ入つて、それを卒へて更に大學へ行つて、法科大學の政治經濟の學科を學んで卒業したのである。そうして卒業と共に大藏省の官吏となつて、勿論寄宿舍も退いて下宿をした。けれども此の修學期間は絶えず私は氏と接して居た。前にも云ふが如く此の寄宿舍は各々學校も方向も異つて居たのであるから、常宿舍に居る時も、各々好むところによつて樣々な事をして居たのであつて、即ち正岡子規の如きは後に文科大學に入つたのであるから、常に文學の同好の人々とそれの研究もして居た。乃で遂に其の頃一般の世間にはまだ注意を惹かない俳句の研究を始めて、遂には今日の如く、我々までもそれを弄ぶことになつたのである。勝田氏は既に政治經濟の科に入つて居る位で、專ら其の方面に於て研究をしつゝあつたのだが、時々は此の俳句なども作つて、其の號は明庵と云つて居た。それで其の後國民新聞社から出版した「新俳句」といふ大部な句集中には、明庵の句も數々見えて居る。然し俳句には勝田氏は左程熱心でなかつたから、間も無くやめてしまつた。

それから今も記憶して居るが、此の寄宿舍には月に一回茶話會といふを開いて、寄宿生一同と監督たる私も臨席して、互に種々なる事を演說したり、討論したりすることがあつた。乃で文學なり、法律なり、其他學術なり、種々なる問題を互に持出したものであるが、勝田氏は毎時も

地方を旅行して觀察した其の見學談であつた。一體暑中の休暇は、多くの學生が歸省をするとか、或は氣に向いた地方を遊びながら見物でもするのであるが、勝田氏に限つては歸省などは殆んど一度もせないで、主として知らぬ地方を旅行して、其地方の物產其他の狀況、又は民政等の様子を出來得る丈け觀察して居た。乃で右の茶話會に於ても、毎時も其の事柄を旅行日記中から抽き出して、いろ〳〵と意見を加へて演說したものである。そうして私などはちつと書生に似合はぬませ過ぎたやうにも思つたが、然し他の人は唯遊んで暮らす休暇時間を無駄にせないで、かゝる點に注目する氏は將來も乾度多望であると窃かに感心をして居た。其他寄宿舍に居ても、何事も眞面目で他の人からも尊重せらるゝ風であつたから、夙くより舍監にして居た。尤も年長者はまだあつたけれども、それ丈け同氏は其の人格も優れて居たのである。

又寄宿舍には歲末に創立の記念會といふがあつて、其の日は久松伯を始めとして同郷の先輩等をも招待して、一年間の寄宿舍の成績の報告を終つて、いさゝかの酒肴などを喰べ合つたものである。其の式日に方つて、或年舍監の勝田氏が云ふには「斯様な日は一般舍生の氣風を新らしくする爲め、畏れ多いけれども主上の御影を懸けて拜をすることにさせたらよい」といふことで、遂に自費で坊間に賣つて居る御寫眞帖を買つて來たので、私も同意して舍生一同を率ゐて拜をしたこともあつた。其他同氏の舍監在職中は舍内の取締り上にも大いに良い結果を得て、私も喜んだ事である。

それから前にも云つた如く大學卒業と共に、同氏は大藏省の官吏となつて他所へ下宿したが、私とは時々往來して談話することもあつた。其の内同氏は函館の稅關長となつて赴任したのであるが、其の在任中に北海道全部の物產や、輸出輸入や、交通や其他の全般の事で、即ち職務以外の事ではあるが、それ等を精細に調査したものを大藏省へ差出したが、當局者はそれを嘉納して直ちに出版させ、上下二冊の本としたものがある。それは私も一部見せて貰つたので能く知つて居る。其の後本省へ戻つて書記官となり、局長となり、次官となつた末、暫時朝鮮銀行の總裁となつたが、遂に今日の大藏大臣となつたのは誰も知るところである。そして私は前にも云つた常盤會寄宿舍の監督となつて間も無く官吏は罷めてしまつて、書生の世話位をして居たのであるから、遂に正岡子規に引込まれて段々と今日のやうな俳人俳人と呼ばるゝ身分にもなつた。そして此の監督は二十一年勤めて、罷めたのが今から足掛け九年前である。それ以來はいよ〳〵俳句其の他の文學社會の交際を主として爲る事になつたが、勝田氏とは相變らず時々往來もして居て、吉凶の事件には互に慶弔もしあつて居る。

勝田氏は其以來も常に常盤會の寄宿舍を初め同郷書生の方向等に就いても、よく注意して、種々世話をして居ることも多い。殊に右の寄宿舍は私の罷めた後の監督は今の陸軍大將の秋山好古氏が擔當して居て、それが職務上他の地に去つた後は勝田氏が監督となつて、朝鮮銀行の總裁となる境に罷めた。此の監督在職中にも寄宿舍の取締上によく盡力した

のみならず、其の創立以來の歴史を簡單なものながら作つて一般に頒布したこともある。又長い間久松伯爵家の家事諮問員となつて居て、私も同じ諮問員であるから、よく此の側でも氏と主家の事を談し合つたこともある。が、此の諮問員も在京者に限るといふので、朝鮮銀行總裁となると共に、此の囑托は解けた。けれども何にしろ財政經濟の事は氏の専門でもあるし、從來十分研究して居るから、舊主家に於ては今も種々相談することがある。

以上に云ふが如く、私は氏と長い間の交際でもあるし、又私は既に取つて七十二歳にもなるので、氏は常に私が健康上に心配されて、時々餘りに多方面の仕事に關係する事に就いて忠告さるゝこともある。又朝鮮在住中は多くの人蔘を送つて、それを服用せよと云はれたこともある。又私の傳記を書くから其材料を示せとの事であつたが、私が怠つて居てまだそれは出來ない。尚ほ、私の末子は今九州大學の醫科に居るが、それが修學上に於ても氏の配慮を得てゐる事は少くない。殊に昨年私が一年延ばした古稀の祝ひは、俳句其の他種々の方面の人々でして下さつたのであるが、常盤會の寄宿生といふ方面の會は氏が主幹となつて行はれて、今日ではもうかなりの地位に居る人々が多く集まつて、共に舊を談じたのは私の最も悦しく思つた事である。悦しいと云へば氏が今日の如く大藏大臣となつたと云ふ事に就ても、私は單に同郷人といふのみならず、又前に云つた如き久しき親しみもあるから、一層悦しく思つて居るが、又それと共に此の上十分なる功績を擧げて、國家の爲めに、否、多難なる今日の國家の爲めに盡され度く思つて居るのである。又何等の過失もあらんかとそれも老人の取越苦勞をして居るのである。

▽何事にも親爺の力が必要

川尻東馬

△現内閣の大臣中には、個人として自ら二種の全然相反せる分派ある樣に見へる、即ち甲派に屬する人々は、少なくも眞面目で行つて見よう、國政を料理するには――飽迄に其理想と抱負あるものと見て――徒らに權謀術數を弄し、俗論人氣を煽つて、一時を糊塗すべきものに非ず位の信念と覺悟を持して居る。首相の寺内伯を筆頭として岡田文相、松室法相、勝田藏相等は、大體其閣内に包括せらるべき人物。

△乙派に屬する人々は、例の眼中國家國民なきを疑はしむる自己本位の連中、國家的理想、抱負杯な樣な面倒臭き小理窟は全然抜きにして、單に自己發展が唯一無二の大目的、時には俗論人氣を煽る、又場合に依りては頗る姑息なる人氣取論の服從拘束も朝飯前の仕事、權謀術數は常習行爲にして、利益壟斷は苟くも口實の以て構るべき材料の發見次第、遠慮會釋なく公々然之を行ふやの觀がある、云ふ迄もなく後藤内相が其筆頭にして、田遞相、夫れに親任待遇の有松法制局長官を算すべく、何れかと云へば仲小路農相も亦其閣内に包まるべき性格、但し利益壟斷の一面

至りては、其間自ら區別あることを一言斷つて置く。

△即ち切言すれば、勝田藏相は現内閣大臣中、個人としては無難の方の人物である、若し假りに之を善玉惡玉といふ分類方にすると――苟くも國務大臣に對して甚だ失禮な警喩ではあるが――藏相は其善玉に算へらるべき一人たるを失はぬ。

△世間藏相を稱して、一概に青二才大臣杯といふが、年齢としても既に五十歳、大藏次官も三度迄勤めて居るから、此評は聊か酷に過ぎはせぬか、但し大學を出たのは明治廿八年、濱口雄幸、下岡忠治、久保田政周幣原喜重郎、上山滿之進、田所美治、菅原通敬、落合謙太郎、西久保弘道君等とは同期生である關係から見ると、其何れもが未だ一人も大臣級になつた履歴のないのに、獨り君の先頭第一に國務大臣昂任は、確かに破格の立身出世たることは明白である。

△君の大藏次官は、第三次桂内閣の藏相若槻禮二郎君の下に於てしたのが最初で、第二回は山本内閣の藏相高橋是清男の下である、第三回は現内閣の最初に於て寺内兼任藏相の下に於てし、其後三ケ月にして現地位に昇格した譯であるが、世間は同じ二十八年出でも、濱口君や下岡君は早晩大臣に親任さるべき人物として取扱ひ、君に對しては、失禮ながら實は夫れ迄の期待を持たなかつた、然るに事實は案外にも君を先導第一の大臣として見ることとなつたので、自然に口善惡なき京童が、小僧大臣の青二才大臣のと、輕蔑するのも亦一面から見れば止むを得ぬ次第と云はねばならぬ。

△大學時代から、對人呼吸を了解した男と學生仲間に評判された君は、官界に入りて以來、更らに一層其性格を發揮し、傾向を鮮明ならしめた、從つて仲間の中には渡世術の達人杯、陰口を叩くものも相當にあつたが、兎に角何れの時代に於ても、上長からは皆相應に氣に入られたのは事實である、但し眞實信任重用されたのか、又單に重寶がられたのか、夫れは自ら別問題に屬する。

△山本内閣の時代、各省次官は政友會の要請に依りて、皆入黨の止むなき境遇に立つたが、君丈けは飽迄も御免を蒙つたのである、加ふるに其内閣に於て勅選議員の恩恵に浴したに拘らず、世間から單に政友系の人物と見らるゝのみで、實質は終ひに政黨員たらずに濟ました、後に君の云分なるものを聞くと、「さなきだに狹い日本、然も交際範圍の極めて狹少な自分としては、政黨員となつて、益々其交友範圍の局限されることを好まぬ、一言にして云へば、廣い世界を强て自ら狹く渡るのが愚策だと思ふ」と、以て君の如何に處世術に長じて居るかゞ判る。

△斯く悧巧に世間を渡つたお蔭が、忽ち時の朝鮮總督寺内伯に依りて朝鮮銀行總裁に用ひられ、果ては現地位を獲渡する迄の深く重き信用を博する基礎を築き上げた譯であるが、元來が官僚主義の人物で、然も其性格調子乃至日常の起居動作に至る迄、如何にも寺内伯にはお氣に入りそうに出來て居る、殊に濫りに人氣取りをせぬ方針、極端なる秘密主義、融通の利かぬ邊杯、寺内伯は甚し我意を得たりと信用するのも無理がない。

△現内閣大臣中、後藤内相は自ら副總理格を以て任じ、田遞相は又參謀長格を以て自ら許して居る、而して互に我こそ首相第一の信任者と自惚れて居る樣だが、實は所謂青二才大臣の勝田藏相こそ恐らく首相第一の信任者であらう、寺内首相としては後藤内相には無論安心出來まい、田遞相に對しても、勝田藏相に拂ふ程の信用は、多分置いて居まいと思ふ、何故かと云へば遞相の性格人物は從前から十分承知して居る筈である。

△人物の點に於てゝ技倆の點に於て、殊に貫祿の點に於ては、國務大臣として其何れにも及第して居ない、併し其頭腦と手腕に於ては、寺内伯を首相と頂く第三流内閣に在ては、敢て不足を感ぜぬ樣である、何れを見ても同じく山家育ち、獨り君のみを青二才扱ひにし、又次官格に見傚そうとするのは、全く以て氣の毒である。只同期生に濱口君や下岡君等のある爲め、何かと云へば直ちに此兩君に比較さるゝ樣な對照者の位置に立ち、動もすれば世間からは『濱口君や下岡君でさへまだ大臣にならんのに勝田君の大臣は全く早過ぎる』と一口に云はれる、されど是れは時節と其人との遭遇、即ち一言にして盡せば天運の回り合せである、其爲めに其人の位置を云々するのは、畢竟するに因はれたる感情論が基礎を爲すのだ。

△併し内閣に於ては、遺憾ながら事實若造扱ひを受けて居る、一等省の長官としては、如何にも閲歷が足らぬ、又人物に重量がない、其爲め事每に各省から逆襲さるゝ苦境に立つて居るが、扨て愈々といふ時には何時も親爺の三角頭が光り出して苦もなく擊退して了ふ、要するに何事も最後は親爺の力を借りて切り拔けると云ふのが、藏相現在の實狀態である、聞く處に依ると、今期議會に提出さるゝ大藏省所管の議案件數四十餘との話だが、各種の增稅案を始めとして、其大部分は皆重大案件であらうから、藏相としての議會に試驗さるべき科目は、隨分多過ぎる程の重荷と云はねばならぬ。

△勿論議會に臨んだ經驗は、局長時代から度々であり、別けて大藏省青ちの大臣であるから、議案其物に對する質問應答にはさして苦艱難行はあるまい、只餘程大きな質問、殊に國家經綸の大問題に逢着した場合には、根が小さく眼前の事より考へぬ男丈けに、同じ逃げるにも頗る低く小さく敵を外すに相違ない、此邊が君として今後如何程の進境あるかを試驗さるゝ肝腎の時であらう、今期議會に於て、君に見んとする主題、而して第三者としての興味は、只此一事と云つても決して差支あるまい。

△放漫無責任、杜撰曖昧、然も無主義無方針なる財政計劃、支離滅裂、前後撞着の增廢稅諸案に就ては、單り君を責むることの餘りに殘酷無慈悲なる事情を諒とする、其根本的禍因は、衆議院に何等の基礎を有せざる官僚内閣其物にあるから、眞の責任者は君以上の高所大所にある、所謂政府與黨と目さるゝ政友、國民兩派の面目、氣兼ね等其邊の辻褄を合せて巧みに調和の出來る餘地を置かねばならぬ彌縫の苦心、綱渡りの妙策、どうせ大藏大臣としての抱負を實現することの不能なるは、假令閲歷、貫祿、手腕の世に定評ある人物にしても、末には同一の結論に達すべき運命、況して君の如き閣内に於てさへ何事も親爺の力に縋る外なき

微力弱體の藏相としては、此點に於て殆んど咎むべき理由を見出さぬのである。

△要するに君は人物として極めて平凡、之を賞すれば庸中の佼々たるもの、之を貶すれば過つて顯要の地位に進んだ凡物である、即ち愛媛縣人から初めて縣出身の大臣が出來たと、嬉しがられる位が丁度相當の人物である、財政意見は、何れかと云へば積極主義の方であるから、此一點丈けでも政友會には比較的受けが好い筈だ。

▽常識過分の失敗歟

小松緑

謹啓陳者勝田藏相に對する所感申述候樣御下命の處、小生も『中外新論』の經營に忙殺せられ居り考慮の暇無之候得共、時節柄好適の御企畫にも有之、殊に同業のよしみ上寸隙を竊み、氣付たる儘を走筆致候。蕪雜に流るるは右の事情と御諒恕被下度願上候。

味噌の味噌臭きは上味噌に非らずとかや。人民の租税に衣食する官吏が、役人風を吹かせるほど面惡きものは無之、又そんな人物に偉才は無之候。殊に大藏省の役人は自ら何か玄妙特絶の知識にても有するが如く心得、他人に對しては財務の事汝等に解つて堪るものかと言はむ許りの態度を執る者多く、世間より厭惡せらるる樣見受けられ候。其の中より勝田藏相の如き恬淡洒落の人物現はれ候は、最も珍とすべき所と存候。

小生は十五六年來の知己に有之候。初より役人風や官吏臭き所寸分も無之候。誰に對しても胸襟を開きて應接し、氣取りたる容體は微塵もなし。去りとて鼻を衝くの俗臭あるに非らず。篤學にして仙骨あり、一時辭職したる時の如き、他人ならば民間の要職を求むることに躍起たるべきに、飄然海外に遊びて歐米を視察し、其の視察したる所を評論公刊したる事實に照らすも、君が如何に研究の氣力に富むかが察しらるる事と存候。若し扛げて其の缺點を指摘すれば、餘り常識に過ぎて熱誠の足らざることに可有之候。何人も君の人物には感服しながら、今度の豫算案を非難する者多き樣相見え候。此の豫算の編成に多少缺點ありとすれば、そは常識過分の失敗とも可申候。此の軍國の一大危局に際し廢減税を實施して、租税の尖銳を柔らげむとしたるが抑もの誤りに有之候。戰國に處して猶ほ綽々たる餘裕を示す積りならむも、恬淡洒落は時にこそ出れ、今の時は大眞面目にて熱誠を灑ぎ出す時と被存候。早く申せば少々位は蠻勇を奮ふべき時節に有之、それを悠々閑々と社會政策などを考量するとは餘り悟り過ぎたる遣方と存候。併し觀過斯知仁矣とも申候に付き、今次の豫算編成の精神を透察する時は、君が膽々たる收斂の臣に非らずして能く下民を撫愛する慈悲心に富む國士たることを諒解し得べく候。小生は君に對し其の一時の非を改むるは當然なるも、去りとて世評の囂々を聞いて決して落膽狼狽すべからざることを勸告する者に御座候。敬白。

▽未熟の勝田藏相

鐵拳禪

一　俳人としての彼

藏相勝田主計は、愛媛縣士族勝田久暉の五男にして、明治二年九月十五日の生れなり。實に愛媛縣出身の最初の大臣にして、又明治ッ兒を代表する唯一の大臣なり。彼れの藏相として耳目を惹けるは、此の最初乃至嚆矢と云ふが如き珍味乃至新味と、年齢未だ五十に滿たずと云ふの若さを以てなり。然れども、單に其の大臣たるの年齢を以てすれば、彼れは必ずしも若からず。第一次伊藤内閣の文相森有禮は三十九歳、隈板内閣の文相尾崎行雄は四十歳、第四次伊藤内閣の外相加藤高明は四十一歳なりし。彼れが四十八歳にして藏相たる、公伊藤博文の始めて首相とはれる四十五歳よりも、三歳の年長なり。而も何ほ若しと思はるゝ所以は現内閣の諸相の皆五十歳六十歳の人物なると、嘉永乃至慶應の生れを以て充滿するが故なり。

此の若き藏相には、帝大學生の時代、若き俳人として俳壇の間に知られたり。號は明庵、其の由來する所を詳にせずと雖、彼れが人格の一面を發露せずんば非ず。伊豫の松山は新俳句を以て、明治文藝史と交渉を有す。俳句革新の曉鐘を鳴せる正岡子規は此の地に生れ、其の機關雜誌『ホトトギス』も亦此處に發祥し、内藤鳴雪、高濱虛子、河東碧梧桐、柳原極堂、村上霽月等、皆同地の産なり。蓋し子規をして容易に俳句革新の業を成さしめたるは、是等同郷人の相呼應し、若くは其の麾下に附して活動せる結果の力多きに居らずんば非ず。明庵も亦同郷なるの故を以て、俳句に志し、運座等に出席せるなり。彼れは籍を法科大學に置くもの、將來俳人たらんの希望を有せるに非ずして、子規の感化、或は鳴雪の關係よりして、玆に至れるなるべし。當時、文藝勃興の氣運に向ひ、指を之に染むる者漸く多く、句作の如きも學生間に流行し、之を知らざるを以て恥辱となすの風潮を生じたり。されば新思潮に棹し、人生を味讀せんと欲するの徒は、相率ゐて趣味の裡に突入せり。彼れの俳句を試みたる、必ずや趣味の爲なるべく、其の一生懸命ならざりしも之が爲なるべしと思はる。所謂彼れの俳句に對する態度は、低徊顧望なり。畢餘の遊戯なり。餘技なり。此處に己れの運命を試みんとし、若くは新生命を開拓せんとせるに非ざりしや推するに難からず。

明庵の俳句、明治三十一年發刊の『新俳句』に出づ。該書は日本派最初の句集にして、彼等の新俳句が元祿文化乃至天明の摸倣より漸く脫して、明治の特色を發揮し來れる時代の作たり。句數僅に七八、明庵獨特の思想格調を認め難しと雖も、幼稚ながらに才氣の穎脫する者あり。而も模倣以外に甚深の清新味なく、精力の充實を缺くが如き者あるは、彼れが餘技以上に努力せざりしの證なり。

畑打つ親子戻るや朧の月

所化猿の畑打つなり大男
陽炎や大盤梯の雪に立つ
掃溜の陽炎になる壺下り
春の海漢綫與綫を載せて來る
芙の花卯の花まじり風薫る
餅搗に來るや長屋の若角力

陽炎を大盤梯の殘雪に發見せるは、着眼奇抜なり。朧の月は大觀張の給を思はしむるも、春の海の穩波濟々の感じを現せるに若かず。他は平凡多なきの作、當時無難を以て許されたるものべし。而して彼れの大男と云ひ、大盤梯と云ひ、若りに大を驅使して調を强めんとし、又は入念に角力の若きを拈出して力を現さんと試みる等、健康體の作物にして、拗ちくれたる胃弱の氣分、又は病的の陰翳を認めず。惟ふに彼れは健康體の人にして、樂觀的の思想を有するならん。今や彼れの面貌快活なるが如くにして、而も一種の哀愁を湛ふるが如きは、是れ本來の性格に非ずして、官海の幾風波に掀飜されたる、疲勞の名殘なるべき乎。將又、豫算通過難の人知れぬ輕き惱みなるべき乎。

二　屬僚としての彼

俳人明庵の赤門を出でたるは、明治二十八年七月なり。彼れの專攻は政治學科にして、其の同窓の首席は法博小野塚喜平次なり。卒業の成績を以てすれば、彼れは中軸の上にして、濱口雄幸、下岡忠次、久保田勝美、神山閏次、落合謙太郎等の下位、菅原通敬、伊澤多喜男等の上位にあり。然るに成績順を以て論ずれば、陞進の速かなるべき筈の久保田、神山は未だ知事級を出でざるに、末席より二番の伊澤は夙く警視總監となり、彼れの一躍藏相たるを見れば、試驗點數は人物の價値を測り、立身を定むるの絕對的のものに非ず。其處に早熟と晩成の種別あり、運開拓の幸不幸あり、閥族關係の有無ありて、自力のみにても能はず、他力のみにては無論能はざる或物の存するを見る。理窟なしに之を『運』と呼び、立身出世の迅速なるを以て、好運の人なりと稱す。彼れの如きは早く大臣たるべく期待されたる濱口、下岡を超して藏相となれるが故に所謂好運の人なり。轉じて同年の法律科出身を見るも、河村金五郎、幣原喜重郎、田所美治は次官級に止まり、西久保弘道は警視總監たりしに過ぎず。河村が子杉孫七郎の女婿を以て羽振好く、夙に群を抜いて宮内次官たりし時、彼れは纔かに大藏の一局長たりき。然るに一たび伯寺内に知らるゝに至りて、儕輩を凌いで藏相に躍進せるは、自力以外更に好運の賚ならずんばあらず。

彼れにして倘し伯寺内に値ふの機なくんば、恐らく斯の好運を把握し得ざりしならん。其の機を逸せるが爲に藏相たるべくして未だ藏相たらず、或は永久に藏相たるの日なかるべしと思はるゝ者、男目賀多種太郎、子三島彌太郎、荒井賢太郎の如きあり。荒井にして單に朝鮮の關係を云々せば、寺内の下に藏相たるべかりしなり。其の藏相たる能はざりしは好運の未だ到來せざるが故のみ。彼れの寺内との關係未だ荒井の如く深

からざるに、忽ち拔擢されたるは、其の地位荒井よりも卑くして採用に便なりしか。但しは、其の手腕の荒井の上に在りと認められたるに由るか。何にしても、官界の好運兒なり。

然らば、此の好運兒勝田の吏生涯は如何。試みに其の頁を通覽するに、乾燥無味の累加にして、何等文彩の見るべき者あるに非ず。大學を卒業するや大藏屬となり、翌年十二月漸く文官高等試驗に合格し、三十年七月稅關檢査官に任ぜられたり。之を官海游泳の手始として、稅務監督官、函館稅關長兼函館稅務監督局長、稅關事務官兼大藏書記官、專任大藏書記官、臨時國債整理局書記官等を勤め、稅金と借金の事を熟知するに至りて、遂に國債整理局長となれり。其の間の實習の模樣は、玆に論ずるの要なし。次で理財局長たるに及んで、主計の手腕、其の名に背かざるを認識され、早くも次官たるべしと豫期されたるに、數年ならずして果して次官に陞進せり。吏路漸く開けて、薫風の世界に面接するの感あり。

然れども、斯の時彼れは最早俳人明庵に非ずして、官人主計なり。官海游泳の技と事務を處理するの手腕とは大に練達せりと雖も、未だ俳味の醇を掬するに到らず。否、寧ろ俳味を忘れて、吏員をなつかしむの官能銳敏となれり。一句を捻出するの風流に背いて財政に親しめるが故に、彼れが頭腦と手腕とは其の方面に敏感となり、敏活となり、天成の事務家となれり。官遊二十年、之を貫くに簿書堆裡の日月を以てす、如何に鈍感の者と雖も吏臭に染まざるを得ず、況んや彼れが如く怜悧に、彼れが如く機敏に、彼れが如く計畫的なる者、豈一もなや。彼れが新閣の[illegible]と化し、財政計畫の頭腦其物よりも、財政事務の手腕の發達せるは其の所なり。

當時藏相たる男高橋は財政家を以て自ら任ずること强く、他の言を聽かずして、己れの主張を貫かずんば止まず。自說を固執するに頑强なると共に、却々の理窟屋なり。其の女房役として、勝田も無氣骨の折れる事なるべし。加之、外債募集に味を占めたる積極主義者と、國債整理の手腕家との道行なれば、隨分不快なる事もありたるなるべし。而も柔能く剛を制して圓滿に通行し、亭主の脫線を取締りて、鍋組内閣に破綻を生ぜざらしめたるは、彼れの手際なり。唯斯の如き手際の人なるが故に、百尺竿頭更に一步を進め、自らの頭腦を以て亭主を支配し、家政を切り盛りする威力ある者に非ず。定められたる方針に由りて事務を遂行し、遺算なきを得るの練磨されたる才能を有するが特色なり。同じく次官なりと雖も、夫の若槻禮次郞が依任藏相桂の下に在りて、隱然重きを成し、計畫遂行共に自ら所じたるの生彩に比すべくも非ず。

畢竟するに、彼れは循吏なり。綿密にして、忠實なる屬僚なり。探算に巧なる事務官なり。自己の才力を信じて剃刀を揮ふの辣腕家に非ず、長上を壓して私曲を行はんとする詐略家に非ずして、健全なる常識を以て事を運ばんとするの打算家なり。彼れが乾燥無味なる吏生涯を遍歷して、總登りに登りたる跡を見れば、何としても覇氣縱橫の人物なりと思ふ能はず。又計數の上に自家の哲學を立し、一世を指導するの經世家、

乃至經綸家なりとも信ずる能はず。倘し彼れを以て偉なりとせば、そは事務官の雄なりとの見地より來らざるべからず。

三、藏相としての彼

大正三年四月山本内閣の瓦解と共に排斥せる勝田は、勅選議員の群に入りて、上院の一席を贏ち得たり。年來御本公の賜なりと雖も、伯山本の推薦なくんば如何で斯の如くなるを得んや。彼れは伯が組織内閣の次官たりし關係より、男高橋の女房役たりし縁故より、政友會と不即不離の境地に立てり。之を以て政界の餘裕派と稱すべくんば、彼れは洵に俳諧より悟入せる、低徊趣味の愛用者なり。屬僚としての幾年かは若槻の下にありしが故に、淺からざる恩顧あり。近く政友會出身の藏相二人の下に屬僚たりしが故に、捨て難き縁故あり。憲政會に色目を使ふと同時に、政友會に秋波を送るを忘れずと云はば、餘りに彼れを多情なりと貶するに等しかるべし。兩者の間に引張凧となる程の人物なりと申さば、彼れは大に男を揚ぐべし。彼れは市原盛宏の歿後を承けて、朝鮮銀行の總裁となれり。是れ大正四年十二月四日の事にして、大隈内閣の時代なり。銀行は黨外に超立するもの、憲政會側の肝煎に依りて任に赴けるも其處に何等の醜關係の成立する筈なく、又之を豫想すべきに非ず。大隈内閣の彼れを選任せるは、彼れが理財の手腕を認め、鮮銀經營の適任となせるに相違なしと雖も、亦彼れが政界の餘裕派たりしが故なり。

一昨年十月九日寺内内閣の成立するに及んで彼れは再び大藏次官に轉じ、兼任藏相寺内の女房役となれり。曾て公桂は次官若槻を信任するが故に藏相を兼任し、今又寺内の勝田に信賴して兼任せるを見る。蓋し公の故智を學びて、其の骨を得ざる者ならずんば非ず。公は武辨たるに似ず、一種の財政眼を有したるも、伯は然らず。況んや勝田の頭腦手腕、未だ若槻の如くに熟せざるに於てをや。果實の新鮮を割くの氣分は禮次郎之を有するも、勝田は未だ之を有せず。前内閣の豫算を踏襲する、或は無事なるを得んも、新に豫算を編成するに際して、果して能く之を按排し得べしやとは、當時疑問とせる所なり。然るに朝鮮總督たる伯の眼に映じたる、鮮銀總裁たる彼れの手腕は極めて賴母しき者に印象して、其の幻影を拭ひ去る能はず。遂に第三十九議會の開會間際に至りて、彼れを名實共に藏相たらしめたり。彼れが此の好運を把握して微笑せる時財政の重任は彼れの双肩を壓し來れり。而して彼れは明治ッ兒の面目に掛けても、慶應以上に劣らざるの活動振を示さざる可からざるに至れり。

然るに、今次彼れが編成せる所の豫算は如何。獨り政府反對黨のみならず、與黨側にも異論あり。或は支離滅裂なりと非難するもの、或は出鱈目なりと痛罵するもの、或は姑息不徹底なりと嘲笑するもの、擧げて數ふべからず。議會開設以來政府豫算に非難なきは無しと雖も、今次の軍國豫算の如く異論の紛々たるものは非ず。斯かる支離滅裂の豫算を編成せざる可からざるに至れる所以は、國防計畫に關して秘密主義を奬すると、與黨の主張を迎合せざるべからざると、各省の分捕的要求に餘儀

なくされたるに由るべけんも、彼れが牢固たる方針の下に、確乎たる態度に出づるの勇なかりしに歸せずんば非ず。尤も彼れが解明せる豫算編成の方針の、國防の充實を首位とし、時局に伴ふ產業上の施設を次位とし、一般普通經費を第三位として之れに緊縮節減を加へたるに對しては何人も大體に於て同意する所ならんと雖も、其の豫算綱要を瞥見する時は、又何人も其の不徹底なるに一驚を喫せざるを得ざるべし。國防計畫の方針を不明瞭にして世人を欺瞞し、一時を糊塗せんとするが如き、增稅計畫の不統一にして誠意を缺き、戰時を機會に苛斂誅求すれば以て足れりと爲すが如き、即ち是れなり。而も彼れは此の矛盾撞着せる計畫を防護するに、社會政策及び稅制整理の兩刀を以てす。何んの心たるを解するに苦しむ。通行稅及び石油消費稅の廢止、綿織物に對する稅率の輕減、五百圓以下の所得稅の免除の如き、社會政策の實行に相違なからんも、通信料の引上、自家用醬油の減石、飴稅の新設の如きも、尙社會政策なりとして稱揚するを得べきか。一方に少許の廢減稅を行ひて、他方に多大の增稅を課するが如きは、明かに彼れが解明を裏切るものなり。而して又稅制の整理と稱しながら、些も地價修正を顧みざるは何んの故ぞや。苟しくも國防充實の爲めに增稅を敢へてする以上、其の計畫は用意周到にして、論理の徹底せる者ならざるべからず。漫然稅種を列擧し計數を合せて以て、增稅の能事終れりと爲すが如きは、吾人の取らざる所なり。

惟ふに今次の增稅計畫は、四五の苛斂誅求の術者の捻出に係り、彼れが頭腦の一大溶爐に投ぜられて、淘汰され、組成されたる者に非らざるべし。何となれば、其の計畫に何等の統一なく、唯生の儘に羅列されたるに過ぎざればなり。倘し彼れ自己の頭腦に依りて、其の矛盾撞着を矯正し能はずとせば、彼れに組織の能力なく、計畫・手腕なしと斷ぜざるを得ざらんとす。縱令之れありと雖も、內閣、重きを爲さざれは、自家の抱負を手腕に實現すること能けず。結局泣寢入の已むなきに至りて、責任の前に恬然たらざる可からざることあり。聞くが如くんば、今次の豫算編成に際し、各省の要求多きに苦しみ、其の取捨は一に首相寺內及び彼れの手に依りて行はれたりと。果して然らば、國防に對する增稅計畫の不徹底は首相の壓迫する所となりて、陸軍の許も出でざるに非ざりしか。處世に怜悧なる彼れが如き者ならざらんか、或は冠を挂けて去りぬべき態度を以て、壓迫を反撥せるや知るべからず。

さはれ如何に隣國の革命に刺戟されたりとは云へ、往年社會政策を以て社會主義と混同して恐怖せる官僚政府が、臆面もなく中產階級乃至勞働階級を云々し、其の名を社會政策に假りて增稅を是認せしめんと圖るは、洵に今昔の感に堪へざるものあり。其の遣口の老猾は即ち老猾なるも、社會政策の新聲を發し來れるを多とせざるを得ず。此の一事、確かに明治っ兒たる、藏相勝田だけの新味はあり。事務に敏活に、計畫に粗放なるは、彼れが未熟の致す所、今俄かに如何とすべからず。

筆を擱かんとして、駄句偶成す。自ら稱して、俳春秋なりと云はんや敢て、明庵藏相に呈す。（大正七・一・一八）

辻褄の合はぬ豫算の寒さかな
鮟鱇も河豚もごつたや鍋の中
誅求の眼ととかぬ冬田かな

▽もつと思ひ切つて遣れ

早川鐵冶

勝田君と吾輩とは同村に住んで居るものである。即ち勝田君は中澁谷で吾輩の處は下澁谷であるから、呼べば應へる處に住んで居るのである。エラク親しくは爲て居ないが而識の士ではある。吾輩が太大の體を腎臓病に脳まされて、活動すべき時期に活動も出來ず、天下の形勢を殘念乍ら床の中で觀てゐるのに非常に同情を寄せてゐる。勝田君が吾輩に好意を有つてゐるから、吾輩も勝田君が贔負である。だから吾輩をして勝田君を論評せしめても、惡い方面は考へて居らん。

併し今度の豫算案などは吾輩から云へば、もつと思ひ切つて遣るべきで、あゝ右顧左眄する必要はないと思ふ。國家觀念の全く缺如してゐる議員や政治家の醜類を對手にするのであるから、此れ位の懸け引や細工は必要だと勝田君は云ふかも知れない。併し苟も國務大臣として國事を擔し行政整理の任に當る以上は、誠心誠意を以て堂々猪突的に其抱藏する經綸を行ふべきで、區々たる懸け引や小刀細工は禁物である。から云ふ主義を取る早川から觀ると、どうも今度の豫算案は如何にも微温的であつて、宜河多事の今日に出す施設としては利口過ぎた遣り方で、面白くない。床次君は昨日(二十二日)演說で、盛んに射擊を試みたと云ひ、政府の意見が徹底しないと云つて非難してゐるが、吾輩も幾分床次君と同一の意見を有つてゐる。殊に成金税などはもつと思ひ切つて遣るべきである。彼等成金者流は偶然の出來事で意外の財を得たものである。彼等の内一人だつて有爲の財ない。皆知れ切つた、つまらぬ輩である。自力で一生努力しても迚も今度得たやうな富を作り得るものは一人もゐない。皆時運の然らしめたものである。であるから國家は彼等僥倖者をしてどし〳〵國家に對して十分の税金を拂はしめて然るべきである。一體日本では寺内君などを軍閥主義の頭目のやうに云ひ囃すが、吾輩から觀れば寺内君などは未だ〳〵實に寛大で、手緩い遣り方であると思ふ。見給へ、英國のロイド、ヂョーヂや米國のウイルソンなどは、一方演說をやつたり敎書を發して頻りに獨逸の暴戾なる軍國主義を痛責して、民主々義の爲めとか、人權尊重とかを標榜しながら、一方に於ては民主々義や平和主義では今日世界列強の間に介在が出來ないと云ふので、着々國防充實の手を擴げて、或は徴兵令を布いたり、或は鐵道の國有などをどし〳〵斷行し、更に物價の激しい調節令を行ひ、殊に思ひ切つた成金税を掛けて、戰爭と云ふ僥倖に由つて却つて浮雲の富を爲した成金共の度肝を拔いてゐる。軍閥とか官僚とか云はれながら、現内閣の諸公の遣り方は、之等英米の政治家に比べると、實に寛大で、慈悲が深か過ぎる嫌がある。諸公にして苟も之れが國利民福を增す最良の方策であると確信されたなら、其方策を誰に憚る處もなく、旗鼓堂々天下に施行して貰ひたい。國家觀念のない、代議士や民間の愚論卑見に顧慮して狐疑し逡巡するのは却つて國家の爲めではあるまい。

大分議論が岐路に逸れたやうだが、偶々藏相の人物を問はれたに際し藏相許りでなく現内閣の諸公の餘りに温和に過ぎるのを氣の毒に思つてこんな事も云つて見たのである。

評論

現下の我政界の活畫

大山郁夫

一、識者と民衆との接近

大正六年度の豫算は、寺内内閣が自ら好んで公言した如く、大體に於て大隈内閣の成案を踏襲したものであつたといふ事實は、種々の點に於て現内閣に絶好の辯解の餘地を與へた。けれども大正七年度の豫算は、最早善政主義を標榜する現内閣の智嚢を絞り盡くして拈出したものであるから、國民が之に依つて現内閣の抱負經綸を問ひ、その所謂善政主義の内容の果して如何なるものなるかを檢索せんとして居るのは、素より當然の仕誼である。近來政府がその概要として世に公表したるものに對して識者の是非（但し非とするもの多きを占めて居ることは、世人の周知する通りであるが）の意見が頻々として新聞紙・雜誌の上に現はれ、而して一般國民がそれに向つて曾つて見ざりし程の注意を拂つて居るのは、極めて歡迎すべき現象である。惟ふに今度の豫算案は、政府が社會政策を名として世間に投げ出したものだけあつて、良くも惡るくも國民の實生活に觸れて居る部分が顯著であるために特に世人の注目を惹き、從つて戰局の長曳くに從つて益す底深き影響を受けたる經濟界の動揺が、全般國民中の知識の分量を最も多く代表して居る中流階級の物質生活を非常に不安定にしたことの結果が、即ち今回發表せられし豫算の概要、及びそれに對する識者の解釋及び批判に向つて集中せられたる興味の形式を以て現はれたものであらう。

その原因がいづれに在るにしても、兎に角國民の比較的多數の注意が國家政治の重要なる一局面に向つて動く樣になつたことは、憲政の進歩のために極めて頼母しいことである。殊に此事は、少くとも二つの慶賀すべき傾向を暗示して居るものと見る事が出來る。その第一は、識者と民衆との間隔の漸進的接近である。その第二は、民衆政治の基礎の深さと廣さとの漸進的增加である。

識者と民衆との接近は、單に一般社會生活の進歩の上より見て慶すべきことであるのみならず、識者階級そのものにも、多大の滿足と刺戟とを提供するものである。近代社會が解決せんとする重要問題の一は、單に經濟的財貨の公平なる分配であるばかりではなく、知識、趣味、藝術といふが如き精神的・若しくは文化的財貨、及び健康とか娛樂とかの如き文化的財貨の基礎若しくは補足物たるものを含めての公平なる分配——若しくは「分配」といふが如き因襲的辭句を離れてもつと適切に言ひ現はせば、その公平なる共同享受である。尤も社會的恩惠の共同享受の半面は社會的犧牲の共同負擔でなければならないが、要するに天賦若しくは修養に依る才能に應ずる分業の原則と兩立する限りに於ける幸福及び犧牲の社會化は、階級的差別の基礎の上に立てる封建制度打破の事業の當然の歸結であらねばならぬ。この意味に於て、曾ては特殊の學者仲間に獨占せられ、若しくは封建諸侯を中心とする支配者間にのみ利用せられたるに止まりたる經世的知識が、漸次に一般民衆の共同所有物に化しつつあることは、惟に近代社會の最大なる獲物の一である。又學者識者の側より言ふも、自己の學殖識見の効果の及ぶ範圍の擴大したることは、それだけ自己の精神的領土が廣まつた譯であるから、一方に於てその責任感が益す强烈に趣くと同時に、他方に於てその快心の度が益す增大するの結果を見るのである。

次に立憲政治なるものは、言ふまでもなくその最終の歸趨に於て、一般民衆の協同參加を豫想するものであるから、一般民衆がその運用に對して緊切なる興味

を示す様になればなる程、益す少くともその第一次の目的が到達せられたるものと見ることが出來るものである。而して一般民衆が之に對して緊切なる興味を示すことは、彼等がそれと彼等自身の實生活との密接なる連結關係を理解することを前提とするものであるが、斯の如き理解を進むる上に於て、識者階級が重大なる職掌を有することは、近代社會生活の特徴の一である。立憲政治は識者階級の指導を缺く時は、直ちに衆愚政治に墮する素因を有するものであつて、而して衆愚政治は暴主政治乃至專制政治と壁一重の間に在るものであることも亦、上古希臘時代以來現代に至るまでの歷史が、反復實物教育に依つて明示し來つた所である。

殊に近世に於ては社會生活上の諸關係が極端に複雜化した結果、各種の知識が著しく專門的に分化した。此趨勢は國家の政治關係の方面の上にも亦發現して、今日に於ては各國の軍事、外交、內政、教政、財政に涉る萬般の事項は、到底一人の力を以て之を處理することも出來なければ、また之を理解するためにも各項に關する專門的知識がなければ、之を如何ともすることが出來ないのである。果して然らば理論上如何に立憲政治の運用に關しては民衆の監視抑制が必要であると言ふことが確說せられても、國家政治の局面が斯の如く普通人の捕捉理解を困難とする事情があるに於ては、識者の指導なき民衆が卒然として不用意に之に面する時は、忽ち望洋の嘆に囚はれて仕舞ふことは必然であつて、その結果は自暴自棄より生ずる衆愚政治に陷沒するか、否らざれば專制政治家の傀儡となることである。されば民衆を此無力の狀態より救ひ出だす任務を有するものは、實に政治の各部門に關して專門的知識を所有する識者であらねばならぬ。

民衆政治は一般人民の教育の上に立たねばならぬとは、可なり言ひ古されたることであつて、現今に於ては閥族打破の標語と共に、最早陳腐なる語彙に屬するものであるが、その適用性に於て依然として生命を失つて居ない點に於ても亦兩者その揆を一にして居るの

である。けれども民衆が如何に教育に依つて啓發せられても、その全般が悉く國家政治に關して專門的知識を獲得するが如きことは、到底望み得べからざることである。されば立憲政治の下に於ては各種の政務に關して專門的知識を有する識者の任務は、非常に重大なるものであると謂はねばならぬ。一般民衆に就いて教育を云爲するは、少くとも現今の情態の下に於ては、彼等が是等の識者連の言說を理解し批判し得る程度を以て滿足せねばならぬ。

近來殊に著しく目立つ樣になつた所の國家問題に關する所謂「學俗の接近」は、右に述べたる主意に依つて、極めて喜ぶべき現象である。此「學俗の接近」を最も頻繁に口にするものは、現内閣の閣僚中に在つては、恐らく後藤内相であらう。併しながら彼が此表現に依つて一夕少數者の官學の教授連を招待して意見を交換すること以外に、どれだけのことを意味して居るかは、我等に取つては不可解の謎である。少くとも彼の管掌する警察權が、學者論客の精神的活動及びその發表の上に不當の重量を課して居る間は、世人は彼の口癖に主張する「學俗の接近」の眞意に對して不測の疑惑を晴らす機會がないであらう。此點より見れば、大正六年は實に近來の不祥事の頻發した歲であつた。

併し乍ら斯の如き窮屈なる範圍内に於ても尙ほ、學者識者が次第に民衆に接近しつゝあるは、近世紀の發明界の誇りたる活版印刷術の最も聰明なる利用として推賞すべきものである。それにしても此問題は、只推賞するだけでは濟まされないものがある。蓋し國家問題に關して學者識者の意見の民衆に徹底することを喜ぶべきものゝ一つに算ふる理由は、單に彼等の專門的知識を尊重するがためのみに出づるのではない。それと同時に彼等が常に政黨的若しく階級的偏見に囚はるゝことなく、自由の境地より大局を達觀し、公平なる見解を以て民衆を啓發するものであるといふことを前提として居るからである。官僚政治家や、政黨政治家や、乃至、政黨的官僚政治家、及び官僚的政黨政治家や、其他各階級の代表者の言說は如何に多く參考として問

くべき價値を有して居るにしても、徹頭徹尾之に傾倒することは、極めて危險な事である。されば乙そ公平なる見地より一切の國家問題を解釋する學者識者の精神的活動を以て、今日の政治生活の順調なる進歩のために、絶對的に必要なるものとする所以である。然るに是等の學者識者までが、階級的若しくは政黨的色彩に浸潤する樣になれば、國民の期待がそれだけ裏切らるゝことになる結果を見るであらう。

斯の如く考へ來らば、所謂御用學者なるものは、その系統が何れに屬するにせよ、その立憲政治に對する神聖なる使命を冒瀆するものとして唾棄すべきは一である。又官學・私學に對する國家の待遇の上に於ける區別の如きものも、此點より見て極力排斥すべきものである。今回樞密院會議に於て可決せられたる高等試驗令に於ては、一見此區別が撤廢せられて居る樣に見えるが、事實に於て試驗官が官學教授中よりのみ任命せられるのならば、その區別の撤廢は有名無實に了るべきものであらねばならぬ。又昨今臨時教育會議を通過したる學制案の如きは、此點よりしても深き注意を以て監視することを要するものである。最後に起る問題は、根本的に考ふる時は、大學官營なるものが果して合理的のものなりや否やの問題である。大學の教授が國家より官吏として待遇せらるゝことは、現今に於ても既に幾多の有形無形の不都合を生じて居るのである。而して國家の文化生活と最も密接なる關係を有する文科大學の教授連の間に於て特に形式主義の一面を代表する固陋なる官僚思想が、最も深き根を張つて居る樣に見受けられるのは、我國民生活の前途の發展のためには、慥に深憂大患の一である。素より個々の例外の存在するとは事實であるが、併し例外はどこまでも例外である。夫の法科萬能主義に對する文科側の反抗も、單に官學の法科に對する官學の文科の不滿である限りは、それは極めて忌まはしき我國の思想界の一部の缺陷を暴露したものたるに過ぎないと思ふ。

尙ほ之に關聯して考へられることは、我國識者階級の間に、適當なる組織の缺乏して居る事實である。國

家現象に關する個々の特殊問題の研究者間の研究の題材の分配の上に、また特殊問題研究者と、一般的題材の下に於ける綜合的系統整理者（システマタイザー）との間に、將又、此兩者と最廣義に於ける政治的・社會的評論家との間に、當事者の才能の適應性とその選擇の自由とを毀損せざる範圍内に於て、今少し有機的組織が行はれて、以て相互間の意思の疏通の途を開き、且つは材料の供給を便にする手段の講ぜらるゝことは、我國の將來の政治生活のためにも極めて望ましきことたるを失はないのである。

立憲政治は造らるゝものに非らずして成長するものであるといふ、長期間に渉つて無批判的に受け容れられたる命題は、向後各種の方面より、少くとも多大の制限を受けねばならぬものである。

二、理想と誠意と熱の缺乏せる政界

世人は官僚政治の攻撃に聞き飽いた。故に再び政界に返り咲きした官僚は、今やその全盛を極めて居る。政黨は人氣に依つて立つて居る。故に憲政擁護運動が大向ふの喝采を受けなくなると、或るものは忽ち軟化して官僚の走狗となり、或るものはそれ程までに墮落せずとも、之に對抗する氣力を失つて仕舞つて居る。政友會、國民黨、新政會の御用振りは更にも言はず、唯一の野黨たる憲政會までが引込思案になつて、今度の議會には、政府不信任案の提出を見合はせる筈と傳へられて居るのは、腑甲斐なきことの極みである。

政府不信任案の効果は、それが議會を通過しない場合に於ては絶無であると思ふのは、餘りに唯物的功利主義に囚はれた見方である。不信任案はそれが議會を通過すると否とを問はず、目下の場合に於ては、議會に代表せられざる多數國民の間に磅礴する官僚政治否認の聲を公衆の耳目に新に示現することに依つて、一般的反省を促す上に大なる効果のあるべきものである。政府不信任案の議會に於ける否決は、何れの場合に於ても、國民の政府に對する信頼の尙ほ去らざることを示すものであるといふが如きことは、普通選擧制、若しくはそれに近き選擧制度を有する國に就いてこ

そ、始めて言ひ得べき理論であつて、我國に於ては全然その適用性を缺如して居るものである。若し强ひて此理論を我國の狀態にも適用せんとすれば、それは直ちに、選擧權なきものは國民に非らずといふ結論に導かねばならぬものである。而かも斯の如き非人道的見解は、文明世界に於ける最後の奴隷解放を見た時より既に半世紀以上を經過せる現代社會に於ては、最早秋毫も假借すべからざる所のものである。

けれども現代日本の政治家及び黨人が常に氣にして居る人氣なる者は、百五十萬人そこそこの選擧權所有者の人氣であると言ふ事實は、多少右の非人道的見解の臭味を帶びて居るものでないとは謂へない。我國に於て選擧權擴張の必要が常に反復せらるゝに拘らず、それが毫もその實現を見ずに終るのは、蓋し其所緣の淺からざるものがあるのである。抑も國家政治上の緊急問題の解決を徒らに永曳かせることに依つて、それに對する正當なる要求の反復を、根本正氏の未成年者禁酒法案に關する年々の說明の樣に、世人の耳に滑稽に響く程も陳腐にして仕舞ふことは、最初よりその要求の聲を揚げざるに勝る罪惡である。而かも理想と、誠意と熱とを缺ける我國の議會に於て、此事が絕えず行はれて居ることは、政治を玩弄物視する我國の政治家及び黨人の惡習慣を遺憾なく反映して居るものである。

三、國防充實費の教訓

寺内内閣の善政主義の試金石とも見るべき次年度の豫算案の上に現はれたる破綻は、從來に於ては官僚政治否認論を一種のセンチメンタリズムと見做し、之に對して高踏的態度を取りし幾多の中立的傍觀者を失望せしめたことは、特に注意すべき事實である。

既に周く世間に知れ渡れる如く、この豫算案は、歲出の部に於ては國防充實費の要求を以て最も顯著なる項目とし、歲入の部に於ては社會政策の實行を特徵として居るものであるとせられて居る。少くとも現政府は斯の如く吹聽して居る。

國防問題に關しては、不幸にして、我國の公衆は一は

從來に於ける官僚の秘密主義のために、一は我國の憲政の跛行的發達のために、此方面に於ける政府の施設を嚴重に監視するに十分なる豫備知識を缺き又此方面に關しては軍閥以外に國民を啓發するに足る能力を有する指導者を多く有して居ないのである。加之、所謂識者階級の人々にして、多少此問題に關して一家の見解を有する人々も、軍閥關係よりの高壓のために、大膽にその所見を公表することを憚る事情の仄見ゆるは、甚だ遺憾とすべき事である。

斯の如き情態が行はれて居るがために、官僚軍閥系の人々は得たり賢しといふ勢で、或は獨逸の航空機や潜航艇の襲來が眼前に迫つて居るが如きことを言ひふらし、或は黃白二人種の衝突が大戰後に息をも繼がせず破裂すべきものであるかの如く說き立てゝ、國民をして如何に重大なる負擔をも、熱湯を吞む思ひをしても甘受せしめやうとして居る。

我國民が祖國の安全のために必要とならば、如何に主義として平和・人道を絕唱するものと雖も、現實政治の問題の前に、血の出る樣な重稅でも喜んで負擔すべきことは、復疑を容るゝ餘地のないことである。現に次年度の豫算に現はれたる海軍の費額に關しては、其過小を責めて居るものこそあれ、その過大を訴へて居る者の絕無なるに徵しても、此事は些の危ぶなけなしに確說し得られるのである。併しながら斯の如き國民の忠誠奉公心は、爲政者が賴母しき最後の堡壘として神聖視すべきものでこそあれ、斷じて之を濫用すべき筈のものではない。

この度要求せられたる陸軍軍備充實費にしても、祖國の安全のために絕對的に必要なるものとせば、國民は素よりその支出を一も二もなく翼賛すべきも、只それを決定する前に當り、國民はその急不急を研究する餘裕を與へらるべきことを要求する權利を有して居る。抑も限りある國民的財力を以て限りなき國家生活上の需要を充たさんとするに際しては、國民が實際的必要の見地よりして、各費額の權衡を査覈し、歲出に關する政治家の放縱を抑制し、その節制を促すことは、

軍權者流の考へて居るらしき國民的罪惡を構成すべき筈のものでないのである。

殊に一派の軍人連が熱說して居る樣な獨逸の航空機や潛航艇の襲擊に關しては、露西亞がその國内通過を認容すべきや否やの問題を離れても此點に關して獨逸が現在及び相當の將來に於てどれ程の餘力を有して居るものであるかに對しては、國民は當局者の威嚇的に非らざる親切なる說明を聞かねばならぬ。又一部の官僚政治家――而かも一方に於ては日英同盟は依然として帝國外交の樞子であると吹聽し、又日米共同宣言を以て近來の成功なりと誇示する一部の官僚政治家が、他方に於て公然豫言して居る樣な人種戰爭が戰後に於て勃發するものとせば、國民はこの危險に對する豫防としては餘りに不十分なる――殊にその場合に於て當然我國の共同戰爭者たる支那の現狀より推せば明白に不十分なる十八年計畫の國防充實の前に立ちて、今少し熟慮を廻ぐらす餘裕を與へられねばならぬ。

政府の與黨及び反對黨は、そのゐのゐのが過日舉行したる大會に於ける宣言、決議、及び各首領のなしたる演說に據れば、何れも皆舉つて政府の要求する陸軍軍備擴張費を鵜呑みにしさうな模樣である。如何にも將來いつかは權力に有附くべきことを豫想して居る各政黨の立場より見れば、現内閣をして此難關を切拔けしめて置くことは、それだけ來るべき歡びの日に自黨の負擔を輕くする見込のあることであるから、苟くも此種類に屬する事は何でもかでも今の内に早く片附けて置く方が利益であらう。けれども國民の共同利害を基礎とすべき國家政治が官僚と政黨との都合に依つて切廻されては、國民は堪つたものでない。故に國民は內外の情勢に鑑みて――この所、官僚及び政黨政治家の慣用語を借る――國防費額の過不足、及びその支出の時期に關して、自ら一層精細なる研究を積むのみに止まらず、此點に關して極力各政黨の反省を促さねばならぬ。

兎に角國防充實費上の諸問題に關聯して近來簇生したる多くの馬鹿げたる議論の連續は、無知なる國民は

容易に專制政治家の傀儡となるべきものであると言ふことを實證するに餘りがあつた。我等は今や我等自身が切實に體得したる此事實の教訓をば、永久に記憶しなければならぬ。

四、官僚式社會政策

寺内内閣に至つて始めて社會政策を高唱したのは、我國の政治的施設中に於て最も世界の進運に遲れた部分に着眼したものとして、單にその事のみより言へば推稱に値するものであつた。併しながらその事實の上に現はれる所に就いて之を見れば、その結果が殆んどあらゆる部分に於て、その當初の聲言を裏切れるものであつたのは遺憾の極みである。我等は如何に政治的信條に於て官僚内閣を否認しても、既成の事實として眼前に存在して居る此官僚内閣に失政あれとは、決して祈ることが出來ない。官僚内閣を葬るには、別にその手段がある。何ぞ必ずしもその執政上の敗績を須たんや。故に如何なる種類の内閣が政柄を執つて居るにしても、苟くもそれが政柄を執つて居る間は、いづれの施設に於ても敏活なる能率を示すことは、苟くも國家政治の有機的性質を認める限りは、國民生活全體の上より見て慶すべきこととすべきである。是れ我等の如き戰爭の渦中に身を置かざる者の、政黨政治家とその立場を異にして居る所以である。

けれども寺内内閣成立以來の内治外交上の失敗といふよりは寧ろその無力が、大體の上より見て最早隱蔽するに由なきものとなつた事實を如何ともすることが出來ない。只その對米關係に於て日米共同宣言を行ふことを得たのは米國をして既成の事實を承認せしめたものに過ぎないものとは言ひ條、公平なる見地よりすれば、之を或る程度に於ける成功と言つて差支ないと思ふ。尤も米國も亦之に依つて大に得る所こそあれ、毫も失ふ所なかりしことや、當時英、佛、伊等に於ける政治家及び輿論がそれを支持したことや、その締結の機會が米國參戰の後であつて、共同戰友としての兩國間の感情が非常に良好であつたとや、又極めて皮肉なるアイロニーではあるが自國民に對して言論思想

の上に峻酷なる待遇を與ふる現内閣の代表者たる石井特使や珍田大使が、米國と英國とで思ひ思ひに自由主義とか人道主義とかに共鳴する演説をして人氣を取つたことなどが、寺内内閣その物の成功を大に割引する要素となつて居るけれども、兎に角我等は之を失敗と呼ぶ根據を有しないことを白狀せねばならぬ。けれどもその金鐵禁輸問題に關する交渉は、如何なる贔負目でも之を成功とは謂へないのである。殊に寺内内閣自身は打消して居るが、世評の傳ふる所では、船舶管理令制定の眞個の理由の一部が、それに關聯して居たものとすれば、猶更下策を行つたものと謂はねばならぬ。若し夫れ對支外交の失敗に至つては、其當初の不干渉主義が、散々に裏切られて、今や支那官民の大部分の侮辱若しくは怨嗟を買つて居ることは、對支外交の刷新が寺内内閣成立の根本的理由の一と見做されて居つただけに、その敗績が更に顯著なるものであると謂はねばならぬ。後藤内相の三世貫通・内外透徹主義とやらに據れば、對支外交なるものがあるべき筈のものではないのださうであるけれども、對支外交といふ語は寺内内閣自身がその不自然なる誕生の時より引續き用ひ來つた所であるから、今更對支外交なるものがないから、從つて對支外交の失敗などといふ事のありやう筈がないなどとはいへた義理ではない。

且つ夫れ寺内内閣がその對内政治に於て、言論思想といふが如き國民の精神的活動の上に加へた暴戻に至つては、國民の文化生活の上に課したる苛税として、心ある者の寛假すること能はざる所である。昨年に於ける言論發表機關の所有者經營者間の恐慌と、それに伴つた苦悶とは、外部に表はるゝことが比較的に少かつただけ、その内部に於ては却て慘憺たり痛烈たるものであつた。殊に昨年中の言論抑壓政策の犠牲者中には、現代文明國に於て他に見ることを得ざる種類の悲慘なる精神的傷創を受けたものがあるやに傳へ聞いて居る。國家の大策樹立に無力なる寺内内閣が、國内の無辜の良民に對して強大なる警察權の閃きを見せるのは、一見矛盾の様ではあるが、古來外に弱き政府が内

に強く、自家の經綸に自信なき爲政家が、民衆の自由批評を防遏するのは、殆んど政治上の定則と稱して然るべき程の普遍的適用性を有して居るものである。

その他寺內內閣の物價調節令の內には、健全なる政治思想と時代錯誤の謬見との交錯紛糾して居ることは、自分は反復「中央公論」で論じて置いたから、今は之を繰返さぬこととする。又寺內內閣の擧國一致の支持の要求、及び國論統一の主張の基底に重大なる不合理の要素が潜んで居ることも亦、屢ば論述した所である。殊に擧國一致の支持を要求しながら、首尾一貫して秘密主義の外交を行ひ、肝腎の擧國一致の目標を公表して之を國民に謀らないから、外交調査會の議事をだに知る由なき國民の疑惑は只管增大する許りであつて、擧國一致の支持の向け所に迷つて居る有樣なのである。此點は聯合側諸國の政治家が、國民及び世界の視聽の前で堂々と戰爭目的を宣言して居る今日に於て、彼我の比較對照上殊に國民の失望を招いて居る。而かも官僚の辯護者は、少くとも表面に於ては、是等の外國政治家の戰爭目的反復の擧を嗤ひ、「戰爭の目的は唯勝つに在り」といつた樣な、第一次的な、單純な、原始的眞理を手柄顏に述べ立てて居るのは、只國民の反感を增す許りである。

併し乍ら斯の如く現內閣の施設に對して、自分が國民の一員として抱懷して居る不滿足を陳列することは、本項の本來の目的ではなかつたのであるから、それは玆で打留めとし、例の豫算面に現はれたる社會政策的施設と稱するものに就いて手短に所見を披瀝しやう。この事を企つるに際しても亦、自分の政治的信念たる反官僚內閣的思想を全然拋擲し、虛心坦懷に批判力を行使して、如何なる種類の內閣が斯かる事をなしたにしてもこれだけのことは言はねばならぬと思ふだけの事を言つて見やう。

尤も豫算面に表はれたる新設稅(戰時利得稅)と廢減稅に關しては、自分は既に本誌の前號に於て一應略評を試みたのみならず、此問題に關して更に有力なる經

濟財政專門攻究者の解說及び批判が、本誌始め多くの新聞紙雜誌に表はれて、政黨政治家の批評以外に立つて、國民を多くの點に於て啓發する所があつた。而して是等識者の議論中に於ては、些少の點に於て相互間に異同があつたに拘らず、大體の論調に於ては、社會政策そのものは歡迎するが、現內閣の施設は不徹底のものであり、且つ矛盾撞着を極めて居るものであるとを切言するに於て一致し（素より一二の例外は自分の讀んだだけの範圍內にもあつたことは認めるが）、殊に本誌前號に揭載せられし福田博士の有益なる批評の如きは、甚だ彈劾的分子に富んで居るものであつた。斯の如き次第であるから、個々の稅目の細評は玆には之を避けることとして、只一二自分が刻下の時局より見て根本的解決を必要とするものと思ふ點を述べやうとして居るのである。

どの政治家も符節を合した樣に、時局の重大を叫んで居る。時局は如何にも重大である。これには疑を挾む餘地がない。それ程痛切に時局の重大なることが意識せられて居るものならば、之に應ずるためには、國家の政治上に社會改造上の根本的施設が少しは行はれても善ささうなものではないか。若し此機會に於て從來の因循姑息なる政策の上に大斧鉞を加ふるに非らざれば、之をなすに適當なる時期は竟に再來の期なく、ずるずるべつたりのまま放置せられたる萬般の社會的弊害に充てる日本を載せて、地球は永遠より永遠に廻轉するかも知れない。日本の政治家及び國民は、今こそ將來の社會的鞏固性の端緒を作るべく、殆んど國民性の如く固定して居るその妥協性及び無爲而化性の舊衣を脫する秋に際會して居るのであるまいか。

あらゆる場合に於て國內的革命は、最も忌むべきものである。併し現今の如く、國民をして時局の重大を意識せしめ、その成金崇拜の下司根性を擲たしめ、思ひを國民全般の共同利害に致さしむることが、少くとも他の何時の日よりも比較的容易に出來べき筈の機會の到來して居る際に於ては、政治家が彼等を善導することに心身を勞しさへすれば、毫も革命の慘禍を經ず

となくして、而かも之を經たるよりも有效に社會生活を改良し、我國民全般をして、切實に共同生活の恩惠を感ぜしめ、國家の神聖を體得せしむる素地を作ることが出來ないであらうか。換言すれば、此機會に於て我等は、現今に於て見るが如き「人」たらざる人々、若しくは「人」たる能はざる人々、若しくは「人」として取扱はれざる人々の群棲蔟動する狀態の絶滅せる健全なる社會的環境を直ちに作り出ださざるまでも、それを準備する位のことが出來ないであらうか。

我等は理想の社會の現世に築かるることを豫期しない。我等は世事の不完全と、人間の慾望の無限の増進性とに加ふるに、社會的・一般的禍福の外に個人的哀別離苦の存在するものであることを知れるが故に、虚空に花降り音樂聞え、人間に涙の乾き歡びの溢るる樂土の假初めにも出現することを豫期することもなければ、また涙の貴く悲みの神聖なものであることをも心得て居るし、且つは貧者の一燈・長者の萬燈の眞意をも悟了して居る積りであるから、貧富の差別なき平等一如の境涯の到來をも希望して居ないのである。けれども現代社會の基底に欝積する餘りに明白なる不公正を絶滅するだけのことは、此曠古の機會に於て之を完成したいといふ希望だけは、今玆に之を陳述しないでは居られないのである

下層社會の救濟問題も、之に含まれて居る。所謂中流階級の保護問題も亦、之に含まれて居る。勞働問題解決機關の設置も亦、之に含まれて居る。國民的保健事業も亦之に含まれて居る。小學校教員の優遇問題も亦、之に含まれて居る。尙ほ監獄改良、感化事業の振興、失業者保護問題、その他苟くも社會問題を以て目されて居る一切のことは、皆之に含まれて居るべきものである。

是等のことは、國防充實問題と同じく、限りある國民的財力を以て、限りなき需用に應じなければならぬものであるから、一網打盡的に之を實現することは出來ぬものであるが、少くとも政治家が今より衷心嚴肅に此問題を考慮して、少くとも陸軍軍備充實問題に獨

機獨艇の襲來の危險を絶叫すると同樣の熱心を以て、國民の公共心を覺醒し、その注意を此方向に進めねばならぬものである、

我等は如何に空想を逞しくしても、右に述べたる種類の社會政策の各項目が、一時に實現せらるゝことを信ずることは出來ないが、今度の豫算案に現はれたる所を以て見れば、平素社會政策を高唱して居る政府の施設計畫としては、それが餘りに貧弱なるに驚かざるを得なかつた。卽ち社會政策として見ることを得べき殆んど名義許りの計畫は、纔に歳入の部に於て數種の廢減税の形式で現はれて居るのみであつて、それも直ちに他の種類の間接税若しくは手數料の増率と交換せられて、差引零とならんばかりになつて居る。若し夫れ之を歳出の部に於て見れば、僅に市町村小學校教員俸給費國庫支出のみが、若し多少でも小學教員の俸給に影響するものとすれば、純粹に社會政策と見られるだけであつて、それから直轄學校教授俸給定率增加の如きも、多少近時頻々として起る高等學府教授の轉職問題の向後の豫防にもならうが、又中流階級の保護の主意にも適ふものかも知れないが、要するに全體の上より見れば、寺內內閣の善政主義を象徴する社會政策は殆んど全然消極的社會政策であつて、それも皆羊頭を掲げて狗肉を賣るの範疇に屬するもののみである。消極的善政主義は、現代が産んだ最も畸形なる産物の一であらねばならぬ。

國防充實費が歳出の部に於て異常の巨額を占むる際に於て、少しでも積極的社會政策を行へと言ふのは空想も亦甚しいとの批難が忽ち襲來しさうであるが、消極的社會政策を行ふがために生ずる收税額の減少を他の消費税を以て補塡するが如きことは、縱しその間に多少の手加減が用ひられてあるにせよ、それは空想より更に惡しき現實である。

且つ重大なる時局に鑑みて、社會的變動のために自己の努力の効果以上に巨大なる利益を得た者、得つつある者、及び永久に得べき見込ある者に、更に大な負擔を課することは、毫も不當ではない。又自己

勞に依るに非らずして祖先の遺產に依つて無爲にして遊食生活を營める者及び營み得る者より、國家の公益のために現今よりも更に多額なる貢献をなさしめ、以てその社會的害惡たる雄蜂的生活の罪業の幾分を消滅せしむる功德を施す餘地は、まだまだ大に存して居るのである。斯の如きことは平時に在つては、或は多少平地に波瀾を起す危險を伴はないでもないが、現今の如く國家の現在及び前途の行路に絕大なる難關の潜在若しくは顯在して居る時に當つては、今に於て之が實現の端緖を作ることは、比較的容易なものでなければならぬ。

無論之を行ふことは差當り不合理でもなく、又永久に不可能ではない。併し乍らいざ之に着手せんとすれば非常に大なる故障が起つて來る。それは財產階級及び之を議會に於て代表する政黨者流の反噬である。是に於て政府は之に對抗するために、昨日までの敵たる國民を味方に引入るることが必要である。これがためには政府は自ら官僚といふ特殊階級より引下つて一般國民の列中に伍するのみならず、國民の大多數に選擧權といふ武器を與へねばならぬ。無論衆議院も貴族院も、斯の如く徹底的なる選擧權擴張に對しては、猛烈なる反抗を提供するに決まつて居る。そして政府は一度は政權を抛たなければならぬ破目に陷るであらう。斯くて選擧權擴張問題は、益す難局に陷るであらう。且つ夫れ一たび政權を離れたる政府者は、益す深く國民中に分け入つて之と同化せねばならぬであらう。けれども斯くの如くすれば、始めて彼等は官僚といふ特殊階級として死する代りに、國民中の先覺者として永久に後世の記憶の中に生きるであらう。加之、彼等が最初に廟堂に於て提唱したる社會政策は、幾多の波瀾曲折を經て、玆に始めてその徹底的實現を見るであらう。是れ自分が一たび本誌前號の論文に於て暗示した所であるが、改めて玆に之を再說することの自由を縱まゝにしたことを許して貰ひたいと思ふ所である。

けれども右の樣なことを現在の官僚政治家に期待することが出來ないことは、改めて言ふまでもない。彼

等の權勢に對する執着心は、兵權に依つて支持せられて居ると云ふ强烈なる自覺が伴つて居るのであるのであるから、彼等が自ら進んで特殊階級としての結合を解體するが如きことは、到底望み得べからざることである。加之、彼等の世界觀が、彼等を驅つて徹底的に選擧權擴張の斷行の計畫を企てしむると云ふが如きことは、どうしても考へ得られぬことである。――けれども彼等が茲まで突貫して來るに非らざれば、彼等が對一對與黨の嚮背を顧慮しつゝ企畫する社會政策より碌なものが出で來ないことは、初めより判り切つたことである。

現官僚政府の弱點は、その與黨の嚮背を極端に顧慮する必要を有することである。此事は今度の豫算面には、國防充實費計上の上にも、歳入整理の上にも現はれて居る。加之、寺内内閣は内部の閣僚に對しても亦相應の顧慮を拂はねばならぬ必要にも囚はれて居る。それは今度の豫算面に於ては、減債基金の不合理なる處分の上に現はれて居ることは、旣に多くの批評家に依つて指摘せられた所である。寺内内閣が世人の豫想以上に長命することがあつても、最後の罅隙は此點より來るべき危險があるのである。寺内内閣には威儀を有する表面及び背後の統一者があるけれども、識見上の統一者がないのであるから、何かの都合で所謂一二閣僚の面目を立てることが出來なくなつた曉は、その動搖の危險が最も多い時であらねばならぬことゝ思ふ。

右は寺内内閣の成立上の弱點であるが、併し乍ら今茲に地を換へて曠古の時局に對應する能力如何の立場より見れば、寺内内閣の最大弱點はその閣僚全般に共通する思想の性質の最早時勢と相容れざるものとなつて居る事實であることは、以上に縷々として說き來つた所に徴して明白であらう。

進歩した國民間に瀰漫せる反官僚的思想は、決して一種のセンチメンタリズムに外ならざるものではないのである。

五、三政黨の態度

新年議會の開會前即ち一月二十日に於て擧行せられし政友會、憲政會、及び國民黨の各大會に於ける宣言、決議、及び黨首の演說に基き、各黨の態度に對する短評を試み、以て此稿を結ばうと思ふ。

政友會の態度は依然として是是非非主義の嚴正中立である。此政黨は常に時局の重大を力說するに於て最も努むる樣であるが、此時局の重大が平凡なる是々非々主義を産んだのは、如何にその黨全體としての經綸に乏しきかを語るものである。そして是を是とせず非を非とせざることを公然聲言せざりしだけが、まだしも取得であると謂はゞ謂はれるのである。

政友會の黨員中には、寺内内閣の内治外交上の施設に對する不幸を懷抱し、殊に次年度の豫算面の廢減税に關して反對意見を持して居るものが可なり多い筈であるが、原總裁の演說中に於ては、それが少しも現はれて居ない。故にその演說筆記を讀んだゞけでは、是々非々の方針の持續だけは看取せられるけれども、何を是とし何を非とせんとして居るのかは、全然判明しない。是れ黨略とかいふものを包む風呂敷であるか。黨略とか陰謀とか、暗中飛躍といふが如き舊世紀より傳來の奇物は、新時代の政治よりは跡方もなく驅逐したいものである。

現内閣の施設に關して具體的に是非の聲を揚げなかつた原總裁は、その演說の長さを整理するためにか、戰後經營に關して毒にもならず藥にもならぬ抽象的議論を長々と試みて居る。斯種の長々しき抽象的議論は聽衆の耐忍力が是非すべき問題であつて、局外者より見れば別に彼此いふべきことではないが、只現内閣の昨年中の施設の大綱目に對して政友會が全體として如何なる評價及び態度を採つて居るかに關する說明が聞きたかつた。無論此大會は政友會自身のための大會であるから、その黨員全體さへ滿足すればそれで好いといふのならばそれまでゞあるが、苟くも政友會が公衆の法廷の前に自黨の立場を明にして、その是非の裁決を仰がんとする公明正大の考へを有して居るものならば、此大會はそれがために絕好の機會を提供して居

るものであつたのである。

現內閣の某閣僚が政友會の總裁の演說の抽象的議論で終始して居ることを稱贊して居るのは、一は內閣自身の便宜を主眼としたる評價でもあらうが、同時に他方に於て、官僚政治家の代表的政治思想と、公開主義を尊重する我等靑年國民のそれとの間に、到底橋渡し得べからざる溝壑の存して居る事實を暗示して居るものである。

之に反して野黨たる憲政會の宣言、及び加藤總裁の演說は、徹底徹尾、明確に同黨の立場を明にし、且つ又現內閣の施設に對するその是非の論點を明にして居るのは、賞賛すべきことである。現內閣の成立の基礎、日米共同宣言、外交調査會、對支外交、國防充實問題、增稅計畫、船舶管理等に對する憲政會の評價は、そこに極めて鮮明に反映せられて居る。我等の立場は憲政會の立場と多くの點に於て異同があるが、此異同が此大會に於ける同黨の宣言及び總裁の演說に依つて明瞭に比較對照せられることを得たのは、同黨の此大會の利用法の宜しきを得たためでなければならぬ。

政友會の態度に關して前に言つたことの大部分は、移して以て國民黨のそれにも通用が出來る。只同黨總理はその演說に於て、現代の政治思想界の民本主義的風潮に觸れ、而して之を是認する口吻を漏らして居るのは、聊か異とすべき所である。而して此聲言は、國民黨が昨春に於ける變幻自在の暗中飛躍に依つて、倏忽の間に官僚內閣の與黨となり、その黨首が外交調査會に列する「榮」を得た事實の背景の前に、奇妙なる對照を示して居る。併し乍ら若し國民黨が犬養總理のこの聲明を忠實に守つて、今一回そして今度で最後の變幻自在の奇術を用ひ、昨春の暗中飛躍に引換へて新に明中飛躍を行ひ、再びその黨名の通りに國民の味方とならば、同黨の永久の幸福のために、慶賀すべき結果を見ることであらうと思ふ。

三黨三樣の立場は、それぞれその大會の上に遺憾なく發揮せられて居るのは、面白い初春の景物である。今に於てまだ大隈內閣の非を鳴らし、現內閣を是非する

代りに將來の絕對多數獲得の努力を促など、どこまでも實利主義を徹底せしめんとする政友會、執念深く現内閣の懷に喰ひ入つて理非曲直を爭ひ、どこまでも理論主義を徹底せしめんとする憲政會、靈魂の向上と肉體の汚慾との間に板挾みになつて間誤ついて居る國民黨、是等の政黨の三つ巴になつての運動が、他の一方に於て外面は傲然内心は戰々兢々として跨踞せる官僚政府に對峙し、其間に迎合や反噬が交も演ぜられながら進みもならず、退きもならず、沈滯低迷の狀態の下に喰喘して居るのが我等の素人眼に映ずる現下の政界の活畫である。（七—一—一三）

露獨單獨講和始末及び其批判

法學博士　吉野作造

（一）

去年十二月十五日休戰條約の締結を見、二十二日ブレストリトヴスクに於て講和談判の開始せられた事は旣に我々の知る所である。但、此談判の開始について我々の吳れ〴〵も注意せねばならぬ事は、少くとも一方の相手方たる露西亞は獨・墺側と自分の國のみとの戰爭を終止せしめんが爲めではなく、全體の戰爭を終止せしむべき一般講和の基礎を協定せんが爲めに今度の交涉を開始したといふ事である。我國の論者動もすれば、露西亞の國民は戰爭に疲れて如何に高價なる犧牲を拂つても是非共平和を得んと熱望して居るとか、或は過激派政府は全然獨逸の藥籠中のものとなつて、其の云ふが儘の條件を容れるに相違ないとか、然らざるも獨逸の武力的脅迫の前には、露國は氣餒え意屈し全然其意思に對抗することが出來ないとかいふて、如何にも露西亞が英・佛側を袖にして獨逸に屈從し、唯其憐憫の下に平和を恢復し得れば可いといふ態度であるかの如くに說く。併し乍ら斯の說明の全然誤りなることは、予の是れ迄いろ〳〵の機會に說き來りたる所にして、前號の本欄に於ても詳に此點を明かにした。

而して予は爰に再び兩國談判の經過によりて露國の談判開始の目的は、決して自分の國と獨・墺との和睦さへ成り立てば他は何うでもよいといふ利己的動機に出づるものに非ずして、何處までも世界全體の平和の恢復といふ高尙なる立場を取つて居るものなる事を明かにしやうと思ふ。言ふまでもなく單獨和議の開始は、千九百十四年九月の所謂單獨不講和條約の違反にして、英・佛側に對する一種の背信行爲には相違ない。而して露西亞は這の背信行爲に出づることを初めより何とも思つて居ないのではない。こゝまで來るには中々の苦心がある。現に去年の六月、時の露國政府が民間の輿論を容れて所謂密約改訂を英・佛側に迫つた時にも、單獨不講和條約だけは之を除外例とすると明言したではないか。蓋し密約の改訂によつて領土併合等の野望を捨てさへすれば、彼は英・佛と手を携へて一般講和の協議に直に進み得ると信じたのである。彼は何處までも一擧して全體の平和を恢復するといふ理想に燃えたので、英・佛を見捨てるといふが如き考を始めから有つて居ないのである。況んや獨逸の利益を圖るが爲めに英・佛を袖にするといふが如きおや。而かも彼が遂に單獨和議の開始を斷行するに至りし所以のものは、英・佛側が或は過激派政府の如き正當に非ざる所謂簒奪者政府と事を共にするを得ずとか、或は又單純なる非併合・無賠償の原則に依つて講和の交渉に入るは今其の時機に非ずとかの理由よりして素直に露西亞の提議に應じなかつたからである。けれども本來の理想が全體の平和といふに在るのだから、獨・墺側との談判に於ても全體の平和の基礎となるべき條件の協定といふ事が主なる題目で、單に露西亞と獨逸との間にのみ平和を見ん事を期するものではない。尤も一方の獨・墺側では之を以て不便となし、純然たる露西亞と自分側との平和談判たらしめんと努めたやうであるけれども、露西亞は斷乎として之に應じなかつたらしい。是等の事實は其當時の電報にも能く表はれて居る。斯くして此談判は一般講和の豫備交渉といふ名目を以て開始せられる事になつたのである。故に之を

たる露・獨間の單獨講和と觀るのは正當でない。

（二）

露西亞側の目的が一般講和の基礎たるべき條件の協定に在る事は、談判開始後彼が相手方に提出した六箇條の條件の內にも明白に表はれて居る。此の中には單純に露・獨兩國間のみの問題と觀るべき事項は一つも含まれてない。悉く皆一般平和の恢復を着眼する抽象的原則のみである。詳しく云へば、六箇條の提案は畢竟彼等の視て以て永久平和の基本條件と爲す所の三大原則の確立を主張するものに外ならない。その第一は非併合主義である。戰爭の結果たる領土併合の事實を將來絕對に否認せんとするのである。是れ開戰の理由が如何に公明正大なものであつても、勝てば必ず敵國領土の一部を割取することが出來るといふ期待が、從來實に戰爭を頻繁ならしめたる主要なる原因であるからである。第二は無賠償主義である。之を主張する理由の第一と同一なるは言を待たない。第三は民族自決主義である。是れ一民族が他民族を壓迫する事が從來特に歐洲に於て紛亂の種であつた事實に鑑み、凡ての民族に其希望に因り其政治的所屬を自ら決定せしめんとするものである。外にも附隨の事項はあるが、要するに此三大原則を揭げ來れば、現今の戰爭を忽ちにして之を終熄せしめ得べく、將來に於ても永く戰爭なからしむることが出來るといふのが、露國の根本主張である。其主張の多少空想的色彩を帶ぶるは否み難しとするも、以て彼等の態度の全然利己的國家主義を超絕して居ることは明白であらう。

更に細目に入つて論ぜんに、第一の非併合主義の適用としては、露國は、（一）武力に依つて占領せられたる土地の原狀恢復並びに占領軍隊の卽時撤退（第一條）と（二）戰爭に由つて獨立を失へる國民の完全なる原狀恢復（第二條）を主張して居る。英國等の占領の下にある獨領植民地の處分も亦此原則に依らねばならない（第六條）。次に第二の無賠償主義に就ては之を絕對的に否認する旨を明言し、既に支拂へる者は之を返還すべしとまで言つて居る（第五條）。斯くいへばとて彼等は決し

て戰爭に由りて蒙れる個人の損害を全然放任して顧みざらんとするものではない。此目的の爲めには交戰各國の一定の比例による出資を以て特別基金を設定すべき事を主張して居る（第五條）。以上は共に今次の戰爭の結末をつけるに直接の關係ある事項である。而して第三の民族自決主義に至つては、戰爭の結末には直接の關係はない。之れなくとも平和の恢復を見るに妨なきも、將來永久に平和を保障するためには、是非とも今の内に決めて置かねばならぬ種類のものである。此主義の適用として露國の主張せる所は二箇條に分れて居る。一は從來獨立を有せざる民族は一般投票の方法によりて表示せられたる當該民族の希望に從ひ、或は獨立を許し、或は其政治的所屬を自ら決することを得しむべしといふので（第三條）、二は幾多民族の混住せる地方に在つては、各民族の權利を尊重し、特別の法を設けて其自治を許すべしといふのである（第四條）。特別の法を設けて自治を許せといふのは、自治は即ち彼等年來の希望にして、一般投票に諮るまでもなく明白であるからである。而して以上の二原則は植民地の處分に對しても亦適用せらるべしとある（第六條）。猶此外に、將來强國が種々の術策を設けて經濟的に弱國を苦むるが如き事を禁ずるの一項もある（第六條）ことを注意して置く。

以上說く所に依つて露國が今度の講和談判に由つて何を要求して居るかゞ分るであらう。之等の原則の決定の結果、露・獨間の問題も亦自ら解決せらるゝといふことはあらんも、始めから露と獨との間のみの平和を直接の目的とするものは一ヶ條も無い。加之、一般世界の平和の永久の保障の爲めに、今度の戰爭に何等の關係の無い印度や埃及の處分までをも講和談判の問題たらしめんとするの點は、特に我々の注意を要する所である。さて全體の平和恢復の基礎たるべき原則を折角骨折つて作つても、英・佛側が之を承認せない以上は、畢竟徒勞に屬する。然し英・佛側がどんな考を以て居るか、是等の點には一向頓着しないといふ所に露西亞の特色がある。けれども獨・墺側としては、露

亞と同じやうな樂天的態度で談判を進める譯には往かない。故に十二月二十六日の會合の席上では、獨・墺側は一方に於ては「露國提案の其大綱に於ては平和の公平なる基礎を構成し得べきものたるを認め、領土の獲得と償金とを含まざる一般且つ即時の講和に同意なる」旨を宣言し、且「同盟國政府は、交戰國全體に對して極めて公平なる條件を基礎とし、本戰爭を終了せしむべき講和を遲滯なく締結する」に決心せる旨を述べたる後、他方に於ては「露國委員の提案が實行せらるゝ爲めには、目下戰爭に參加せる凡ての諸國が、相應の期間内に、其條件を例外無く誠實に遵守するを約するの必要あるは論を俟たない。何となれば我々同盟國が露西亞と談判しても、露國の同盟國が我々に對し是等の條件を誠實に且何等留保する所なく、承認し且實行するの保障なきに於ては、我々のみ獨り片務的に該條件の拘束を受くる事となるからである」と明言し、即ち英・佛側も亦他日參加協同するといふ條件の下に協議の結果は効力を有するのであると云ふ主旨に念を押して居る。之等の事情に依つて觀ても、今度の談判が一般講和條件の豫備交渉であるといふことは明白であらう。

（三）

次に進んで此交渉に於ける兩國の主張が、如何なる點に於て合し、如何なる點に於て乖離せしかを調べて見やう。第一非併合主義の適用たる露國の主張に對し、獨・墺側は「獨立を失ひたる國民の完全なる恢復」については全然露の提案に同意して居る之に依りて吾人に獨逸が白國領有の意圖を放擲し、墺匈國がセルヴイヤ・モンテネグロの併合を斷念せることを知ることが出來る。けれども其他の條件については獨・墺の言ひ分は露のそれに比してまだ中々の距離がある。占領地の還附は主義としては同意を拒まぬやうであるけれ共、即時撤兵の要求に對しては、或は撤兵の時期及方法は講和條約によつて之を解決すべしとか、又は講和條約締結以前に之を必要とせば、特別の協定に依つて之を決すべしとか、いろいろ留保して居るから、果して眞實に撤

兵還附する考なりや否や判らない。此點に於て獨・墺は全然侵害的野心を棄てたとは見られ難い樣である。

次に無賠償主義については、大體主義としては贊成して居るが、只俘虜給養の費用と、一國が其領內に於て敵國の臣民に不法に加へたる損害の賠償とを例外として居る點に於て、獨・墺の誠意は疑はれて居る。一體戰爭に於て賠償の問題の起るのは主として、一國が敵國に侵入して其敵國人民に加へた損害に就いてゞある。而して獨・墺が此點を全然默殺して居るものは頗る狡猾と謂はねばならぬ。而かも獨・墺の主張するが如き二例外を認めん乎、彼等は償金を拂ふ所か却つて取る方の額が多くなる。自分の取る方の額の多い項目だけを擧げたのは、大國の態度として聊か意地穢い。若し夫れ個人的損害の賠償を目的とする特別基金設定の主張については、凡ての交戰國が齊しく講和談判に參加するを待つて之を議すべしとの口實の許に巧に逃げて居る。

第三の民族自決主義に基く主張に對しては、表面堂々と反對するを避けて、而かも事實に於ては之を斷乎として拒絶して居る。即ち獨立を有せざる民族に、一般投票の方法により其政治關係を自ら決定せしむべきや否やの問題及び民族に自治權を附與すべきや否やの問題は、該民族の屬する國家國內法上の問題に屬し、國際間の協定を以て强請すべき事項ではないと主張して居る。尤も成るべく露國の提案せるが如き原則に據るべしとはいふて居る。併し之を國內法上の問題として放任して置いては、到底正當に解決せらるゝの見込が無いことは、從來の經驗上明白であるから、露國の提案が起つたのである。故に之を容認しないのは、如何に其言葉は婉曲であつても、事實體のよい拒絶の意思たる事は疑を容れない。されば露國委員は此答辯に對し、彼等の最も重要とする原則に付て彼我意見の合致を見得ざる事を非常に遺憾とする旨を述べて居つた。もう一つ植民地問題に對する獨・墺の態度はまた甚だ面白い。彼等は露國の提案たる原狀恢復の主義には全然贊成の意を表して居るが、住民の意思によつて此

政治關係を決定せしめんとするの原則には極力反對して居る。其反對の理由は、獨領植民地の土人は、今度の戰爭に於て、事實上母國に對する極度の忠誠を示して居る。此事實は彼等の永く獨逸の治下に在らん事を熱望するの證左にして何等の方法を採るも、此事實に勝る意思表示の方法はない、故に更めて一般投票によるの必要はないといふに在る。

以上說く所に由つて觀ると、露國の主張と獨・墺の主張との間には大部まだ距離がある。然るにも拘らず、露國委員は「同盟國の回答中に何等侵略的意圖を藏せずとの坦懷なる宣明を見るは、吾人をして一般平和の談判を直に各交戰國間に開始し得べき事を思はしむるに足る」と爲し、「此談判に未だ其政府を參加せしめざる人民に、一般平和の主義を知悉了解するの機會を與ふる爲め、千九百十八年一月八日まで十日間談判を休止せんと」を提議した。斯くて所謂一般講和條件豫備交涉は一先づ中止せられ、其間に露國外相トロツキイは、連合國政府並びに其人民に檄して講和談判の參加を促すこととなつた。この目的を以て過激派政府が外相をして英・佛・米諸國に向つて發表せしめた宣言書は、二十九日の日附を以て公にされて居る。形式は政府並びに人民に示す姿になつて居る。未だ之等列國の承認を得ざる政府のこととて、正式に相手國の政府に向けて發送する譯には行かないのであらう。相應に長い文章であるが其要點は次ぎの三項に歸する樣に思ふ。（一）露國の單獨講和を締結する事は、連合諸國に取つて目前の一大打擊たるに相違あるまい。併し乍ら、之に伴ふ必然の結果如何を虛心に考へて見れば、之れ實に獨り我が露國の幸福のみならず、佛・伊及び其他連合諸國の大利益にして、吾人の將來の政策を支配すべき大原則が之に由つて確立せらるゝを認めなければなるまい。今日に至るまで我々は實に凡ゆる奔走を爲して一般平和の爲めに努力した。今後は諸事皆連合國人民全體の意思に依つて動かう。連合諸國は宜しく速かに其平和條件を宣言すべく、又講和豫備交涉に參加すべきである。豫備交涉の再開は今や十日の後に迫

つて居る。若し連合國政府が此重大なる一般的講和の問題に對して依然その曖昧なる態度を改むる無くんば、我々は最早此上諸國政府の同意如何を待つの遑を有たないだらう。(二)講和問題の討議について、交戰國双方の最も考慮を費すべき點は、一方に於てはアルサス・ローレン、トランシルヴァニア、ヘルツェコヴィナ等の運命、又他方に於ては愛蘭、埃及、印度、印度支那等の運命をどうするかといふ問題である。然るに獨逸側は、其の現に占領せる地方より撤兵すべく、又大體に於て侵略的意圖無き意思を表明した。然らば此際必要とするものは、同樣の問題に對して英・佛・米諸國が果して如何なる態度を執るかを明かにすることである。敵國領土の一部分をなせる民族に、その將來の運命を自ら決定するの權利を認むる以上、自國領土並びに自國植民地の人民に向つても、同樣の決定權を與ふるは當然ではないか。連合國諸政府は、平和促進の爲め我々と協力するに先立つて、先づこの主義を絕對且つ完全に容認するを必要とする。(三)若し連合國政府にして、頽廢せる少數階級の面目を發揮し、盲目的に且つ頑强に講和豫備交涉に參加するを拒まん乎、勞働者階級は必ずや是等の者の手より實權を奪還するの必要を認むるに至るであらう。我々はこゝに連合諸國政府に對し、講和豫備交涉の參加を求むるの最後通告を發すると共に、帝國主義的侵略政策に反抗して起たんとする勞働者階級をば飽くまで援助すべきを公約する。以上は露國外相の宣言の大要である。之に由つて觀れば、露西亞は占領地植民地乃至異民族に對する問題につき獨・墺側に要求せる所のものを、其儘同じ嚴重さを以て英、佛側にも絕對の承認を迫つて居ることが明かであり、また假令政府が贊成して來なくとも、國民の多數を占むる勞働者階級はやがて政府に迫り、或は政府を仆して、我々と協働し來るの日あるべきを期待して居る跟跡も見える。然るに是等の催告的宣言にも拘はらず、英、佛側は果して豫想の如く參加して來なかつた。否ウィルソンとロイド・ヂョーヂとは、堂々の論陣を張つて夫れ〳〵其の講和條件を宣明し、

到底露西亞や獨逸とは今の處事を倶にし得ざる理由を明かにした。殊に佛蘭西の如きは、其下院に於て十二月二十八日一社會黨議員の提出せる「非併合・無賠償を原則とせる露國の一般的講和條件に随ひ連合國の戰爭目的を訂正せん」との動議を一〇三に對する三七八の多數を以て否決し、最も鮮明にその態度を示した。故に今日のところ英・佛・米の諸國までが相卒ゐてブレストリトウスクの講和會議に參加するの見込みは全然無いと謂はなければならぬ。

英・米側の講和條件の如何なるものなるかは、予之を別の論文に於て詳論した。その條件の敵國側の條件と著るしく異ること、又露西亞の意見とも多少の距離有ることとは言ふまでもない。故に一般講和條約の成立などはもとより、豫備的協定すら容易に纏り難かるべきは明かである。けれども露西亞の現政府は平和を唯一の政綱＝而かも之を以て人民に公約せる＝として起つたのであるから、今更不調に了つたからとて其儘引き退かることは出來ない。そこで彼等は一方には英・佛側の勞働者を煽動し、他方には獨・墺側の勞働者を煽動して、彼等に自分達の主義を鼓吹し、是等の國々の勞働者が内部から起つて夫れ〴〵自國の政府を鞭撻し、已むを得ずんば其政府を倒し、斯くして露國の平和主義を無理矢理に實現せしめんとの最後の手段に訴へんとして居る様である。彼等が談判の休止を求めたのもかゝる期待の早晩實現せられんことを信じて居るが爲めではあるまいか。一月十日再開せられた會議に於て、彼等は更に二月十八日まで延期を求めて居るが、其時に至つても尚ほ形勢の變化なくば、獨逸側の承認する以上、露西亞側は更に重ねて延期の繼續を求むるに違ひない。而して其間彼等が他國の勞働者を動すに努めて居ることは亦、新聞等の報導によりて世人の耳目に新なる所である。

然し何時まで延期した所が、是等各國の形勢の變化は豫想の如く實現するだらうか。尤も各國は之に依つて多少の影響を受くる事は爭ひ難い。前記佛蘭西議會に於ける一社會黨員の動議も、つまりは露西亞の主張

に應ずるもの丶佛蘭西にもあつたことを語るものである。而して百三人の社會黨員の之に贊成するものありしの一事は、決して之を看過してはならない。又一月十五日の倫敦發電報に據れば、英國勞働黨は、露國並びに獨・墺側の人民に書面を送り、非併合・無賠償の原則並びに各民族に國籍自決の權利を認むるの原則に贊成なる旨を述べ、印度及び其他の英國屬領地に對しても、國籍自決主義の適用を拒ばまざる旨を附言したとある。之れ豈露西亞の提案に全然同意なる意思の發表ではないか。併し乍ら又他方ウィルソンやロイド・ヂョーヂの宣言を見れば、今の所彼等當局者に毛頭讓歩して露西亞と提携しようといふ考は無いやうである。露西亞の現狀に對してはウィルソンの方は餘程好意を持つてゐるやうだけれども、ロイド・ヂョージの方は寧ろ或種の反感を以つて居るかに見える。當分のところ英・米・佛諸國の態度は容易に變化すべくも見えない。

附記

露西亞は獨・墺側と一般平和條件の豫備交渉を開始せると同時に、自國と獨逸だけの特殊の問題――獨・墺軍の占領の下に在る露國領域の處分の問題――をも相談の題目とした。此點から觀れば純然たる單獨講和の交渉と云へる。故にブレストリトヴスクの談判は一般平和條件の豫備商議と、露・獨單獨講和の商議との二つの資格を兼有するものと云つてよい。而して前者の資格を以てする談判は、本文述ぶるが如く目下中止の姿にあるけれども、露・獨兩國間のみの交渉は依然として進行しつゝある。昨今の新聞の電報が、頻りに双方の意見一致せず將に談判破裂せんとするの兆ありなどと報ずるのは、此單獨商議の方である。予は此點に關しても詳細なる說明を試むる豫定であつたが、不時の出來事に妨げられ、今本稿を續くるの時が無いから、詳論を次號に讓り、爰には唯成行の大要を附記して置くに止める。

獨逸占領地の處分に關して、露西亞の當初の要求は、彼が一般平和の基礎條件として兼ねて主張せる原

則を其儘こゝに適用することに外ならなかつた。從つて彼は第一に非併合並びに即時撤兵の原則により、獨逸軍隊が即時に撤退して占領地を露國に完全に還附せんことを要求し、第二に民族自決主義の原則に由り、還附を受けた是等地方の大部分に對しては、他の特種民族在住地方と共に、一般投票の方法によつて是等民族の意思を發表せしめ、其希望に從つて今後の政治關係を定めしめやうといふことを宣言した。要するに露國は、自國の利益とか獨逸の利益とかいふ個々特別の關係は全然之を眼中に置かず、一般平和の基礎的條件たる抽象的主義を露・獨間の特種の問題にも文字通りに適用せんと主張したのである。之に依て吾人は露國側が正義公道の抽象的原則をば國家的利害關係よりも遙に重要視する態度を思ふべきである。然るに獨逸は固より露西亞の如く抽象的原則を第一義としない。彼の主として念とする所は矢張自國の利害である。故に露西亞の抽象的主張を眞向から斥けるとは敢てし得ないが、何とかして此原則に從ふやうな外觀の下に自國の利益を押立てやうとするのである。斯くして獨逸は、露西亞の主張に對し、第一に露西亞の領土を占領するの意思無きこと、從つて占領地よりは其軍隊を撤兵すべきことを承認した。けれども之れには二つの條件を置いた。一つは撤兵の時期は、露西亞の主張するが如く、所謂即時では無い、講和條約が成立し、露西亞の軍隊が動員を解いて全く平常の狀態に復した時にするといふのである。も一つの條件は次項に掲ぐる點につき、露西亞が全然獨逸の主張を承認せる時に限り還附撤兵を行ふといふことである。故に後にも述ぶるが如く、露西亞の殆んど承認するを得ざるが如き條件を掲げて、而かも其條件を露西亞が全部容れなければ占領地を還附もしないし、又撤兵もしないといふのであるから、獨逸は果して非併合及び即時撤兵の主義に忠なりや否やは、何にしても疑はざるを得まい。然らば第二に獨逸の露西亞に對して要求する苛酷なる要件とは何かといふに、それは民族自決主義の適用の問題である。露西亞では、自國内の諸民族に對し、分離獨立の

犧牲を顧みずして、民族自決主義の採用を公約した。けれども、愈々是等の與へられたる自決權の行使を許すといふ場合には、それは必ず最も自由に最も公正に行はるゝやうにしなければならない。それには住民一般が皆自由に投票するといふことでなければならぬ。故に避難民や又は占領軍隊の忌諱に觸れて放逐せられた者等が、皆歸郷した上で投票の行はるゝを必要とする。且其投票は最も自由に行はるることを要するといふ點より、外國軍隊の占領の下に投票の行はるゝことは避けなければならない。何となれば、占領軍の軍政は、常に直接又は間接に、住民の自由意思を左右するの憂あるからである。そこで露西亞は、一般投票の實行に先立つて、先づ獨逸兵の撤退を求めたのである。然るに此要求に對して獨逸は全然反對の意思を發表した。獨逸は其占領地を先づ二種類に分ち、第一種に屬するポーランド、リスアニア、クールランド、リガ等、各自の地方議會に於て、曾て今後の政治關係に關する希望を表明したものに付ては、改めて人民投票を必要としないといふ。何となれば之等地方の住民は既に、或は、露國より分離して完全なる獨立國を形成しやうとか、又或は獨逸の保護を得たいとか、夫々相當機關の決議に依つて其意思を表明したからである。故に露西亞は唯之等の決議を承認しさへすればよいといふのである。次に未だ何等の意思を表示せざる第二種のものについては、獨逸は速かに是等地方に特別委員を設けしめ、其委員をして至急一般投票を爲すの準備に取り掛らしむべしといふて、全然撤兵問題には觸れて居ない。蓋し獨逸は其占領軍隊の面前に於て取急いで一般投票を行はしめんと欲するのであらう。獨逸軍隊の占領の下に於ては、公正自由なる投票の行はれざるべきは云ふを俟たない。

此等の點に付いて露國は固より大に反對の聲を擧げたのみならず、甚だしきに至つては獨逸の態度を以て領土併合の野心を包むものなりとなす者もあつた。一月三日の夜、我國の諸新聞が發した露・獨單獨講和の談判破裂の號外は、露國外相トロッキイが獨逸の態度を

以て僞善的なりと罵倒したといふことの誤り傳へられたものである。一般講和條件の豫備協議の時には、漠然侵略的意圖無しと宣明した獨逸も、愈々具體的の問題になれば、なか／＼此野心を棄てやうとしない。獨逸の態度はまるで戰勝者が戰敗者に莅む姿である。而して露西亞は、前に屢々述べたる如く、初めから戰爭する意思も元氣も無いが、又決して戰敗者を以て居るものでもない。否寧ろ思想上に於ては戰勝者を以て任じて居るの概がある。故に到底獨逸の要求にオメ／＼應ずるものではない。而して獨逸では、一月十日前後の御前會議に於て、露西亞に對しては益々强硬の態度に出ずることに定まつたといふから、雙方の間に一致點を見出すことは、なか／＼困難であらうと思ふ。之れ昨今露・獨單獨講和が結局不調に了るべしなどゝ報道せらるゝ所以である。（一月十八日）

「知名の兄弟を産んだ兩親の研究」は頁數超過の爲め其一小部分しか本號に掲載する事能はず、殘れる數十組は之れを次號に於て發表する事とせり。

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

家庭醫學叢書

全部五十冊完了
定價各冊十五錢
郵稅 各冊二錢

吾妻醫學博士述●お產の話
唐澤醫學博士述●小兒病の話
千葉醫學博士述●耳鼻咽喉病の話
山田醫學博士述●神經衰弱の話
額田醫學博士述●肺結核の話
岡村醫學博士述●皮膚病の話
佐藤醫學博士述●婦人病の話
廣川醫學博士述●淋病の話
佐藤病院長述●黴毒の話
森肛門病院長述●肛門病の話
杉江醫學博士述●ヒステリーの話
南醫學博士述●胃病の話
中原醫學博士述●外科療法の話
森醫學士述●呼吸器病の話
竹中ドクトル述●性慾教育の話
森醫學士述●病人看護の話
中村醫學士述●精神病の話
菊地醫學士述●脚氣とリウマチスの話
齋藤ドクトル述●寄生蟲の話
豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 上卷
豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 下卷
竹中ドクトル述●感冒と肋膜炎の話
岡崎醫院長述●有益危險食物の話
阿久津醫學士述●男子生殖器病の話
森醫學士述●良藥と毒藥の話

高橋醫學士述●姙娠と避姙の話
杉本醫學博士述●便泌と下痢の話
森醫學士述●注射の話
井上醫學士述●眼病の話
落合ドクトル述●科學的美容法の話
額田醫學博士述●糖尿病と腎臟病の話
土田醫學博士述●腦病の話（上卷）
同●腦病の話（中卷）
同●腦病の話（下卷）
岡崎醫院長述●有效漢藥療法の話
竹中ドクトル述●肺病有效療法の話
衞生新報社編纂●物理的健康增進法話
同●化學的健康增進法話
同●精神的健康增進法話
同●滋養食物と滋養劑話
同●兒童健康增進法の話
同●婦人健康增進法の話
同●黴菌と消毒の話
同●生殖衞生の話
同●營養療法の話
同●癌の話
橫手醫學博士述●理想的飲食物の話
小川醫學博士述●心臟病の話
宮原ドクトル述●理學的療法の話
森醫學士述●九種傳染病の話

通俗疾病大字典

醫學士森繁吉先生
ドクトル竹中繁次郎先生
醫學士佐藤得齋先生
醫學士高橋政秀先生
ドクトル近江湖雄三先生
醫學士杉村可宗先生
醫學士井上溫先生
保健主筆伊藤尚賢先生
共編

○定價金六圓
郵稅十八錢

通俗醫學の書に乏からずと雖も苟も疾病療法に關する一切の最新智識を網羅する一大辭典に至りては實に本書を以て嚆矢とす、古來四百四病の稱あれども本書に至りては採錄する所實に千有餘病、總紙數一千有餘頁、各病疾毎に先づ原因を示し次ぎに症候を說き最後に最新最善の療法を公開す、而も各科悉く專門大醫の執筆に成り懇切周到にして平易簡潔、本書一部を備ふるは即ち各自の家庭に大醫を常聘するに均し、本書一度出でて深遠玄妙なる醫術の奥妙は天下萬人の前に公開せられたり如何なる素人も本書によりて安全なる自己の醫師たるを得べし

體力養成叢書

▽冷水浴と冷水摩擦	大澤醫學博士述	▽定價二十錢	▽郵稅四錢
▽腹式呼吸	二木醫學博士述	▽定價二十五錢	▽郵稅四錢
▽海水浴	栗本醫學博士述	▽定價二十錢	▽郵稅四錢
▽滋養物の攝取	桧田醫學博士述	▽定價二十五錢	▽郵稅四錢
▽深呼吸	遠山醫學博士述	▽定價二十五錢	▽郵稅四錢
▽呼吸靜座法	伊藤尚賢述	▽定價二十五錢	▽郵稅四錢

組合セ本箱

東久邇宮家、梨本宮家、[illegible]香宮家を初め奉り德川公爵家、大隈侯爵家、伊藤公爵家等の諸名家より御注文の榮を辱ふせる最善最良の本箱……△種類價格並に構造を示せる目錄……郵稅二錢封入御申越の方へ進呈す

▼發賣元 東京市銀座通新橋際 振替東京二〇〇番 電話新橋一九九一 新橋堂

（中付の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

出版界空前の名著

理學博士 横山又次郎

新著

前世界史

【新刊】

總布製 全一冊 七百餘頁
挿圖四百九十餘入
正價金參圓 郵税十二錢

人類に歴史あるが如く地球にも亦その歴史あり。本書は卽ち此の歴史にして、世界の開闢より説き起し、次ぎに地球の創成を述べ、更に無水時代と無生物時代とを經て生物時代の今日に至るまでの地球面の變遷と生物の進化とを精叙し、最後に類猿人と原人との發生を縷述せり。又日本と支那との地質並に化石は最新發見のものに就て説明したれば、此の點に於ても毫も遺憾あることなし。挿圖約五百、中に新怪動物のもの數十あり。

横山博士(著述)

- 改訂 天文講話 正價壹圓參拾錢 郵税拾貳錢
- 改訂 地學概論 正價壹圓參拾錢 郵税拾貳錢
- 天文地學講話 正價壹圓參拾錢 郵税拾貳錢
- 人文地學講話 正價壹圓五拾錢 郵税拾貳錢
- 海洋學講話 正價壹圓五拾錢 郵税拾貳錢
- 陸文學講話 正價壹圓九拾錢 郵税拾貳錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三 早稻田大學出版部

(賣捌) 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野 (其他)

東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授
宇野哲人先生新著

【三版出來】

隨一の支那見聞記

新版發賣 改訂 支那文明記

日本人は支那を知らなければならない。支那を知ると云ふ事は單に東洋の一國を解するといふに止まらず東洋全體の消長を知ると云ふ事になる。實に支那は未知數である支那の如何によつて世界の平和が何ふなるか圖り知る事が出來ない。本書の著者は文部省の命で留學して長く支那に遊び支那をよく理解した人だ其の人から支那全地に亘つての人情風俗習慣名所舊蹟の話を聞くのは實に我々日本人には非常に有益な事である。目下は日本に取つては重大の關係ある彼地の事情を精細に知つて居らなければならない時機だ本書の如きを讀むのは日本人の權利であり且つ義務である。（批評）

四六判最上製美本
全壹冊四百卅頁
寫眞版卅五圖入
石版畫及地圖一葉
正價壹圓四拾錢
郵稅金八錢

■■岡田播陽氏新著■■
―（大正出版界の奇書）―

好評忽ち

再版 東京 京都 大阪 三都生活

世評一斑

大阪毎日新聞評…本書は著者一流の輕快なる筆を以て三都に於ける人情風俗氣質藝術其他一切の生活の長短を評せるものにして就中「三都の女」「三都の言葉」「住む東京賣る大阪買ふ京都」等殊に面白し其他三都の印象を奇警なる觀察や皮肉な文字を以て忌憚なく暴露し痛罵實に骨を刺す如き深刻なるものあり要するに著者が現代都會生活の一切を呪咀して將に新生活の生れ出でんとしつゝあるを暗示したるもの讀みて感興頗る深きものあり。

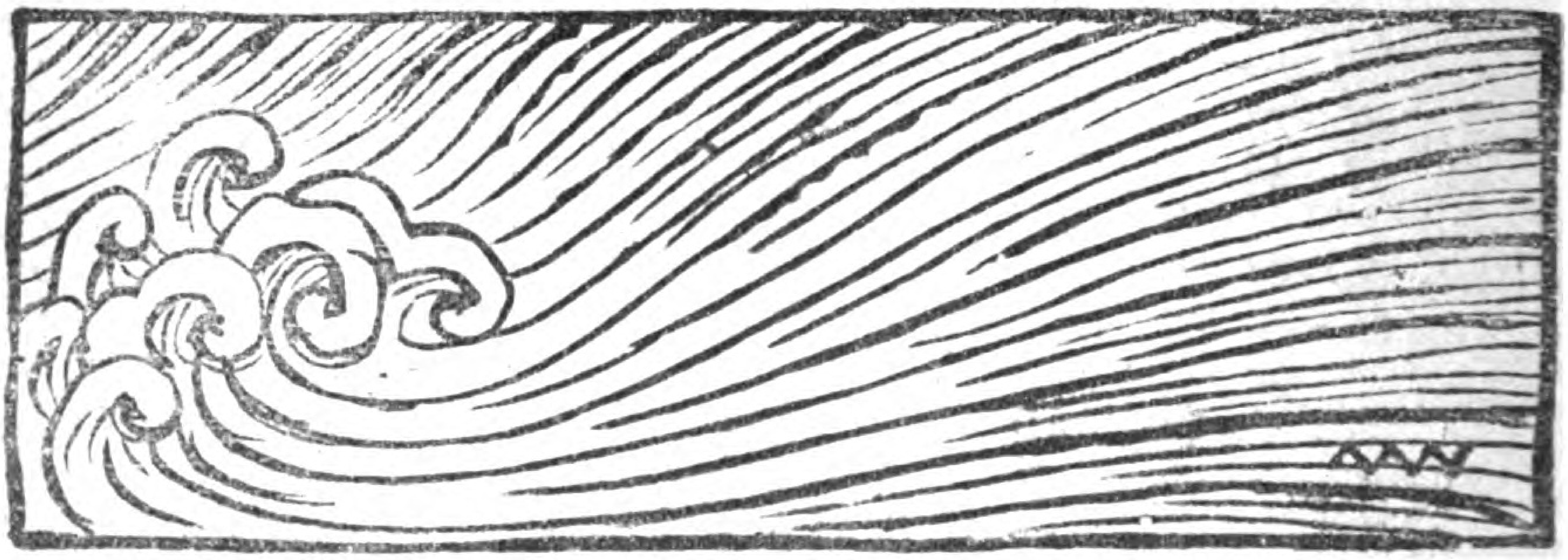
四六判最上製美本
正價金壹圓四拾五錢
郵稅金八錢

插畫執筆者
太田喜二郎 大谷句佛上人 土田麥僊 河合新藏 北野恒富 野田九浦 水島爾保布 菅楯彥

三色版四葉
寫眞版十數個入

（中付の四）

東京市神田區
表神保町七番地
■大同館發行■
振替貯金口座
東京七八貳番



兄弟

谷崎潤一郎

一

姫は長い春の日の遊びに飽きると、細殿の局へやつて來て、乳人の話に耳を傾けるのが常であつた。貴い家柄の長女に生れて、世の中と云ふものを知らずに育つた、まだ幼い姫の身には、乳人の物語るいろいろの世間話、代々の御門の御事蹟や、先祖の大臣たちの性行や、けふ此の頃に時めいて居る攝政關白の榮華のさまや、さては天竺震旦の御佛や聖賢の話など、凡べてが珍しく面白く感ぜられた。

「私の夫は、もと東國の常陸の介を勤めて居た事がございます。」

かう云つて、乳人はまた遠い東の國々の風俗を、話して聞かせる折もあつた。常陸と云ふのは都から何百里の彼方にあつて、其處へ行くには武藏野と云ふ廣い淋しい野原を過ぎねばならないこと、そこには體中に毛の蓬々と生えた、熊

のやうな鬼のやうな夷と云ふ人種が住んで居ること、和歌で名高い筑波根と云ふ山があること、さうして今から三十年ばかり前に、將門と云ふ男が、その近傍を打ち從へて朝廷に謀叛したこと。四十歳に近い女ではあるが、乳人は隨分さまざまの事を見聞きして居るやうであつた。

「それほど都から隔たつた土地に、そなたの夫はよくまあ住んで居られたねえ。」

姫が斯う云つて同情を寄せると、彼女はいかにも心得顔に、

「誰しも嫌でございますが、公けのお役目ならば致し方がございません。東と云ふと、一概に邊鄙な土地だと思し召すかも知れませんが、邊鄙なだけに氣樂なこともあるやうでございます。いつぞや敦敏の少將がおなくなりになつた時、東國の人は其れを知らずに、はるばると都へ馬を贈つて參つたことがございました。その折少將の父上の、小野宮の大臣がおよみ遊ばしたお歌を御存知で居らつしやいますか。」

など〻云つて、「まだ知らぬ人もありけり東路に、われも行きてぞ住むべかりける」と、口の内で吟じながら、檀紙へすらすらと書き下して見せたりする。

その小野宮の大臣の弟で、姫の祖父にあたる故の九條の右大臣の噂を、乳人は一番熱心に屢々語つた。

「祖父さまはほんたうにえらいお方で居らせられました。天徳四年の五月四日におなくなり遊ばしましたが、御存生で居らしつたら、今頃はきつと大政大臣におなりなされたでございませう。當帝と云ひ、東宮と云ひ、二代の御門はみな祖父樣の孫で居らつしやいますよ。」

さう云つてから、乳人はいつでも九條殿の御遺誡を讀んで聞かせる。「先起稱二屬星名號一七遍。次取レ鏡見レ面。次見レ曆知二日吉凶一。次取二楊枝一向レ西洗レ手。次誦二佛名一。及可レ念下尋常所二尊重一神社上。次記二昨日

事一。次服ㇾ粥。次梳ㇾ頭。次除二手足甲一……」と、漢文の文章を細やかに說明して、姫にも此れを日課としなければいけないと云ふ。

彼女の教へる所に依ると、祖父の次ぎにえらいのは、姫の父親の中納言であつた。その證據には、父は九條殿の三男に生れながら、伯父の參議の地位を追ひ越して、既に三位中將の要職を占めて居る。此のやうな立派な父君を持たれた姫は、今に必ず御門の后におなりなさるに相違ない。立身出世を遊ばす事は疑ひない。などゝ云はれると、ことし漸う十二三の姫の胸にも、花やかな樂しい未來が夢のやうに描き出される。

「ねえ、ばあや、麿は大丈夫后の宮になれるかねえ。」

「大丈夫でございますとも。」

と云つて、乳人は大きく頷きながら、頼もしさうな返辭をする。

全く乳人の云ふ通り、父は伯父よりも數等勝れた人物のやうであつた。「東三條の中將は、早い出世をされたものだ。此の樣子では、兄君より先に大臣になられるだらう。」と云ふやうな評判さへも、ちらほらと世上に洩れ傳はる。その爲めでもあらうか、父と伯父とは互ひに反目して居るらしく、堀河の伯父の邸と、東三條の父の邸とは、目と鼻の間にありながら、ついぞ往來をした事がない。例の乳人が口癖にする御遺誡の中にも、「爲ㇾ親必竭二孝敬之誠一。恭ㇾ兄如ㇾ父。愛ㇾ弟如ㇾ子。……」と云ふ文句があるのに、伯父と父とはなぜ斯うだらうと、姫は折々恨めしかつた。

「お父樣と伯父樣との御仲が惡いのは、元方卿の惡靈の所業だと、誰やらが呟いて居たけれど、そんな

事があるものか知ら。」

かう云つて姫が不審がれば、乳人は顏を眞靑にして、

「惡靈などゝ、めつさうな事を仰つしやいます。二度と再び、そのやうな言葉を仰つしやつてはなりません。」

と、聲をひそめて、たしなめるやうな句調で云つた。

「御兄弟の仲が惡いのは、伯父上さまのせいでございます。兄が弟に負けるのは、兄に働きがないからでございませう。それだのに伯父上さまは、お父さまの御立身を、お嫉みなさるのでございますよ。」

父の邸に仕へて居る者共は、女房たちを始め下司下郎までも、異口同音かう云ふのである。淺ましいとは思ひながら、姫もだんだん其の氣になつて、伯父を凌いで行く父の威勢が、やがて后の宮と云ふ仕合はせを、わが身に授けてくれるだらうと、いつからともなく待ち設けて居た。

「ねえお姫さま、私はね、あなたが行く行く貴いお方におなり遊ばすやうに、始終神佛を、お祈り申して居るのでございますよ。物は試しでございますから、一つ御運勢を占つて御覧なさいまし。」

乳人は頻りに、夕占問ひをして見ろと云つて姫にすゝめた。それは日の暮れに街の四つ辻へ出て、行人の言葉によつて身の吉凶を判斷する、至極簡單な方法であるが、不思議にあたるものだと云つた。

ちやうど三月の末の、或る日の夕方、姫は中門のほとりに彳んで、前栽の山吹がやり水の面に散つて行くのを、ぼんやりと眺めて居たが、ふと「夕占問ひ」の話を想ひ浮べると、何とはなしに好奇心に驅られながら、獨りでふらふらと邸の門を出て行つた。彼女の家は、二條の南、町尻の西に方つて、二町

ばかりの築土を繞らした厳めしい構へであつた。そこから三條の通りへ下つて、西へ真直ぐに辿つて行くと、路幅の廣い大宮の四つ辻へ來る。姫は其の辻のまん中に、北を向いたまゝ暫くの間立つて居た。内裏を退出する公卿か何かであらう。郁芳門の方から一臺の檳榔毛の車が、長い長い神泉苑の土塀に添うて、からからと走り去つた外には、ひつそりとして人通りも稀であつた。宵闇の迫つて居る往來の片隅には、痲疹で死んだらしい病人の屍骸が、二つ三つ捨てゝあつて、その上に蝙蝠だの虻だのが夥しく群がつて居る。何處かの家で八講が始まつて居るらしく、法華經を誦する聲が、たそがれの町に微かに悲しく響いて居る。やがて大路の北の方から、水干を着た一人の男が、笛を吹きながら悠々と歩いて來たが、姫の姿が眼に留まると、訝しさうに立ち止まつて、

「もし、もし、其方は路にでも迷つたのかね。でなくば、早う内へお歸り。日の暮れがたに子供が表をうろついて居ると、人さらひに渫はれますぞ。」

と、姫の髪の毛を撫でながら、いたはるやうに云ふのであつた。

その男の過ぎた後から、又二三人の男女が、足ばやに四つ角を横ぎつて行つた。けれども誰も、姫の様子をちよいと振り向いて見るばかりで、別段聲をかけようともしないのである。姫はがつかりして、もと來た道へ戻らうとすると、折柄すたすたと尻切れの草履の足音が、鳥の羽ばたきのやうに鳴つて、

「お姫さま、あなたは夕占問ひをなさいますか。」

から云つて、後ろから呼びかける者がある。

見れば年の頃六十餘りの、銀のやうな白髪を生やした、異樣な装束を纏うた媼である。落ち窪んだ眼

には一杯に眼脂が溜つて、皺だらけの頬は傷々しくこけて、口をきく度に頤をわなわなと顫はせて居る。あの路端の屍骸と云ひ、此の老人の風情と云ひ、悉達太子が伽毘羅城の門前で出遇つた、淨居天の化身ではあるまいかと、姫は乳人に聞かされた因果經の佛傳を、思ひ起さずには居られなかつた。

「あなたの望んで居らつしやることは、必ず成就いたしますよ。あなたは今に、貴いお方のお后におなりなさいます。あなたのお子さまは、一天下の主におなりなさいます。お姫様の行くすゑは、この大宮の大路のやうに、廣く長くお榮えなさるでございませう。」

嫗は杖をあげて大路を指した。さうして、愛らしい姫のみめかたちをしげしげと打ち守つた後、再びすたすたと歩む影が、程なく青い夕靄の底に消えて行つた。

二

東三條の兼家卿の姫君が、冷泉院の上皇の女御になつたのは、それから間もない事であつた。時の御門は十一歳の御童で、殿上人の奉つた村濃の紐の着いた獨樂を、淸凉殿の板敷にくるくると廻しながら、興じて居られるお年頃である。それに兼家卿の權勢も、まだ其處までは及ばないので、姫は上皇の御殿へ上るやうになつた。

院はやうやう二十のお歳で、つい四五箇月前に、讓位せられたばかりであるが、御門の位におはします間は、絶えず元方卿の惡靈に、惱まされてのみおいでになつた。その祟りが恐ろしさに、僅か三年で位をお降りになつたのである。

「近頃の御様子はどうでございます。御機嫌よう居らせられますか。」

女御が二條堀河の院の御殿から、東三條の邸へ遊びに來られる度に、父の中納言はかう云つて、心配さうに聞くのであつた。

「そりそり物怪のお憑きになる時は、はたで見るさへ凄じう覺えますが、さもない時はお顔の色も美しうて、ほんにあでやかな、有り難いお方のやうに拜まれます。さうして此の頃は、たゞもう春宮の御成長遊ばすのを、樂しみにしておいでなさります。」

春宮と云ふのは、ことし二歳の師貞の親王で、冷泉院が御在位の時分、一條攝政の姫君との間に、お生れになつたお方であつた。

「さればこそ、早う女御にも、あのやうな親王をお生みなされたがようございます。院のお爲めにも、女御のお爲めにも、又かく申す父の爲めにも、それが何よりの仕合はせでござる。」

中納言は、幼い折から病み煩ひをした事がなく、伸び伸びと育つて來た女御の健康を、頼みにせずには居られなかつた。綾文の葡萄染の唐衣の上に、房々と垂れて居る丈なす黑髮や、櫻色に、生き生きとかゞやいて居る豐かな頬を打ち眺めては、彼女のすぐれた體質が、一門の榮華の元を授けるやうに祈つて居た。時々、院のおん物怪の激しい折などに、女御が里方へ逃げて來られると、物に動ぜぬ中納言は

「あはゝゝ」と高笑ひをして、

「そのやうに氣がお弱くては、えらいお人にはなれませぬぞ。」

と、力強く勵ましたりした。

元方民部卿の悪靈は、今から二十年も昔、天暦七年の三月に、卿が憤死を遂げた頃から、朝廷の人々にいろいろの祟りをすると云ふ噂が、いつも世間に絶えなかつた。而も其の噂は、村上天皇の女御であつた卿の御女と、その御腹の廣平の親王とが、最近に引き續いて薨去されてから、惡靈の味方が更に二つ殖えたやうに、一層喧しく取り沙汰されて、ますます公卿や女房たちの恐怖の的となつた。元方が惡靈に化したのは、云ふまでもなく、自分の孫の廣平の親王が、一の宮でありながら御門の位に卽かれなかつたのを、含んで居るのであるらしい。從つて卿の怨念は、當時の競爭者であつた九條の右大臣の一門は無論のこと、その一門に好意を寄せる凡べての方面に、讐を報いねば已まなかつた。二の宮の冷泉院の御惱みを始め、天德四年から七八年の間に、九條の右大臣が五十二三でなくなつたも、その御女の中宮が天折されたのも、村上の御門が崩御になつたのも、皆惡靈の爲業であると人は信じた。

兼家卿の邸にも、怪しい事件は度び度び起つた。或る年の十五夜に、冷泉院の女御と中納言とが、南殿の庇の間に向ひ合つて、女房たちに圍まれながら、夜の更けるまで物語つて居た事があつた。月の光を賞づるやうに、わざと格子を明け放つて、大殿油を消してゐたので、部屋の中には、隈なき影が鮮やかにさし込んで居た。すると、晴れ渡つた空の方から、目に見えぬ者が、ばたばたと勾欄のあたりに舞ひ降りて、格子を下ろしてしまつたのである。

「あれ、物怪が……」

女御が斯う叫んで、几帳の蔭に身を隱されると、女房たちは大波の湧き騷ぐやうに、袿の袖を搔き合はせて、床にひれ伏したまゝ尊勝陀羅尼を一生懸命に誦しつゞけた。

「誰だ。其處をしめた者は誰だ。」

中納言は鋭く叱咤した。さうして、いきなり傍の太刀に手をかけて、格子の隙から洩れて來る月光に、きらきらと白刃を打ち振りながら、

「月を見るのに折角格子を上げたものを、何者が締めたのだ。もとのやうに上げろ、上げろ。上げなければ容赦はせぬぞ。」

と、きつと表を睨みつゝ繰返して云つた。その勢に怯んだものか、格子は再び自ら開いて、物怪は遙かな虚空へ逃げて行つた。

「父は何と云ふ勇ましい、豪膽な人であらう。」——さう思はれると、女御は此の上もなく頼みがひのある心地がせられて、いつぞやの媼の豫言や乳人の話も、偶然ではないやうに感ぜられた。

實際、兼家卿の官位は、その頃から際立つてぐんぐんと昇り始めた。兄の兼通卿がやつと中納言に任ぜられて、彼に追ひ着く隙もなく、弟は忽ち右大將になり、權大納言になり、天祿三年の閏二月には、大納言に轉じて右大將をも兼ねて居た。「この勢では、もうぢき大臣になられるだらう」と、殿上人は目を見張つて囁き合つたが、同じ年の十一月に、太政大臣伊尹卿が薨去されたので、機會は遂に到來したやうであつた。

「今度こそは少くとも、右大臣にはなれるに違ひない。」

かう信じたのは大將自身ばかりではなく、誰も彼も卿の榮進を期待して居た。しかし朝廷からは、いつ迄立つても何の御沙汰も下らなかつた。下らないどころか、それ迄官位の低かつた兄の兼通卿が、月

末の二十七日に、意外にも一足飛びに内大臣に任ぜられ、やがて關白にさへなつたのである。

様子を聞いて、東三條へ尋ねて來られた女御のおん眼には、涙があつた。父の右大將は、それこそ惡靈になりはせぬかと訝しまれるやうな、殺氣立つた眼つきをして、物をも言はずに控へて居た。

「それがしが聞いたところでは、堀河の伯父御が秘密に手段(てだて)を運らして、是非とも關白の宣旨を下し賜るやうに、たつて御門へお願ひ申したとやら、專らの評判でございます。」

と、太郎の道隆が、女御と父とを見比べながら、慰めるやうな調子で云つた。

「何も騒ぐには及ぶまい。向うにそれだけの手段があるなら、此方にも覺悟はある。」

右大將はたゞ斯う云つたきりであつた。さうして明くる日から病と稱して、當分内裏へ顔も出さなかつた。

三

堀河の大臣兼通卿が、關白の宣旨を蒙むる迄には、隨分長い間の隱忍と苦勞とがあつた。卿は弟よりも官位が低いばかりに、いかにも無能な兄のやうに目されるのが、心外でならなかつた。成る程卿には弟のやうな濶達な氣象もなく、縱横の才氣もない。けれども卿は自分の材幹が、弟よりも劣つて居ようとは、どうしても信ぜられなかつた。自分の出世が遲いのは、兼家のやうな派手な所がなく、人づき合ひが惡い爲めなのである。それだのに弟の奴は、自分の立身を鼻にかけて、動ともすれば兄をないがしろにしようとする。今に覺えて居るがいゝと、さう云ふ風に考へて居た。

卿は右大臣家の二郎に生れながら、幼い折から妙に陰欝で、可愛がられない少年であつた。

さうして父の師輔が亡くなつた後は、伯父の實賴も兄の伊尹も、三郎の兼家の爲めばかりを思つて、一向卿を相手にしない。大概の公卿ならば、とうに榮達の望みを絶つて、出家入道して、無理にも世の中をあきらめてしまふのが普通であるのに、卿はそのやうな意志薄弱な男ではなかつた。うはべは頗る働きのない、覇氣に乏しい人間のやうに見えても、その實一徹な卿の胸中には、絶えず激しい功名心が執念く燃えて居た。

卿は四十の歳になるまで、機會の來るのを辛抱強く待つて居た。しかし、徒らに手をつかねて運命を自然に任せて居る限り、機會は永遠に來さうもない。

「伯父や兄が賴みにならないとすれば、自分は后の宮にお縋り申すより仕方がない。」

最後に卿はさう決心したのである。

其れはちやうど村上の御門の御代で、卿の御妹の安子姬が、中宮として世に時めいておいでになる時分であつた。ある日、弘徽殿の宮のおん許へ、兼通卿が何と云ふ事もなく伺候して、暫くもぢもぢと躊躇つて居る樣子であつたが、やがて、思ひ餘つたやうに、

「お願ひがございます。」

と、御前に近く擦り寄りながら、額づいて云つた。

「わたくしは、弟に先を越されるのが口惜しうございます。この後、せめて關白の宣旨だけは、兄弟の順序に仰せ下さるやうに、宮樣のお手づからのお文を、いただきたうございます。」

后の宮は、不遇な兄君の此の言葉を、今更のやうに哀れに聞し召したのである。

「よし、よし、何なりと書いて取らせよう。」

かう仰つしやつて、直ぐに其の席でお文を卿へお渡しになつた。

卿はその折の御書付けを、御門や中宮が崩御になつた後までも、袋に入れて、頸に懸けて、肌身放さず持つて居た。安和二年の五月に、卿が四十五歳でやうやう宮內卿になつた時、弟の兼家は四十一歳で、既に中納言であつたが、「關白だけは自分が先に取つて見せる。」と、卿は私かに成算を抱いて、わざと落ち着き拂つて居た。

御文を頂いてから殆んど十年近くも立つて、中宮の御腹の親王(みこ)の圓融院が御在位の時、卿が弟に對する復讐の機運は、始めて熟して來たのである。天祿三年の十一月一日に、一條攝政の薨去の報が傳はると、間もなく卿は參內して、淸涼殿の殿上の間へ伺候した。主上はまだ十三四の幼いお歳で、鬼の間に遊んでおいでになると、其處へ兼通卿がむづかしい顏をして、這入つて來さうなけはひであつた。不平のあまり、日頃めつた朝廷へ出たことのない、不愛憎な此の伯父を、主上にはうるさく思し召されたのであらう。櫛形の窓の間から、卿の姿をちらりと御覽ぜられて、そのまゝ朝餉(あさがれひ)の間の方へ、駈けておいでにならうとすると、卿が二三步お跡を追つて、

「奏上いたします。」

と云つた。

「此れを御叡覽下さりませ。」

かう云つて、兼通卿が懇懃に捧げて居る物を、主上は生憎(あやにく)に思し召しながら御手に取つて御覽にな

つた。それは紫の薄様に、「關白をば次第のまゝにせさせ給へ。ゆめ〱違へさせ給ふな。」と、見事に走らせた女文字である。

「おゝ、此れは故宮のお手ぢや。」

なつかしさうに仰つしやつて、主上は暫くお母后の亡き御俤を、お忍ひになる御氣色であつたが、やがて御文をお持ちになつたまゝ、奥の間へ入らせられた。

かくて半月ばかりのうちに、内大臣の任命が兼通卿へ下つたのである。それからの卿は、思ひのまゝに驥足を伸ばして、關白になり、太政大臣になり、天延元年七月には、姫君を御門の中宮に奉つて、外戚の權威を振ふやうになつた。

卿はもう五十を超えた老人であつたが、半生の屈辱と逆境とに依つて、一層强く培はれた性來の意地惡さは、存分に希望を遂げた今日になつても、容易に緩和されないで、なほ弟を憎んで居た。弟に對する復讐は、まだ充分でないやうに感ぜられた。「自分が嘗つて味はつたやうな孤立無援の狀態に、弟の奴を陷れてやらう。」——卿は始終さう思つて居た。

兼通卿の堀河の住居と、兼家卿の東三條の住居とは、閑院の邸一つを隔てゝ居るばかりなので、弟の家を訪れる公卿の牛車が聞える度に、

「又しても、誰ぞ東三條へ追從に行くと見える。今通つたのは、あれは誰だ。」

と、兼通卿は氣色を惡くして、車の主を調べさせた。人々は後難を恐れて、成る可く東三條へ近寄らないやうにした。たま〱已むを得ない用事があれば、夜中にこつそりと尋ねて行つた。

卿は、御女の中宮が、美しい男親王をお生みになるのを見ない內は、容易に安心が出來なかつた。自分の孫にあたらせられる御方が、天下の主となられてこそ、自分の榮華は絕頂に達するのであつた。しかし、太政大臣の勢力を以てしても、此ればかりは思ふに任せず、中宮には長く御妊娠の御樣子がない。御門は心うく思し召して、兼家卿の二番目の姬を、女御に上るやうに、內々での御沙汰があつた。卿は再び、更に激しく弟を嫉視した。

「中宮があゝしておいでになるのに、東三條の大納言が、女御を上る要はない。彼奴は何處までも、歷に楔を突かうとする。」

卿はかう云つて、極力女御の御入內を妨げた。

「年中曆を呪つて居る弟の奴を、何とかして亡き者にしてやりたい。」

などゝ云ふ恐しい考さへも、胸中に浮ぶ事があつた。

弟の兼家卿の方でも、默つて兄に負けては居ず、「たとへ關白が何と云はうと、上のお言葉があるからは、差し控へるには及ぶまい。」さう思つて、世間へは知らせずに、姬君の入內の支度を急いで居た。

東三條の一門に取つて、此の上もないめでたい事は、冷泉院の女御が、御妊娠なされたと云ふ知らせであつた。それを聞くと、兼家卿の邸の內は、俄かに春が來たやうに活氣づいて、五壇の御修法や、長日の御讀經や、御安產の加持祈禱に手を盡した。

「東三條の大將は油斷がならない。彼奴は、院の女御が男親王をお生みになるやうに祈つて居るのだ。

さうして行く行く、その親王を押し立てゝ、謀叛をしようと云ふのだらう。」

こんな事を云つて、兼通卿はその祈禱をさへ、苦々しく感ぜずには居られなかつた。

太政大臣の執拗な威壓と迫害にも拘らず、御修法と御讀經とは、山々寺々の大德、修驗者に依つて、半年の間怠らず行はれた。院の女御は貞元元年丙子正月三日に、恙なく男親王を御産みになつた。

四

その明くる年、兼通卿が五十三歳の晩秋のことである。太郎の顯光と、次郎の朝光とが鷹飼をつれて、大原野へ夕狩りに行かうとする日に、

「お父樣もおでになりませぬか。」

と云つて、公達は頻りに父を誘つた。

卿は二三日前から、夕ぐれになると何となく胸が塞がつて、かすかな頭痛を覺えて居た。卿は平生、自分の病氣を意識する事が嫌ひであつた。「自分はまだまだ生きなければならない。子孫の繁榮をたしかめた後でなければ、迂濶に死ぬる譯には行かない。」さう云ふ考が常に頭にあるせゐか、大抵の病氣には强ひて抵抗しようとした。それが今度だけは、格別苦しいこともないのに、どう云ふものか重病にかゝりさうな豫感に襲はれて、不愉快でならなかつた。

「氣分がすぐれないのは、天氣が惡い爲めだらう。しぐれ模樣の空が、毎日毎日欝陶しく曇つて居るか

らだらう。」

かう思つて、無理にも安心して居たが、鷹狩の日は朝來珍しく晴れ渡つて、霜解けのした庭の地面に、うら〳〵かな小春日和の日光が、紫竹の影をくつきりと印して居た。九月の中旬の、青々とした空の色を仰ぐと、卿は急に救はれたやうな心地がして、こんな時には、血氣盛んな公達と共に、山野を驅け廻つた方が、却つて頭痛が一掃するやうに感ぜられた。

「よろしい、麿も一緒に行くとしよう。」

かう云つて、卿は慵い體を勵まして未の下刻に、堀河の邸から葦毛の馬を驅つた。

けれども、卿はまだ道程の半分も來ないうちから、早くも惡寒に襲はれ始めた。西日をうけて、ぱつと眼の覺めるやうに反射して居る比叡山の頂きを、手綱を締めながら見上げようとすると、不思議な眩暈がして、仰向けにふらふらと倒れさうになる。野裝束を纒うて、地摺の指貫に熊の皮の行縢をさへ穿いて居る兩脚が、殆んど無感覺に冷え切つて、體中の血が蜂谷の邊へ悉く集つて來るやうに思はれる。久しく馬へは乘らなかつたにしても、あまりに息切れがして慟悸が激しい。同じやうな紺の狩襖を着けて、つきげの駒に跨がつて居る二人の公達の、逞ましい鳴符の鷹に戯れて居る様子や、犬飼の手に曳かれた黑尾の犬の、狩場へ近づくにつれて、鈴を鳴らして勇み立つ姿が、をりをり卿の注意を惹く毎に、卿は「はつ」として元氣になるが、其れが一向長もちをしない。

「御血色がお惡いやうに見えますが、どうかなさいましたか。」

隨身の一人が尋ねると、

「いや、別段……」

と云つて、物を云ふのも大儀らしく、卿はたゞ首を振るばかりである。

日の暮れ方に鷹野へ着いてから後は、卿は全く夢中であつた。夢中で、若い者に負けない積りで、森や藪や丘陵の間を馳せ廻つては居たものゝ、辛うじて體が馬上に繋がつて居たに過ぎなかつた。最初は總身が水を浴びたやうになつて、立烏帽子の縁がふるへるほど、頭蓋骨がきりきりと軋めいて居たが、しまひには一切わからなくなつて、凡べての光景が幻の如くぼんやり瞳に映つて居た。

太郎の顯光が、獲物の中の二羽の山鳥を、榊の枝に結び着けて、右大臣の雅信卿へ贈らうとして騒いで居る時、

「雉があるなら取つて置け、麿が卯酒(ぼうす)の肴にする。」

と、負け惜しみを云つたのを、譫語(うはごと)のやうに覺えて居るだけで、卿は何處をどう歩いて何時ごろ家に歸つたのか、少しも記憶に殘つて居ない。恐らく途で昏倒して、公達や隨身どもに擔ぎ込まれたのであつたらう。……

氣が付いて見ると、卿の耳には、何か地鳴りのやうな響が、囂々と聞えて居る。それは此の世の終りの知らせで、自分は今、地獄へ墮ちて行くのではあるまいか、それとも又、自分の體は船底のやうな所に押し籠められて居て、波の音に圍まれて居るのだらうか。――そんな事をうつゝともなく考へて居るうちに、卿にはふと、それが多勢の人間の、騒々しく怒鳴つて居る聲であるらしく、思はれて來た。聲はどうかすると、蚊の呻るやうに遠くなつて、やがて今度は鳴神(なるかみ)のやうにおどろおどろしく近づくので

ある。中でも一番近い聲が、やがてはつきりと卿の耳へ這入り始めた。

「南無東方藥瑠璃光佛、藥王藥上菩薩、耆婆醫王、雪山童子、……」

自分は病氣で寢て居るのだ。さうして誰かゞ服藥の咒を唱へて居るのだ。――卿が斯う腹の中で呟いて居る間に、聲は一層明瞭に、朗々と咒文を高唱し續けた。

「……善神扶助、五藏平和、六腑調順、七十萬脈、自然通張、四體强健、壽命延長、行住座臥、諸天衞護莎訶(ソワカ)。」

卿はぱつちりと眼を開いた。

「お氣がおつきになりましたか。お藥を召し上りませ。」

と云つて、典藥頭の丹波忠明が、今の咒文を誦しながら、卿の頭上へ乘りかゝるやうにして、口元へ湯藥を注ぎ込んで居た。

「まろはどうしたと云ふ事だ。」

卿はかう云つて、自分の周圍を徐ろに眺めた。仰向きに寢て居る鼻先に、何か紅いものと白いものとがちらちらするので、額越しに見定めると、それはけばけばしい紅梅の御衣(かんぞ)を召された、中宮のお顏で、おん睫毛(まつげ)には涙が一杯に宿つて居る。宮の左右に侍りながら、ずらりと枕もとに並んで居る家族の者共の兩頰も、同じやうに涙で濡れて居る。

「おゝ、お父樣がお眼をおあきになつた。」

公達の一人が斯う呼ばはつたやうであつた。同時に五六人の女房の顏が、息のかゝるほど近くへ寄つ

て、「お氣をたしかになさりませ。たしかになさりませ。」と、口々に甲高い調子で云つた。先づ、夢の中で聞いて居た騷々しい人聲は、忠明の咒文が止んでしまつても、未だに屛風の向うから、嚴かに絶え間なく響いて居た。

「あれは何を云つて居るのだ。あの聲は誰だ。」

「あのお聲がお分りになりましたか。あれは寛朝僧正や餘慶律師が、此の間から仁王經を讀誦遊ばして、御平癒の祈願をこめて居らつしやるのでございます。」

と、女房が云つた。

病氣の爲めに我を折つたことのない卿は、これだけの人々が寄り集つて涙を流したり、泣きわめいたり、祈禱をしたりするほど、自分が瀕死の境にあるのかと思へば、情ないやうな忌ま忌ましいやうな心地がした。この月始めから自分を脅やかして居た豫感は、やつぱりほんたうであつた。自分はとうたう勝てなかつた。公達の話に依ると、鷹狩りの歸途に氣を失つて、その晩枕に就いてから、今日は既に七日目で、病氣は傷寒であると云ふ。――唇がぱさぱさに乾いて、眼の球が抉られるやうに痛い。寢返りを打たうとすると、いつの間にか手足に力がなくなつて、體が不自由になつて居る。ぢつと靜かに安臥して居ながら、襟首のあたりが始終火のやうに火照つて、その熱が盛んに燃え上る時は、朦朧として危く失心しさうになる。をりをり、典藥頭が甘葛の汁に削氷を入れて、銚の縁から口に注ぐのを、卿は何より旨さうにして舌にうけた。

それから長い間、卿は日に幾度となく、屢々昏倒し、屢々蘇生した。卿には正氣で居る時の熱病の苦

しみよりも、前後不覺で居る時の幻覺の方が恐ろしかつた。
「まろの病氣は傷寒ではない。衆家の生靈が祟つて居るのだ。餘慶律師は何をして居る。早く彼奴を調伏してくれ。」
そんな譫語を云ふかと思ふと、元方卿の惡靈が、磐石のやうな重みで、胸の上に跨がつて居るのだと云つたりした。凄じい夢の間には、嬉しい夢にも遇ふと見えて、
「后の宮が男親王をお生みなされた。忝い、忝い。」
と云つて、痩せ衰へた頬に、淋しい笑ひを洩らしたりする。
九月が暮れて十月の初冬になつたが、卿の容體は快い方へ向かなかつた。朝のうちはいくらか氣分が落ち着いて、看護の人々と機嫌よく話をするけれど、夕方からは必ず熱に浮かされる。さすがに我慢の强い卿も、だんだん氣が弱くなつて、以前のやうに激しい譫語を、口走る精根もなく、やゝともすれば情に脆さうな事を云ふ。夜の明け方に眼を覺まして、燈臺の灯（ともしび）の薄暗い影を見詰めて居ると、頭腦が透き徹るほどはつきりして來て、愉しかつた過去の生涯が次ぎから次ぎへと思ひ出され、自分は餘りに冷酷な人間であつたやうな心地もする。そんな考へが起るのは、死ぬ前兆のやうにも感ぜられるが、それをどうしても追ひ拂ふことが出來ない。
十一日の早朝の卯の下刻ごろ、卿は例のやうにすがすがしい頭を枕に載せて、暫くの間、ぢつと感慨に耽つて居た。爽やかな黎明の外氣が、何處からとなく流れて來る病室の中には、二三人の女房が、長炭櫃を圍んだまゝ、看護に疲れて睡つて居る。今しがた起き出たらしい都の町々の、鷄の啼き聲や、寺々

の鐘の音や、往來の人の騷擾や、曉の物の響の遠くの方で鳴つて居るのが、高僧の讀經のやうに莊嚴に聞えて、卿は靜かに耳を澄まして居ると、やがて近隣の公卿の家から、牛車に載つて出て行く者があつた。轍の音は卿の邸より東の方に始まつて、それが程なく此方へ練つて來るらしく、隨身の警蹕の聲が、凍えるやうな寒空に冴え返つて居る。

「あの車は、東三條の邸から出たと思はれるが、……」

卿は獨語のやうに云つた。さうして、今頃弟の兼家は、何處を訪れる積りだらうと、訝しまずには居られなかつた。

「さやうでございます。東三條の大將のやうに思はれます。」

と、女房の一人が眼を擦りながら云つた。折柄次ぎの間に詰めて居た次郎の朝光も、急いで父の枕許へ馳せ寄つて、

「あれは伯父御に相違ございません。きつと伯父御は、お父樣のお見舞ひに入らつしやるのでせう。」

かう云ひながら、意外の喜びに打たれたやうに、病人の顏色を窺ふのであつた。

「さうか、」

と云つて、卿は瞑目して何事をか考へて居るやうであつた。日頃は仲が惡かつたが、兄の命の旦夕に迫つて居るのを、弟はやつぱり案じて居てくれたのである。此れ迄兼家を恨んで居たのは、みんな自分の僻みであつた。今にも弟が見えたらば、潔く從來の罪を詫びて、一門の後事を託すとしよう。關白の位をも讓つてやらう。さうしたら弟は、どんなにか嬉し淚に咽ぶだらう。――その刹那の光景を想像

るだけでも、卿は胸が一杯になつた。

「東三條の大將が、まろの見舞ひに來てくれる。珍しい事があるものだな。——その邊を綺麗に片附けて置けよ。」

卿はこみ上げて來る泣き聲を無理にこらへて、やつと此れだけの事を云つた。

すると、車はたしかに三條坊門を轣轆として進んで來たが、卿の邸の門前には止まらずに、堀河の角を北へ曲つて、内裏の方へ行くのである。病床に侍つて、客の到着を待ち構へて居た人々は、一樣に不審の眉を顰めた。朝光は早くも眼の色を變へて、再び恐る恐る、父の表情を窃み視ずには居られなかつた。

「麿は此れから内裏へ參る。麿の體を抱き起せ。」

卿が突然かう云つたのは、車の響がもう聞えなくなつた時分である。

一瞬間に卿の相恰は全く違つて、眞青になつた顏の中に、吊り上つた眦が狂人の如く血走つて居る。「起せ、起せ、」と云ひながら、水を潜つた痩せ犬のやうにぶるぶると奮ひ立つて、口と鼻とを大きく歪めて、あはや息を引き取りさうな、切ない喘ぎ方をする。

「大變でござります。殿が物怪にお憑かれなさりました。」

近侍の者が、斯う云つて絶叫したのも無理はない。明日にも命の危い病人が、女房たちの力まかせに抑へる手を撥ね除けて、起き上らうとするのである。

「どうなされました、お父樣。淺ましうござる。」

顯光が父の耳元へ口を寄せて、正氣を喚び返すやうに、厲聲叱呼した。

「兼家の奴は、兼家の奴は、……」

と、卿は車の過ぎ去つた方角を睨んで、性急に身を藻掻きつゝ云ふのであつた。

「……麿が病氣をよい事にして、内裏へ何か奏聞に行き居つた。さう云ふ人間なればこそ、麿は彼奴を憎んで居たのだ。麿にはきつと覺悟がある。今から直ぐに參内するから、早く車に裝束をしろ。」

左右の袂を控へて居る公達の手を振り切つて、卿は獨りでゞもふらふらと歩いて出さうなけはひである。病氣になる前の剛情と一徹とが、卿の心を俄かに捉へたのである。而もその剛情と一徹とは、長の煩ひに傷々しく窶れて影のやうになつた人間を、達者な時よりも一層物凄く、人間以上の鬼神のやうに恐ろしくした。一座の者は卿の見幕に氣を奪はれて、命令のまゝにするより外仕方がなかつた。

「冠を持て」「束帶を持て」と呼ばゝりながら、兩手を人の肩に懸けて、立ち上ると同時に卿は氣を失つたやうであつたが、しかし決してよろめきはしなかつた。氣を失つたまゝ、袴を穿かせ、袍を着けさせ、石帶を締めさせて居た。さうして、すつかり朝服を纏うて、黄金づくりの飾太刀を佩くや否や、殆んど奇蹟に近い程のしつかりした足取りで、東の妻戸の階へ、二た足三足歩いて行つた。顯光と朝光と、二人の兄弟が呆然としてその跡を追つた。

三人の親子を乘せた唐庇車が、堀河の邸を出たのは、兼家卿が通つてから半時も立たない間であつた。兄は父の卿とさし向ひになり、弟は卿の右に座して、車の揺れる度毎に、兩方から卿を支へて居た。簾越しに、兄弟が物見の窓から戸外を眺めると、やう朝霧の晴れた地上には、霜が眞白に降りて居る。北に

向つて走つて居る車の、蘇芳の絹の下簾の隙間や、傍立の手形の穴から、すうすうと洩れて來る凜烈な寒風に、父は襟元を吹かれながら、後ろの窓に倚り添うて、仰向きに眼を閉ぢて居る。兄弟は、それでも病人が生きて居るのを不思議に感じつゝ、紫色になつた父の顏色を、車の停るまで默然として凝視して居た。

卿は內裏の瀧口の陣の所まで、公達に擔がれて來たが、そこから獨りで眞直ぐに簀子を渡り、白地に浮線綾の丸のついた下襲の裾を、長々と曳き擦つて、淸涼殿の艮の隅の、荒海の障子の際から、この世に迷ひ出た幽靈のやうに弘廂の間へ姿を現はした。さうして、漢の武帝が造つたと云ふ昆明池の風景を描いた、極彩色の衝立の前を二三間進むと、案に違はず東三條の右大將が、今しも日御座へ臨御になつた主上に拜謁して、何事をか奏上して居る最中であつた。

卿の樣子を御覽になつた主上のおん驚きは、申すまでもない。後ろの方に衣ずれの音がするので、何氣なしに振り返つて見た右大將は、驚愕と云ふよりも寧ろ恐怖を覺えたのである。なぜかと云ふのに、此の間から兄の病死を待ち設けて居た大將は、今朝、明け方に兼通卿が息を引き取つたと云ふ風說を聞いて、その機を逸せず、關白の宣旨を自分へ下し賜はるやうに、急いで內裡へお願ひに上つたのである。剩へ其處に彳んで居る兄の形相は、到底息のある人間のやうには考へられない。大將に取つては風說が無根であつた事に氣が付くよりも、兄が黃泉から來たのであると信ずる方が、遙かに自然なくらゐであつた。

兼通卿は、蒼惶として鬼の間の方へ立つて行く弟には目もくれず、先刻邸を出た時のやうな沈着な態度で、御前に進んで平素のやうに恭しく敬禮した。けれども其の瞳は、主上の龍顏を仰ぎ視ないで、兩

手に捧げた象牙の笏の裏面へ、吸ひ着かれた如く注がれて居る。
「わたくしは今日、病を冒して、生あるうちに最後の除目を、行ひに參りました。」
と、奏上した卿の聲は微かではあるが、颯爽とした意氣に充ちて居た。此の言葉と共に卿は氣が弛んだのであらう。忽ちよろめくやうに額づいて、笏をばつたりと床に落した。

右近大將藤原兼家は、何と云ふ罪もなく、たゞ朝廷に對して不穩の擧動があると云ふ口實の下に、その日のうちに治部卿に貶せられた。それから程なく、兼通卿は關白の位を從弟の左大臣賴忠に讓つて、此の世を去つた。

五

賴忠卿は、前關白とは反對に、女性的な、誰に對しても恨みを買はない好人物であつた。卿は自分の姬君を、女御に上げたいと思ひながら、なくなつた兼通卿に濟まないやうに感ぜられて、さうする程の勇氣もない。同時に兼家卿の境遇をも氣の毒がつて、長く治部卿の位地に置くのに忍びなかつた。ちやうど堀河の兄が薨去してから一年の後、天元元年の十月の除目に、東三條の弟は從弟の關白の推擧に依つて、始めて右大臣に任ぜられたのである。

しかし、兄にさへ楯を突くほどの右大臣は、從弟の親切を恩に着て居る暇はなかつた。關白が先任者の

遺志を憚つて居る間に、右大臣は二番目の姫君を御門の女御に上つて、久しい間の希望を遂げた。それは御姉君の冷泉院の女御にも勝つた、愛敬のある、健やかに若々しい姫君で、梅壺の女御と云はれたお方である。氣むづかしい堀河の伯父が存生中は、何となく肩身が狭くて、あまり世間へ顔出しをしなかつた道隆、道兼などの公達も、やうやう近頃時を得たやうに、蹴鞠の遊戯に加はつたり、物見車を走らせたりする。一昨年の春お産のあつた院の女御は、そのうちに又二の宮の男親王をお生みになる。右大臣家に取つてめでたい出來事が、重り合つて起る間に、前關白の御女の中宮は、父の卿のお跡を追はせられて、天元二年六月の二日に崩御になつた。

好人物の頼忠卿は、中宮の御法事を執行した後、その年の冬に姫君を内へ參らせて、傍若無人な右大臣に對抗を試みたが、春の初めには、早くも梅壺の女御が御姙娠の御樣子なので、初めて御子をお儲けになる上の御喜びは一と通りでない。しばしのおん別れを、遣る瀨なく思し召しながらも、三月と云ふのにお許しが出て、女御は東三條のお里方へお歸りになる。その夜は朝廷に仕うまつる上達部や殿上人が殘らずお供に從つて、右大臣家に詰めると云ふ騷ぎであつた。例に依つて長日の御修法や御讀經が、内裏とおん里方と兩方で行はれる。内藏司では白の御帳だの装束だの、いろいろの御産用の調度を拵へる。夜晝わかぬ御見舞の勅使が、内裏と東三條との間を馳せ違ふ。女御は五月の晦日から御産の御氣色があつて、あくる六月一日寅の時に、いさゝかの御惱みもなく、玉の樣な男親王をお生みになつた。

どう云ふものか、その年は大風、地震、火災などが頻發して、七月には宮城の諸門が吹き倒され、十月には内裏が炎上した。御門は、朝光大納言の住んで居た閑院の御殿へお移りになつて、僅か數町を隔

てゝ居る東三條の邸の、若宮や女御のお身の上を、御軫念あらせられてのみお暮しになつた。御誕生の後の御肥立もよく、御五十日や百日を恙なくお過しになつた若宮のお姿を、一と目御覽になりたいとは思し召しながら、假の内裏の所狹きまゝに、お呼び寄せになる譯にも行かない。ともすれば、東三條の女御のおん許へと思し立つ折もあるが、さすがに關白の賴忠卿の心中を哀れに思し召されて、そのやうな仰せもない。たゞ時々、賀茂平野などへ行幸遊ばされて、若宮の御成育をお祈りになるばかりである。

右大臣の幸運を見るにつけても、賴忠卿は頻りに焦つたが、卿の御女の女御は、遂に御子をお宿しにならなかつた。しかし關白の姫君であるから、誰に憚るところはない。御門からは、皇后の御位に即かせようと、有り難いお言葉さへ下つたのを、卿は御遠慮申上げて、「一の御子をお生みになつた梅壺の女御をこそ。」などゝ、相變らず愼み深い風であつた。

「梅壺の女御は、行く末必ず后の宮にならせられる御方である。今度は先づ、順序として卿の御女が、御位に即かれても宜しからう。」

と、朝廷の再度の御沙汰があつてから、卿は始めて安心して、内々で立后のおん催しを急ぎながら、纔かに不平を慰めて居た。

天元四年の冬の初めに、主上は新造の内裏へお移りになつた。男親王がお生れになつた上は、やがて御位をお降りにならうと思し召すものゝ、東三條におはします若宮と女御とは、なぜか其の後、長く參内せられなかつた。それは父の右大臣が、賴忠卿の御女の立后の噂を聞いて、わざと女御をお引き止め申して居たのである。御門は宸襟を惱ませられて、幾度となくお迎ひの勅使をお遣はしになるけれど、

一向お召しに應じない。院の女御と、梅壺の女御と、お二た方の御腹の親王たちと、それから女御の御兄弟の四人の公達と、此れだけの方々が一つ邸に日を送られる東三條の御殿の内は、いつも陽氣な笑ひ聲に充ちて居た。

あくる年の正月の庚申待には、冷泉院の女御のお部屋でも、梅壺の女御のお部屋でも、お召し使の女房たちを御相手に、夜を徹していろいろのお慰みがあつたので、邸の中は常にも勝る賑かさであつた。太郎の道隆を頭に、ことし十八歳になる末の弟の道長まで、四人の公達は彼方の御殿から此方の御殿へと、お二た方の女御のお許を遊び歩いて、碁や双六や、偏突や、いしなどりや、さては和歌のやりとりに餘念がない。

「お蔭様でわたくしどもは、睡くならすに濟んでしまひます。」

と、女房たちも一緒になつて、夜の明けかゝるのも知らずに、打ち興じて居た。

冷泉院の女御の御部屋では、一としきり勝負事が止んで、四方山の世間話が榮えるやうであつた。兄弟のうちでも一番酒好きの道隆が、いつの間にかほろ酔ひ機嫌の赭顔を光らせて、炭櫃の周圍に集まつた一座の人々を見渡しながら、雜談の中心となつて居る。女御がまだ姫君であらせられた頃の、物識りの乳人も交つて、話題は女房の衣裝の好みから、若い殿上人の品定めだの、當時の歌よみ手書きの批評だの、和歌と漢詩との比較論だの、際限もなく擴がつて行つた。

「和歌の話で想ひ出したが、まろは近頃耳よりの事を聞いた。――あの和歌の上手な閑院の左大將の北の方は、離緣になつたと云ふではないか。」

と、次郎の道兼が、突然間から嘴を入れた。

「あゝ、あの話でございますか。あの事なら私はよく存じて居ります。」

かう云つたのは乳人である。

「……御器量もよし、才もおありになり、三人の男君や美しい姫君までもお生み遊ばした北の方を、お去りになると云ふのは、左大將がお惡いのでございますよ。つまりまあ、慾に眼が晦んだとでも、申すのでございませうね。」

「さうすると何かな、外に有福な女があつて、その方へ靡いたと云ふ譯かな。」

「さうなのでございますよ。ほら、御存知で居らつしやいませう、先日お亡くなりになつた批杷大納言の北の方、あれが今度、左大將の北の方におなりなさいました。」

「あれがかい。」

かう云つて、眼を圓くしたのは道隆である。

「あの北の方は、まろもよく知つて居るが、もう四十ぐらゐで、朝光とは親子ほどに歳が違ふ。それに色が黒くて、ちゝれ毛で、たしか額に疱瘡の痕があつた筈だ。いかに有福だと云つてもなあ。」

公達が口を揃へて從弟の左大將朝光を散々に嘲ると、一座はどつと笑ひ崩れた。

「あのお方も、お父君の關白がおなくなりなされてから、妙に魔がさしたのでございませう。」

こんなことを云ふ女房もある。

「それどころではございません。今度の北の方について、もつとおかしい話がございます。」

と、乳人がまた膝をすゝめた。

「先の北の方にくらべると、成る程御器量は及びませんが、それはそれは大將を大切になさるのでございます。第一、お側には裳や唐衣や立派な裝束をした女房が、三十人ばかりも仕へて居て、大將がお出でになれば、痒いところへ手の屆くやうに、お持てなしをなさります。此の頃のやうな寒い晩には、炭火を澤山に焚いて、その上に伏籠を伏せて、大將がお召し換への褻の服を、いつもぽかぽかと暖めてお上げになる。炭櫃に銀の提子を二十ほど据ゑて、さまざまのお藥を並べてお置きになる。大殿籠る時などには、三四人の女房が大きな火熨斗を持ち出して、お休みになる蓐の上を、何遍も何遍も擦つて上げるさすが有福なお方だけに、萬事がさう云ふ風ださうでございますよ。」

「いやはや。」

と、三郎の道綱が大きな聲で云つた。

「それで朝光の大將は、その親切にほだされて、元の北の事を、ふつつり忘れてしまつたらうか。」

「ところがさうは參りません。をりをり元のお方を戀ひしう思し召して、その方へ車をやれと仰つしやいますが、肝腎の雜色だの隨身だの牛飼の童などが、今度の北の方から年中御酒をいたゞいたり、裝束を賜はつたりして居るので、どうしても仰せに從はないのださうでございます。」

「あはゝゝゝゝ、それを朝光は、よく辛抱して居られるな。あの男も父の關白に似て、片意地な、つめたい所があるのだらう。」

道綱が感心したやうに首を振つた。

「それでも左大將は、思つたよりも風流なお方でございます。このごろ、胡籙の端に水晶をつける事が流行るやうでございますが、あれは最初、あの大將がお考へになつたのでございませう。」

青裾濃の唐衣を着た、うら若い女房の一人が、斯う云つて朝光を辯護すると、鷹揚な道長がにたりと笑つて、

「お許はあの人が好きと見える。」

と、横眼をつかひながら云つた。

「それはあんまりでございます。まあいやな事、……」

うろたへながら云ひ譯をする女房の口の下から、隅の方に居る誰やらが、

「最上川のぼれば下るいな舟の……」

と、小ひさな聲で冷やかしたので、一坐の者が、又どつと笑ひ崩れた。

此れ等の人々が一とかたまりになつて、他愛もなくしやべり合つて居る光景を、院の女御は面白さうに打ち眺めておいでになつた。戸外はもうほんのりと白み初めたのに、一方の壁に懸けられた、帝釋天と靑面金剛との畫像が、燈臺の油煙の陰にぼんやり浮かんで居る部屋の中は、いまだに和氣藹々たる夜の團居の有樣である。畫像の前には、さまざまの草花を盛つた六器や水瓶が、脇机の上に載つて居る。女御は其處から少し離れた御席に、白の御衣へ紅の唐綾をお重ねになつて、おん手を沈の火桶にかざゝれながら、をりをり、お側の者共と御一緒に、ほゝ笑んでおいでになる。

「……ですが皆さん、經文のうちでは一體どのお經が、一番御利益があると思し召します。」

或る女房がこんな問題を提出すると、それから暫く經文の優劣に就いて、人々は實例を擧げつゝ、議論の花を咲かせて居た。或る者は仁王經の功德を讃へ、或る者は般若心經の靈驗を語つたが、結局此處に集まつた男女の中では、法華經を信ずる者が、最も多數のやうであつた。

「何と云つても、法華經より有り難いお經はございますまい。あのお經を讀誦したお蔭で、盲目の眼が開いたり、難病が助かつたりした例は、昔からどれ程あるか知れませんが、御利益のうちでも一番不思議なのは、あのお經を信心すれば、自分の前世が分るやうになると申します。」

かう云つて、乳人が威丈高になつて、反對者を說き伏せにかゝつた。

「それは外のお經でも、御利益がないとは申しません。けれども前世を知る事の出來るのは、法華經だけでございませう。……」

「法華經を讀誦すると、どうして前世が分るやうになりますか知ら。」

かう云つて乳人に尋ねたのは、先の靑裾濃の唐衣を着た女房である。

「それについて、こんな話がございますよ。」

と、乳人は其の質問を待ち構へて居たらしく、勿體振つた口調で言葉を續けた。

「つい此の間、美作の國に蓮尊と云ふ坊さんが居りましてね、その人が幼い折から、毎日毎日法華經を讀誦して、しまひには經文を空で覺えるやうになりましたが、どう云ふ譯か、二十七品だけを覺えて、いつ迄立つても普賢品を覺える事が出來ません。或る時などは、普賢品の一々の文句を、數萬遍も繰り返して讀誦しましたが、やはりどうしても覺えられないで居りました。すると、たしか去年の夏のこと

だと申します。その坊さんの或る夜の夢に、普賢菩薩のお使ひだと云ふ、貴い童が現はれて、麿は其方に、宿業の因緣を知らせに來たのぢやと、かう仰つしやるのださうでございます。……」

「ほゝう、其の坊さんの宿業と云ふのは、どう云ふことだらう。」

と、道綱が釣り込まれて言葉を挿んだ。人々はいつの間にか眞面目になつて、熱心に乳人の口もとを見守つて居る。

「その童が坊さんに仰つしやるには、其方の前世は狗であつた。其方は或る時、母親の狗に伴はれて、人の家の板敷の下に住んで居ると、ちやうど板敷の上で、法華經を讀誦して居る者があつた。其方は有難い經文を、床下で聞いて居た爲めに、人間となつて此の世に生れて來たのぢやが、その時親狗は、序品から二十七品までを聞いて、普賢品の讀經を聞かすに、其方をつれて床下を出て行つた。其方が普賢品を覺えられないのは、さう云ふ因緣があるからぢや。しかし、其方の信心に免じて、此の後は普賢品を覺えさせて進ぜよう。來世は必ず、法華經の功德に依つて、佛にめぐり會ふであらう。かう仰つしやつたかと思ふと、坊さんは眼が覺めました。それから後は、夢の中のお告げの通りに、普賢品が易々と覺えられたさうでございます。かう云ふ話は、まだまだいくらもございますが、法華經の有り難さは、此れで大概お分りになるでございませう。」

　固唾を呑んで耳を傾けて居た男女の顏には、知らず識らず敬虔の情が表れて、誰も彼も此の物語を疑はうとはしなかつた。二三人の女房は、いかにも緊張した眼つきをして、ほつと微かな溜息をさへ洩らして居た。

「それほど法華經を信ずるお許は、自分の前世を知つて居るかな。」

道乘がこんな事を云つて、乳人に戲れたのは、餘程立つてからである。

「殘念ながら、信心が足らぬと見えまして、まだ私の前世は分らないのでございます。」

「お許のやうな物識りでも、さすがに前世だけは知らないな。――それ仲尼の智も、睫上の塵を覩る能はずか。」

いまだに醉つて居る道隆が、道乘の跡について、おかしな節が斯う怒鳴つた。一坐は三度び、賑やかに笑ひ崩れた。

曉を告げる鳥の啼く音が、頻りに表に聞えて居るけれど、御殿の内では、絶えず女房が、大殿油に油をさして廻つて居た。院の女御は、乳人の話の途中から、大さうお睡さうに、脇息に凭れておいでになつたが、やがて其のまゝお休みになつた御樣子である。俯伏しに倚りかゝつて居らせられる御頭の、長々と垂れたすべらかしのおん黑髮や、海浦の摺裳のうへに、組入の天井の燈檯の明りが眩く落ちて、おん頂きの黃金の釵子や、蝶鳥の銀絲の繡のあるお腰のあたりが、繪のやうに美しく、きらきらと輝いて居る。

「女御さまがお休み遊ばしたやうでござります。お邪魔にならないやうに、靜かに致して居りませう。」

と、一人の女房が云つた。

「いやいや、もう夜が明けるのに、却つてお風を召すといけない。お起し申す方がいゝだらう。」

道長が斯う云ひながらお傍へ寄つて、

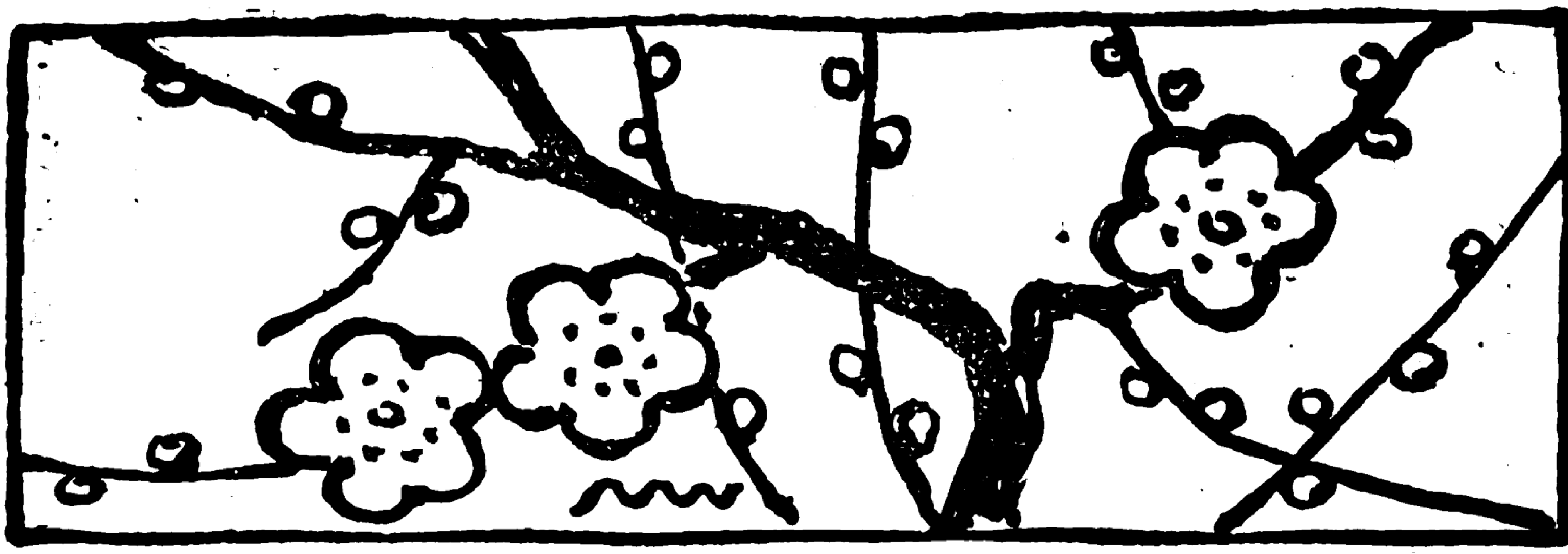
「お眼覺めなさりませ、お眼覺めなさりませ。」

と、二三度くり返して云つた。
しかし女御は、何のお答へもなく、すやすやと快げに眠つておいでになるのである。
「夜が明けまする。お眼覺めなさりませ。」
道長はもう一遍、おん耳元へ近づいて、少しく聲を張り上げて云つた。けれども依然としてお答へがない。四人の公達が不審に思つて、左右から言葉をかけ、脇息を搖つても、たゞぐつたりと項垂れてのみおいでになる。
「御氣分がお惡うござりますか。」
かう云ひかけて、隆道が試みに女御のおん手を取つて見ると、それは氷のやうに冷たくなつて居た。わづか半時前までは、御機嫌の好かつた院の女御は、法華經の利益の物語の間に、もう事切れておいでなつたのである。
たわゝに撓つた牡丹の大輪をゆり起すやうに、女房たちが御遺骸を抱き參らせると、夕顔の花のやうな白いお顔には、おん惱みの影だになく、らうたけたおん眉根の神々しさは、御存生中と變りがない。人々は、餘りの事に涙も出ないで、此の不可解な御頓滅を、怪しみ畏れるばかりであつた。
暫く立つてから、ふと、乳人が思ひついたやうに、
「きつと、元方卿の惡靈の業でござります。あの物怪は、何處まで御一門祟りをすることか。」
と云つて、急にさめざめと泣き始めた。
父の右大臣兼家卿は、惡靈を退治して御命を喚び戻すやうに、あらん限りの手段を悉した。直ちに、

山の大德や修驗者を招いて、女御のおん遺骸をもとの通りに脇息に倚せ參らせ、その周圍で盛んなる加持祈禱を行つたりした。耳を聾するやうな讀經の聲が室内に轟いて、護摩壇の火が、白綾の女御の御衣にあかあかと燃え映つても、俯伏しに伏し給ふ御頭は、遂に起きようとなさらなかつた。

かう云ふ混雜のうちに、庚申の夜は全く明け放れて、風のない、靜かな正月の空からは、大粒の雪が繽紛と降つて居た。

女御の御最後は、或は御不運であつたかも知れない。しかし、女御が嘗て夕占問ひをなされた折の、嫗の言葉は僞りではなかつたのである。なぜと云ふのに、女御はおなくなりになつてから、程なく皇后の御位を贈られ、御子の居貞親王は、やがて帝の御位にお卽きなされたのであつた。



非凡人の面影

岩野泡鳴

一

忘れもしない、大正六年九月三十日の夜であつた——渠は夜中にばり〱はりと云ふ大きな音を聞きつけて目をさますと、宵のうちからのおほあめ風が一層ひどくなつてるのであつた。雨戸ががたッぴし云つて、自分の寢てゐる二階が地震のやうにゆすつてる。けれども、電燈は消えてるし、特別な音を何の音であつたか分らないので、暫らく耳をくらやみにすましてゐた。そして、かかるおほあめ風にまぎれて、まさか、ぶち毀わしの強盗が來たのでもあるまいと思つた。

今一度おそろしい音がした。それで分つて少し安心したことには、うら隣りの家根のかわらが吹き飛ばされてこちらの戸に當るのであつた。

「兄さん——兄さん——大變よ。」隣りの三疊敷きでは、あわててマチを副りこ

こねてゐる樣子だ。ぱッと火がともるのが二三度ふすまのあはひから見えたかと思ふ每に、また暗くなつてしまう。

「……」へたな返事をしてこの上かの女をあわてさせまいと思つたので、渠は暫らく默つてゐた。すると、やがて火を點じたはだか蠟燭を手に持つて、妹はふすまを明けて這入つて來て、あわただしく、

「兄さん！」

「おい」と、直ぐ返事をしたので、かの女は却つてびッくりした。まだ眠つてると思つてたらしい。

「起きてたの？」

「無論、さ。」あふ向けになつて蒲團を半ばかけてるままで、「けれども、心配すな。これ以上のことはあるまいから。」

「さうでしようか？」

「そとまわりにどんな損害があつたからッて、おれ達の持ち家ぢやアなし——」

「そりやさうだけれど——」妹は短い蠟燭を手に持つてからだを顫はせてゐる。

「まア、その火を何かに立てたらいいぢやアないか」と云ひながら、渠も自分の身を蒲團の上に起して座つた。妹はかの女自身の使つてる繪の具ざらを見つけて來て、これに蠟燭を立てた。

　下の家族も騷いでるらしいので、渠は下りて行つてちよッと見舞ひの言葉を述べた。それから再び上つて來ると、妹は矢ッ張りもとのところに座わつたままであるが、多少その心は落ち付いた樣子であつた。そしてうちのことは、もう、安心だが、麹町の方が心配だらうと云ふことを注意した。

麹町とは、今、熱海へ赤ン坊と共に病氣保養にやつてある渠の病身な妻の里である。そこには老人夫婦と妻の妹なる十六才の女の子とがゐるばかりだ。渠等がこのおほあらしに手傳ひもなく、家の中をまご付いてる樣子が忍ばれるので、渠も自分の妹がこの場合けなげなことを云つて呉れたと喜んで、見舞ひに行く氣になつた。

時計を見ると、もう、午前一時を過ぎてる。が、思ひ切つて濡れる覺悟をして外へ出ると、おほあらしであるばかりでなく、その風がどこか近處の火事をでも運んで來たかのやうにむッと生あッたかいのである。ふと、こんな時にどこかの海岸に津浪でもありはしないかと云ふ恐れが浮んだので、第一に郵便局へ立ち寄つて、見舞ひの至急電報を熱海の方へ打つた。

かわらが飛んで來たり、家根の看板が落ちたり、道ばたの立ち樹が倒れたりするので、あぶなくッて、うか〳〵歩いてゐられないのである。かうもり傘などは豐玉橋を渡る時に取られてしまつた。それでも無事に鍋屋の横丁を銀座の通りへ出た。電車がないのは覺悟の前であつたが、たとへあつたとしても、とても通じないのであつた。街樹が勝手放題に倒れて、東京第一の往來を立ちふさいでゐた。その上、街燈がすべて消えてゐて、場末の暗い町も同然であつた。

渠は無方針に吹きまくるあめ風の銀座街を殆ど夢中で突ッ切つてから、多分二つ目か三つ目の或る狹い横丁を見ると、ちよッと曲つたところに、一臺の人車があるのを發見した。天の與へだとまで喜んで、その方へ這入つて行つて、

「おい、三宅坂まで行け！」

「どうして、どうして――このあらしに歸りそこなつて風よけをしてゐるばかりですから。」

「一圓やるから――」

「……」

「貳圓でも出す。」

「……」車夫は、これも濡れ鼠になつてゐながら、とう〳〵參圓の金で動いた。幌は取り外してあつても、なほ、から車では吹きさらはれさうになるので、そこに風の止むまで避難するつもりであつたのが、人を乘せれば左ほどでもあるまいと思ひ直したのであつた。

渠は車夫に注意して成るべく危險な物の飛んで來ないところを通ることにさせた。ところが、車は有樂橋を渡つて馬場前門に出たので、

「おい〳〵、車屋、冗談ぢやあない――三宅坂へ行くんだぞ。」渠は氣が氣でなく、斯う云つて車屋を責めた。

「知つてますが、ね」と、さきはちよつと踏みとまつて、當惑した樣子だ。「でも、あぶなくないところつて云やア、まア、この中を通るより仕かたがございますまい――？」

「さうだ、な。」渠自身もやッと危險物の下をくぐり拔けて來た心持ちがしてゐたので、成るほどそれもさうか知らんと考へた。無論、遠まわりになるのは分つてた。

車夫はそのまま足を運んで馬場前橋を渡つた。けれども、なほ一つ、トタン家根の一片らしいのがどこからか飛んで來て、渠等の雨にぶつかりながら進むその横丁へ落ちた。すると、車夫は突然足をとど

めて、こちらをふり向き、

「旦那、實際、いのちがけですぜ」と云つた。この時、車夫の進みの調子が狂つたせいか、また一吹きの烈風に車が横ざまに吹き倒れたのである。幸ひにも、お互に大した怪我はなかつたが、渠は肱にすりむき傷を受けた。そしてその傷口へ雨のしづくがしみ込んで痛い。

こんな目に逢ふ位なら、何も遠まわりなどはしないで、日比谷公園そとの堀ぶちを來てもよかつたのだ。

「お前は少しあわててゐたんだ、な」と、車夫をからかひ半分に斯う云つて見たけれども、實は、渠自身を責めたのであつて、自分の心の烈しい動搖が引き續いてゐた。

櫻田門を出てから、參謀本部したを通る時が恐らく最も危險と思はれた。あたまの上には、森の大きな樹ががう〳〵鳴つてる。自然ばえの樹だから、植ゑた街樹のやうには根こそぎ倒れまいが、そのおほ枝の一つでも二つでも折れて來たら大變であつた。その上、横手の土手へ車體が吹きつけられれば、深い堀なかへころ〳〵落ちてしまう恐れがあつた。けれども、思つたよりも無事に坂をもすべらず、吹き倒されもせずに登れた。

來て見ると、果して老人夫婦はおほまご付きをしてゐた。家が高臺の外れに立つてるので、一枚でも戸が外れると、風の爲めに家根まで持つて行かれると云つて、眞ッぱだかになつた渠も渠等と一緒になつてあぶなさうな戸を押さへたり、釘づけにしたりした。雨もりの箇所もあつた。車夫は、また、どうせこの風にから車を引いて歸れないから、夜が明けるまでこゝに置いて吳れろと云ふので、これをも

ひに手傳はせた。

「このあらしによく來て呉れた、な」と、老人は餘ほど元氣が出たやうであつた。何しろ、明治何年かにあつてから、久し振りのおほあらしだからと云つてゐた。

高臺であるから、一層ひどいのであらうが、雨を投げつける風はなほ縱横自在にひゆう〳〵と吹いてゐるのであつた。渠は今、家の中にあつて、これを聽いてると、自分ながらこゝまで來たのが不思議でゝあつた。そして遠くにゐる妻子のことが思はれた。殘して來た妹のことも心配になつた。また、葛西の海岸の借り別莊に留守居させてある甥のことも忘れられなくなつた。けれども、そんなことを一々老人夫婦と話し合ふひまもないほど二階の雨戸や雨もりの始末に忙がしかつた。

「もう、大丈夫――夜もおッつけ明けるだらうから。」老人が斯う云つた時には、雨はやみ、風の勢ひも少し滅じてゐた。すると、やがて、横庭を一つ隔てた隣りの大工どもの多人數の聲がして來た。その家根のうへからららしい。そしてトン〳〵と物を打ち付ける音もしてゐる。

「家根を飛ばされたんでしようか、ね」と云ひながら、渠はおづ〳〵二階の戸を一つ細めに明けて見た。

老人夫婦も今また蠟燭をつけ直したところの提燈を手にして集つて來た。

「何だ、夜が明けてるのか？」車夫は投げ出すやうに云つた。

さすが職業がらでもあらうが、大工どもはこの風にも恐れず、その自分等の長くつゞいた二階長屋の家根に登つて、そのトタン張りがへぎ取られたあとへ家根板を打ちつけながら、冗談を云ひ合つてるのであつた。そして打ちつけられた板がところどころに白く、そして大分弱くなつた風を受けながら立つた

り、しやがんだりしてゐる大工どもの姿が黒く、こちらのぼやけた眼に見えるほど空は明るんでゐた。

庭の植ゑ木や板塀もすッかり倒れてゐるやうすであつた。飛ぶだけの物は飛んでしまひ、倒れるだけの物は倒れてしまつたらうから、もう危險はあるまいと思つて、渠は皆の先きに立つて二階を下り、外へ出て見た。果してどこもかもさんざんな體で、周圍の塀が右や左りにねぢれ倒れたのはここばかりではなかつた。そして隣りから隣りへとすッかり平等に見通されるやうになつてゐた。

「ひどいあらしでした、な」と、ここの老人はお向ふの主人に挨拶した。

「これぢやあ、お互ひに恨みつこがありませんや」と、お向ふも棄て鉢の冗談であつた。

二

渠自身は、然し、斯うしてはゐられない氣がした。おばアさんの手早く用意した朝飯を喰ひながらも、その心は三方に分れて心配した。

「このぶんぢやア、電信も不通だらう」とは云はれながらも、渠は自分の妻から返事が來てゐるかどうかを知りたい爲め、おぢイさんの着物を借り着して、先づ早く自分の家に歸つて見ることにした。で、同じ車夫を丁度好都合だからまた歸りの便にやとつた。が、途中の見じめな見聞を思ひ出すひまさへ與へられぬほどの事件が自分の留守のうちに自分の家にも起つてゐた。

矢ッ張り、龜屋の横丁から松昌洋行のそばの橋を渡つたのであつたが、三十間堀の水が橋のしたにだぶ／＼接近してゐると思ふと、自分のさして行くべき方面には、二つに分れたどの道も水が一杯にあ

がつてた。
「おほ水が出たのだ、な」と、獨り言のやうに云つて見たが、心が特別にどき〳〵し出したので、後半夜ぢうの親しみを得た東夫とは橋のたもとでそこ〳〵に別れてしまつた。
往き來の人々の顏いろや目つきも尋常一般でなかつた。皆がはだしや尻まくりであるので、渠もかはず尻まくりになり、ぬいだ下駄を片手に持つて水の中に這入つて行つた。
雨がはの家々はどこも障子や格子を明けッ放してあつた。床うへ二三尺まで浸水したあとが戶や柱についてゐて、家の中では濡らした疊を起してゐるところもあるし。また、うまく疊やおはちを濡らさないで、床のうへなる俄か仕立ての臺のうへに乘せてあるところもある。或かみさんなどは、また見すぼらしい寢まきを着たまゝで、家の中をまご付いてるところが見られた。また、或家の勝手口からは人糞が浮き出してゐる。
最も驚いたことには、その間を一方の横丁からボートが一つ——小いのであるが——やつて來た。そのうへなる靑年を、渠は
「おい、呑氣すぎるぢやあないか」と責めた。
「僕も人を見舞ひに來たのです」と、靑年は口をとんがらかして答へた。
「…………」渠自身は人の見舞ひどころか、自分の家に急ぐのであつた。
到着して見ると、ここは、もう、水が床した少しばかりまで引いてゐた。が、矢ッ張り、床うへ三尺まではあがつてたらしい。臺を三尺以上にして、とッ付きの二疊と奧三疊とのたたみを一つに積み重ね

てあつて、そのうへにまた蒲團などを乘せてあるのが見えた。

「あら、兄さん！」妹はたすき掛けになつて、したのぢいさん、ばあさんと共に雑巾がけをしてゐたが、渠のすがたを格子うちに見ると、片手に雑巾を持つたまゝ迎へに出た。「大變よ、お勝手とおてうずとが一緒になつて！」

「それどころかい！」渠は思はず人の難儀に同情してゐるやうな口ぶりを聽かせた。そして床にとび上るが早いか、先づ自分の腰を自分の持つてたハンケチで拭いて、まくつてた裾を半ばまでおろした。そこへ手拭ひを持つて來て呉れたかの女の、さきのはしたなさをなほもおもて向きではたしなめるやうに、

「お前のいのちが助かつたのをありがたく思へ。」

斯うは云ひながらも、勝手の手桶に乘せかけてある古わたの一包みから水が垂れてるのを、何よりもきたなく感じられた。そして、ここが若し今回の爲めに始末にをへないやうなら、直ぐにも自分等だけはどこかへ引ッ越してしまへばいいのであつた。

氣味の惡い水ッけを自分の足のさきまで拭き取つてから、皆のしてゐる通り、自分も自分の下駄をはいた。そして、ぢイさんに向つて、

「どうも、大變な出水です、なア、どこの川が溢れて來たのか知らないが」と、言葉をかけた。

「兄さん、津浪よ」と、妹はよこから說明をした。

「えッ！」渠にはこれがまた意外であつた。木挽町と云ふ、この帝都では一つの有名な町で、大劇場の一つまであるところが、小田原や沼津の邊鄙な海岸に於ける如く津浪に襲はれたのであつた。

渠は無論――そこまでに立ち至らなかつた間にも――實際、自分が非常事にぶつかつたのであることを感じてゐた。九死に一生を爭ふべき非常事にだ。そして自分の精神と生活とにも何か面白い變動が起りさうに思へてゐた。ゆふべの烈風の中を無事に通過し得たのも面白かつたが、その面白最中にまた津浪の現場を免れてたのが一層面白い。ところで、この面白ついでに、いッそのこと、あの厄介なる病身な妻子があちらで水にさらはれてゐたら――と云ふやうな、風俗道德超越の考へまでが浮んだのである。

「麹町の方はどう？」

「無事だ――熱海からまだ電報は來てゐまい、な」と云つて、心では反對に來ようにも、もう、出し手がないと云ふことなどを想像しながら、兎に角、二階へあがつた。

夜を徹して神經を刺戟して來た疲れが手傳ふ爲めでもあらうが、日本中の人が皆倒れ死んだり、溺死したりして、自分だけが大將や金滿家になつて生き殘つたらと云ふやうな空想が渠のあたまを取り卷いてた。そしてこの幕が破れて正氣の自分に返る度毎に、見るのもいやなのは、自分の書齋なる四疊半が殆ど三分の二までしたの追ひあげ荷物で塞がつてることであつた。今まで見もせず、氣が付きもしなかつたほどきたならしいおぢィさん、ばアさんの夜具や、風呂敷包みが、朝まだきの薄びかりに照らされてゐるのだが、やがて日が照れば、ぷんと惡くさい臭ひがして來さうな感じまでする。

けれども、そのまま渠は、自分の出しッ放しになつてる蒲團を引きかぶつて寢てしまつた。そして晝過ぎに目をさますと、近所の水は大分に引いてゐた。新聞では、果して諸方に津浪があつたり、電信不通の箇所があつたりしてゐる。そして水害の最もひどく、人死にや、人家の倒れが多いのは砂村だとあ

る。ところで、渠は砂村のさきなる西宇喜田の海岸に人の別莊を借りて、つい、一週間ほど前まで自分の妻子を置いてゐた。かの女らが熱海へ轉地してからも、まだ引上げない荷物もあるので、留守居かたがた自分の甥なる十七才の男の子をやつてあつた。それがどうなつたかがまた一つの氣がかりだと云へば云へた。

何にせよ、自分等ところでも飯をかしぐ水がないと云ふ騷ぎだ。水道さへも便所の水と一緒になつてしまつた。近所で借りつけの電話によつて、雜誌社へは斯う〳〵云ふ始末だから休むと云ふことを自慢さうに通知したついでに、或友人にも見舞ひの握り飯でも持つて來いとかけたら、

「馬鹿な、如何におほ津浪だつて、木挽町へ水が來ることなどあるかい」と云つて、本氣に受け取つて呉れなかつた。無論、新聞なんか當てにならぬとしても、遠方の水害などはどし〳〵電報で出してゐながら、つい、その足もとの損害地に氣が付かずにゐるのだから。然しそれだけ、渠には、おほげさで而も秘密な面白味があつた。

何となく昂奮してゐる渠は、今までの生活以外に何か面白いことが出來して來さうな氣がしたので、その翌日、晝めしを喰ふと直ぐ自分の雜誌社へ出勤した。すると、自分一個の受け取りかたによるのかも知れぬけれども、社長を初め皆のもの等が、矢ッ張り、何かを待ち設けてるかの如き態度で、話を新聞に出た各地の暴風や水害のことにばかり向けてゐた。その留守に麹町の老人が珍らしい津浪と聽いて見舞ひに來たさうだが、そんなことは左ほど氣にもとまらなかつた。

そしてそのまた翌日も、同じ話の仲間入りをしてゐたさに、同じ心持ちで不斷よりも早く出社した。

新聞の記事によると、各地の被害の範圍と程度とがいよ〳〵分るに從つてます〳〵大きくなつて行く。そして砂村よりさきのことや、殊に飛び離れて熱海のことが、まだ書いても分つてもないのが、渠の昂奮を一層つないでゐた。

　ところが、その晩、乃ち、十月三日の夜に、熱海から妻のたよりが郵便であつて、當地は大したこともないが、東京は水も出たよし、どうであるかと云ふ見舞ひ状だ。こちらから出した電報が着したのか着しなかつたのか、この點は判然しなかつた。が、兎に角、自分の妻子が無事であつたことが分つたのに、それが分ると同時に渠は一大非常事を逸したやうな氣がした。そして矢ッ張り平凡な關係を持續すべきわれであつたかと思はれて、俄かにがッかりした。

「では、もう、誠ちやんのことばかりが心配よ」と、妹は渠に渠の甥のことを取り調べるやうに云つた。が、渠は――もう――これも、思つたよりは何でもないのだらうと考へて、氣のりがしなくなつた。

「若し死んだのなら、今更ら騒いでも仕やうがなし。」渠には自分以外の人間の生き死にが、なほ、重大事ではなかつた。何しろ、自分の留守に木挽町の町なかまでも海水が溢れて來たのだ。津浪は二度に來たのだが、よく聽いて見ると、最初のは床したに流れ込んだだけであつたが、二度目ので急に床うへ二三尺、はしご段の二つ目までにも達した。隣りの、妻君か目かけか分らない婦人の如きは、乳のみ兒と二階に獨り寢てゐたが、何だか變だと思つて下へ下りるとたん、疊が浮いてるとに知らないでそれにいきなり足を置いた爲め、水の中へ引ッくり返つたさうだ。何しろ、一ときはボートが市中を漕がれたとき云ふ大事件だ。

四日になつても、自分の家を初めとして、隣り近所が濡れ物を家根のうへや道の眞ン中に出して乾してゐるので、渠が心に消えかけてた昂奮もなほ名殘りを惜しんでゐた。その午前、もう、晝近くになつてから、――けふは少し出社の時刻を無精してゐたのだが、――甥からの電報が届いた。

『スグキテクレ』とあつた。よく見ると、一日の午後三時發だが、今日まで延着となつてる。いのちの無事なだけは分つたので、兎に角、見舞ひに行つて見ることにした。人もして來た通り、今度は自分も持てるだけの握り飯を用意して、午後二時半に家を出た。

三

渠がよせと云ふのに、妹も物好きについて來た――而も寫生の道具までその肩にぶらさげて。ところが、深川の高橋まで來ると、蒸汽がまだ通じてゐないことが分つた。止むを得ず、そこから小名木川の運河の河岸を眞ッ直ぐに四里半ばかり歩いて行くことにした。

このあたりは水が床うへ六七尺もあがつたらしい。高橋の蒸汽乘り場の倉庫の如きも在り荷がすべて臺なしになつてゐるままだ。そして濡れた疊、腐れたやうな莫蓙や筵などが、至るところ、河岸ぶちの石垣や道路の上にところ狹きまでに乾してある。或家にはきたない着物やぼろが綱で萬國旗のやうにつるされてゐる。河水のどろんと濁つた上には傳馬や五大力などがごちやごちやと、まだ澤山うッちやられてゐる。

入り船橋の手前まで來ると、大きな五大力が一つ陸上にうちあげられてゐて、多くの人がそれを押

おろさうとしてゐるのだが、なか／＼動きさうでもなかつた。尤も、動きさへすれば、水はまだ少しそこの窪んだ河岸をうへに出てゐるのだから、直ぐ浮び出るのであつたが――。そのかたはらで、七八名の男や女の子供がはだしの尻はしよりで、ぴちや／＼云はせながら、何か腹の光る小魚をわけもなくすくひ上げてゐた。近よつて見ると、どこの養魚場から流れて來たのか、澤山の金魚であるが、すべてそれが死にかけて横になり、半死半生のいきをあぷ／＼させてゐるのである。中には、もう死んでるのもあつた。

そこの橋をのぼり詰めて渡つて行くと、直ぐさきはまだ水に深く浸つてゐて、とても二人にはかち渡ることができなかつた。勞働者らしいものどもは皆眞ッぱだかになつて、へその上までも平氣で這入つて行くのだが、二人はそれを見ながらどうしようかと相談した。この様子をいやァにながめて通るもの等は、舌うちをしたり、

「焼けらア、な、こッちやァ水だのに」と云つたりした。

「馬鹿々々しい！　こッちもそんなことどころかい」と、渠は心に云はせたが、自分の妹には成るべくそんな意味を感づかせたくなかつた。

傳馬が通つたので、これをあらしの夜の車夫に於ける如く無理に頼んで呼び戻し、それでやッと向ふへ進むことができた。傳馬の船頭に何であゝ云ふ勞働者どもが多くけふに限り手ぶらで行くのかと、聞くと、方々の會社で不時に賃銀を拂つたり、施米を與へたりすることになつたからとの答であつた。

どうせ下駄や足袋はよごれたので、淺い水はそのまゝぴしや／＼と渡つたが、今一つ船を頼まなけれ

ばならぬところがあつた。そのうち、中川のおほ橋へ來ると、大きな鐵船が一つ橋のしたへ喰ひ込んだまゝになつてゐるのがおそろしかつた。それでも小橋の方は無事に通れた。そこから有名な小名木川土手で、川と平原との間を一里以上も眞ッ直ぐに續いてるのだ。風景のみで見ると、平原一杯に引き殘りの水がみなぎつて、その上を西に傾いた太陽の光がきら／＼と横照らしに照らしてゐるので、ただださへ寂しいのが一層寂しいわけだ。が、土手の上の往來がいつになく忙がしいので、ゆふがたの迫つて來るのが左ほどの心配でもなかつた。

所々に土手の切れたところがやッと砂だわらで塞げてゐる。その上に一層手を入れてゐる人夫もあつた。それから、疊おもてや莫蓙を運ぶもの——芋やしようゆうをかついで行くもの——こちらと同じうやに救助物を提げてくもの——。

土手の中途にかかつてるちよッと細長い橋の如きは、中が殘つて兩端が取れた爲めに、その兩端には丸太が二本づつ足してあつた。

新堀村を進む時には、藁ぶき家根の家が水でじゆく／＼して、二つも押しつぶれてゐるのを見た。

少し日が暗みかけた時、やッと栗渡しへ着することができたが、その僅かの川はばを向ふ岸へ渡して呉れるものがなかつた。それが爲めに、勞れた足ではあるが、こちらの岸をなほ二十丁、三角橋まで行つて、向ふ岸をまた二十丁やつて來なければならなかつた。

七時頃には、もう、足もとまで暗くなつて、向ふ岸には忙がしさうに提燈の火が往き來し初めた。渠は自分の妹の慣れぬ遠みちに弱つてるのを知つてたけれども、今更らどうすることもできないので、自分

がかの女の厄介な寫生かばんまでを引き受けてやつて歩みを急がせた。そしていよ〳〵三角橋を渡つてから、渠等は自分達のやつて來た方向へ違つた方の岸を曲がるが早いか、最も豫想外の光景に接したのである。夜目にもかねて見知りの土手みちだが、それを左り手に外れたがはの廣い田地はすべて、見渡す限り大海と變じてゐて、その土手みちも左りから半ばまではびちや〳〵と浪が寄せてる。そしてその浪ぎはには、ずらりと列んで、別々にだが、菰を敷き、菰をまた後ろからはすかひに上へ廣げて、その中を家みたやうにしてゐる家族どもがある。そして『浮長』とか、『浮熊』とか云ふぼんぼりを軒に吊してゐるのもあるのを見ると、すべて自分等がさして行く宇喜田の村民の避難所になつてるらしい。

そのうちの或假り小屋では、女のうん〳〵うなる聲がして、特に人だかりがしてゐるので、渠もちよッと背延びをして見て、これもはたに立つてる者に

『どうしたのです』と聽くと、

『この騷ぎの中でお產です』との不平さうな答へであつた。

『高島の家は無事でしたらうか？』ついでに斯う聽いて見た。

『あすこも店を流された、な。』

『死人があつでしようか』と、突ッ込まずにはゐられなかつた。

『さア、よく分らないが、どこでも三人や四人はやられたよ。』

道理で、殆どその軒並みに線香や蠟燭を立ててあるのは、すべて死人の爲めだ。ちやんと寢棺に入れたのもあるし、桶になつてるのもあるし、また菰をかぶせたまゝのもある。それが一つづつならまだし

もだが、一軒毎に二つ、三つ、若しくは四つも並べてある。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と唱へる聲が行くとして聽えて來る。が、それは皆小屋にゐ殘つてる女や子供の聲だ。男どもはすべて氣が立つてるせいか、うつて變つて權幕が烈しかつた。忙がしさうな往來をちよッと人にぶつかりかけても、こちらはけんつくを喰つた。で、渠はともしたはだか蠟燭や提燈の光を手頼りに、見知りのものが小屋の連中にゐないかと、こわごわ軒並みをのぞきつつ歩いた。お產の箇所が今一つあつた。そしてちよッと小屋が途切れたところで、浪ぎはの薄やみから、自分等の來たあとをふり返りながら、これも矢ッ張り同じ氣ぶんでらしくふり返つてる妹に、

「ひどい、なア」と、一こと聲をかけた。自分ながらその聲が壓さへ付けられて、呼吸の切迫してゐるのをおぼえた。そして妹は全く返事もできなかつた。かの女も、恐らく、二人がただ一人殘つてる母を失つた時のことを線香のにほひに思ひ出したのであらう。そしてその感じを今南無阿彌陀佛を唱へてる人々のうへに及ぼして見たのだらう。男性たる渠には、然し、この場合、そんなことばかりではなかつた。死んだもの、生き殘つたものの見じめなそのこと以外に、この騷がしい恐ろしい一大事變の間に平氣で生まれて來るものの偉大さの方が一層渠の心を壓迫してゐたのだ。渠自身を決してえらい者としてゐないだけに一層、この偉大さに自分の心はた擊れたのである。

見よ！ ここで初めて氣が付いたのだが、土手に並んで植わつてた大木は左り手のが殆ど皆根こそぎ洗ひ出されて倒れたのだ。そして往來の邪魔になるところだけはその枝でも幹でも切り拂はれたのだ。今渠等の立たずんでるところの倒れ木がそれでも幹や枝がそッくりしてゐるらしいのは、浪ぎはに添ひ

て倒れたからであらう。そしてその却つて天の方につッ立つた枝々の間から、なみ〳〵した臨時湖水のおもてがのぞかれる。そしてその湖水のあなたには、本土手を栗渡しのさきから分派して向ふ宇喜田村へまわつてる豫備堤のうへに、矢ッ張り人が非常の往來をしてゐる爲めの提燈火が賑やかに見える。而もその火がすべてこちらの方へ水に映つてちら〳〵と夜の色をあやどつてる。

この麗はしさ、この騷がしさ、この悲しみの中をうぶ屋として生まれるもの等にも道德があるとすれば、渠自身が最初厄介な妻子もいッそのことと考へたほど昂奮した時のと恐らく共通なものであらうと思はれた。自分には、矢ッ張り、これも凡俗道德は超越してゐることだ。そしてさきに何か大きなことをと待ち受けてた心持ちは、これをここに多少內部的に解き得るところの糸口を發見したやうな氣がして來た。

四

非常時の赤ン坊と自分とに共通な點を發見した如く、渠はまた小名木川の水と臨時の湖水とが一緒になつた時があるのを發見した。本土手に一旦切れたあとが二ヶ所もあつて、そこは砂だわらで假りにつくろはれてある。その最初のところでは、暗いうへに氣が付かなかつたので、渠は重い足をつまづきかけた。が、二度目のには、

「あぶないぞ」と、勞れた聲で妹にも注意してやりながら通つた。

栗渡しの水ぐちから、細い堀り割りに添つて一直線に行ける十丁ばかりの榛の木道があつて、いつも

はこの近みちをするのだが、三四間も行つて見ると、一方から竹やぶのかげが蔽つてるところにどこかの死人が菰をかぶつたまゝ棄てられてゐる。そしてそこからさきは土が崩れたり、水に浸つたりして道が絶えてゐて、あやふくも落ち込むところであつた。で、豫備づつみの方をまわつて行くと、青年會のぼんぼりを提げて村の青年どもが道普請をしてゐた。

「おう、先生」と呼ぶものがあつた。渠はこの村へは一週間に一度ばかり妻子を見舞ひに靜養がてら來てゐたのだが、一部のものには尊敬を受けて、うか〳〵してゐると青年會の會長に擧げられるところであつたのだ。

「奥さんは助かりました、なア、うまく逃げてしまつて。」

「でも、誠さんも無事でしたよ。」

「高島では誰れだれがなくなつたのでしよう」と、渠は尋ねた。そして分つたことには、主人の老父母と子供二人とだ。多分、流れたと云ふ店の方に不斷寢とまりしてゐたものばかりだらう。渠には、兎に角、甥の無事なことだけは信じてゐることができてたので、直接の損害がありとすれば、借り別莊に殘して置いたがらくた道具ばかりであつた。

　東のそらが明るんでたと思つてたら、果して月の出であつた。而も丁度滿月であつた。不斷は百姓どもが鍬を以つて耕作する土地のうへへ、恰も品川灣か琵琶湖のおもてに於ける如く、月はきら〳〵した光線を段々と延長して來た。

「あア、いい景色、ねー」後れがちな妹も立ちどまつて、ここに初めて少しゆツくりした息をつけたや

うであつた。

「……」渠はただ默つてゐて、自分の重いやうな輕いやうな、乃ち、現在目の前の事變に着いてるやうな着いてないやうな、一種深刻な動亂の氣持ちに、天もこの新らしい光景を以つて一層莊嚴の趣きを添へて呉れたやうに思へた。そして少し足もとが明るくなつて進んでると、稻の穗が海の藻くづのやうに靡いてる水中の淺みで、何かの魚が人の足おとに驚いてはね飛んだのを、渠は自分の精神の一飛躍と見た。そして愉快な調子で、『もう、來たぞ』と妹を急がせた。

人家の集つてる部分に這入つたが、見おぼえの家が倒れたり、あとかたも無くなつたりしてゐる。まだ土手の崩れたままのところもある。が、いよ／＼高島の家に歡迎された時には、渠は全く傍觀的な態度でゐるつもりであつた。おも屋はしツかりしてゐるので外形はそツくり殘つたが、その周圍の板や壁は流されてしまつた。壁のところなどは、中なる竹のしんまでが無くなつた。そして自在に吹き込む夜かぜを殘つた板戸やよしずで以つてやツと防ぎながら、その中に床板のぢかに菰や筵を敷いて知らない人々までがごろツちやらしてゐるのが、薄ぐらいランプの光に見える。渠が持つて來た僅かの食物などは皆にとても渡りさうがなかつた。それでも、まだ、家を無くして土手の浪ぎはに寢てゐるもの等よりはどれだけましだか分らない。

けれども、まだ鹽けやどろ水のあとがかはかぬ何だか別なくさみの中に、ここでも亦線香や死人のにほひが嗅ぎ分けられる。一方の隅には、聽いた通り、四人の、これだけが白く新らしい寢棺が据ゑられてある。

「どうも殘念なことをしましたよ。」主人は酒に醉つてたが、最初の挨拶がすむと、何よりもさきに斯う云ひ出した。「餓鬼どもは、まア、また生めば生まれるものですけれども、年寄りを二人とも死なしたことは、な！　わたくしも、兄さん、どうも殘念なことをしました。この子などは、兄さん」と、半ば向ふの隅を振り返り見ながら右の手をその方にちよッと延ばして、莚の上に坐わつてこちらを見てゐる女の子をさし示めして、「七つですが、一旦流されまして、二十丁もさきのお寺の樹の枝にとまつて助かりました。かう云ふ運のいいものもあるのに、わたくしはどうも、兄さん、殘念なことをしましたよ。子どもの二人や三人は無くなつても何でもありませんが、どうもかけがひのない年寄りを死なしたのは、な、どうも殘念で――。」

「……」醉つてくど／＼しくなり、而も人に物を云ふ餘地を與へないのが兼て主人の癖であるから、渠もさう自分の意にとめないのだが、自分が來てから、もう二回も死人どもの位牌に向つて主人が殊勝にも線香をあげて、南無阿彌陀佛を唱へるのを見ると、自分にも十分同情して吳れろと云つてるのだらうと思はれた。で、自分も「どうもお氣の毒でした」を繰り返した。そして、妹を促して眞ごころらしく立つて行つて、主人のしたやうに線香をあげた。

それから、やッと渠は自分の聽きたい津浪の時のことに話を移したのだが、東京に於ける如く矢ッ張り二回に來て、二回目に大抵のところはやられてしまつた。高島家にはおも家とは離れて別に店があつて、この村での日常品をすべて取り扱つてゐた。それが倒れ流れたばかりでなく、おも屋に最も接した釜屋も、のり製造場も、物置きも皆、流れた。ずッと海岸に出たところの、渠自身の借り名義になつ

てた別莊も――高島で保管を託されたのだが――全くあとかたがなくなつてるさうだ。が、誠ちやんはその前夜、あまり風がひどいので、留守居の相棒に每夜來て貰つてた若い衆と共に高島の家へ引きあげてゐた。尤も、ここで每日の食事はして貰つてゐたのだから。

「一體、水の二三日前に蟹が釜屋の家根にあがつたのが神のお告げでした、な」と、主人は云つた。「わたくしどもがそれをあとになつて氣が付いたのが間違ひでした。」

「そりやア、穴物が高くあがれば水、巢物が低く巢を喰へば風と、昔から云つてあるさうです」と云つて、渠はあまり默つてる無愛相をまぎらした。尤も、主人がとめどなくしやべつてるので、口を出すひまがなかつたのだ。

「それを忘れてゐたのがわたくしどもの間違ひでしたよ。時計を見ると十一時でたしが、どうも樣子がをかしいので皆を蚊屋の中に呼び起して見たけれども、若いものは皆たわいもなく眠つてました。十二時過ぎに思ひ出して、わたくしは土間へおりてあの太い柱の根もとを調べて見ました。一を書けば一、二を書けば二が、しとつてあらはれるではありませんか？　あの柱がしとれば、もう油斷はならぬぞとは、こりやアわたくしのおぢイさんからの遺言です。さア、大變と、わたくしは蚊屋も何もまくり取つて皆を叩き起しました。それからわたくしは實際どうしてゐたか今でも分りません。やがて第一回の津浪が來て、いきなり水がわたしどもの立つてる胸よりもうへに成りました。さうしてまだ〳〵ずん〳〵ふえて來るのです。わたくしどもは皆浮いた板につかまつてゐながら、どうすることもできませんでした。

「ところが、兄さん、誠ちやんはさすが書物を讀んでゐるだけあつて、感心な思ひ付きをやりなしたよ」と云つて、おほ主人が續けたところをこちらで解釋して見ると、こちらの甥は斯う發議したのだ——まご／＼とこんなことをしてゐたら、やがて天井につかえて皆が息を詰めてしまうだけだ。どこか、らくなところを突き拔いて天井の上に出よう、と。皆はそれがいいと決議した時、ふと、若い衆の一人が天井のないところがあるのを今更らの如く思ひ付いた。たッた十七歳の子に智慧を與へられるほど皆が錯亂してゐたので、渠等にそんなへまなことがあつたのも自然であつたらう。考へて見ると、自分だッてあのあらしの夜、わざ／＼危險な道へ車夫を遠まわりさせたやうなへまをした。ところで、皆はそこから天井にあがり、明り取りの窓から見ると、どこかの家が既に流れて來て、その家根の端がこちらの窓のところへ當つてゐた。皆は一旦窓から出て向ふの藁家根を足場としてこちらのおほ家根に移つた。

「けれども、向ふの店にゐた年寄りどもがあぶないと思つて、わたくしは助けにまゐりましたけれども、どうも殘念です、とう／＼助かりませんでした。」

「隨分お大抵ぢやアなかつたとお察し申しますよ。」床の上の筵に坐わつてるのが痛いので、あまり目に立たないやうに横ッ尻をしてゐた。

「さア、一杯おやりなさい。酒にでも醉つてゐなければ、わたくしはこの殘念は忘れられないんです。」

「御尤もです」と答へて、渠も主人の細君が持つて來たお燗酒を少しおしようばんした。酒も買つてたし、水害後箪笥の引き出しを明けて見たら銀貨で四百圓もあつたと云ふし、この家がかかる時にも酒を缺かさないのは、別に不思議ではなかつた。

『わたくしはどうも殘念です』をまた繰り返したと思ふと、主人はまた線香をあげに立つた。

渠の持つて來た物はおもに誠ちやんと、お寺の樹に助かつた女の子と、うちの若い衆に分配された。

渠は香奠を出さうかどうかと私かに自分の妹に相談して見たが、まア、あすのやうすにしようと云ふことになつた。

五

渠は甥をつれて歸るつもりだが、どうせ今夜のことにはできない。さうかと云つて、疊も蒲團もまだろくに整はないところでらくに休むことができないのも承知であつた。

誠ちやんはこの狀態で二三夜を慣れた爲めだらう、他のもの等のやうに筵の上に寢ころんでしまつた。が、渠は自分の妹と共に腰をかけて夜を明かすことにした。菱がたをして一方の眞ン中に圓い穴が明いてる踏み臺を借りて、二人は隅ッこの柱を脊にして腰をかけた。そして渠は疲れ切つた眼と精神とを落ち付けようとしたけれども、如何にも窮屈で、なか〳〵眠られない。そしてあらし以來東京で出くわしたことや、三角橋の土手に於ける見じめさや、ここの家人どものいぎたない寢すがたやが、かはり番こに浮んで來た。そしてそれがまたおしまひにはごッちやになると同時に、例の何か知ら偉大な昂奮がまた滿月の光となつて、自分の目の前にちら〳〵する。

それでも、その間を矢ッ張りうと〳〵してゐたのだ。ふと氣が付くと、自分は知らず識らず熱を求めて自分の妹に寄り添つてゐた。で、そッと肩を引かうとすると、かの女も目をさましてきッとなつた。

その次ぎには、また、妹の方から肩を引くのが渠自身にも分つた。そして分つてきッとなつた時に、異様な感じをおぼえながら、その度毎に一層夜ざむの氣をおぼえた。斯うしてさめたり眠つたりして、やッと夜明けに達した。

渠が腰かけを離れた時、妹もそこから立ちあがつたが、これも後半夜のことをおぼえてゐたかして、ちよッと顔を赤めて横を向いてしまつた。それが爲めに渠自身は恐らく一層、心の顔が赤らんだ。そしてこれも一つの超道徳的感じであつたのなら、この大事變と關聯しないでは解釋できないものだと思へた。

渠がそとへ出ると、妹もついて來た。

『どうだ、寫生ができるか？』笑ひながらこの冷かしを云つて、渠はかの女に對して全く氣を轉換することができた。

『とても――』と、かの女も微笑して、もと〳〵通り可愛らしい首をかしげた。

この邊の家はすべて土手のうちがはに土手をおりて建てられてた。けれども、水は土手を越えて泥をまで運んで來たかして、高島の釜屋や物置きのあとにもすべりさうな泥が一杯にあがつてる。そんなところを成るべく避けるやうにして、ついそこまで來てゐる浪ぎばへ行つて見た。栗渡しからの近道は直ちにここに達してゐたのだが、その形も崩れて見えない。ここにも一つ、枝のはびこつた松の庭木が水の中に倒れてゐる。そしてその枝へ寄つて來てゐる大きな魚はいなである。ゆふべはね跳んだのも確かにこの種類であつたらう。

朝めしをすませてから、二人は他家への見舞ひやら見物やらに誠ちやんを伴つて出たので、初めて誠

ちやんのうち明け話を聽くことができた。

『隨分困つたらう、な、電報が延着して』と、渠は慰めがてら云つた。電報は實に一日に人のついでを賴んで二里もさきで打つて貰つたのだが、どうしたのか四日まで屆かなかつた。

『僕は兄さんを待ちかねただけで、別にさう困りやしなかつたけれども』と、誠ちやんは答へた、『高島のおぢさんがあわてかたッたら、なかつた。皆を叱り飛ばすばかりで、自分は何もできないのだ。僕が先づ店の方の人を呼んで來たらと云つても、それどころぢやないなんて云つて、たゞまご〳〵してゐた。そのうちに水が來てしまつた。店にゐたものを呼んで來ようと思つたら、そのひまは十分にあつたのだ。』

『ぢやア、お前が呼んで來てやつたらよかつたのに。』

『けれど、おぢさんが出たらあぶないッて云ふんだ。』

『そりやア、あづかつてる人間だから、若しやのことがあつちやアと心配したのだらう。』

『一ときは生きてる氣がしなかつたでしよう』と、妹も從つて來ながら口を出した。

『でも、今となつちやア面白かつたよ。』

『まア、云つて御覽、そのつぎを。』渠は子供らしい問答よりも高島の主人のことを聽きたかつた。

『ゆふべ、あいつの云つたことなどはうそが半分だ。』

『女の子が助かつたこともかい？』

『いいや、年寄りを助けに行つたことなどは。』

『へい――？』

よく聴いて見ると、あの主人はあわてふためいてゐてヤッとおほ家根のうへに出てからも、なほ自分のいのちをあやうんだのだ。そしておも屋よりも店の方が水につかりかたが少いのを見て、皆もあッちへ渡れと主張した。そして誰れよりも先きに自分の女房にさうしろと促した。乳吞み兒をかかへてゐるものが水の流れを渡つてそんなことのできよう筈はなかつた。その他のもの等も贊成しなかつた。ところがとう〳〵怒つてしまつて、自分だけが逃げて行つたので、主人としては、あとのものを見棄てたかたちであつた。その上、年寄りを助けるつもりでも何でもなかつた。その證據には、第二回のおほ寄せがあつた時、今度はまた店の方があぶないと見たので、自分だけでまた泳ぎ出した。この時七歳の女の子がおぶつて行つて吳れいと父の肩に飛び付いたのを、主人は夢中でふり切つたらしい。その子があとで語つたと云ふのによると、

「お父さんがわたしを突きのけたので、わたしは水をがぶと吞んだ。それから、獨りで泳いでると、いつのまにか木の枝につかまつた。いくら呼んでも誰れも助けに來て吳れないので、じッとしてゐると、夜があけて來て、段々水が引いて行つて、わたしは段々したの枝へおりて行つたけれども、お寺の高い木であつたので、もう、枝がなくなつて、途中にとまつて泣いてゐた。そこをよそのおぢさんにはしごでおろして貰つた。」

「あれは不斷から氣丈な子には相違なかつたが――」

「それでも、よくさう泳げました、ね」とは、妹の感嘆した言葉であつた。

「なァに、流れが非常だッたんだ。――でも、あの子が見棄てられたのは事實でしよう。年寄り二人も

棄てられたんだ。僕等も一旦棄てられたんです。ところが、おほ家根に殘つてた僕等はおほ津浪の勢ひな見物しながら、何でもなかつたけれど――」

『暗いのに見物ができるかい、なま意氣な？』

『でも、雨かぜの中を透かせば見えてた』と云つて、誠ちやんはなほ調子づいた話しぶりで言葉を續けた。この事變がこの子をも俄かに小なま意氣に、否、寧ろ大人らしくしたらしい。その所謂見物をしてゐたもの等に店の建て物のひツくり返つたのがかすかに見えた時には、かみさんが聲を擧げて泣いた。そしてお父さんも、年寄りも、娘三人も皆、死んだものと諦らめた。ところが、夜が明けてから、先づ主人が歸つて來た。そしてまだ家根の上に殘つてるものらを見て、どこからかはしごを持つて來て、皆をおろした。そのところへ七歲の女の子も歸つた。

主人の方はわれからとう〳〵押し流されて、やツと例の眞正面に當る小名木川土手に泳ぎ付いたのだ。尤も、他の家の話をも聽くと、生きたものも死んだものも大抵はこの土手へ着いた。

主人はそれから死人の死骸をさがしまわつたのだが、四つとも揃つたのは水から二日目のことであつた。棺に入れてから、線香をも立てた最初の一度は濟まんことをしたと云つて拜んださうだ。それから引き續いて燒け酒を飮んでるのだから、その醉ひは死人に對する悲しみを忘れようとしてゐるのではなく、その實、自分の良心の苛責を免れようとしてゐるのであつた。

誠ちやんには、大人びた考へが出て來ただけ、一般月並みの凡俗道德になづんで行つて、主人のありさまを然るべき應報覿面の苦しみと思つてるやうだ。が、昂奮した氣ぶんを東京からして持つて來て、

なほここでもそれが斷續してゐる渠には、この主人の取つた自我中心の態度は現はれかた次第では決して否定すべきものではなかつた。否、主人としても後悔するには及ばないのであつた。が、無學のなさけなさには、無論、非凡人としての意識も自覺もなかつた。たとへ非凡人でも、あわてふためく場合もないとは云へないから、それを何も後悔するには當らぬ。若し自分なら、あとで平凡なそして僞はりの申しわけをしてゐるのをこそ後悔すれ、さきのその場の自我擁護は俯仰天地に耻ぢぬ公明正大のおほ努力、おほ仕事であつたのだ。

「誠ちやんにはまだ分らないことがあるよ。世間には、な、自分を救ふこともできないで、利いたふうに慈善とか、人の爲めとか云つてるものが多いのだ。」こんなことを渠は、それ以上には説明しないで、みち〳〵自分の甥に語つた。

少しでも知り合ひになつてる家は殘らず訪問した。同情の爲めと云ふより寧ろ物好きの爲めで、成らうことなら、自分の斯う云ふ考へを確める材料をこの上にも得たいのであつた。ところが、至るところ、一人や二人の死人を出してゐない家は殆どなかつた。そしてそんな家の主人どもは皆高島の主人と同じやうな申しわけを云つてる。そして誰れだれが死んだかと調べて見ると、いづくも同じ、そんな子供でなければ、老人か、病人か、兎に角弱いものばかりだ。

これは渠の偉大な道理だと思つてるところによく附合してゐる。如何に生きた物でも、必要があつてどれから棄てるべきかと云はば、役に立つ物を一層充實させる爲め、先づ弱い物、役に立たなくなつた物から棄てるべきだ。そして強い物なら、たとへウッチやつて置いても獨りで助かる。渠には、この獨

りで助かるものはぐづ〳〵して弱いものの亡ぶその道づれになるべきではなかつた。

こんな村にでもこの偉大な道理が行はれてたのである。否、こんなやくざな村にでも、詰り、非常の時には俗想を脱した非凡人のおもかげが闇のうちに現はれたのだ。そして渠はこのおもかげを斷片的に自分のあたまで能く寄せ集めるのが愉快であつた。

けれども、この村の村長を尋ねた時、渠は一つの興ざめた話にぶつかつた。最初、出しぬけにお禮を云はれたので、何ごとの爲めかと思ふと、渠が〇〇新聞の記者を紹介して置いたら、その記者が來ての視察記がきのふの夕刊に出て、村長の息子が大いに模範青年として讃められてたのだ。讀んで見ると、何のことはない、おのれのうちの離れの二階に女中がランプをつけ殘して來たのが、家の動くと共にぐら〳〵倒れさうになるのを見て、火事になつては困ると云つて、泳いで行つて吹き消して來ただけのことだ。けれども、村長は取り澄ましたもので、

「いづれこの勇敢な行爲は新聞で表彰されましよう」と云つてゐた。さう云ふことを約束する新聞も新聞だし、またそれを喜ぶものも喜ぶものだ。

最後に、渠は自分の借りてた別莊を海岸へ見に行つたところ、全くあとかたもなかつた。その歸りに、自分に屬してゐた物らしい竹のステキを一本、ずッとこちらの土手のそとがはに發見したけれども、その握りのところにぬら〳〵するほど泥がついてゐた。

香奠の件は、かう多くの家へ一々分配することができないので、とう〳〵どこへもやらぬことにきまつてしまつた。

六

晝過ぎになつて、高島の家まで引ッ返すと、もう、酒氣を帶びてる主人が突然、
「兄さん、村長のせがれが新聞で讃められてるさうです」と、こちらの罪でもあるやうに憤慨した。
主人の向つてる大きな角火鉢の上の鐵瓶にはお燗が入れてある。
「………」この流儀で水の眞ッ最中にも見當違ひのあわてふためきをして、自分から自分のいのちを失ひかけたのだらうが、ここにも既にきのふの夕刊の話が傳はつたものと見えた。が、あれはこちらの紹介した新聞記者が書いたのだと云ふことを、渠は、いつまでも、ここの主人に知られたくなかつた。新聞も雜誌も同じだらうと云つたことのある、人のいい然し無學な主人は、記者の腹でやつたことをもこちらがさせたのだと勘違ひするかも分らなかつた。で、こちらは飽くまでそ知らぬふりをして、然しこの話を少し馬鹿にした心持ちで、「今、わたしも村長さんのところで讀んで來ましたが、まア、それも結構でしよう。」
「何が結構だか？」
「………」渠はまた主人のます〳〵憤慨して來たこの樣子に、今度は、少し油をかけて見る氣になつた。かかるいたづらな氣持ちも、これをもッと大きなことにちやんと徹底的に押し通せば、一つの偉大な仕事だと云ふことは、自分の最近の刺戟に受けた一暗示であつたのだ。だから、自分は左右の妹や甥には意味を含めたにこ付きを見せて置きながら、主人に向つては矢ッ張りそ知らぬふりで斯う云ひ添へ

た。「村長さんのお話では、おッつけ新聞社から表彰されるさうです。」

「また表彰さわぎかい、下だらない！」

「……」渠は主人のこの簡短な意見には全く同感であつた。近頃のやうに地方に青年會の起るのは、ちよッと見れば結構らしいけれども、要領を得ないもの等が幹事や會長になり、これも要領を得ない、否、要領を得過ぎて餘りに形式に流れた官僚學者などが都會から演說に來るので、地方の人民がちッぽけに完成しようとして自然に外面の形にばかり重きを置くやうになつてる。そして社會の耳目たる新聞までがこれに迎合して、無理に模範青年とか表彰的行爲とかを拵らへ上げて、これはまた不自然的に地方の人氣を取つてる。こんなこともすべて根本から革命を要するのだ。今回のはそれが爲めの大々事變であつたかも知れないのに、青年會のやつてる仕事を見ると、矢ッ張り月並みの見當違ひが多い。道路の修繕もいい。棺桶が不足なので樽を配つたのも思ひ付きだ。が、こんな場合にもッと緊急なのは新事實の創造、乃ち、精神の改革と食物不足の補充とであることを、渠は至るところに發見してゐた。

「下だらない」と、主人は然しまだ比較的に有福なだけ太平樂をつづけた。「わたくしどもは、兄さん、水で騷いでゐたんですぜ。それに、あのせがれめが火事の出ないやうにランプを消しに行つた。それがどうして村の爲めになります？　火事が出ようとしても出る道理がないぢやアございませんか？　またたとへ出たとしても、うッちやつて置けば、獨り手に消えます。それを消しに行つたッて、それが何になります？　津浪の中を泳いだのが勇敢なら、私どもはお波浪を突ッ切つて年寄りを助けに行つたんです！　これを何と名づけて異れます？　勇敢も勇敢もそのまた上の勇敢でなければなりますまい？」

『……』凡俗な良心の苛責を主人の免れようとすることが、今回はまた一層凡俗と呑氣とになつて、世間並みの評判を相爭はうとしてゐるのだ。斷片的にだが偉大なことをやつてゐながら、それを云ひ憚つて押し隱し、成るべく凡俗の小理窟に合はせようとする者こそ一しほあはれだ。渠の心はいつしか主人のそこに最も侮蔑の同情を持つやうになつてゐた。で、こちらはただやわらかに笑ひを見せて、火鉢に手をかけながら腰をしやがめ、向ふをなほ勝手にしやべらせて置いた。

『泳ぐことが勇敢なら、この子だッて』と、また女の子を返り見てから言葉を次ぎ、『二十丁もさきまで泳いで行つて、お寺の樹にとまつて助かつたんです。それだけのことなら、うちの若い衆に幾度でもさせて見せます。』

『うちの若い衆だッて、わけもなくそんな藝當はできませんよ』と云つて、かみさんは三人の食事を奥の室に揃へて呉れた。『さア、どうか、何もありませんけれど――』

『ちよくを添へてあげろよ、ちよくを。』

『いや、それには及びません』と云つて、渠は他の二人と共に奥の筵に移つた。かみさんはこちらが飲み手でないのを知つてるので、この方はすすめようともしなかつた。

『酒だけはこんな場合ですけれどいくらでもあります。わたくしはこれでもないとわたくしの殘念が――どうも――忘れられません。道路の修繕の手傳ひには若い衆を代りにやつてありますから、わたくしは、もう、死んだ隱居の代りも同樣で、斯うやつて隱居の新らしいお位牌を番してゐればいいんですから。然し、わたくしも――どうも――殘念で溜りませんよ。かけがひのない年寄りをなくしてしまつ

たんですから、な。」

「……」こちらでは、それにかまはず箸を運んでゐたのだが、渠がそのひまにそッと主人の方を見ると、坐わつて揃へた膝ッこが着物から喰み出してる上へ筒袖の兩手を置いたり、その片手を以つてあたまを撫でたりして同じやうなことを云つてゐた。

「あ、またおれもお線香をあげなければなるまい、な。」思ひ出したやうに立ちあがつて、主人も奥の方へ來た。が、その前から七才の女の子は佛前で蠟燭の火のしんを四ッのかたはじから一つづつ切つてゐた。

「……」親に敎へられたのであらうが、若しくは人のすることを見て眞似してゐるのだらうが、かの女がどんなところまで事情を分つてるのか、その心持ちを渠は知りたかつた。突ッ放された時、赤ン坊なら無論そのまま死んでただらう。そしておやぢの自我的決心の證據を——おやぢが不爲めだと思ふやうには——あとになつて人にあばかなかつただらう。けれども、多少でも泳ぎを知つてたので、夢中ながらも、速い潮に乘つて行つて二十丁もさきで助かつた。歸つて來てからも、喉がかわくと云つて水をがぶがぶ飲んでただけで、左ほど疲勞も病氣もしなかつた。そして一旦はおやぢに向つて涙一杯、恨みごとらしい言葉をかけたさうだが、おやぢに何とか云ひくるめられて、そのままにそれ以上を繰り返さなかつた。そして今ではおやぢを矢ッ張りもとのおやぢと思つてゐるらしい。だから、きのふ見ても、けふ見ても、いつも素直に笑つて子供らしく云はれる通りにしてゐる。

「どうも殘念なことをした、なア、お前のおぢイさんやおばアさんを死なして。」主人はこんなことをその子にまでも云ひながら、蠟燭の火を線香に移してゐた。

七

渠は香奠のこともあるし、甥の受けた世話に對する謝禮のこともあるしするから、今一度出直して來ることにして、他の二人と共に一先づそこを引き上げた。

ゆふべ通つたまわり道をまたまわつた行つたのだが、道ばたの水中には大きな魚の泳いでるのがいくつも見えた。そして違つた喰ひ物のできたのを喜んでるやうだ。それとも、また、從來の喰ひ物がないので探しまわつてるやうだ。いづれにしても、大分に澄んで見える限りの水中は勢ひがよかつた。

渠は、ふと、自分の好きな釣りのことを思ひ出したのである。

「殘念なことをした、な」と、立ちどまつて魚の泳ぐのを見てゐたが、目で魚を追つて行つて、とうとう、靑年會が積み上げて置いて、まだ手をつけないところの、石の道普請材料の上に脊延びをした。そして後ろのものをも見返らないで、「釣り道具を持つて來たらよかつた！」

「わたくしも——どうも——殘念ですの方でしよう。」甥は渠の思ひも寄らぬことを云つた。

「かけがひのない年寄りをなくしてよ」と、妹も笑ひ聲でうまくも合ひ槌を打つた。

「馬鹿！」渠は微笑しながら石材の上を飛び下りた。そしてまた歩き出した。

「兄さんはわたしが寫生かばんを持つて來たのを笑ひながら、自分であんなことを！」

「だッて、それが爲めにおれの厄介になつたぢやアないか？」

「だから、今度は誠ちやんに頼んである、わ。」

「……………」渠が見ると、自分の殆ど忘れてゐた妹のかばんを甥が自慢さうに提げてゐる。

小名木川の本土手に達した時、渠はゆふべの菰の上のお產がどうなつたかを考へて見た。さうして生

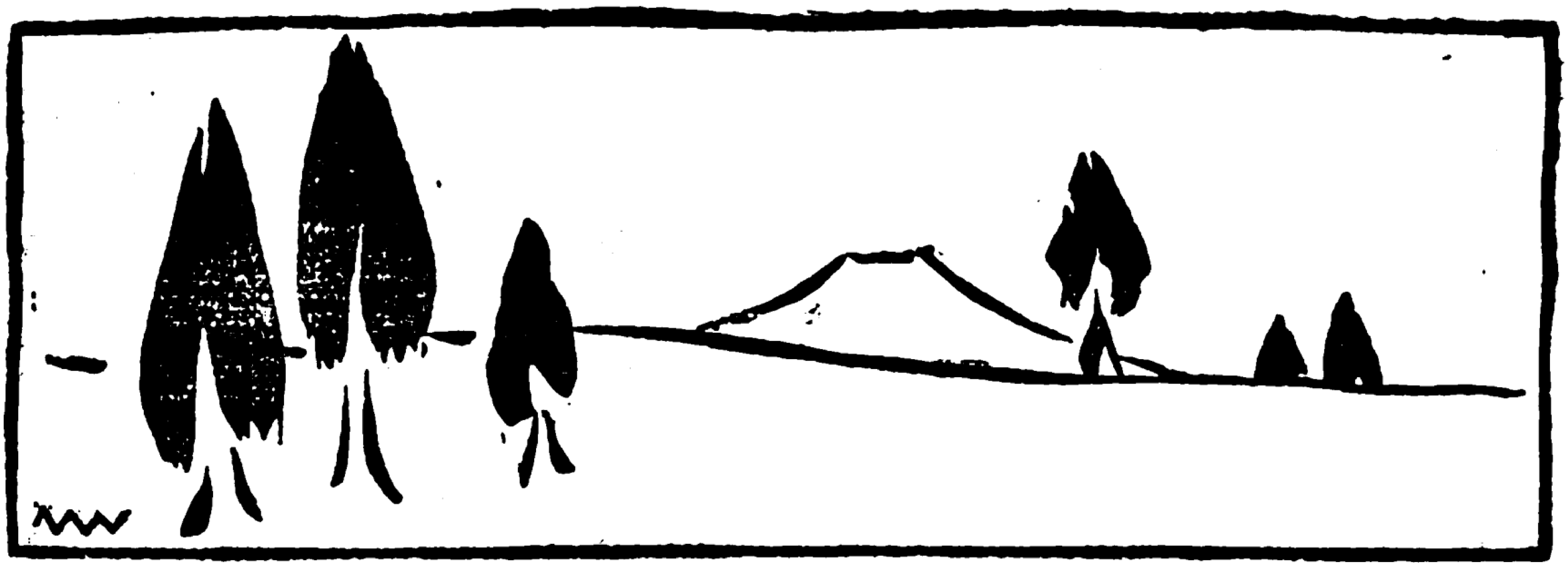
れた赤兒や、高島の七歳の女の子やは、渠には、ただ無邪氣のかたまりばかりではなかつた。

「二十丁もさきへ流れて行つて、お寺の樹にとまつて助かつたんです」と云ふ、高島の主人の言葉をふと、主人同樣に繰り返して見ながら考へると、この二つのかたまりには自分の心をそそる潜在の偉大力があつた。けれども、その力を實力的に而も超越的に所有してゐるのは、今の場合、自分がその實例であると考へられた。自分には、今、俗惡な束縛がない。あらゆる形式思想を脱してゐる。そして而も自分から涌くところの偉大な實力を感じてゐる。

渠はこれを自分の待ち設けてゐた大きな事であつたときめてしまつた。そして東京へ歸つて來たのであるが、東京では、その一二日前に比べると、もう、世間が大分おだやかになつてゐた。そしてあらしや水害のことは新聞の三面記事としても時代後れの說明に過ぎぬ感があつた。渠自身としても、目前の仕事に忙しい爲め、日に日に心は他の方へ向つて行つた。

あらしの當夜を必要上東京の市中に出て實見したり、水害地中の水害地と文字だけではなほ書かれてる宇喜田村を實生活的に見舞つたりした渠ではあるが、それから得たと思つた非凡な事を人にも云ひ傳へることができず、自分としても實際に示すことができなかつた。そしてたッた四五日か一週間かの前後を殆ど隔世の感があつた。

「それでも詩人か小說家かであつたら」と、渠は或夜、皆が寢靜つてから、自分の書齋に在つて考へた。「あの時の大きな實想や臨時的實生活は十分にこれを書き殘して置くことができたものを！」矢ッ張り、自分も凡俗人であつて、あんな大事變に遭遇してゐながら、今となつては、それに受けた刺戟と昂奮との斷片しか思ひ出せなかつた。——大正七年一月十九日——



女の留守の間

田山花袋

一

Sは二階にあがつて行つた。一方に友禪縮緬の四布蒲團をかけた行火、一方に藥罐をかけた瀬戸の丸い大きな火鉢、茶器も水さしもすつかり揃つてゐて、机に代用するための欅の一枚板の餉臺は、Sの來て坐つて原稿紙を其處に並べるのを待受けてゐるやうに見えた。障子には冬の朝の日影が朗らかに心持よくさし添つてゐた。

Sは坐つて、茶を一杯飮んで、落附いた靜かな心持で、家から持つて來た風呂敷を解いて、そこから筆入れと雜誌と外國の小説と地理の本とを出した。混亂と掃除も碌にしない書齋、または慌たゞしい旅舍の一間、それとは違つて、一種言ふに言はれないなつかしさと靜けさと世離れた心持とをかれは味はずにはゐられなかつた。つゞいてかれは二三十分ほど前に慌たゞしく支度をして、女とその妹と女の母親との出て行つたさまを頭に浮べた。大きな信玄袋、其

處等に脫ぎ散らした着物、紅い白いまた紫の色彩のチラチラした一間、女は綺麗におつくりをして、長い髱をすつと後に見せて、時計の針を見い見い、時間におくれぬやうに、または忘れたものがないやうにとあたりに目を配つた。母親も着物を着ると、不斷見る姿とは違つて、小さな丸髷も恰好が好く、細かい大島の重ねもよく似合つて、何處かの商家の立派なお袋さんのやうに見えた。殊に、嫁に行かうとしてゐる妹の島田姿が、くつきりと一間の中に際立つて見えた。『何うせ、汽車だから、今から大騷をしたつて駄目だよ』かう母親の傍から度々言ふにも拘らず、姉は丹念に妹の髮の線を三本足で一本一本かいてやつた。流石に、その朝は一家の中にも普通と違つた慌しいやうな悲しいやうなまたは艶めかしいやうな氣分が滿ちわたつた。

『ぢや、私は一足先に行きますから』

停車場まで荷物を持つて見送りに行く筈の父親は、かう言つて、三十分ほど前に出かけて行つたが、そのあとも何や彼やで、容易に支度が出來なかつた。姉はまたしても妹の髮を氣にしては立つて行つてそれを直した。『本當に折角これまでにして、お嫁にやつて了ふと思ふと、本當につまらないね、母さん』など丶姉はその姿を見ながら言つた。

車が三臺揃つて來てから、茶を一杯皆なして落附いて飮んだが、『ぢや、先生、行つて參りますよ。大抵一週間あれば澤山だと思ふんですけどもね……十八日には歸つて來るつもりですけれども……』かう言ふ姉のあとに續いて、妹は、『ぢや、をぢさん、いろいろお世話になりました……』かういくらか聲を曇らせて別れをつげた。

「さう言へば、お前、あの包を忘れては大變だよ」

一度出かけて下駄まで穿いたのを戻つて來てから母親は注意したが、最後に出て行つた女は、

「先生、さびしいでせうね、一人で」

「大丈夫だよ。婆やがゐるから。却つて靜かで好い。勉强が出來る」

「それはさうね。ぢや、お願ひしますよ。成るたけ早く歸つて來ますから……」老婢の其處に送つて出たのに向つては、「それぢや、賴むよ、バアや。先生は性急だから、御飯も三十分前位に支度をするんだよ」

「大丈夫だよ、そんな心配をしないでも……」

「ぢや、行つて來ますから」

「行つていらつしやいまし」

かうあとから老婢は聲をかけた。三臺の車は靜かに動いて、紅い白い紫の色彩がチラチラしたと思ふ間もなく消えて行つて了つた。

もう停車場についたな……かう思ひながら、Sはかき書けた筆を下に置いて、そして朝の二階の朗かな空氣に浸つた。兎に角かうしたことはかれに取つてめづらしいことであつた。旅で物を書くことはよくあるが、かうした二階家の一間で、世を離れて、世間にも友人にも誰にも彼にも內所で、こつそりかくれて一週間を過すのはめづらしいとかれは思つた。かれはまた筆を執つてコツコツ書いた。

一間の中にある道具、茶箪笥、本箱、長押にかけてある女の油繪、床の間の軸物、それ等のものにも、

かれとかの女との長い間の交錯が雜り合ひ纏り合つてゐるのがSにはなつかしかつた。ほんの空想ではあるが、かれはかうした別宅の主人公になつたやうな無邪氣な喜悦を感じた。

本當に甘い男の無邪氣な喜悦である。實際は女は何れだけその心をかれに寄せてゐるか頗る疑はしいのである。第三者には無論笑はれてゐるのである。また、今度の旅行にしても、妹の結婚の世話をしに行くのは事實であるが、その途中では屹度男に逢ふのは知れ切つてゐる。男は大阪に行つてゐる。行きか歸りかに屹度一日都合して逢つて來るにきまつてゐる。それを思ふと、甘い無邪氣な喜悦も、かき消すごとく消えて行つて了ふやうな氣がする。しかし落附いた靜かなSの今の心は、それに觸れても、いつものやうな痛い強い刺戟を感じなかつた。そんなことは何うでも好いと思つた。兎に角惚れた女の心の一角をつかんでゐさへすればそれで滿足だと思つた。

つゞいて昨日旅に行くと言つて出て來た家庭のことも、ちよつと氣になつたが、それも別に大きな波も起さずに、それからそれへと筆が進んだ。

隣の藝者屋の仕込みの子が、長唄をぽつんぽつんやつてゐるのが、朝の朗らかな空氣に際立つてきこえ出して來た。角の水道の共同栓のところでは、近所の女達が二三人寄つて何か頻りに饒舌つてゐた。ジヤア、ジヤア落ちる水道の水の音が絶えず聞えた。

障子にさした日影の線が上の方二寸ほどかげつて來た頃、ふとガラガラとやつて來た車の音がした。いよいよ出動の時間が來たなとかれは思つた。かれのゐる二階の向うの家の女優、R、Kと表札を出してゐる女優、公園の劇場に毎朝出動して行く女優、亭主ともつかず情夫ともつかぬ活動の辯士らしい男

と同棲して、朝に晩につかみ合ひの喧嘩をする女優、道具といふ道具もなく、着物もきたきり雀の、寝道具も一組しかない、喧嘩をする時には、先づ表の格子をピッシャリ閉めて、こん畜生！とか ぬすつとう！とかあくたれ口を男に向つて浴せかける女優、その女優を何うかして一度はつきり見てやらう、都合がよかつたら口位はきいてやらうとSは常に思つてゐた。そして、その願ひを、その好奇心を、今度の滞在中にかれは満足させたいと思ひ立つてゐたのであつた。しかし、障子を細目にあけては、寒いにも寒いし、向うからも發見される虞がある。Sは止むなく指で障子をぬらして小さな穴を一つ明けた。

　しかし度々覗いて見ても、車夫がぽつねんと立つて待つてゐるばかりで、女優は容易に出て來なかつた。時は段々かれの書いてゐる文章の中に經つて行つた。やがて格子戸の明く氣勢がしたので、急いで中腰になつて覗いた時には、女優はもう幌のかゝつた車の中にその半身をかくして、纔かに白足袋を見得るばかりであつた。

　やがて車の出て行く氣勢がした。

　午近く父親は歸つて來た。

「何うでした？間に合ひましたか？」

「いゝ鹽梅でしてね。丁度好い女伴もありましてね。お蔭で、まア安心いたしました。……皆なよろこんで行きました。もう國府津あたりでせう」

「それは好う御座んした。荷物も旨く行きましたか？」

「好い鹽梅に……。丁度、三十分位時間がありましたもんですから」

「役所は？」

「これから參ります。すぐ參らうと存じましたけれど、少し用事がありましたものですから」

父親はかう言つてすぐ出勤する支度をした。

午飯の時、老婢は、

「見ましたか？」

「何を……？」

「前の人を？」

「ヤ、見そくなつちやつた。足袋しか見えなかつた」

「さうでしたか。今朝も大分御機嫌がわるいやうでしたよ。男に何かぶつぶつ言つてゐましたッけ。まア、本當に、あんな夫婦ちやありやしない。あんなに喧嘩する位なら、別れた方が好かんべと思ふ位だ」

「喧嘩をする位だから、別れられないんだよ。好い處があるんだよ、矢張……。」

「いくら好い處があるか知らねえけれども、本當に呆れた人達だよ。えらい騒ぎをおつ始めるんだから」

かう言つた老婢は笑つた。近所で買つて來た肴の一切、飯をすましたあとは、茶を飲みながら、Sは老婢と話した。老婢は少くともかれ以上に女のことについて詳しく知つてゐる筈である。かれはそれを何處からかさがし出さうと思はぬでないが、またそれがかうして此處に來てゐる理由の一つでないこと

もないのであるが、しかしかれの性質として巧にそれを引出すことが出來なかつた。また、さうしたことを正面から持出すのは、自分の品格にも關するやうな氣がした。老婢は曾て下毛の山の中で、鑛山を亭主と一緒にやつてゐたことがあるので、Sは主としてその地方のことを持ち出して話した。一時間ほどして、Sはまた二階に行つて坐つた。

二

五時には父親が役所から歸つて來た。長火鉢の傍でちよつと話してから、Sは石鹸を持つて湯に出かけた。

向うからかねて知つてゐるMといふ藝者が、襟元を眞白に隈取つて、三本足で髮を立てゝ、そして急いでやつて來たのにばつたり逢つた。

「もう行つて？Kちやん？」

「今朝行つた……」

しかし留守に來てゐるとは氣の附かぬらしく、すぐ向うに行つて了つた。

空いてゐる夕暮の湯の中に浸つて、しきり板一重を隔てゝ、女湯の賑やかな饒舌と湯をザアザア使ふ氣勢とを聞いてゐるのは、かれに漲るやうな狹斜情調を味はせずには置かなかつた。聲を聞いただけで、それはP、それはN、またそれはTであるといふことがSにはわかつた。おか湯の中にそりそり白く隠見する女達の腕もなつかしかつた。

取留りもない無邪氣な饒舌と、艶な節廻しの好い女の聲の音樂とは、かれに男女の歡樂の世界を髣髴

させるに十分であつた。春水の作にあらはれた江戸の寫生などがかれの頭に思ひ出されて來た。かれは靜かに湯に浸つた。

女湯の戸を明けて箱屋が入つて來たらしく、『姐さん、お支度をお早くして下さいといふ電話です』かう言ふ聲がすると、つゞいて、『はい、はい、今、大急ぎでお湯に入つてをりますつて言つて下さいよ。さう急かれてもしやうがありやしない』かういふNの聲がした。『何處？T？あそこのお上さんやかましいのね』かうしたTの聲もつゞいてきこえた。

緩くり温つて、湯からあがつて、丁度其處に體量機のふんどうが揃へてあつたのに、ふとその氣になつて、裸體のまゝ量つて見ると、目方が夏時分とは二百目ほど減つてゐる。少し詰らないやうな氣がしたが、派手な長胴着、新らしいへこ帶、上にはをつた女の古で拵へたお召のどてらといふ姿を鏡に映して、いくらか滿足してそしてSは湯から出て來た。

しかしかれは家の方へは戻らずに、そのまゝ足を土手の方へと運んだ。何處も彼處も藝者屋と待合ばかり、艶な狹斜氣分があたりに漲つて、三味線の音が其處からも此處からもきこえて來た。Sはすつかり遊蕩兒にでもなつたやうな氣がして、一層得意で、好い心持で、靜かに土手へ行く阪路へと登つた。俄かに川の溶々として流れてゐるのがぱつとかれの前に展けて來た。

中流に黒く浮き出すやうに棹してゐる渡舟、上流から下つて來る大きな帆、夕暮の曇つた川の碧は、いつものやうな冴えた色を見せてはゐないけれども、それでものんびりした氣分をSの胸に漲らすには足りた。土手の上の芦洲張の茶店の前を車や人がぞろぞろと大勢通つて行つた。

Sはどてら姿をあたりに際立たせて、河の岸に行つて、かなり長い間往つたり來たりする船を眺めた。鷗の夕暮の空氣の中に白く飛んでゐるのが一つ二つ見えた。

女のゐないといふことが、愛憎の何物にも暫くは遠ざかつてゐられるといふことが、かれにかうした靜かな落附いた氣分を起させたのであつた。それがS自身にもよくわかつた。さうかと言つて、女と別れたのでは駄目である。また女に喧嘩して離れてゐたのでも駄目である。今は遠く離れてゐても、女の心はちやんと堅く握つてゐて、その中には歸つて來るといふ心でなければ、さうした氣分は起すことは出來ないとかれは思つた。かれは離れて即いてゐる心、即いて離れてゐる心の上に、藝術的な、のんきな、インプレッシイブな感じを味ふことが出來たやうな氣がした。

これが女のゐない留守に、復仇的に、他に女でも拵へやうといふ了簡では、それでは面白くない。また平凡である。またかうしたのんきな心持を味ふことは到底出來ないにきまり切つてゐる。女のゐない留守に、ひとりで酒でも飲んで、靜かに欲望なしに寢るといふ形も、かれに新參な遊蕩兒でないといふやうな小さな滿足を與へた。

歸つて來ると、もう電氣が明るくついて、酒の支度はちやんと出來てゐた。父親は甘黨で猪口は決して口に當てないのであるが、それに強ゐて一杯飲ませた。そして、今時分は何處あたりだらうの何のと行つた人達の噂をして、そして好い心持にSは醉つた。女のゐる時と違つて、酒の體に廻る形も至極自然に、體と心とが一緒になつて平衡を保つてゐるやうな氣がした。

女優の話がまた始まつた。「そんなに歸りが遲いのかね？」からSが言ふと、「え、え、遲いですとも

……。歸つて來るのは、いつも十一時すぎですよ。それから饒舌つたり喧嘩をしたりして寢るんですから、近所迷惑で爲方がありやしません。』老婢はかう言つて、それからそれへと話した。Sは喧嘩が喧嘩でなく、仲の好いのが仲の好いのではない男女の間柄などをその女優の上に想像して、明日こそは何んな女だか、是非見てやらうなどと思つた。

酒を飮むとすぐ寢て了ふ習慣のSは、やがてそのまゝ二階へとあがつて行つた。いつもの寢道具、役者の似顏のついてゐる羽二重の肩當の當つた夜具、白い厚い毛布、大きなくゝり枕、寢衣もちやんと行火にかけて煖めてあれば、水もコップも目が覺めた時に吸ふ煙草盆もマッチも、何も彼も皆な完全に揃つてゐた。ゐないのは唯かの女一人であつた。それが全く一人であるといふことが、夜着の中に入る時にちよと物足りないやうな、または却つて樂で好いといふやうな氣を誘つたが、それもほんの僅の間で、やがてぐつすりとかれは好い心持になつて寢込んで了つた。

夜中に厠に起きた時には、それでもちよつと大阪のことが氣にかゝつて、かれは暫し眼を明いてじつと一ところを見詰めてゐた。しかし再び枕を頭に當てたSは、窓の戸の隙間の白むのをも知らかつた。

三

一日は風が吹き、一日は曇つた空が低く二階の窓を壓した。別にこれと言つて變つたこともなかつた。かれの書きかけた筆は、思ひのまゝに進んで、餉臺の一隅に一枚々々重ねて積んで行く層が次第に厚くなつて行つた。

前の女優の顏は、二日目の出勤の時にSは穴のあくほどはつきりと見た。さう大して大騷ぎをするほ

どの顏でもなかつた。それに、何方かと言へば、小柄で、柔和で、何うしてあんな唇からさうしたあくたれ口が出るかと思はれるほどであつた。ある日は南縁日暖かで、春のやうであつたので、さうした小穴からかれが覗いてゐるとは知らず、すつから前の障子を明放して、男と二人してさし向ひで遲い朝飯を食つてゐるところを、芝居のシインでもあるかのやうにして見せた。女優は背を此方に見せて、まだいくらも娘の氣分を脱しないやうな風をして、頻りに箸を運んでゐた。

男も餘り好い男ではなかつた。

かれ等の戀の光景も大抵は想像がつくやうにSには思はれた。何うせ長くかうして同棲してゐるかれ等ではない。肉體の羈絆があるにしても、いづれ何方かから離れて行くにきまつてゐる。しかし、戀のシインの一つとしては面白い珍らしいものであるには相違なかつた。人間とは可笑しなものだ。てんでに勝手に一つづゝさうした滑稽なシインを持つてゐながら、他人のを見る段になると、それを笑つたり何かする心持になるのだ……。そしてまたさうした戀に浸つて見たくなるものだ……。

近所にゐる藝者達は、大抵Sの知つた顏であつたけれども、また此方から出かけて行けば皆な歡迎して呉れる人達であつたけれど、さういふことをしては、却つてこの靜かな假ずまひの心を打壞して了ふやうな氣がしたので、かれはつとめてさうした人達に逢ふことを避けて、行火と、友禪縮緬の派手な蒲團と、一間に漲つた世離れた空氣とに滿足した。父親が役所に出かけて行つたあとはしんとして、をりをり鳥の翼が晴れた障子を掠めて通つて行くばかり、誰も二階にあがつて來るものもなかつた。たまさかに階梯の軋る音がすると思ふと、それは老婢が留守中の爲事として置いて行かれた洗濯物を一杯バケツ

に入れて來て、それを南の日向の好い物干竿に並べて干しに來たのであつた。その洗濯物の中には、女の丸い赤い毛絲のジヤケツだの、足袋だの、小さな肌襦袢などがあつた。

何うかすると、老婢は拭掃除の次手に入つて來て、かれの爲事をしてゐる傍に立つて、赤い小さい罫紙の中に字を書いて食つて行く面白い不思議な稼業もあるものだといふ顏の表情をして、じつとそれに見入つた。時には、窓の障子をがらりとあけて、

『女優さん、今、おつくりだな』

などと言つた。

『聞えるぜ、おい……』

『聞えたつて構はねえ。何もわるいことを言つたんぢやないから』こんなことを言つて、平氣で雜巾を持つたまゝ長い間立つてそれを見てゐた。

障子を閉めながら、

『まだ、若いんだな、あれで』

『内の姐さんよりは若い』

『若いどころか、まだ娘つ子だ』かう言つてすぐ話頭をSの方へ向けて、『それでも、よく根がつきねえと思ふな。退屈するだらうね』

『なアに……』

『一字、一字書くんだから、大變なことだ。人が眞似したいつたつて出來ねい藝だ』

「それはさうさ」

餘り相手にしないので、老婢はそのまゝ立ちかけたが、

「旦那、何か好きなものがあるなら、お言ひなさい。バアやに任せて置いたら、拙いものばかり食はせて、瘦せちやつた！などとあとで言はれると困るから」

「大丈夫だよ。そんなことは言はんよ」

「でも、何か望むものがあるなら……」

「何にもない」

取附く島もないと言ふやうにして老婢は下りて行つた。

Sは退屈すると、本箱や茶簞笥の中を明けて、何かめづらしいものでもないかと搜して見たりした。本箱には、讀方の手帳だの、女學校の敎科書だの、綴葉書だの、學校友達からよこした手紙だの、色の褪めた古びた肱附だのが入つてゐた。英語のチョイスリイダアなどもあつた。それ等はすべて今度嫁に行つた妹のもので、それを見ても、姉が困る中からもいかに心を盡して妹を良家の娘のやうに敎育したかといふことが知れた。「何にも私は好いことをしたことはありませんけれど、今度これを嫁にやるまでにしたことだけは本當のことをしたと思ひます。だから、先生、喜んで下さい」かう言つて涙をほろりと滴した姉のことを考へると、Sは可哀相な氣がせずにはゐられなかつた。妹に對する親切な保護は、すべて皆な姉の艱難を背景にして釀されて來た心持で、さうありたいと自分で痛感したことを姉は妹に實行してゐるのであつた。かう思ふと、かういふ社會の泥濘の中にゐても、美しい人間の心は矢張淸い

花を咲かせるものだとSは思つた。今日はもう結婚の當日である。もう今時分は、おつくりやら着附けやらで、さぞ忙しがつてゐるだらうと思ふと、一生懸命になつて、妹の髮を梳いたり何かしてやつてゐる姉さまが眼に見えるやうな氣がした。『私も一生に一度は、さういふ眞似をして見たいと思ふけども……駄目ですか、先生』から笑つて言つた言葉なども思ひ起された。

茶箪笥の方には、五六年前の小遣帳だの、懷中電燈の壞れたのだの、先方からよこした結納の奉書の水引のかゝつたのなどが入つてゐた。下の抽斗には寫眞がぎつしり詰つてゐた。

それはこの前にもSは見たことがあるので、別にめづらしいとも思はなかつたけれども、またその中には女が男と一緒に寫したものが二枚も交つて入つてゐることもちやんと知つてゐたけれど、それでも退屈まぎれに、Sは一枚々々それを行火の上にひろげて出して見た。中でも一番多いのは妹の寫眞で、島田に始めて結つた時の正面、後姿、横向、それから今度別れるについて寫した寫眞、婿になる人の寫眞、それから女學生時代のお下げの姿、もつとずつと遠く溯つて小學校時代の可愛いリボン姿、さうしたものが澤山に澤山にあつた。姉のはAにゐた時分の庇髮姿、花を口に當てた姿、その寫眞は初めてSがかの女を知つた頃に撮したもので、その時分はまだ若く、苦勞も多くは知らず、色戀の深い情に惑はずに、常にはしやぎ切つてゐるやうな無邪氣さと生々しさとを持つてゐた。Sはその頃がなつかしいやうな氣がして、じつとそれに見入つた。

男と一緒に寫した寫眞も、別にかれにわるい感じを與へなかつた。一枚は洋服の派手なネクタイ姿、一枚は外套の立派な中年姿、その男達のことは、散々きいて知つてもゐるし、またすべてかれの前を通

過し去つて了つた人達なので、却つて男同士の同情とか共鳴とかがかれの心を領した。殊に、中年姿の方が、色戀に深く、今は紙衣で、外國に行つて、飛行機乘の傀儡になつて、生命を的の一乘いくらの金を捗いで、かの女の後に出來た女に、ダイアの指環などを送つて來てゐるといふことなどを考へると、甘い男心にSは心から同情が出來た。自分もいくらも違つてゐないと思つて微笑した。

今大阪にゐる男とも一緒に寫したものが何處かにあるに相違ないと思つたけれど、その中には遂にそれを見出すことが出來なかつた。で、寫眞を見てゐる中に、つい眠氣がさして、行火の蒲團の上に頭を凭せてうとうとしたが、ふと何か言はれてはつと覺めると、老婢が二階の階梯の下から、午飯の出來たことを報じて來てゐた。

四

『もう今時分は大騷ぎですな』

『本當に、もう喜んでゐるでせう、皆な……』

『今が六時……もう儀式がすんで、料理屋へ行きましたな』

『大騷ぎでせう……これも、皆な皆様のお蔭です』

から父親は喜ばしさうに言つて、『本當に、姉がよくして呉れますからな』

『さうですね』

『皆な姉のお蔭です。ですから、恩を忘れてはならないて、呉々も立つ時言つてやりました。本當に仕合せです。M子は……』

「まア、安心でさ」
「まア、片荷が下りました」
「一杯、おやんなさい、お祝ひに」
から言つてSは盃を父親にさした。
「イヤ、もう私は」
「だつて、昔はやつたんでせう？一つ昔の話でもきかして下さいな。横濱に取引に行つた時分の話でも……」
「いや、もう駄目です。そんな意氣なんぢやないんですから」
「そんなことはないでせう」
「何う致しまして……」
晩酌を少しすごし加減のSは、
「父さんが少し飲めると好いんだがな。」
「何うも不調法で爲方がないんですよ」
「父さんがいけず、母さんがやらず、僕でも來なければ、不斷は酒のさの字もない家だからな……。藝者屋にはめづらしい……」
「何うも無意氣者ばかしで……」
「でも、若い時は、ちつとは面白いことはあつたでせう。母さんを困らせたり怒らせたりしたこと位は

あるんでせう。神戸では、女があつたつて言ふぢやありませんか。」

「いや、もう……」

父親は頭をかいて、「しかし、若い時ですな。面白いのは――」

「それでも今でも、まださういふ氣はいくらかはあるでせうな」

「いや、もう――」

「藝者は駄目ですか」

「いや――もう」

「ぢや、仲は――？」

「仲は好う御座んすな。大雛か何かで、ゆつくりやるとわるくありませんな」

「何うです？これから一緒に行きませうか」

「いや――」

「大丈夫ですよ。ゐない留守に爺をつれだして、先生も碌なことをしないッて怒るかしら……」

あはゝとSは大きく笑つて、

「それが――僕が留守につれて行つたのが病み附きにでもなると、それこそ面白いんだがなア」

「お戯談を……」

父親も大きく笑つた。

「本當に行きませうか。」

「駄目ですなァ、もう。さういふ元氣があると好いんですがな」。

「元氣を出す方が好いね」

「もう十年も若いと。さういふ氣にもなりますけどもな」

「駄目かなァ」

かういくらか失望したやうにしてSは盃を口に當てた。

其處に入つて來た老婢は、

「雪だ！雪だ！とうとう雪だ！」

「え？雪が降つて來た？」

「今夜は降りさうですよ」

「そいつは面白いな……盛に降つてゐるかえ？」

「えゝ」

「それぢや明日は雪見が出來る。お誂へ通りだ！」かうSは言つたが、急に興に動かされたといふ風に、「どら、一つ土手へ行つて見て來るかな」

「寒いですよ」

「大丈夫だよ」

「何かもう一枚召して入らしやつたら……」かう言つて父親が何か捜さうとするのにも頓着せず、Sはどてらのまゝで、がらがらと格子を明けて戸外へ出て行つた。

日は暮れて了つたので、降頻る雪はそれとはつきり見えなかつたけれども、軒を並べた藝者家の軒燈の光線の周圍には大きいぼた雪がチラチラと巴渦を卷いて光つて、それが地上に亂れて落ちるさまが美しくそれと見えた。地上はもう薄すらと白くなつてゐた。

傘に當るサラサラといふ音がSに一種藝術的な感じを與へた。それに細い巷路に並んでゐる女達の生活が、あたりに梅暦式の狹斜情調を漲らせてゐた。ある家では、姐さんがこの降頻る雪を衝いてお座敷に出て行くらしく、深く幌をかけた車が一臺そこに待つてゐた。角の球突場の灯が明るく雪を透して見せた。

細い巷路を拔けて、やがて土手の上に登つたかれは、暗い闇の中を流るゝ大川の流に映つる灯を眺めながら、サラサラと傘の上に落ちる雪をなつかしみつゝ、長い間そこに立つてゐた。自働車が一臺、大きな眼を光らせながら向うからやつて來た。

五

思つたほど雪は積らなかつたけれども、あくる朝再びその姿を土手の上に見せたSは、何年振りかの靜かに落附いた心を其處に味ふことが出來た。

土手に登つて行く路を縫つた小笹原、それは平生は埃や塵に黄く塗れて見るかげもないやうなものであるけれど、その朝はそれに雪が積つて、氷つて、朝風にガサゴソと寒く動いてゐるさまがかれに歌などを思はせた。それはいかにも藝術的な印象的な感じを人に與へる朝であつた。くつきりと碧く晴れた空には、朝日の朗らかな光線が雜つて、それを劃つて並んでゐる藝者屋の新しい二階の屋根が、すつき

りと雪の朝の酒の旨さをかれに思はせた。旦那が來て泊つてゐる家であらう、あゝ家の屋根からは、朝風呂を沸かす細い烟突からの烟が碧い空に捺すやうに靡いた。

對岸の山谷堀に藝者屋があつた時分のことが河の岸に立つてゐるSの頭の中に繪やうにふと浮んで來た。「岸壁に並んで繋がれた屋根舟、その上に積つた雪、川に臨んだ二階の欄干、「今朝の雨にまたしつぽりと……」などといふ小唄も思ひ出されて來た。昔の人も矢張かうして遊んだのだ……。かう思ひながら、Sは笘の上の雪をそのまゝに下して來る船を眺めた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄉區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一**振替貯金**口座は**東京三十四番**なり

一**郵券代用**は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒ます

一**集金郵便**の便法を利用せらるる方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一**受領證請求**は必ず返信料を要す

大正七年一月廿九日印刷納本
大正七年二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三
東京市本鄉區駒込西片町十番地

發行所　中央公論社
電話番小石川一四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月十九日第三種郵便物認可